小説

未来を垣間見た男

スティーブ・ジョブス

スティーブ・ジョブズは未来のテクノロジーを時代の最前列で考え見つめてきたといわれている。しかしその陰には2016年12月6日、アップル銀座のエントランスから40年前のカリフォルニア、ロス・アルトスにあるスティーブ・ジョブズ家のガレージ前にタイムスリップしたひとりの男の存在があった。
優れたビジョナリーといわれたスティーブ・ジョブズ。
その若かりし時代の秘密に迫る！

松田純一著

［小説］未来を垣間見た男　スティーブ・ジョブズ

はじめに

小説でスティーブ・ジョブズの人生やアップルの歴史を表現してみたいというアイデアはすでに十五年も前から温めてきたことだった。しかしこれまでなかなか機が熟さなかったというべきか。しかしやっと頭の中でスティーブ・ジョブズを始めとする人物たちが動き始めたような気がした…。

ではなぜ小説の体でスティーブ・ジョブズの若い頃を描きたいと思ったのか、その点を説明しておきたい。

私は自身のブログにこれまでにもアップルやスティーブ・ジョブズにかかわる多くの記事を書いてきた。それぞれはご紹介した時点において可能な限り一次資料や信頼できると思われる書籍などを基に史実に忠実な描写をと考えた。

そもそもそれぞれのアーティクルは当然のことながらその都度のテーマに沿った内容だ。

例えば、

「二人のスティーブが出会ったきっかけは？」

「アップルＩとはどのようなコンピュータなのか」

未来を見た方がいいのか？ 2018/09/11 hagaromo

「アップルという会社を創業するに至る動機は？」

あるいは、

「スティーブ・ジョブズとはどんな男なのか」

といったように。

そして事実を伝えるためには「誰が、いつ、どこで、何故、何を、どのように」といったフレームワークを明確にする必要があるというが、一般的な記事ではこれらを立体的に網羅するのは難しい。無論私自身の力量の問題も否定できないが。

しかし長い間アップルの歴史やそれにかかわる群像を調べていると単一のテーマに絞ろうとしてもそれらにまつわる多くのエピソードやきっかけがまとわりついていることを知る。

そもそも狭い範囲の事実だけを検証しようとすればするほど直接間接に様々な要因がかかわっていることに気づかされるし、我々の人生とは本来そうしたものに違いない。ともかくそうした要素をひとつひとつ取り上げれば散漫なものになりがちだしテーマや焦点はボケてしまう。

さらに小説の形をとってみようと考えた一番の動機は、司馬遼太郎が小説「空海の風景」の中でその執筆の動機を「空海を肉眼でみたいという筆者の願望」と書いたように、私もこの眼を持ってスティーブ・ジョブズの若い頃に接したいと思ったからに他な

未来を見た。ガリスマ 2018-09-11 hagoromo

らない。

ちなみに私が生身のスティーブ・ジョブズに出会った最初は一九八九年七月十日、幕張の東京ベイＮＫホールにおけるＮｅＸＴ発表会だった。さらにステージにあがる前にホテルの通路ですれ違ったこともよい思い出だ。

またその年にアップルジャパンのデベロッパーとなったことでもあり、スティーブ・ジョブズが復帰後はＭａｃＷｏｒｌｄ Ｅｘｐｏサンフランシスコでジョナサン・アイヴと一緒にいる姿を多々目撃したし、彼のキーノートを見たり、デベロッパーの代表たちがホテルのレセプションルームで談笑していたときプレゼン姿のままのジョブズが部屋に入ってきたこともあった。

私がアップルの歴史に興味があるのは自分が夢中になったアップルⅡやマッキントッシュという素晴らしいパソコンを生んだ企業を知りたいと思ったことは当然だが、それ以上にそこで働く人たちの情熱や思いがどういうものであったかに強く心引かれたからだ。

アップルⅡがアップルという企業で開発生産されたという事実より、なぜそういうことになったのか、誰の意志なのか、どのような思いで開発に至ったのか、時代背景は…等などの方に興味が向かったのである。

こうした興味に沿った記事を書きたいと思ったら、もう通り一遍の記事ではそれらにまつわる人々の思念といったものを伝えることは難しい。しかし小説の体をとれば表現の幅が大きく広がるのではないかと考えた。

なぜ小説なのか。前記と重複する部分もあるが思いついたことを以下にまとめてみた。

一　史実に基づいてが基本だが、多くのミッシングリングを状況証拠に基づきフィクションとして埋めれば物語性が増すと考えた。ひとつにテーマを決めた記事だとどうしても立体的な描写がやりにくく平面的な解説になりがちだ。小説の体を取れば情景描写や人と人との感情のぶつかり合いも描け、多面的／立体的な表現が可能になると思った。

二　三人称の上に神視点、さらに断章も入るというなんでもありの書き方は素人丸出しだと自覚しているが、読んでくれる人たちが楽しんでいただければそれでよい。というか書いている本人が一番楽しんでいるし、なによりも数編書き出してみると面白い事に主人公たちが理屈でなく一人で動き出すようにも思え、小説家の性を垣間見た思いをしている。

未来を見た方がいいのだ。

三　ありきたりではあるが、タイムスリップで主人公（私を仮託した人物）をその時代に立たせ、実際に私が体験・経験した時代の空気を主人公の目で表現したいと思った。文字通り肉眼でスティーブ・ジョブズを見、その空気感を少しでもお伝えできたら嬉しい。そしてスティーブ・ジョブズが真のビジョナリーになり得た理由が、天性の聡明さは当然としても、四十年後の未来からやってきたひとりの男の影響があったのだというストーリー展開に興味を持った。

四　米国のニュアンスを借りつつ表現はあくまで日本人に無理なく通じるようにと考えた。例えばジョブズの養父が登場し「なあマイク、君たちが苛つくのもよくわかるが、『色の道』は息子に任してくれや」という台詞はまったくもって日本語だ。ただし養父のポール・ジョブズはガレージ時代、仲間たちがイライラし険悪な状態になると実際に中に入り、雰囲気を和らげたという。

ちなみに「色の道」だが、私は若かりし頃に東証一部上場の顔料・染料メーカーに六年ほど勤めたが、その色作り…カラービジネスを極めるという意味で創業者の社長は興が乗ると自社のビジネスは「色の道」と称して悦に入っていたことに所以する。

五　本編を楽しみながら読んでいただければスティーブ・ジョブズという男の素顔と

未来を回間見たカリスマ20180911.hagoromo

黎明期のアップルがよく理解できるというものを目指した。これまでスティーブ・ジョブズについて書籍などを通じ、何らかのイメージを持っていた方ほどリアリティを感じていただけるに違いない。また本編は特にどこがフィクションなのかについては明記していない。

というわけだが、一番の問題は私自身を仮託した主人公、加賀谷友彦が四十年前にタイムスリップするものの果たして元の時代へ戻れるかだ。

ともあれお楽しみいただければ幸いである。

目 次

	はじめに	3
第一章　出会い		
	タイムスリップ	10
	仲間たち	32
	ウォズニアックへの説得	41
第二章　アップルコンピュータ社誕生		
	ジョブズの憂慮	49
	ＷＣＣＦ開催	69
	クリスアン・ブレナンの妊娠	82
	雑誌広告の躓き	99
	二つの危機	107
第三章　スティーブ・ジョブズという男		
	スティーブの本音	116
	ＤｉｓｋⅡの誕生	129
	困惑のアップル	152
第四章　成長と混乱		
	ＰＡＲＣ訪問	177
	アップルⅢの失敗	191
	株式上場	205
第五章　マッキントッシュ前夜		
	ラスキンのマッキントッシュ	217
	リサ不幸な生い立ち	225
	知野弘文と出会う	259
	マッキントッシュ生みの苦しみ	272
	リサの販売開始	335
第六章　波乱の前兆		
	ジョン・スカリーという男	349
	マッキントッシュ発表	371
	ジョブズの挫折	387

未来を垣間見たカリスマ20180911 hagoromo

［小説］未来を垣間見た男　スティーブ・ジョブズ

第一章　出会い

タイムスリップ

ｉＰｈｏｎｅを持ってアップル銀座へ向かった。二〇一六年十二月六日のことだった。

何年ぶりだろうか、ここに来たのは…。

先月依頼された仕事を終え僅かばかりの金が入ったことでもあり、自分への褒美に新しいｉＭａｃでも買い、そして女房にｉＰｈｏｎｅケースでもクリスマスプレゼントしようかと久しぶりに銀座に足を向けたのだった。

私の名は加賀谷友彦、ガチガチのアップルユーザーだ。それが高じて一九八九年にマッキントッシュのソフトウェア開発を目的に起業までした。

いまは還暦も遠に過ぎての年金生活者だが、ありがたいことに昔のよしみでソフト開

未来を見るカリスマ 2018/09/11 hagaromo

発のプロデュースをしたり新製品開発のコンサルタントなどといったことを細々ながらさせてもらっている。

そう、足掛け十四年間アップルジャパンのトップ・デベロッパーだったから、日本においてはもっともアップルに近いところでビジネスをしていたといえる。

そういえばこのアップル銀座、どうも私にはアップルストア銀座といったほうが座りがいいが、オープン時のセレモニーにも招待された後、三回ほどここで買い物をしたはずだ。しかしその後は足が遠のいていた。なにしろ歩くのも面倒だし便利なオンラインストアもあるからだ。

そんな一昔前の記憶をたどりながら勇んで地下鉄を降り地上に出た。まだ昼過ぎの明るい時間帯だったが、クリスマス・イルミネーションに飾られた銀座の街並みはとても綺麗だった。

早速アップル銀座の明るい店内に入ろうとしながら手にしていたｉＰｈｏｎｅ６ｓＰｌｕｓで時間を確認しようとホームボタンを押した。その刹那、どうしたことか急に目眩がして私はその場に座り込んでしまった。

自分を落ち着かせるため目を瞑ったものの、それでも店内の照明が明るいのかまだ瞼の裏で強い光が感じられた。

未来を見る方法 hagoromo

周りでは、
「大丈夫ですか？」
「救急車呼ぼうかしら」
といった声がしたが、
私は（大丈夫ですから）と言おうとしたその瞬間雑踏がスーッと遠ざかっていった。

どれほどの時間が経ったのだろうか。私にはものの三十秒ほどだと感じられたが、目眩も治まったのでゆっくりと立ち上がりながら（私も歳を取ったものだ）と思いつつ目を開けた途端、眼前はアップル銀座ではなく、しかしどこかで見覚えのある景色が広がっていた。
（ああ、これは夢だ。アップル銀座の前で倒れてどこか病院にでも運び込まれて私は寝かされているに違いない）といった奇妙な納得の仕方をしてみたが、それにしては頬に当たる乾いた風が心地よい現実感を漂わせていた。
何が何だか分からないものの気が遠くなったまま歩き回り迷子にでもなったのか、あるいは私もボケて徘徊するようになってしまったのかと思いつつ手にしていたｉＰｈｏｎｅで妻に電話してみようと思った。しかしバッテリーはまだ八五％と十分残っているのにどうしたことか電話ができない。ネットに接続できていないようだった。

未来を見た方はこちらへ 2018/09/11 hagaromo

困惑して立ち尽くしている背に、
「おい！お前、俺の家の前で何してるんだ！」
といいながら痩せた長髪髭面の若者が大股で歩いて来た。
あれ？英語ではないか。と振り向き若者の顔をみた瞬間思わず私は生唾を飲み込んだ。
それは多々写真で見た事のあるスティーブ・ジョブズ、それも極若い時の姿だった。
思わず彼の顔を真正面から見ると、不健康そうな顔から覗いた二つの瞳は思わず引き込まれそうなほど魅力的だったものの酷い姿だ…。
私が季節柄、厚手のジャケットを着ているのに彼はよれよれのジーンズに模様なのか汚れているのかもわからないＴシャツ一枚の姿だった。それも裸足だ。
呆然と立ちすくんだままの私に若者は機関銃のような早口でなにかを言いかけたが一瞬の空白があり、私の手にしていたｉＰｈｏｎｅを指さしながら、
「それは何だ」
と怒ったような口調でいった。
私は自分が置かれている状況が分からず、言葉を発することができないでいたが、なにか大きな間違いを犯しているような気がして思わず手にしたｉＰｈｏｎｅを後ろ手に隠した。

未来を見たかりスマ 2018/09/11 hagaromo

「何だよそれ！エレクトロニクスに詳しい俺も見たことのない代物だな」
といいながら男はキスでもするような距離まで私に顔を近づけ
「見せてみな」
と命令口調でいった。
瞬間私は彼の口臭のすごさにウッとなって思わずｉＰｈｏｎｅを握っていた握力を弱めたとき、すでにそれは男の手の中にあった。
やっと周りを見渡す余裕が出てきた私は目の前に興奮の体でｉＰｈｏｎｅを手にしている男を観察した。いや、男とは初対面だが、変ないいかただけど誰だかは分かっている。彼はどう見てもあのスティーブ・ジョブズだ。
長い間私はライフワークのような気持ちで彼の生い立ちから死に至るまでの情報を集めて多くの記事も書いた。
間違いなく奴は、彼はスティーブ・ジョブズだ。まだ夢を見ているのかと手の甲をつねってみたが痛い。
男は、スティーブ・ジョブズは近視なのかｉＰｈｏｎｅを自分の顔に近づけなめまわすように見ていたが、先ほどより声高に、
「俺はスティーブ・ジョブズっていうんだ。スティーブって呼んでくれ。オヤジ、お前の名は？」

未来を見た力 Kaiser Mayer 2018/09/11 hagaromo

と右手を差し出しながら相変わらず機関銃を撃ち続けるような口調で問いかけた。
そうか、彼から見たら私は立派なジイサンなんだと苦笑する。

(しかし、なんて答えたらいいのか。私は)
私は彼の手を弱々しく握り返しながら、
「…トモヒコ・カガヤです。いやトモって呼んでください。この辺に来たのは初めてで迷ってしまったようです」
とブロークンな英語で取り繕った。
心の中では映画やテレビドラマで見た「過去へのタイムスリップ」が頭に浮かんだが、そんな馬鹿なことがという気持ちは捨てきれなかった。
理論上「過去へのタイムトラベルは不可能である」という話しも聞いたことがある。では何が起こったのだ。
スティーブは、
「トモ、時間があるんだろう?なくても付き合え。あれが俺の家だ。これについて詳しい事を聞かせてくれよ。こんなの見たことないし、訳分からんがメチャメチャクールな代物だ!」
私の二の腕を強く掴みながら言った。

場違いな問いだったが私はスティーブに腕を引かれながらも喉から絞り出すような声で、

「今日は何日だっけ」と聞いた。

スティーブ・ジョブズと名乗った男は手にしたｉＰｈｏｎｅから視線を外さず

「今日は一九七六年十二月六日、月曜日だ」

と几帳面に答え、続けて、

「いま俺一人だが後で仲間が来る。紹介するよ。俺たち会社を作ったんだ。来年早々には法人化する。金のあてもできたしな」

独り言のように呟いた。

スティーブのいうことが正しいのなら私はちょうど四十年前にタイムスリップしたことになる。

(そんなばかな)

と思いながらも顔を上げれば眼前の建物は多くの写真で見た事のある、そうカリフォルニア、ロス・アルトスのスティーブ・ジョブズ家のガレージだった。

私はいまだに混乱していたし現状認識もままならなかった。

(いくら自分がアップルフリークだからといって、アップル発祥の場所にタイムスリップ

未来を見た方は、ご注意を。

するなんて…）と混乱した頭で私はつぶやいた…。

もし本当に時間を遡り、一九七六年十二月にタイムスリップしたのなら、いや夢でも良いが、若い頃のジョブズと知り合いになると共にこの悲劇を十分楽しんでみようという気もあった。しかし反面、現代の二〇一六年にも同じ私がいるのならともかく、もし突然私が戻らなければ妻に多大な心配をかけることになる。それを思うと息苦しく鼓動が早くなってくる。

そもそもタイムスリップしたのならそう簡単には帰れないかも知れない。

スティーブはガレージの中に私を引き入れてから腕を放し、

「適当なところに座ってくれ」

と自分は大きな作業台の前にある椅子を引き寄せ腰掛けた。

ふと木製の作業台を見るとそこにはアップル1と並んで別の基盤が置かれていたが、それがどうやら試作中のアップルⅡのようだった。

私は覚悟が決まると急に腹が空いてきた。アップル銀座で買い物を済ませた後、せっかくだからその銀座で昼食をとろうと考えていたがこのありさまだ。

小型のショルダーバッグの中に食べ物の持ち合わせはないし、財布にあるいくばしかの金やクレジットカードは「この時代」では役に立たないであろうことは推測できた。

未来を見るかなくなる 2018/09/11 hagoromo

「スティーブ、悪いけどなにか食べ物はないだろうか」
気むずかしそうにこちらを見据える男に声をかけた。まだ本当にこの若者があのスティーブ・ジョブズだという実感はないが、それしか考えようもない。第一本人が自身のことをスティーブ・ジョブズだと紹介したではないか…。
スティーブは面倒そうに少し振り向き、
「そこの棚に林檎がある。好きなだけ食べてもいいぞ」
と顎を付きだした。
「ありがとう」
私は林檎をひとつ囓り始めたが、普段食べている林檎と比べてちょっと大味だった。
「その代わり、このクールなものの正体を教えてくれよ」
スティーブはひねくり回していたｉＰｈｏｎｅを私に放り投げながらいった。
当然だが彼はその使い方が分からず、何の機械かもわからず苛ついていた。

幸いなことに私のｉＰｈｏｎｅは背面をハードケースで保護していた。だから一見しただけではアップルロゴがあることはわからない。そして当然のこととはいえ指紋認証やＩＤを知らないスティーブはロック画面から先へは進めなかった。
どうやらスティーブは短い時間でホームボタンを押すと画面がＯＮになることには気

未来を見た方 ＿＿＿＿＿＿＿＿

づいたが、一分もすれば表示が消えてしまうことにも苛ついていた。

私が説明を躊躇しているとスティーブは

「オヤジ、いや、トモは日本人か」

あの人を射貫くような鋭い視線を向けながら問いかけた。

「そうだ。私は日本人だ」

そう答えると彼の表情がいくぶん柔らかくなったように思えた。

「そういえば君は日本に行って禅僧になるつもりだったらしいね」

私の問いに、

「よく知ってるな。本気だったんだ。アップルを辞めて日本に行こうかと真剣に悩んだよ。師のコープン・チノに相談したら、事業も座禅も究極は同じことだといわれて決断したんだ。アップルを続けてみようとな」

天井を睨みながらスティーブは言った。

彼は堅い椅子に座り作業テーブルに両足を投げ出しながら、

「俺はソニーに憧れている。それももしかしたらソニー製か？」

私が抱えていたｉＰｈｏｎｅを指さし彼は話題を戻した。

「いや、違う」

未来を見たかりしゃ 2018/09/11 hagoromo

お茶を濁しながら私はどのように会話を続けるべきかを考えていた。
いろいろと突っ込まれるより先手を打って、なんとかｉＰｈｏｎｅの説明をごまかせる方法はないかと考えてみたが、妙案は思いつかなかった。
なにしろｉＰｈｏｎｅのハードカバーを外せばそこにはあのアップルロゴが歴然と輝いている。
それを見れば絶対スティーブは「おい、これはどうしたことなんだ」と詰め寄るに違いない。しかし「四十年も歴史を遡りタイムスリップした」といった話しをスティーブは受け入れるはずもないだろう。それにもし受け入れたとしてもその事実が未来に影響を及ぼしヘタをすればタイムパラドックスに陥るかも知れず、私は元の時代へ帰れなくなるかも知れない…。

「ここで君たちはアップルⅠを組み立て、いまアップルⅡを設計してるんだろう？」
私はいたって静かに話題を変えた。
「そうだが、はじめてここに来てそんなことよくわかるな」
鋭い眼で睨まれたが私は続けて、
「後で理由は説明するけど、私は君たちのことを結構よく知ってるんだ」
そういいながらガレージ内を見渡した。

未来を回回見たカリスマ20180911 hagoromo

「それにしてもこのガレージは想像していたよりずっと閑散として片付いてるね」
私は正直に思ったことを口にした。
スティーブは作業台に足を乗せ、左手の爪を頻繁に囓りながら、
「近々引っ越しするんだ。だからいま少しずつ片付けているところだ…」
苛つきを隠そうともせず呟いた。
私は彼の次の言葉に被せるように、
「新しい住所は“Stevens Creek Blvd”だったかな」
そう言うというとスティーブは飛び上がるように投げ出した長い足を組み直して私をにらみ付けた。
「トモ、お前はスパイか？ 俺たちの新しい引っ越し先など極親しい身内しか知らないはずだ。コンピュータの情報を探りにでも来たのかよ」
今にも掴みかかりそうな勢いで詰問した。
スティーブは私の顔を真正面からじっと見つめた。なんだか催眠術にでもかけられたように私は身動きできなかったものの、その不安と苛立ちの表情の中にどこか憎めない子供っぽさを感じて私は続けた。
「スパイではない。約束するよ。だけど変な言い方だが私は君たちのことを君たち以上に知ってるんだ」

未来を見た方がいいのか？ 2018/09/11 hagoromo

そう言うしか思いつかなかった。
スティーブはなにかを感じたのか、無言で椅子を離れて冷蔵庫から冷えたアップルジュースを二本取り出しながら、
「なあ、トモ。俺って仏教徒になろうと思ったくらい日本文化は好きだが、そういえば日本人についてはほとんど知らないんだ」
と話題を変えた。
アップルジュースの瓶の一方を乱暴に私の前へ置きながら、
「だけどあのへんてこでクールな電卓みたいな奴を見た途端、俺は…お前が…トモがただ者ではないと思ったよ。どれほど俺たちのことを知ってるんだ」
スティーブは真面目な顔でいう。
(誤魔化しきれないことは分かっているが、どのように説明すれば良いのか)
しかしもしスティーブ・ジョブズの気持ちや好奇心を良い意味でつなぎ止めることができれば彼と友達になれるかはともかく、知り合いとして付き合って行けるかも知れない。それにこれが夢ではないのならいつ帰れるか、元に戻れるかは不明だし、最悪はこのままこの時代で生を全うしなければならないかも知れない。そうであれば何とかスティーブ・ジョブズの懐に入り込むよう努力してみようとかいう気持ちが固まってきた。
なにしろ私にはｉＰｈｏｎｅという最高の餌があるのだから…。そして頭の隅にはな

未来を見るカリスマ 2018/09/11 hagoromo

んとか初期のアップル社員となり、ストック・オプションでも手に入れることが出来れば金持ちになれるかも知れない…。とよからぬ考えもちらついた。

「そうだな、君の相棒はスティーブ・ウォズニアク。先般マイク・マークラの資金援助を受けて来年の一月三日に会社を法人化するんだったな」

瞬間、またスティーブの顔色が変わった。

「おい、法人化は急いで進めているがどうして一月三日なんだよ。俺を差し置いてマークラのやろうがスケジュールを決めたのか！」

と怒鳴った。

いやはや、歴史を知ってる者はとかく先走りしこうして失敗するんだなと反省しながらもスティーブの問いを無視して話しを続けた。

「十月だったかな、君たちはレジス・マッケンナ・エージェンシーとパートナー契約して企業ロゴのデザインを依頼したんだったな」

私は返事を待たずに、

「もう来年四月のＷＣＣＦ(第一回ウスストコースト・コンピュータ・フェア)出展は決めたのかな」

とたたみ込んだ。

未来を見たかりスマ 2018/09/11 ハガロマ

スティーブは、
「フン」
鼻で返事をしながら、
「よく考えれば調査会社ならその程度の事は知り得るよな。最初はびっくりしたけどマジックなら種はあるわけだ」
と息巻いた。
そんなことを言われた私はちょっと悪戯心が騒いだ。
少しリラックスしてきたらスティーブの凄い体臭が我慢できなくなった。
私は無言でガレージの出入り口まで歩きつつ、
「私は調査会社の人間ではないよ」
と言いながら1／3ほど下げられていたシャッターを一杯まで引き上げた。
カルフォルニアの乾いた風が襟首を心地よく吹き抜けていく…。
「スティーブ、君が秘密を守れるなら私が何者かを正直に話すよ。さっき会ったばかりのオヤジを信じろというのも変なのはわかるけど、そうでなければこのデバイスがなんなのかは喋れないよ。それに、たぶん君らの未来にとってとても有益な話しになると思うんだ」
私はスティーブの目を直視しながら話した。

未来を回回見たカリスマ20180911 hagaromo

スティーブは少しうつむきながら片手でむさ苦しい頭を掻きむしりながらも、「分かった。あと三十分ほどすれば仲間が戻ってくる。その前にその有益な話というのを教えてくれ。秘密は守るよ」

少し緊張しているのか、彼の貧乏揺すりで作業台の上のハンダごてが「ギッ」と音を立てた。

この二十一歳のヒッピー同然の若者が、後にマッキントッシュ開発の陣頭指揮を取り、一旦はアップルを追放同然に辞めたものの、十一年後に復帰してアップルを世界一の企業に押し上げた張本人だとは歴史を知っている私にも信じがたいことだった。

私は先ほどスティーブが返してくれたｉＰｈｏｎｅからおもむろにハードカバーを外し、その背面を上にしてからそっとスティーブに差し出した。

その瞬間スティーブの「ごくり…」という生唾をのむ音が聞こえ、不遜な態度に終始していたスティーブの背が伸び、凍り付いたように動かなくなった。

そこにはｉＰｈｏｎｅの背面には、先般レジス・マッケンナ・エージェンシーにデザインしてもらったばかりの６色アップルロゴが単色ながら燦然と輝いていた。

混乱したスティーブは気持ちを落ち着かせるためか椅子の上で結跏趺坐し瞑想のポーズをとった。

私はその姿を眺めながら彼の言葉を待った。

未来を見た方 ＿＿＿＿＿＿＿＿

「なにもかも変だ。なぜ俺たちのロゴがそこにあるんだ？なんだその ｉＰｈｏｎｅ っていうのは？ということは電話なのか？」

両目を閉じ、姿勢を変えずにスティーブはいったが、その声はすでに落ち着いていた。

「何もかも変だし奇妙だ。使い方も分からんが、その小さなディスプレイひとつ考えてもメチャクリアだしそんなの見たことないよ。いや聞いたこともない」

スティーブ・ジョブズは深く息を吸いながら独り言のように話し続ける。

「軍の最高機密はわからんけど、最先端テクノロジーなら俺たちが集まっているホームブリュー・コンピュータ・クラブに持ち込まれるはずさ。だけどそこでも話題にすら上ったことはない…」

「そんな小さな、いやサイズはともかく厚みがほとんどないディスプレイなんてありえない」

スティーブは私の顔色を探るように半眼の視線を送りながらいう。

「しかし奇妙なのは何故か懐かしい感じがする。それが何だかわからんが知っているようにも思える。やはり変だ…」

スティーブは軽く頭を振った。

そのときガレージ内の電話が鳴った。

未来を見た方 Kasumi Kaya

しかしスティーブ・ジョブズは椅子の上で瞑想のポーズをしたままだ。
私は思わず、
「スティーブ、電話…」
と余計なことをいってしまったが、それでもスティーブは姿勢を変えなかった。
何度目かのベルが鳴ったそのとき、
「はい、はい、電話ね」
とエプロンで両手を拭いながら中年の女性が姿を現し電話を取った。
「アップルコンピュータです。はい、そうです。ああウォズね、彼はいまおりませんが後ほど電話を…はい、そうですか、それではそうしてくださいな。よろしくね」と言って電話を切った。
「あらあらお客様だったのね。気がつかなくてごめんなさい。いまコーヒーでも淹れるわ」
彼女は作業テーブルに散らかした林檎の芯と2本の空瓶を片付けながら奥に消えた。
スティーブはやっと瞑想のポーズを解きながら「お袋だよ」と説明した。
「なるべく電話に出てもらっているんだ。俺たちだと第一印象が悪いってマークラがいうから…」
「クララさんですね」

未来を見た。ガリスマ2018-09-11 hagaromo

私の問いにスティーブは瞬きで「そうだ」という意思表示をした。

スティーブ・ジョブズの養母であるクララ・ジョブズは夫のポール・ジョブズと共に歴史の表舞台にはほとんど登場しないが、この両親たちの暖かい理解がなければアップルコンピュータ・カンパニーはその本拠地さえ確保できなかった。

なにしろアップルＩの組み立ては当初開発者であるスティーブ・ウォズニアックの自宅で始めたが、まずいことにウォズは新婚だった。その新婚の家にドタドタと薄汚い野郎共が押しかけ、キッチンテーブルを占領して散らかすので妻のアリスに嫌われた。

最後の砦がジョブズの自宅の一室だった。

その部屋はジョブズの妹パティが嫁ぐまで使っていた部屋だったがすぐに部品や納品のための箱で狭くなったし、ハンダごてで家具に焼け跡を作ったりもした。ちなみにパティもジョブズと同様養子として迎えられた血の繋がっていない妹だった。

見かねた養父、ポール・ジョブズが「ガレージを使ったらどうだ」と提案したことから収まるところに収まった。

姿勢を正したスティーブは両手の指先を胸の前で合わせ、私が持っているｉＰｈｏｎｅをにらみながら考え込んでいた。

未来を見る方がマシ 2018/09/11 hagaromo

そのときクララがトレーにマグカップを二つ乗せ再びガレージに入ってきた。
「お待たせしたかしら。どうぞ…」とコーヒーが入ったマグカップを作業テーブルに置いた。
「ありがとうございます」
私は合掌のポーズをしながら丁寧に頭を下げた。
「お仕事の話しでいらしたんでしょうけど、失礼ながら貴方のような年配の方は歓迎よ。ここはヒッピーの集会所みたいになってるでしょ。私は若い人たちも好きだけど皆宇宙人みたいで何考えてるかわからないもの」とニッコリと笑った。
確かにあらためて考えればこのときクララは五二歳だったはずだ。したがって後に出会うことになるマイク・マークラやロッド・ホルトも含め、私はずっと年上だった。
続いてクララはスティーブの方に優雅に向き直りやさしい声でいった。
「そうそう…スティーブ、小一時間前かしら、アリスから電話があって泣かれたわ」
クララの言葉にスティーブは両肩を上げて聞いていることを示した。
「いつもの話しよ。ウォズのことよ。新婚だというのにろくに家にも帰らず、アリスが仕事から帰って食事を作り待っているのに夜半過ぎに帰ってもマグドナルドで済ましたというんですって。怒って当然よ！」
軽いため息をついたクララは続けた。

未来を見た方 ＿＿＿＿＿＿＿＿

「原因はアップルそしてスティーブ、貴方だというのよ。アップルと貴方に主人を取られたと泣くのよ。あなたたち親友でしょ、なんとかなさいな」

語尾のニュアンスは少しきつい言い方だったが、スティーブを信頼している暖かみが私にも伝わってきた。

「そうそうもうひとつ。アップルＩを欲しいという人からの電話よ。そこにメモを置いたから後で電話してあげてね」

「ああ、わかったよママ」

スティーブは意外に素直だった。軽く片手をあげて承知したことを示すとクララは私の方へ笑顔を送りながら奥に引っ込んだ。

母親の姿が見えなくなると、以前のスティーブに戻った。

「トモ、もうすぐ仲間たちが戻ってくる。皆の前では、そうｉＰｈｏｎｅといったな、そのデバイスのことは内緒にしろ。いやしてくれ、頼む。ウォズにもなっ」

勿論私も同じ考えだった。この時代の優秀な頭脳たちに見られたらどんな混乱を引き起こすかと心配していたからだ。

「わかった。別途時間を作ってくれればいつでも君だけに説明するよ」

私が快諾したことで安心したのか、スティーブは「ニッ」と笑った。

「二人だけの秘密だぞ。そうだ、ところで今夜はどこに泊まるんだ」

未来を見た方は、ご注意！ 2018/09/11 hagaromo

スティーブの言葉に私は厳しい現実に引き戻された。
無論泊まる場所もなければ金もない。このままでは食事もできないありさまだった。
私の困った顔を察したのかスティーブはいった。
「よし、事情は後で聞こう。よければしばらく俺のところに居候しろ。このガレージなら寝る場所いくらでもあるぜ」
命令口調だったがその顔は笑っていた。
クララの淹れてくれたコーヒーはすでに冷めかけていたが、私はありがたくそのブラックコーヒーをゆっくりと喉に落とした。
ふと気がつくと外で数人の賑やかな声が聞こえる。
「仲間たちが戻ってきたようだ。トモのことは俺の友人ということで紹介するから話しを合わせておけ。年齢は皆かなり違うがこの世界では年の差なんてクソだ。トモと俺は共通の知り合いを持つ友人ということにしようや」
一端言葉を切ったジョブズは真顔になって続けた。
「ｉＰｈｏｎｅとやらはそのバッグにでも仕舞って誰にも絶対に見せるなよ」
立ち上がったスティーブ・ジョブズの凜とした姿はまさしく伝説の…我々がよく知っている男の姿そのものだった。

未来を見たカリスマ 2018.09.11 hagaromo

仲間たち

ガレージに近づいてくる姿は三人だった。
私には遠目にもそれがスティーブ・ウォズニアックとマイク・マークラ、そしてロッド・ホルトだとわかった。
最初にガレージに入ってきたのはウォズだった。
「途中でホルトに会ったんだよ」
彼はジョブズ以上の早口でいったあと、大きなため息をつき一番奥の席にどかっと座った。背はジョブズより低いが体格は良く無精髭が伸びていたし髪も伸び放題で整える気はないようだ。それに悪いけどセンスのかけらもないシャツ姿だった。どうやら自分の格好には気が回らないようだ。

ウォズは近づいた私に気づき満面の笑顔でどこか恥ずかしそうな表情で手を差し出した。
「ウォズだ…よろしく」
「トモヒコといいます」
私も軽く頭を下げつつ握手を返したが、ウォズニアックの姿は縫いぐるみの熊のよう

未来を見たカリスマ 2018/09/11 hagoromo

に思えた。そういえば一九九〇年代後半だったか、秋葉原のラオックス前で数人に囲まれ店に入っていくウォズを見たことがあったが本人と握手したのは初めてだ…。

少し遅れてマイク・マークラが顔を出した。スーツ姿でネクタイを着用した姿は少し疲れたように見えた。その紳士然としたスタイルはガレージオフィスに似合わなかったが軽く右手を挙げ無言で我々に挨拶をしウォズと離れた椅子に腰掛けた。

最後にオートバイを留め、くわえていたタバコを放り投げてから入ってきたのはホルトだった。革ジャンを着こなしサングラスを外しながらガレージに入ってきた彼はまるでロックスターのようで格好良かった。

脱いだジャンパーとサングラスをテーブルに乗せながら私に「よっ」といった視線を送った。ホルトは見かけよりずっと紳士だった。

面白いのは皆スティーブ・ジョブズと一緒にいる初対面の私のことを「誰だ？」と聞かないし気まずい感じもない。

この時期、さまざまな人たちがこの小さなガレージを訪れただろうから、慣れているのだろうか。

マークラに顔を近づけたジョブズは、

未来を見た方 Hagoromo

「どうだった？」
と小声で聞くとマークラは一瞬ウォズの方へ顔を向けつつ顔を左右に振った。
ウォズは背を向けていた。
「そうか、奴はヒューレットパッカード命だからなあ」
スティーブはため息をついたが、
「よし、それはまた別の機会に話そう」
スティーブは呟きながら奥に入りガレージから姿を消した。それを追うようにウォズも立ち上がり姿を隠した。

マークラはやっとリラックスした姿勢を取りながら苦笑を浮かべる。
「説得は失敗かい」
ホルトが苦笑いしながらマークラに問う。
「ああ、ウォズはヒューレット・パッカードの職は失いたくないんだよ」
「だけど法人とするからにはウォズが常勤でないと君は納得できないんだろう？」
ホルトの言葉にマークラがうなづいた。
「ぼくの事業計画をきちんと遂行するには当然のことだし、ウォズは技術職だといっても責任ということを知ってもらわないとね」

未来を頑固だ　カリスマ　20180913 hagaromo

いいながらマークラは両手で頭を抱えた。
「ウォズは意外と頑固だから厄介だよな」
とホルトは奥のテーブルに向かった。彼はアップルⅡの電源開発を任されていたはずなのでその仕事があるのだろう。
思わず私はマークラに向かって、
「大丈夫ですよ。ウォズは最後の最後で貴方たちの説得を受諾しますよ」
と言ってしまった。
マークラは勿論、奥に座ったばかりのホルトも立ち上がって私の方に向き直った。
「あっ、私はスティーブ・ジョブズの友人でトモヒコ・カガヤといいます。日本人です。しばらく居候させてもらうことになりました。トモって呼んでください」
そのときスティーブ・ジョブズが奥から現れ、
「トモは超能力者だぞ。未来が分かるらしいから皆気を付けないとな。しばらく俺んちに寝泊まりするからよろしくな」
と茶化すように紹介してくれた。
「それはそうとＷＣＣＦまで後四ヶ月だ。何とか展示用のアップルⅡを何台か完成させなきゃならないぞ。ホルト、電源は旨く行ってるかい」
「電源のことは任せとけ。それより試作品を設計どおりに組み立てたんだが動かん。言

未来を見たカリスマ 2018/09/11 hagaromo

いたくないがウォズ自身も原因が分からんではどうしようもない」
ホルトは困った顔をした。
ジョブズはホルトに、
「ウォズの奴は、お前には一目置いてる。なんとかしてくれよ」
となげやりの口調でいった。
ホルトはマークラよりも年上だったが、なによりも物知りで博学だった。
エレクトロニクスにも優れたセンスと知識・技量を持っていた。それに政治経済の知識はもとよりオートバイ、写真技術やカメラ、印刷技術そして陶磁器の釉薬に話しが及んでも説得力のある話を展開できたから皆もホルトには一目置いていた。
「俺にいわずに直接ウォズにいったらどうだ。なにしろウォズは配線図も書かずに組み立てたわけで、他人はもとより本人にもなぜ動かんか分からないというんだ」
ホルトは吐き捨てる。
一息入れたホルトは、
「なあスティーブ、独断だがビルに配線図を再構築するよう頼んだよ。彼ならウォズのミミズが走ったようなメモも読めるらしいしな」
ちなみにビルとはビル・フェルナンデスのことだが、彼がスティーブとウォズを引き合わせた人物だった。

未来を見る方 カリスマ 2018/09/11 hagaromo

ビルは私が日本人だと知るとなにかと親切にしてくれすぐに友達になった。彼は母親がスタンフォード大学で極東文化を専攻していた関係で極東アジア文化に造詣も深かったことから日本に興味をもったらしい。

事実二年後の一九七九年には来日し、札幌で二年間生活することになる。ビルにアップルⅡの配線図をあらためて作るよう依頼したというホルトをフォローするようにマークラがいう。

「ウォズは天才だが閃きで物事を進めるから周りが困る。これからは特に技術的なことはホルトにサポートしてもらうようにしようや」

スティーブの返事を待たずホルトは「やってみるよ」と言いながら再度机に向かった。

事実ウォズニアックの技術力には誰もが敬服したが、なにごとにつけてもウォズは最後の詰めがあまかった。ひとつひとつの部品の管理はもとより、勘や経験だけに頼らずしっかりとした配線図作りと仕様を決め、それに基づいた製造をすべきと主張したのはロッド・ホルトだった。そうでなければ大量生産は無理だった。

マザーボードに配された各チップ間に流れる信号をチェックするため、初めてオシロスコープを活用したのもホルトだった。

この後、ウォズが新しいアイデアを思いつくと、誰もが理解できる形に図面化し機能

未来を見通せ　ガリスマ　2018/09/11 hagoromo

を立証しろとうるさく主張する役割も彼の仕事になっていた。ホルトにいわせれば、ウォズの閃きによる判断はほとんど信用できなかった。

トイレにでも行っていたのか、ウォズが戻ってきた。

「ウォズ、ママがアップルＩが欲しいという電話を受けたそうなのでフォーローしてくれ」

スティーブ・ジョブズは母のクララが書いたメモをウォズに渡しながら、

「今日の仕事はいいから家に帰ってやれよ。アリスから電話があってママに泣きついたらしいぞ」

珍しく優しい声でウォズに呟いた。

ウォズはなにかをいいかけたが口には出さず両肩を上げて賛意を示し、のっそりとガレージを出て行った。

「ウォズ。明日はメチャ忙しいぞ。頼んだぞ」

ウォズの後ろ姿に向かってスティーブが怒鳴った。

「お袋さんが泣きつかれたか」

マークラがわかったというように呟く。

「俺も結婚と離婚を繰り返したから人のことは言えんが、ウォズは新婚だしな」

未来を見るカリスマ 2018/09/11 hagoromo

とホルトは姿勢を変えずにいった。
スティーブはマークラとホルトの話しを聞き流し話題を変えた。
「マークラ、法人化は急いでくれ。ここにいるトモのお告げだと来月新年早々三日がいいそうだ」
私の方を向きながらウィンクした。
「法人化と引越をやりながら四月のＷＣＣＦ出展の準備をしなければならない。予算はマークラのおかげで心配ないが、肝心のブツが出来ないようでは皆の苦労が水の泡だ。マークラ、例の件も続けてウォズを説得してくれ」
スティーブ・ジョブズは再びガレージの奥へと消えた。
ホルトが使うハンダごての煙と臭いがガレージに広がっていく。
気がつくとガレージから仰ぎ見るカルフォルニアの空に夕闇が迫っていた。その夕焼けの向こうに心配顔の妻の姿が浮かんだ。

行くところも寝るところもなく持参していた円貨やクレジットカードは四十年後の未来のものだからして使えない。妻が狂いそうなほど心配しているだろうと思うと気が気でなく息苦しくなるが、私にはどうすることもできなかった。
手にしたままのｉＰｈｏｎｅを眼前のガレージから出てきたスティーブ・ジョブズと

未来を見たカリスマ 2018/09/11 hagoromo

名乗る若者に見られて質問攻めにあうが、それが縁でしばらくの間ガレージに居候することになった。

私はその後、スティーブ・ジョブズと二人だけの機会を見つけては過日見せたｉＰｈｏｎｅや私が何者であるかについて、信じるか信じないかはともかく真実を話した。

「俺も大概のことには驚かないよ。二年前にコトケとインドへ行ったときも想像もできない度肝を抜かれるようなことが多々あったよ」

ジョブズは私の目を凝視しながら話しを続けた。

「瞑想や不思議な体験も経験したがトモの話しはぶっ飛んでる。そのまま信じろという方がおかしいがお前の手にはこのｉＰｈｏｎｅがある。それはどう考えてもいまのテクノロジーでは実現できないことも事実だ」

私はジョブズが喋っている間は口を挟まなかった。

「トモ、一度に全部信じろというのは無理だが、俺は君がクソやろうだとは思えない。少しずつ俺を納得させてくれ。それでいい」

姿勢を変えて彼は続けた。

「トモは未来が分かるという。でも聞きたいことと聞きたくないことがあるさ。しかし君なら俺たちのこれからにとって有益なアドバイスを期待できるよな」

これまで私のことを「お前」と呼んでいたのが「君」に変わっていたことに気づい

未来を見た。カリスマ 2018/09/11 hagoromo

た。基本的には信用してくれたに違いない。
「君に勤まるかは分からんが、今後俺の秘書役としてつるんでくれ。いいな」
ジョブズはさっぱりした表情であらためて右手を差し出した。
私は「ありがとうスティーブ」といいながら彼の手を強く握り返した。

ウォズニアックへの説得

アップル・コンピューター・カンパニーは法人化を急ぎ、来年(一九七七年)四月に開催される第一回ウエストコースト・コンピュータ・フェア(WCCF)でアップルIIをお披露目することを目標に全員が寝る間も惜しんで働くことになった。
そういえばスティーブは早々にWCCFの主催者であるジム・ウォーレンと電話で話し、会場入り口正面の目立つ位置に小間を予約した。
私もボーと突っ立っているわけにはいかない。ウォズをはじめマイク・マークラ、ロッド・ホルトや頻繁にジョブズのガレージに出入りしていたダン・コトケらと友好を深

未来を見たかりんだ 2018/09/11 ハンダ付けなどを手伝うようになっていた。

めながら雑用や簡単なハンダ付けなどを手伝うようになっていた。

スティーブ・ジョブズにはやらねばならないことが山積みだった。まずはアップル・コンピューター・カンパニーの法人化だが、これにはひとつの案件が障害となっていた。

それはマークラがスティーブ・ウォズニアック、通称ウォズがアップルの常勤であることを前提に法人化を考え事業計画を立てていたことだ。しかし当のウォズはヒューレット・パッカード社を辞める気はなかった。

そもそもその年の四月一日、もう一人の創業者であるロン・ウエインを交えアップルを会社組織にすることに同意した際、ヒューレット・パッカードを辞めなければならないという話しはなかった。ウォズは安定した技術職を離れたくなかったしヒューレット・パッカード社が好きだった。

「僕は会社を作って儲けることにどうにも違和感があるんだ」

ウォズは私とふたりきりのときにいみじくも話してくれた。

「アップルⅡの設計を終えたら僕の仕事は、会社にとっての僕の役割は終わってしまうんではないかと思うんだ。それでもヒューレット・パッカードを辞めてアップルに居続けなければならないのかな」

未来を見た方 ハリスマ 2018/09/11 hagaromo

ウォズはビジネスも金儲けにも興味がなかった。

「僕は一生ヒューレット・パッカードの技術職で人生をまっとうし、余暇に好きな発明でもして友人たちを驚かすことができればそれで満足なんだよ」

ウォズはちょっと悲しそうな表情を見せた。

しかしマークラたちからしてみれば創業者であり天才技術者のウォズが片手間仕事では将来に不安があった。したがってスティーブ・ジョブズはもとよりここのところマークラが事あるごとに説得を試みていたがウォズの決心は変わらなかった。とはいえマークラもその点だけは譲れなかった。

結局年が明けた一九七七年一月三日、私のご神託の通り、マークラは堅い決心で自宅のプールサイドに株式会社設立の発起人全員を集めた。

その場にはマークラは勿論、ジョブズ、ウォズそしてホルトがアップル・コンピューター・カンパニーを株式会社にする契約にサインすることに同意し集まっていた。またどうしたことかスティーブは「トモ、君もオブザーバーというか記録係として同席しろ」といったことから私も見た事もない素敵なプールサイドの椅子の一つに座ることになった。

問題はただひとつ、ウォズを常勤で働くことに同意させることだった。

未来を見た方がいいのか？ 2018/09/11 ハガロマ

マークラは、
「ウォズ、私は君が常勤であることを前提で法人化を進めてきた。この場におよんでも君が嫌だというなら白紙に戻すしかないがどうだ」
と珍しく強く詰め寄った。

ジョブズが続けて、
「そもそもアップルは一生で一度くらい会社をつくってみようや…ということでお前と一緒に起業した。その会社がいま大きく飛躍しようとしているんだ。それもお前がいなければできないことだよ。腹をくくれよ。すでに一年前の俺たちではないんだ」
ジョブズの隣に座っていたホルトが口を開いた。
「もし会社が早々に駄目になったら、俺は君がヒューレット・パッカードに再就職できるように最善の力を尽くすよ。まあ君の天才ぶりならヒューレット・パッカードだって歓迎するだろうし」と悠然と言い放った。
達観したようなホルトの物言いだったが、ヘビースモーカーの彼がキャメルの灰が落ちるのを忘れていたことを見れば彼もいささか緊張していたようだ。
それだけ今後のアップルにとってこの場の決断は重要だった。

未来を見た力 Kaiser Mayer Nagoya

そもそもウォズの父親をはじめ、周りの親しい人たちは「ウォズはスティーブ・ジョブズに利用されている」と考えていた。

優れたコンピュータを作ったのはウォズだ。だとすればそこから生じるすべてのプラス要素、無論お金も含め、特許やらもウォズに期すべきだと考えていた。

ウォズ自身の心境は残念ながら他のスタッフたちとは違い、アップルという会社で働いているという意識はほとんどなく、相変わらず仲間との遊びの延長だった。

しばらくの間、マークラとジョブズ、ウォズが喧喧諤諤とやりあったがホルトと私は口をはさまなかった。

ため息のあと、マークラはいつもの落ち着いた紳士然とした態度に戻り、あらためた口調でウォズにいった。

「君は会社を作るよりコンピュータの設計そのものが好きなことはよくわかっている。アップルは投資や儲けの場所ではないと思っていることも知っている」

ウォズもあらためてマークラを見つめた。

「我々も会社を作って暴利をむさぼろうと考えているわけではない。君の設計したこれまでにない素晴らしいコンピュータで世界を変えようとここまで皆が頑張ってきたんだ。これからも一緒に、そしてずっと力になってくれ」

未来を見通せたかリスマ2018-09-11 hagoromo

ウォズは大きな体を一端椅子から離して座り直し、
「わかったよ」
とつぶやいた。
「それにしてもジョブズが僕の友人たちに電話をかけて僕を説得させたのにはまいったよ。いつの間にか僕は悪者みたいになっていたんだからね」
ウォズはいたずらっぽい顔で皆を見回した。

じっと聞いていたスティーブが口を開いた。
「ウォズ、お前も知ってのとおり俺も大企業は大嫌いだ」
吐き捨てるようにスティーブは続けた。
「昨年大規模な汚職が明るみになったロッキードを見ろ。議員を買収し多大なリベートや裏金を受け取る。こんな醜いことはないよ。もし僕らの会社が成功し大企業になってもそんな怪物のような会社にはしないさ。それは俺も望むところだ。約束するよ」

ウォズが結局ヒューレット・パッカードを辞め、アップルで常勤することに決めたのにはマークラやジョブズらの説得よりもっと明確な理由があった。
あるときウォズが私にぽつりと話してくれた。

未来を見た力 Ⅰ 2018/09/11 hagoromo

「トモ、君は以前マークラらに『ウォズは最後の最後には説得を受け入れる』といったらしいね」
テディベアーのような髭面をしたウォズは私の顔を覗き込んだ。
「ああ、そんなことをいったかな」
誤魔化すしかなかった私は曖昧に答えた。
しばらくの沈黙の後でウォズは少し寂しそうにいった。
「僕が作ったコンピュータは仕事とは無縁だったけどヒューレット・パッカード在職中に作ったことは間違いないんだ。これまでの経験も確かに役に立っている。だからできればヒューレット・パッカードでアップルⅡを生産し売り出すことはできないかと上司に話しを持ち込んだんだよ」

ウォズらしい律儀といえば律儀な話しだがウォズは続けた。
「それができれば僕は大好きなヒューレット・パッカードを辞めなくて済むからね。でもそこは大会社なんだよヒューレット・パッカードはね」
「断られたのかい」
私の質問にウォズは髭を擦りながら…
「興味ないといわれたよ。僕が大好きな個人向け、ジョブズ流にいえばパーソナルなコ

未来を一番見たカリスマ2018-09-11 hagaromo

ンピュータを作り続けることができるのはヒューレット・パッカードではなくアップルしかないと気がついたわけさ」

当時ヒューレット・パッカードはメインフレームからポケット型電卓までを生産していた。したがってパソコンを開発する下地は十分にあったしパソコン開発に一番近いポジションにあったともいえる。

結局ヒューレット・パッカードは個人がコンピュータを持つというイメージを膨らませることができなかった訳だが、このとき対応した上級技術者たちはウォズニアックが学位を持っていなかったこと、コンピュータの専門家ではなかったからということに拘ったとも言われている。

「ヒューレット・パッカードに試作品を持ち込んだ事はスティーブ・ジョブズも知ってるの」

私は聞いた。

「勿論さ。彼は僕の話が断られたと知ったとき顔がパアッと明るくなったよ」

ウォズはもしヒューレット・パッカードでアップルⅡが受け入れられたならアップルを飛び出していたかも知れない。しかし幸いというべきだろう、アップルⅡの未来を一番高く評価していたのはスティーブ・ジョブズだったのだ。

未来を見た男 Apple Computer Inc.

第二章　アップルコンピュータ社誕生

ジョブズの憂慮

結局会社名はアップル・コンピュータ・インコーポレーテッド（Apple Computer Inc.）とし、二人のスティーブがそれぞれ株式の三十％を、そしてマークラも同じく三十％の株式を取得し、残りの十％をホルトが持つことになった。

契約書に皆がサインしマークラの自宅から出て行くとき、マークラは皆にいった。

「例の社長が決まったよ。引越が済んだら顔合わせの機会を作るがナショナルセミコンダクター社で上級管理職だったマイケル・スコットという男だ。覚えておいてくれ」

一番の懸案事項が片付いたとはいえ問題はまだまだ山積みだった。

新しいオフィスへの引越日程が決まったある日も朝から皆がピリピリしていた。

「トモ、今日は冷えるな。不足していた部品を買ってきたよ」

ビル・フェルナンデスが片手をジーンズのポケットに入れながらガレージに入ってきた。彼がもう一方の手にぶら下げていた重そうな袋を受け取ろうと私は立ち上がった。

「まったく、いまだに僕は雑用係だよ」

未来を見たカリスマ 2018/09/11 hagoromo

フェルナンデスは愚痴をいいながら袋を私に委ねた。
「いや、私も雑用係としては君の相棒だよ。それに君ほどテクノロジーのことを知らないから仕方ないけど」
私は慰めにもならない言葉をかけた。
フェルナンデスは私の目をまっすぐ覗き込みながら、
「理由は知らんが、ジョブズは君のことを高く評価しているよ。あの口五月蠅い、いや失礼、彼としては珍しいよ」
と小声でいう。
私は素直に、
「それは嬉しいな」
とこれまた小声で呟いた。

今日もジョブズの機嫌は悪かった。
「おい、ビル！アップルⅡの配線図は間違いないか。お前のおかげで組み立ての目処はついたがいまだに不安定だそうだ」
ジョブズは横にウォズがいるのにわざわざフェルナンデスに不満を向けた。
「配線図はばっちりですよ。それはウォズやロッドも認めてくれたし。後は問題をつぶ

未来を見た。カリスマ2018-09-11 hagoromo

していくしかないですね」
フェルナンデスは言いながら自分の椅子に座った。
フェルナンデスは反撃のつもりかピリピリしているジョブズに体を向け、
「ケースの色は決まったの」
と嘲笑気味に問うた。
ジョブズがムッとした顔つきをしたときマークラがガレージに入ってきた。
マークラはフェルナンデスの言葉が聞こえたのか大きな声を出した。
「ジョブズ、そのカラーだがいい加減に決めてくれないとな。君は人には急げ急げと厳しいが、自分の決断も急いでくれよ。アイボリーだか何だか知らんが千種ものカラーサンプルを取り寄せたのはまあいいとしてもだ、いつになったら決まるんだ。決めてくれるんだ」
とジョブズに詰め寄った。
スティーブ・ジョブズも負けてはいない。顔色一つ変えずに反論しようとしたときガレージの奥からポール・ジョブズが顔を出した。スティーブ・ジョブズの養父である。大柄なポールは若い時にはあのジェームス・ディーン似ともいわれた男だった。そのパ

未来を見たカリスマ 2018/09/11 hagoromo

パが和やかにマークラとジョブズの間に入り込み、
「なあマイク、君たちが苛つくのもよくわかるが、色の道は息子に任してくれや」
ポールはマイクの肩に手を置きウィンクしてから「アッハハハ」と笑いながら奥に戻っていった。
まだ少年だったクリス・エスピノサは、
「なるほど僕には色の道は早いよな」
といったのをきっかけにウォズやフェルナンデスそしてホルトも笑い出した。
肝心のマイク・マークラも、
「色の道か、そりゃあ確かに難しいな」
と苦笑しながら憮然として立っているジョブズの前を離れた。

ＷＣＣＦまで後三ヶ月を切ってしまった。しかしアップルⅡの試作品はまだまだ思うように動かなかった。
そうした理由もあってジョブズやウォズを筆頭に全九人は寝る間も惜しんで働いた。
九人とはスティーブ・ジョブズ、スティーブ・ウォズニアック、マイク・マークラ、ロッド・ホルト、ビル・フェルナンデス、クリス・エスピノサ、ダン・コトケ、ランディ・ウィギントンそして私ことトモヒコ・カガヤだ。

未来を見た。カリスマ2018-09-11 hagoromo

一九七七年一月三日に法人となったアップル・コンピュータ社は、20863 Stevens Creek Blvd., B3-C Cupertino CA 95014 に引っ越して新たなスタートをきった。

ただし先走るがこの新しいオフィスはガレージよりはずっと広かったし会社らしくなったもののすぐに手狭になり、ほぼ一年後の一九七八年一月二八日には 10260 Bandiey Drive Cupertino Callfornia 95014 へ再度引っ越すことになる。

ともあれ第一回ウエストコースト・コンピュータ・フェアは迫っていた。

スティーブ・ジョブズは快活に動き続けた。しかしこの頃から彼の２つの性癖がこれまで以上に強く表に出るようになった。

ひとつは完璧癖、もうひとつはスピードへの執着だった。

些細なことに首を突っ込むのは由としても、特にクリス・エスピノサやランディ・ウイギントンらへの言葉遣いは尊大で乱暴を極めた。

「なぜ、お前らはクソみたいに仕事が遅いんだ。ソフトウェアを組むなど簡単だろうに」

「もっと見栄えにも気を付けろ。俺たちにガラクタは無縁だ。最高のコンピュータを作

未来を見たかりこ

るんだ！」

わめき散らすジョブズだったが、不思議に私に対して怒鳴ったりわめいたりはしなかった。自分の親より年上だったからだろうか…。

そういえばこの頃の彼はソフトウェアの開発には計算づくではなし得ない相応の時間がかかること、なによりもバグをつぶすことに時間が必要な事実を理解できなかったと思われる。

そしてこの時期、スティーブ・ジョブズが苛つく理由はＷＣＣＦへのスケジュール履行だけではなかった。

マイク・マークラに連れられてやってきたアップル最初のＣＥＯ、マイケル・スコットとは最初から肌が合わなく顔を会わせるごとに罵りあうようになっていた。

マイケルは普段は マイク と呼ばれていたが、マイク・マークラと区別するため社内ではスコッティと呼ばれるようになった。ともかく彼は柔軟な面を見せるかと思えば尊大な態度をとることもあった。

ジョブズと違う点は、そうした態度は感情的で思わず…といったものではなく、計算づくだったしスティーブ・ジョブズと張り合うだけの押しの強さももっていた。

なかなか食えない男だったが、彼がいたからこそガレージでのバイト感覚が抜けきれ

未来を見る方 カリスマ2018-09-11 hagaromo

なかった社員たちを鼓舞しアップルを会社らしい組織へと牽引できたといえる。

「スティーブ、俺は君たちに請われてここに来たんだ。アップルを素晴らしく素敵な会社にするためにな。社員たちがアップルで働けて誇らしいと思うような企業にしなければならないんだ。そのためには最低限の規則、約束事が必要なんだ。君がごり押しする社員番号とて遊びではないんだ。わかってるのか！」

社員が急激に増えていったからそれを効率よく管理し、実績を評価するためには社員番号を採用し社員証を作ることが急務だった。しかしここでも厄介者はジョブズだった。

スコッティは社員番号1番をウォズに割り当てたがそれが誇り高いジョブズの勘に障った。

「なぜ1番は俺でないんだ！」

ジョブズは恥も外聞もなく騒ぎ立てた。

スコッティに詰め寄り変更しろと要求するもスコッティも強者だったから社長としての権限だとして譲らなかった。

ジョブズは怒ったり哀願しても効果がないと悟ったとき、ついには泣き出した。それ

未来を見るかりスマ 2018/09/11 hagaromo

でもスコッティはガンとして主張を曲げなかった。
「トモ、スコッティは頑固すぎると思わないか。俺様が頼んでいるのに今日なんか一瞥も返さないんだぜ」
私と洗面所で二人だけになったときにジョブズは愚痴をいった。
「君がスコッティを説得してくれないか。頼むよ」
「スティーブ、君も知ってのとおり私は単なる平社員だ。君のためにできることなら何とかしたいがスコッティを籠絡するのは難しいと思うよ」
私の担当はスティーブ・ジョブズの秘書役兼アドバイザーだったが、特に決まった役職についていたわけではなかったし誇れる技能をもっていたわけでもなかった。ただしジョブズの肝いりで役員待遇に甘んじ、どこへでも出入りが許されていた。しかしだからこそ無用なトラブルには巻き込まれたくなかったしスコッティに睨まれたくはなかった。事実もしここを追い出されたら私には行くところがなかった。
「しかし、トモなら客観的な立場でスコッティを説得できるよ。誰が見ても俺がアップルなんだからな」
社員番号にあくまで拘るジョブズは執拗に私に仲介しろという。
「1番が無理なら0番にしてもらったらどうだい。1番より前という理屈だし、0番だなんて社員はいるはずもないし」

未来を見た方がいいのか？ 2018/09/11 ｈｉｇｈｒｏｒｏｒｏ

私は面倒なのでその場しのぎにいい加減なことをいったが、途端にジョブズの顔が輝いた。

「さすがにトモ、君は凄いな」

後で聞いたところによると、ジョブズはその足でスコッティを探し自分の社員番号を０番にしろと迫ったという。スコッティも大人げないジョブズに根負けしたのか表向きの社員番号、すなわち社員証の０番を承認したという。無論社内のデータ運営上、ジョブズの正式な社員番号は２番だったが。

ちなみにマークラの社員番号は３、スコッティは本来５番目の入社だったが、好きな数字である７を社員番号とした。

スコッティとの確執の他にスティーブ・ジョブズの頭痛の種はウォズのことだった。ウォズは四月のＷＣＣＦ出展のため日夜を問わず働いたが、その働き方には大きなムラがあった。

企業としての規律を重んじるスコッティから見てもウォズの不規則な就業癖は困ったことだと考えられていた。

ＷＣＣＦを終えた後の話だが、ホルトが珍しく慌てて私の所に飛んできたことがあった。

未来を見たかりしてマ 2018/09/11 hagaromo

「トモ、聞いたか。スコッティがウォズを首にするというんだ。ジョブズは知ってるのか」

事実そんなことも懸念されたほどウォズは気に入った仕事に対しては集中するものの他人から与えられた仕事は何とか理由を付けて先延ばしした。また会社の立場を考えもせず行動することも目立った。

例えば起業以前ブルーボックスを作る際に知り合ったジョン・ドレイパーにウォズはアップルⅡの拡張スロットに差し込むだけで電話をかけられるインターフェースカード制作を軽い気持ちで依頼した。

ドレイパーはキャプテン・クランチと称し電話システムに不正侵入して長距離電話を無料で利用し続けた罪で服役し出所したばかりだった。

マイク・マークラやマイク・スコット、そしてブルーボックスを売り歩いたことのあるスティーブ・ジョブズもウォズにドレイパーと付き合うなと苦言を呈したがウォズは「これは史上もっとも偉大な製品の1つになる」と耳を貸さなかった。

結局ドレイパーが拡張カードとアップルⅡをペンシルベニア州に持ち出した際にドレイパーは逮捕され刑務所に逆戻りとなった。

ドレイパーが作り出したものはまさしくアップルⅡ駆動によるブルーボックスだったのである。

未来を見た男 カリスマ 2018-09-11 hagoromo

「まったくガキじゃあないんだからウォズにもほとほと困ってるよ」
ジョブズは苦々しく吐き捨てた。
「アップルは無関係で済むのかい？」
私の質問にジョブズの表情はさらに曇った。
「警察の事情聴取は免れないとスコッティは怒り心頭だよ。何しろウォズから依頼されたとドレイパーが証言しているんだ」

ウォズはなぜこんな無謀なことに手を染めたのだろうか…。もともとウォズは知的好奇心を最優先する傾向があった。そんなときには周りの他のことは眼中になくなる。だからこそアップルⅠやアップルⅡを開発できたともいえる。
あるとき会社の長椅子で仮眠しているウォズニアクの姿を見て私は近づきいった。
「ウォズ、余計な事だけどたまには息抜きも必要だと思うよ。帰ってきちんと休むといいよ」
顔をこちらに向けたウォズは、
「ありがとう。でも僕にとってここ(会社)は避難場所でもあるんだ」
早口でいったウォズの真意をそのとき理解できなかったが、結局妻のアリスとは結婚十七ヶ月で別居および離婚となってしまった。彼はプライベートの悩みを払拭するため、

未来を見たカリスマ 2018/09/11 hagoromo

目の前のことにのめり込んだのかも知れない。
ジョブズはボソッと私にこぼした。
「ウォズの野郎には困ってるよ。若い奴らにとってウォズは神様のようだが俺たちはもうチーム、組織で動いているんだ」
ジョブズの口から組織だなんて言葉がでてきたので苦笑せざるを得ないが、このころからジョブズとウォズが二人で仲良く談笑するシーンはほとんど見られなくなった。
ウォズに敬意を払っていたランディ・ウィギントンと目が合ったとき彼は心配そうにいった。
「ねえトモ。ウォズとジョブズがうまくいってないみたいだ」
「なにか直接の原因でもあったのかな」
私の問いにランディは我が意を得たりといった顔をして話しを続けた。
「貴方も知ってのとおり、二人の言い合いはアップルⅡのスロット数をいくつにするかという議論あたりから激しくなったみたいだよ」

アップルⅡの仕様をフィックスする際、いくつか重要なことが決められた。その多くは押しの強いジョブズの主張が通ったようだ。
例えばプラスチック製のケースに入れ、キーボードも付属させる完成形を貫くこと。

未来を見たカリスマ 2018/09/11 hagoromo

そして反対者も多かったがコンピューティングに雑音は害だとして冷却ファンの採用をジョブズは認めなかった。しかしウォズはしぶしぶにしてもそれらジョブズの主張を容認したがひとつだけ拘ったことがあった。

それがマザーボードに乗せる拡張スロットの数だった。

ジョブズは自分たちがコントロールできること以外の使い方をユーザーに許すべきではないとし、さらに拡張スロットを付けるのはハッカー的な仕様で時代遅れ、したがってエレガントではないと主張した。それでも拡張スロットが必要ならせいぜいプリンター用と予備の２つあれば十分だとウォズに迫った。

このジョブズの主張に珍しくウォズが猛反発した。

ウォズはマザーボードのスペースから判断しエッジ・コネクタを備えた８個のスロットを付けると自説を譲らなかった。

「これだけは譲れないよ。もし君がどうしても気に入らないのなら他のコンピュータを作ればいい」

ウォズは声を荒げた。

「あのスロットのことだけではないと思うけど、ジョブズもウォズに直接物申すのを避けているように思うけど」

ランディは心配そうに呟いた。

未来を見通せ　ガリ　ス　マ　2018/09/11 Nagaoka

「そうだよなあ、一昨日もエントランスで二人は何か言い争ってたな」

私とランディは顔を見合わせた。

その翌週辺りになると社内全員二人の仲が険悪になっていることを知ることになる。

ウォズはより頑なになり、ジョブズはより尊大な態度で皆を困らせた。しかしアップル全体を鼓舞して全員を奮い立たせているのはスコッティでもマークラでもなくスティーブ・ジョブズその人であることは確かだった。

我々は怒濤のようにスケジュールをこなさなければならなかった。ジム・ウォーレンが主催する第一回ウエストコースト・コンピュータ・フェアの開催日、四月十六日が迫っていたからだアップルは全社一丸になってしゃにむに働いた。マイク・マークラはこの催事に五千ドルの予算を注ぎ込むことにし、会場入り口からすぐ見渡せる場所にブースを確保した。

しかし物事はなかなか予定通りに運ばなかった。

私は社長のスコッティにいわれてそれぞれの担当者がミッションを予定通りに遂行できているかをチェックし報告する係になっていた。ジョブズのミッションも注視しなければならないから実に嫌な仕事だがこれまた誰かがやらねばならないことだった。

スコッティに呼ばれ、その担当を命じられた後にスティーブへ報告しにいった。一応私

未来を見た男 Hagaroma

の直接の上司はスティーブだったからだ。
正直スティーブが「勝手に決めやがって」と怒鳴り散らすのではないかとドキドキだったが、彼は意外と冷静だった。
「トモ、確かに君の言うように誰かがやらなければならない仕事だ。知ってのとおりスコッティは融通の利かないクソ野郎だがＣＥＯなんだから仕方がないな。大変だろうけど巧く立ち回ってくれ」
スティーブは気の毒そうにいった。

夜半過ぎに疲れ切った皆がそれぞれ帰って行った後、少しでも時間があるとジョブズは私を呼んでｉＰｈｏｎｅと私自身に関することを聞きたがった。
ｉＰｈｏｎｅは残念ながら一九七七年のこの時代では電話もネットワークも使えない。その上バッテリーがなくなればどうしようもなかった。
そうした意味はジョブズも即理解し納得してくれたので数十分の説明を終えた後はバッテリーの消耗を防ぐために電源を切るようにしていた。したがって起動させる度にアップルロゴが表示されるとジョブズは大層喜んだ。
「となればだ…。このｉＰｈｏｎｅとやらは完成品であり後からハードウェアを追加することは許してないわけだな」

未来を見た方がいいのか？ 2018/09/11 ｈｉｒｏｒｉｎｏ

ジョブズはウォズとアップルⅡに実装するスロットの数について気まずい思いをしただけに、ユーザーに本体を開けさせることを拒絶しているｉＰｈｏｎｅのエレガントな仕様に仕事の疲れも忘れて魅惑されていた。

「イヤフォンジャックの他はライトニングコネクタと呼ばれるインターフェースがあり、サードパーティー各社はその規格に合わせて周辺機器を開発することはできるよ。ただしそれらを市場に出す際にはアップルの審査が必要なんだよ」

私の説明にスティーブ・ジョブズはどこか嬉しそうな顔をした。

「それに再度念を押すけど、これからの説明の核心は…スティーブ、君がだ、私が四十年後の未来から来たということを信用してくれるという前提が大事なんだ」

私の念押しにジョブズはｉＰｈｏｎｅから視線を外さずに答えた。

「だけどトモ、完全にタイムスリップを信じろというのは無理だ。しかし理屈では信じられないがこれがここにあることを考えればトモのいうことを信じるしかないよな」

やはり眠いのか両眼を左手でこすりながら答えた。

「ｉＰｈｏｎｅには冷却ファンもなければ拡張スロットもないしユーザーが筐体を開けてアクセスすることを禁じているんだ」

私はあらためてｉＰｈｏｎｅの筐体には一切ネジが使われていないことをジョブズに

未来を凄い奴がいるな 2018/09/11 ぱるぷ

見せた。
「美しいよな。俺が常々考えてることが実現されているわけだ。未来にも凄い奴がいるな」
ジョブズも少々混乱しているようだ。
私も瞼が閉じそうなのをこらえてジョブズに顔を近づけていった。
ジョブズも社長のマイク・スコットに体臭のことを指摘され、少しは身だしなみに気を配るようになっていたから一時よりは悪臭も軽減されていた。
「スティーブ、間違っては困るよ。いいかい、これは未来の君が作ったんだぜ」
私が諭すようにいう。
「ふふふ、そうだったな。間違いなく俺の思想そのものを表現しているプロダクトだよ」
上機嫌なジョブズは、
「バッテリーはまだ持つのか」
と心配そうに聞いた。
「本体のバッテリーもいちいち切ってるし、ｉＰｈｏｎｅを三回ほどフル充電できるモバイルバッテリーという小型充電器を入れてきたのでこの程度の時間ならあと数回機会を作れると思うよ」

未来を見る先見なカリスマ 2018/09/11 hagoromo

私はそう説明し、その夜は解散となった。そして私はもともとジョブズの妹の部屋で一時は作業場として使われていた一室で寝ることになった。

アップルは猛烈なスピードで前進していた。ウォズがコンピュータを設計し、マークラが商才を鼓舞し、スコッティが組織としての会社の舵を取った。そして広報はパートナー契約した広告代理店のレジス・マッケンナ・エージェンシーが縦横無尽の活躍をしてくれたがアップル全体の推進力はヒッピーとしか思えない押しの強い若者、スティーブ・ジョブズだった。

「ウォズ、会場で使えるアップルⅡは何台なんだ？」

ジョブズは苛立つ気持ちをなるべく気づかれないようにとウォズニアックに声をかけた。

「本当は最低5台は持って行きたいんだ。しかし4台になるかも知れない」

少々自信なさそうな返事が返ってきた。

ロッド・ホルトが振り向いていった。

「電源は入るが動作が安定しないんだ。すぐにキーボードが反応しなくなる。どうやら静電気にチップが影響を受けているようなんだが調査中だよ」

「マシンは要だからな。なんとか頼むぞ」

未来を見たカリスマ 2018/09/11 hagaromo

ジョブズの鼓舞する大声を背に受けホルトとウォズが顔を見合わせ同時に「勿論だ！」と答えた。

再び振り向いたホルトは周りの雰囲気を和らげようとしたのか明るい声で叫んだ。

「俺って、自慢ではないがこれまで３万ドル以上の金は持ったことのない男だぜ。しかしこのアップルⅡがＷＣＣＦで成功すればだ、数年で十倍の年収も夢ではない時代がくるかも知れないな」

「僕には金勘定はわからんけど、２進法の計算なら得意だよ」

ウォズはアップルⅡのマザーボードから目をそらさずにとぼけていった。

同じ部屋にいたランディ・ウィギントンやクリス・エスピノサは声をあげて笑った。

「クリス、デモソフトウェアはできたのか」

ジョブスは会場で大型モニターにデモ映像を映し出すためのプログラミングをしていたクリス・エスピノサらに声をかけた。

クリス・エスピノサ、ランディ・ウィギントンはウォズのアドバイスを受けながらアップルⅡの優れたサウンド特性とカラー表示を強調するデモプログラム開発に没頭していた。

「プログラミングはまずまずだがクリス、コピーするカセットテープがなくなったぞ。悪いが例のディスカウントショップで買ってきてくれないか」

未来を見たカリスマ 2018/09/11 hagoromo

ホルトがジョブズへの返事にまかせてクリス・エスピノサにいった。
「あいよっ！」
若いクリスは飛び跳ねるように席を立った。
その背を追うようにビルが叫んだ。
「カセットテープは３０分のにしてくれよ。いや、もしあったらもっと短いのを頼む。６０分や９０分はダメだぞ。使いづらいからな」
クリスは振り向きもせず、右手を上げて駆けだした。

アップルⅡの樹脂製ケースはヒューレット・パッカード社で数年製品デザインを担当しウォズとも顔見知りだったジェリー・マノックに依頼した。ＷＣＣＦ開催の１２週間前ぎりぎりに依頼したこともあって開催日に間に合うかどうかが心配だった。
ホルトはジョブズに向かっていった。
「スティーブ、電源は目処がついたぜ。いっていたとおり信頼度が高く軽量、そして高熱を発しないスイッチング電源を開発したよ」
ホルトの仕様ではサイズも牛乳パックよりいくぶん小さくなるはずだった。
スイッチング電源装置はそれまでほとんどのメーカーが採用していたリニア電源装置しか知らない人たちにとっては高嶺の花であり、ウォズ自身もどんなものなのか漠然と

未来を面白くカリスマ20180911 hagoromo

しかしらなかった。
ホルトの株がまた上がった。

そういえば相変わらず小さな小競り合いは日常茶飯事だった。
「キャンティの奴が設計したプリント基板は突き返したよ」
ジョブズはこともなげにいったが皆は「ああ、またか」と誰も言葉を発しなかった。
基盤設計はアップルＩのときにも頼んだアタリ社の同僚ハワード・キャンティに依頼したが、できあがったプリント基板のチップとチップをつなぐ線をきっちりとした直線にしろと要求し突き返したという。

ＷＣＣＦ開催

そんな大小のトラブルが続いたもののＷＣＣＦの開催日程は待ってはくれなかった。なにしろフェアで配る予定の新しい名刺は２日前になっても納品されずジョブズ達をヤキモキさせたし、肝心のケースが届いたのは前日だったが、それを見たジョブズは怒り心頭だった。

未来を見る人 ナリスマ 2018/09/11 hagoromo

「なんだこのくそったれな出来は」
確かに酷い仕上がりで凹凸やバリが目立った。ジョブズは怒鳴り散らしたが作り直す時間はなかった。
「スティーブ、時間がないよ。確か紙やすりがあったな。皆で何とか見られるような姿に磨こうよ」
私は見るに見かねて立ち上がった。
私の発言を合図としたようにジョブズを含む九人全員が無言で届いたばかりのケースに紙やすりをかけて磨き始めた。
「よし、次はペイントのし直しだ」
しばらくしてホルトが威勢のいい声を上げた。
明日から開催という前日からセント・フランシスホテルに陣取った全員が一丸となり賢明に働いた結果、ケースにマザーボードが取り付けられ、テストが済んだのは夜中の1時を回っていた。結局ブースで使えそうなアップルⅡは3台だったが、努力の甲斐あってアップルにとって記念すべきデビューの朝が明けようとしていた。
私ひとりがこの後に起こる彼らの運命を知っていた。しかしそれはジョブズにさえ言うべきことではなかったし懸命なジョブズは一言も私にＷＣＣＦの歴史的な結果を問いただそうとはしなかった。

未来を見たカリスマ 2018/09/11 hagaromo

第一回ＷＣＣＦ（ウエストコースト・コンピュータ・フェア）を企画開催したジム・ウォーレンの目算では来場者の数を土曜日と日曜日の両日で七〇〇〇人から一〇〇〇〇人と見越していた。

無論これだけの来場者があれば成功だし採算も十分取れた。しかし開催初日、市民ホールの片側には二列、反対側には三列もの長い列が数時間にわたって続いた。結局実際には一三〇〇〇人もの人たちが集まったのである。

スティーブ・ジョブズは人手が足りない状況から一人でも事情を知っている、そして信頼できる人材をブースに置きたかったから私にもその要請があった。

ＷＣＣＦ開催の朝、ホテルのロビーでジョブズと２人だけになったとき私はブースに立つことを辞退した方がよいのではないかと申し出た。

「だってスティーブ、会場には日本人も来るはずなんだ。私がブース内にいたとなれば歴史が変わってしまうかもしれないし」

ジョブズは苦笑した。

「トモ、歴史なんて、未来なんて自分たちで作るものだぜ。それにすでにトモは君の知ってる歴史を変えている理屈だぜ。そうだろう」

考えるときに彼がとるポーズ、両手の指先を合わせながらソファーに座ったジョブズ

未来を見た方 Kaiser Mayer 2018/09/11 Nagaoka

は続けた。
「日本人が来るなら日本語で説明できる人間もいた方がいいだろう。是非参加してくれ」
こうして私もアップルコンピュータ社のブースに立つことになった。

どんなイベントも設営という地味な仕事があってこその成果・効果が期待出るものだ。そしてイベントにも数々のノウハウがある。
「ランディ、カタログはそこに置かない方がいいよ」
私の物言いに怪訝な顔をしたランディ・ウィギントンが振り向いた。
「自由にカタログを持ち去られたらあっというまになくなってしまうよ。明日の終了直前まで残しておかないとまずいよ。途中で補充できないからね」
カタログの束の上に手を置いて私は続けた。
「来場者は必要だからカタログを手に取るんではないんだ。こういう場所に来るとまずはなんでもかんでも持ち帰ろうとするのが来場者の心理なんだよ。その上ひとりで数枚、十数枚持ってく人もいるし。だからあっと言う間になくなるんだ。だから手間だけど、なるべく我々が自分の手で客に一枚ずつ手渡すのが一番効果的だと思うよ」
横で大型モニターの設営をしていたクリス・エスピノサが納得したようにランディ・

未来を垣間見たカリスマ20180911 hagaromo

ウィギントンにいった。
「トモのいうとおりだな。カタログを消化すれば良いというものではないからな。必要な客に確実に渡すことこそ重要だよな」
話しを聞いていたマイク・マークラはすでにきちんとスーツを着こなしていたが、彼も私に賛同してくれた。
「トモはこうした催事の経験があるようだな。どうしたらよいか分からないときにはトモに聞くことにしよう」
「ありがとうマイク」
私はマークラに礼をいった。
「そういえば、ジョブズもいまスーツに着替えているが、見ものだぞ」
マークラは笑いながらバックヤードに姿を消した。
マークラとアップルの広報・広告を担当することになったレジス・マッケンナは我々スタッフらの身なりにも注意を払った。ためにジョブズもサンフランシスコの洋服屋に連れて行かれ、三つ揃えのスーツを作らされたのだった。しかし本人はノーコメントだったがウォズはスーツの新調を断ったようだ。
ところで、確かに私は起業した会社において大小多くの催事を経験した。プライベー

未来を見るカリスマ 2018/09/11 hagaromo

トイベントはもとよりだがマックワールドエキスポ・ＴＯＫＹＯといった大きなイベントにも十年間出展したし、本場米国のマックワールドエキスポにもこれまた十年間視察を続けたから出店側としての重要なポイントはわかっているつもりだった。

開場時間になると来場者は我先にと駆けだしながら会場へ入ってきた。あっと言う間に二〇〇近い展示スペースのほとんどは人で一杯になったが、さらに一部のエリアでは満員電車なみの混雑となった。無論我々のアップルブースも凄い混雑ぶりだった。

しかしブースに詰めかけた人々はそこに美しく洒落たケースに納まった世界初のパーソナルコンピュータを目のあたりにする。さらに来場者らはケースの蓋を開けたマザーボードを見るにつけ、その洗練された造りに驚かされた。

その上、来場者の中には大型スクリーンに鮮やかなカラーで映し出される万華鏡のようなスライドショーがその小さなマシンで実行されているとは思えず、後ろに大型コンピュータが隠されているのではないかと疑る人がいたため、ジョブズは苦笑しながらも何度も垂れ幕をめくっては何も隠していないことを示さなければならなかった。

ジョブズは勿論、社長のマイク・スコット、クリス・エスピノサやランディ・ウィギントンらも説明や来場者の対応に追われていた。

マイク・マークラは会場を回り、代理店の確保に努力していたが、後からマイクに聞

未来を見る人 ナガリ

いたところによればＡＬＴＡＩＲのＭＩＴＳ社より大幅な自由を与えると約束したアップルに対し協力を望む代理店が多かったという。

やはり目玉はシャツにネクタイを締めベストを着たスティーブ・ジョブズの姿だった。長髪で髭面ではあったが、ガタイがしっかりしているから姿勢を正すと素敵だった。特にこうした催事には彼の人たらしぶりがいかんなく発揮され、常に大勢の人たちに取り囲まれていた。

「アップルかあ、凄いなあ。僕はバイトショップでアップルＩを見たことがあるけど、アップルⅡはカラーなんだ」

大型モニターに表示するカラーのカレイドスコープ・アニメーションを見上げ、口を開けたままの少年もいた。

私はなるべく裏方で皆のサポートをしようと目立たないようにしていたが、それでもあまりの人の多さに質問攻めにあった。

昼過ぎだっただろうか。私は一瞬身体がこわばり、まごついた。

なぜなら目の前にはイーエスディ・ラボラトリーの社長、水島敏雄さんの姿があったからだ。

（気づかれたらどうしようか）

未来を見たかりスマ 2018/09/11 hagoromo

私がアップルⅡや周辺機器そしてマッキントッシュを買ったのは本郷にあったイーエスディ・ラボラトリー社だったし、同社が季刊で発行していた「アップルマガジン」という情報誌の編集長を1年間依頼されたほど周知の方だったからだ。

逃げだそうとしたがかろうじて踏みとどまった。

よく考えればこのとき、すなわち一九七七年四月前後に私がイーエスディ・ラボラトリーへ行った歴史的事実はなかったし、当然水島さんを存じ上げなかったから彼が私を知るはずはないのだ。

私がイーエスディ・ラボラトリーに頻繁に通うようになったのはアップルⅡを手に入れた一九八二年からだった。

安堵した私は悪戯心もあってなにか質問したそうな水島さんの前に立った。

「ようこそアップルコンピュータ社のブースへ」

私が日本語で迎えるように挨拶すると水島さんはちょっと驚いたような表情を浮かべながら、

「失礼ですが、これはゲーム機ですか」と日本語で質問された。

「いえ、これは世界初のパーソナルコンピュータです。無論ゲームもできますが」

私は左手脇に抱えていた数十枚のカタログから一枚を彼の前に差し出した。

未来を見た力 Nagoyo

「ありがとう」
カタログに素早く目を通した水島さんは「凄いな」と独り言をつぶやきながら再び私の顔を覗き込むようにメガネを直した。
「これはいま持ち帰ることができるの」
「一般販売は六月を予定しています」
私は愉快になってきた。
なぜなら私が得たアップルⅡに関するハードウェアやソフトウェアの知識のほとんどは水島さんの会社、イーエスディ・ラボラトリー社から得たものだった。そのアップルⅡの情報を私が水島さんに話しているその事実に快感を覚えた。
「価格は米国内では１２９８ドルになると思います」
私は答えながら技術的な話しはぼろが出るとまずいと考え、後ろにいたスティーブ・ジョブズの袖を引き、
「将来大切なお客様になると思うよ」
とささやいて対応を変わってもらった。

イーエスディ・ラボラトリー社はこの後、日本にアップルジャパンが設立されキヤノン販売に代理店権が移るまで、紆余曲折はあったもののアップルの日本総代理店として

未来を見たかりんぱ 2018/09/11 hagaronno

販売とメンテナンス、そして啓蒙や市場育成に力を尽くすことになる。

こうして一般展示の２日間、私はアップルのブースに皆と一緒に詰めていたが、水島さんの他にも日本人の姿があった。当時マイコン雑誌Ｉ／Ｏを発行したばかりで後にアスキー出版を立ち上げる西和彦さんは目立ったのですぐに分かったが、彼は来場者ではなく出展者側だった。

そういえば西和彦さんとは一九九〇年代の半ばだったか、千駄ヶ谷にあったアップルジャパンの応接室で名刺交換したことがあった。

その他、有名私立大学工学部教授の引率でツアーを組んで乗り込んできた一団もいた。参加者は大手一流メーカーのエンジニアや企画調査担当者などだったが、超デラックス観光バスで会場に乗り付けただけに目立ったし多くがスーツ姿だったので些か会場の雰囲気にはそぐわなかった。その上、彼らは自分たちの所属を知られたくないとバッジを外して行動し、各ブースを丹念に回って技術資料を収集して回っていた。

まさしくこの第一回ＷＣＣＦは個人用コンピュータの催事としてこれまでで最大級のものだったし、出展各社の方向性はこれまで大型コンピュータメーカーが夢想だにしなかった新しい市場が急速に膨れあがっていく確信を会場内にいる誰もが感じたに違いない。

我々のブースでは全員が夢中でＷＣＣＦを楽しんでいたし、声をからして多くの来場

未来を見る方がいいでしょ。

者らにアップルⅡをアピールしていた。しかしひとりスティーブ・ウォズニアックだけは期待したほどの役には立たなかった。

何故ならウォズはこの大事においてもいたずらを考案し、想像上の新型マシンのパンフレットをでっち上げて会場で配り、ジョブズまでをも欺き慌てさせていた。

ＷＣＣＦ出展はアップル社にとって大成功だったといえる。

かかわったスタッフら全員は高揚した気持ちのままいつもの仕事にもどれるのか心配したほどだった。

「トモ、驚いたよ。いや予測していたことだけどすでに数百台の注文が来てるんだ。アップルⅠのときとはレベルが違うぜ」

スティーブ・ジョブズも興奮気味だった。

アップルⅡの発売はその年(一九七七年)の六月だったが、ジョブズは確かに単に金儲けのためにアップルを始めたのではなかった。

社長のマイク・スコットも驚いたようだが、スティーブ・ジョブズはアップルⅡの購入に際しアップルⅠのユーザーはそれを下取りに出せるサービスを発案した。

その下取りサービス、アップグレードサービスにはマイク・マークラも賛同する。

これにはスティーブ・ウォズニアックもちょっと驚いたようだ。

未来を見た方がいいのか？ 2018/09/11 ｈｉｒｏｒｉｍｏ

「ジョブズはコストがかかっても正しいことをしなければならないといってたよ。僕もよい考えだと思う」

ウォズでさえこの下取りサービスなど考えもしなかったからだ。

スティーブと二人になったとき彼は私の顔を覗き込むようにして聞いた。

「どう思う。下取りサービスは」

「素敵なサービスだと思うな。今後コンピュータは年ごとに、いや毎日毎月新しい技術が開発され大きく進歩する。新機種を買う度に数千ドルを必要とするのでは、常々君が言うように家庭内にコンピュータを浸透させるには無理があるからね」

「君の判断は斬新だが正しいと思うよ」

私は付け加えた。

ジョブズはちょっと照れた表情をみせてつぶやいた。

「下取りサービスは差額だけの問題でなく手間もかかるんだ。スコッティに計算してもらっているけど集まったアップルＩは市場に再度出回らないよう廃棄処分しなければならない。その為のコストも必要なんだ」

確かにＷＣＣＦでの成功でアップルの知名度は大きく向上した。そして広告代理企業レジス・マッケンナの努力もあってアップルは実態以上に輝いて見えたが、その実体は

未来を回回見たカリスマ20180911 hagaromo

まだまだガレージから脱却できたばかりのちっぽけな零細企業にすぎなかった。

私は四十年前の未来から来た人間だったから、その後のあれこれは自分の体験として覚えている。

下取りサービスもその名称はともかくアップルはその８年後、スティーブ・ジョブズがアップルを去ってもしばらくの間、そうしたサービスを続けたのだった。

私自身、一九八四年に登場したマッキントッシュを数ヶ月後に５１２Ｋにしたとき、そしてメモリが１ＭＢになった一九八六年、マッキントッシュ・Ｐｌｕｓが登場した際にもこの前機種を下取りとするサービスを利用した。

そういえば相変わらずジョブズは社長のスコッティと喧嘩ばかりしていた。

アップルⅡの発売に際しスコッティはその保証期間を九十日間と考えていた。当時エレクトロニクスの業界ではそれが相場だったからだ。しかしジョブズは一年間保証を主張する。

「アップルⅡの顧客は特別な客だよ。俺たちも特別な会社だ。我々はまったく新しい分野の仕事を始めたんだ。だから相場なんてことで決めるのはクソだ」

スティーブ・ジョブズは泣きわめいてスコッティに抵抗した。

「大切な顧客は厚遇した方が次もまたアップルを買ってくれる」と大暴れする。

結局この戦いはスコッティが折れ、アップルⅡの保証は一年間と決まった。

未来を見たカリスマ 2018/09/11 hagoromo

クリスアン・ブレナンの妊娠

仕事は順調に回り始めたがジョブズの私生活は混沌をきわめた。それは私の日常にも大きな影響を及ぼすことになる。

アップルⅡの出荷が始まった一九七七年の夏になるとジョブズはそれまでの自宅を出てクパチーノの一戸建てに移った。何しろ当座の金には困らなくなったしスティーブも自宅を出たかった。

「トモ、君も一緒にくるんだ。まさかひとりでママのところに置いていくわけにはいかないからな」

いたずらっぽく笑いながらジョブズはいったが、私が他に知り合いもなく行くところがないことを知ってのサポートだった。

というわけで私はジョブズの新居に小さな一室を与えられたものの、同居人は私だけではなかった。

スティーブとインドへ一緒に行ったというダン・コトケも一緒に暮らしはじめた。

ダンは付き合いにくい男ではなく私とは気が合ったが、困ったことはクリスアン・ブレ

未来を見た方がいいのか？ 2018/09/11 hagaromo

ナンというジョブズの彼女も一緒だったことだ。
「トモ、居候の俺たちがいうべきことではないけど、女が同居というのも辛いものがあるよなあ…」
ダンもこぼすほど我々は彼女とジョブズの間にはいって日々気を遣うことが多くなった。
あるときたまたま早朝にテラスでクリスアンと2人になったとき彼女はわざとらしいしかめっ面で聞いた。
「ねぇ、トモ。スティーブって付き合いにくいでしょ。嫌な奴だと思わない」
私は二人の間で板挟みになるのだけは避けたかったから正直にいった。
「彼は私には紳士だよ」
彼女は誰かに聞いて貰いたかったのだろうか、テラスに置かれたピーチチェアに座りながらぽつりと二人のことを話し出した。

余談になるが、私はスティーブ・ジョブズのことは様々な本などでその生い立ちやらを知っていた。しかし幾人かのジャーナリストが書いた本でもクリスアン・ブレナンが登場しない本もあり、常々不思議に思っていた。
例えばマイケル・モーリッツ著「スティーブ・ジョブズの王国」にはクリスアンの名

未来を見たカリスマ 2018/09/11 hagoromo

はなく、同時期に付き合っていた彼女の名はナンシー・ロジャースとある。

また二〇〇五年に出版されたジェフリー・S・ヤングとウィリアム・S・サイモンの共著「スティーブ・ジョブズ 偶像復活」にも当時の彼女の名はクリス・アンと書かれている。

これらは単なる間違いとしてはお粗末すぎると当初は考えていたが、スティーブ・ジョブズがあれこれ書かれることは有名税としても一個人のプライバシーを尊重してこの頃までクリスアンの名は伏せられていたようだ。

それが初めてスティーブ・ジョブズとクリスアン・ブレナンとの仲が公開されたのは公認伝記といわれるウォルター・アイザックソン著の「スティーブ・ジョブズ」だという。同書が出版されたのはジョブズが亡くなった二〇一一年のことだった。

また二〇一三年にはクリスアン・ブレナン自身が書いた自伝 "The Bite in the Apple" が出版されたことでスティーブ・ジョブズとの関係や彼の二十代前後の様子が知られることになった。

「スティーブと出会ったのは高校生のときよ。私は彼より一学年下だったの。そして私は彼の瞳をみつめるのが好きだったの」

「ロマンチックな話しだなあ」

未来を見た。カリスマ2018-09-11 hagoromo

私は思ったとおりの感想をいった。
「私がロマンチストだとすれば母の血よ。私の名、クリスアンって母が考えたらしいわ。どうやら「菊」を意味するらしいの。そういえぱ母は文学好きでいつも本を読んでたわ」
スティーブ・ジョブズが真面目に付き合った初めての彼女がクリスアンだったそうだ。
「思い出すのはいつもお金がなかったことだわ。なにしろディランの音楽を一緒に聴くことぐらいしかできなかったのよ」
クリスアンはふとその場に立っている私に気づきいった。
「あっ、ごめんなさい。トモもそこに座って」
私もクリスアンの隣のチェアに深々と体を沈めた。

太陽が昇り始めた空を仰ぎ見るようにして彼女は話しを続けた。
「スティーブとウォズ、そしてルームメイトと私の四人で猛暑だったのにもかかわらず着ぐるみのバイトもやったわ。暑くて十分も持たなかったけどね」
クリスアンは真っ白な歯を見せて笑った。
「あるときのことだけど、デートして車に戻ると駐車違反のチケットが貼られていた

未来を見つめ、ポケットから小銭とドル札を掴んだと思うと有り金全部を目の前に広がる海に投げ捨ててしまったのよ。信じられる。クレイジーよね」

の。そのときは絶望したっけ。罰金は二十五ドルだったけど私たちには大金で払えるあてがなかったもの。だけど彼は平気なのよ。心の中まではわからないけど」

思わず私は、

「それで罰金はどうしたの？」

と聞き返した。

クリスアンは思い出し笑いをしながらその後のエピソードを話してくれた。

「私があまりにもお金お金と心配したからかも知れないけど、スティーブは苛ついた顔で私を見つめ、ポケットから小銭とドル札を掴んだと思うと有り金全部を目の前に広がる海に投げ捨ててしまったのよ。信じられる。クレイジーよね」

「そういえば」

クリスアンは私の方を向いて、

「スティーブは例の囓り跡のある林檎のロゴについて私に意見を求めたことがあったわ」

「意見って」

私はいささか意味が分からずおうむ返しに返事をした。

「あの、私は芸術的センスがあると彼に評価されていたからだと思うけど、彼はデザイ

未来を見るカリスマ 2018/09/11 hagaromo

ンされた林檎のロゴがどんなイメージとして一般の人々に映るかを知りたかったのね、きっと」

「なるほど、それで君の意見はどうだったの」

右端を囓った6色アップルロゴは後にアメリカンドリームの象徴にもなったしクールで素晴らしいコンピュータを作る企業のシンボルに相応しいと評価をされ、ユーザーの熱狂的な支持を受けた。

そしてそのシールは好んで車のリアウィンドウなどにも貼られ、ロゴが載ったグッズも多々作られた。

しかし当時の第一印象は決してそんなに良い印象ばかりではなく(ダサイ)とまでいう人もいた。

クリスアンは楽しそうにいった。

「私はこれは芸術的と言うより哲学的なロゴだといったのよ」

「なるほど」

「レジス・マッケンナのデザイナー、ヤノフによれば右端を囓ったのは"a bite"(ひとかじり)と2進数の"byte"をひっかけたとか、林檎がチェリートマトに見えないようにと工夫したからだとかいってたようね」

未来を見たかりんマ 2018/09/11 hagaromo

「うん，私もそう聞いてるよ」
「でもね、私はヤノフはもっと哲学的に深淵な意味を込めたのではないかとスティーブにいったのよ」
私は俄然興味を持ったので続きを促した。
「だって聖書ではイブとアダムは林檎を囓って楽園を追われたけど知恵を得たのよね」
「なるほど、我々もアップルⅡを使うことで知恵を増幅できるというわけかな」
「そうね。その代わり楽園ならぬ何かを犠牲にしなければならなくなるのかも知れないわね」
クリスアンはスティーブという楽園から追われることを暗に気づいていたのではないかとドキッとしたが、うつむいた拍子に美しい長い髪が彼女の横顔を隠したのでその表情は分からなかった。
「そう、スティーブはいま何しているのかい」
確か今日は休日だし、アップルへ出社していないはずだと思いクリスアンに聞いた。
「ああ、彼は明け方までタイプライターで詩を書いていたわ。ちょっと読ませてもらったけどディランの歌詞の真似みたいなところがあって芸術的ではないわね」
クリスアンは微笑みながら、
「スティーブは基本独りが好きなのよ。寂しがり屋の独り好きって奴ね」

未来を見た。カリスマ 2018/09/11 hagaromo

笑顔のクリスアンは美しく賢明な女性に思えたが、悲運だったのはスティーブ・ジョブズという男の頭の中にはこの時期彼女の占める場所がなくなっていたことだ。それはジョブズにとってアップルのビジネスが面白くて仕方がなかったからだ。

さらに起こるべきして悲劇が（本来なら喜ばしいことだが）起こった。クリスアンが夏も終わろうとしていた頃に妊娠した。

同居していたダン・コトケは私よりジョブズの心の内を知っているからか、クリスアンの妊娠を知ると暗い顔をした。

「本来なら（おめでとう）といいたいところだけど、これは一騒動おきるぞトモ」

ダンは見つめた私に頷きながら、

「心すべきことは、そうだな。僕らにはなにもできないということだよ」

コトケの憂慮は当たった。スティーブ・ジョブズはクリスアンに「生むな」といい

「俺の子ではない」とまでいった。クリスアンは半狂乱となった。そして彼女が中絶を拒否すると関係は終わったことをアピールするためかスティーブはすべての責任を回避する行動をとった。

結局クリスアンは絶望しアップルを辞めてオレゴン州の農場へと去った。

「僕はスティーブの親友のつもりだが、この件に関しては彼の言動で支持できることは

ひとつもないよ」
ダンは腕を振りながらいう。
「いいかい。スティーブは生みの親から捨てられ苦悩してきたことは僕ら皆が知ってることだ。そのスティーブが、スティーブ自身が父なし子を世に送り出そうとしてるんだぜ。どう考えても理不尽だよ。おかしいよ」
私も心からうなづいた。
「トモ、君も知ってるとおりアップルは順調だ。マークラがいうには再来年には株式公開が実現するといってたよ」
「ああ、スティーブは大切な時期にスキャンダルを避けたいと思っているのだろうが、認知するならともかくまかり間違って裁判沙汰になれば余計に目立つよな。なに考えているんだか」
ダンと私は顔を見合わせ、同時に深いため息をついた。
「トモ、僕はアップルが好きだし仕事も好きだ。無論スティーブも好きだよ。だけどスティーブとは距離を置いた方が良いかも知れないな。なにしろ言うにことかいて僕にクリスアンを説得しろといったんだぜ。生むなと。そればかりではないんだ、トモ」
私の視線を真正面から受け止めながらダンは続けた。
「絶対に自分の子ではないというだけでなく、クリスアンは他の男とも寝ていたと悪あ

未来を見る力 Hagaromo

がきしているんだ」

ダン・コトケはスティーブとの長い間の友情が冷めていく気持ちをどうにも押さえようがなかったようだ。

「アップルの役員たちもいざとなると冷たいよな」

私が無言でダンに視線を送ると、

「マークラは示談にしろとか養育費を払ってやれとはいうけど彼女のためを思っていってるわけではないよ。これまた株式公開前に決着をつけたいだけさ。クリスアンをきちんとサポートすべきと主張したのはスコッティくらいなものさ」

歴史の事実としてスティーブとクリスアン、そして生まれてくる女の子の運命を知っている私はダンに慰めの言葉も発することは出来なかった。

ましてやスティーブが後年生まれた子供の名前をそのままプロダクト名としたなど、口が裂けてもいえなかった。

アップルⅡの評判と売上げは好調だったが、誰もが日々これまで経験したことのない出来事やトラブルをひとつひとつクリアしていくという忍耐が必要な毎日が続いた。しかし市場の反応が良いことはスティーブをはじめ全員の志気を高めていた。

年の暮れにははじめて手応えのある利益を計上することが出来た。ただしそこに至る

未来を回顧 ©ガリ文庫 2018/09/11 hagaromo

までには文字通りの紆余曲折、試行錯誤、失敗への反省が繰り返されていた。

スティーブ・ジョブズは鼻息が荒かった。

「トモ、この調子だとアップルⅡが一般家庭に浸透するのにそんなに時間はかからないな」

スティーブの夢はパーソナピュータを一握りのホビーストのものではなく一般家庭で楽しめる製品にしたいということだった。

「いいかい、コンピュータは決してホビーストが使うだけのものでもないし高価なビデオゲームではないんだ。無論教育分野にも大きく貢献するだろうよ。そして人々の毎日の暮らしを楽しくし、自分たちの能力とチャンスを大幅に広げることに役立つと思うんだ」

スティーブ・ジョブズは後年、マッキントッシュのリリース前後にそれを知的自転車と称し、コンピュータによって我々の能力の限界を大幅に越えることができると熱弁を振るったが、すでにこの時代から彼は機械いじりが好きなコンピュータ好きのホビーストだけではなく、予備知識がない一般家庭の主婦にでもアップルⅡは役立つばかりか、生活の向上が図れる事をアピールしたいと考えていた。

「だけどスティーブ、いまだにコンピュータなど個人が持ったところでなにをするん

未来を見たカリスマ 2018/09/11 hagaromo

だ、何が出来るんだという人たちも多いよね」
私は率直に意見を述べた。
「新しいツールの評価は最初そんなものかも知れんな」
スティーブは椅子に踏ん反りながら両手を頭の後ろに組みつついった。
「コンピュータは確かにこれまで発明されてきた家庭電化製品などとはまったく違ったものだからね」
私は相づちのつもりでいった。
「そういえばトモ、君は未来から来た男だ。俺たちに直接かかわる話しは聞きたくないけど未来はコンピュータに対しての理解は大幅に向上するんだろうな」
やはり持論への不安もあるのかスティーブは真顔で私を直視した。
「そうだな、二〇〇〇年前後になればコンピュータは特に珍しいものではなくなるけど、今後十三、四年に至るまでは残念だけどコンピュータはやはり特別なモノといった感じかな」
「……」
スティーブは怪訝な顔をしながら聞いた。
「何故なんだ、トモ」
「スティーブ、君はよく承知だけどコンピュータは未知の人にとっては利用目的が分か

未来を見たかりんマ 2018/09/11 ハガロマ

らない製品なんだよ」

一呼吸して続けた。

「コンピュータはプログラミングもできればゲームも楽しめる。例えばマークラが作った小切手帳管理やこれからは料理のレシピ作りを支援してくれるソフトウェアも出るだろう。しかし普通の人にとっては自分が使いたい、やってみたいと思わせるソフトウェアや周辺機器がなければアプローチできないわけだね」

私は先ほど淹れたコーヒーのマグカップを口にしながら、

「だから、目的意識のない人は必要性を感じないんだよ」

「そして、相変わらず、コンピュータはブラックボックスであり、キーボードの習得にしろゼロから使い方を覚えなければならない難しい代物というわけさ」

私の熱弁にスティーブ・ジョブズは無言で耳を傾けている。

「冷蔵庫には食品を冷やして保存するという使命が、洗濯機には文字通り衣類を洗濯するという当然な機能・目的をもっているからユーザーは必要なら躊躇せず買う気になる。車だってそうだよスティーブ。車はなんのためにあるかは誰でも知ってる。その上で乗り心地、安全性、デザインが良いといった新車がでれば購買意欲を刺激するんだ」

私は口を挟まないスティーブをいいことに話を続けた。

未来を見たかりしマ 2018/09/11 hagaromo

「アップルⅡで一体どんなことができ、どのような新しい体験ができるのかをあらかじめ思い描ける人などほとんどいないのが現実だと思うよ」

スティーブは姿勢を変えながら口を開いた。

「それはユーザーからだけでなく販売店からも言われはじめているよ。どのような売り方をしたら効果的かとよく聞かれるよ」

「まあ、いまはアップルⅡを売ってる店の人たちはそれなりに詳しい人たちだよな」

私のあらためての問いにスティーブは黙って頷いた。

「でもさ、その詳しいというのはコンピュータのスペックについてであり、ユーザーがどのような体験をしたいのかを聞き出しそれに合ったソフトウェアや周辺機器を販売できる人たちは極一部だと思うよ。販売店の担当だってアップルⅡの可能性など知ろうとしたこともないだろうね」

「そして一番のポイント、それは一般の人たちは自分でプログラミングできないことだよ。だから様々なことに興味を向けるソフトウェア、アプリケーションソフトの存在が重要になるんだ」

私の物言いに興味を持ったらしいスティーブは表情で先を続けろと催促した。

「そうだな、君は自身の未来については聞きたくないだろうが、私自身のことなら話してもいいかな」

未来を見たカリスマ 2018/09/11 hagoromo

そう断りつつ、私は話しを続けた。

「一九七七年十二月の事だった。いや今年がその一九七七年だからして変な感じだが、私は秋葉原という電気店が建ち並ぶ街で最初のワンボードマイコンを買ったんだ。富士通製だったな」

「アキハバラなら俺も聞いたことがあるよ。一度行ってみたいと思ってる」

「そのコンピュータを販売している店員は客に何ができるかと聞かれ『何でもできますよ』と説明していたんだ」

その時のことを思い出しながら私は笑った。

「ねぇスティーブ。その店員の物言いは間違いではないかも知れない。しかし何でも思うように使いこなすには相応の知識が必要だしメモリの増設や適切な周辺機器も揃えなければならないわけさ」

「で結局、何でも出来ると勇んで買った客はどうなるか。なんでもできるはずがなんにもできないで埃を被るわけさ」

私は喉を潤すために冷えてしまったコーヒーを口に入れた。

「何でもできるというような曖昧な製品を一般家庭ではなかなか買うわけはないと思うよ。やはりキラーアプリケーションといった(これを使いたい、実現したい、体験した

未来を見るカリスマ 2018/09/11 ハガロマ

い）という目的に合ったソフトウェアが重要になってくるんだ」

「人々は自分がコンピュータを持ってどうなるのかが想像できないんだよ。またすでに詳しいはずの技術者たちの間でも個人用コンピュータのあり方というのかな、目的意識や価値観にはまちまちな意見があるよね」

私は手に持ったマグカップをテーブルに置きながら続けた。

「後になって考えたんだが、そもそもコンピュータという代物を一般家電を扱うショップで販売したのが間違いだったのではないかとさえ思ったよ」

これは正直な私自身の体験から来る感想だった。

スティーブは椅子から体を、起こしながら私の顔を見ずにいった。

「わかるよ、その意識のずれはなにも君の言う未来の話しでなくてもさ、俺とウォズの間にも大きな溝として横たわってるんだ。さらにだ、スコッティやマークラだって俺が考えているコンピュータのあり方とは相容れないものを持っているに違いないぜ」

アップルⅡで世界を変えようと話し合った二人のスティーブだったし、マイク・マークラやスコッティもイメージとしてはそうした夢というか目標を受け入れたものの現実問題として具体的な話しになるとそれぞれ大きな温度差があった。

ところで現在の私たちはアップルⅡというとアイボリーの洒落たプラチックケースに

未来を見る方法 ＿＿＿＿＿＿＿＿

収まって販売されたパーソナルコンピュータという認識しかないが、アップルⅡの売り出しに際して社内で喧喧諤諤の論議が戦わされたのだった。

そのひとつはウォズからの強い希望だったが、アップルⅡの基盤のみの販売もすべきだという意見だった。ホビーストなら自分で電源やキーボードなど苦も無く手に入れられるし安価でアップルⅡが提供できるというのがウォズの主張だった。

ジョブズは勿論反対だった。時代に逆行するビジネスだしせっかく美しいケースに入れ、持ち帰ったらテレビに繋ぐだけで使えるという企業戦略、コンセプトにも逆行するからだ。

しかしアップルⅡのスロット数を決めるあたりからウォズとジョブズの中は険悪となったこともあってジョブズは条件付けでウォズの提案をのんだ。

「知ってるよ。ボードのみの販売を君がＯＫしたことだろう？」

「まあ、正直そうまでいうなら勝手にしろといった気分だったよ。トモ、君も知ってのとおり４ＫＢ ＲＡＭのアップルⅡは１２９８ドルだけど、ボードオンリーは５９８ドルで販売することにしたよ。ただし半年ほど様子を見て市場の支持がなければボードだけの販売は止めることをウォズに納得させたけどね」

スティーブは苦々しくつぶやいた。

こうした私との話しが直接の引き金となったのか、ＷＣＣＦが終わった二か月後のＢ

ＹＴＥ誌６月号にはじめてアップルⅡの見開き広告が載った。事実ＢＹＴＥ誌に載せた最初期の広告には "Board-only" の価格も明記されていた。

雑誌広告の躓き

広告はスティーブ・ジョブズの思い、すなわち一般家庭にコンピュータをというコンセプトを具現化したもので、左ページは全面写真で構成され、上部には "Introducing Apple II." と記されたテキスト、そして写真の内容は奥のキッチンにいる女性が笑顔でこちらを振り向き、手前には若い男性がアップルⅡを操作しているといったシーンだ。それは多分にホームコンピュータというコンセプトを意識したものだった。

この広告は一般的には好評だった。これまでコンピュータ会社はこうしたアットホームなイメージの広告など思いもよらなかったからだ。スティーブ・ジョブズの真骨頂といったことろだったが問題が起こった。

ひとつは広告右側ページ左下に採用した写真に対して一人の女性からクレームの手紙が舞い込んだことだ。

「困ったよ。この写真は『セックスを連想させ不快である』というクレームなんだ」

未来を垣間見たカリスマ20180911 hagoromo

スティーブの話しにウォズもマークラもスコッティも不用意に言葉を発しなかった。
やっとホルトが口を開いた。
「どういうことなんだスティーブ」
「いや、俺にもわからんが、女性がゲームコントローラーを握り、対面している男性が女性に指を突き出しているというシーンがセックスを連想させるというんだ。アップルⅡを挟んで男女が楽しく会話しているだけの写真だし、まったくの言いがかりだよ」
スコッティが堅い口を開いた。
「まあ、無難なのは無視することだな」
その話しにマークラが続けた。
「無視するのは簡単だが、我々にとっては最初の広告であるだけでなくスタートアップの重要な時期だ。どんな小さな火種も過小評価せず対処すべきだと思うよ」
スティーブ・ジョブズはジーンズのポケットから封筒を取り出しながら珍しく気落ちしたようにいった。
「問題はそれだけではないんだ。一昨日だったか、俺宛に手紙が届いたが、差し出し人は皆も知ってる業界筋のあの野郎だ」
「それも広告に対するクレームなのかい」
私が質問するとジョブズは頷きながらテーブルに封書を投げた。

未来を見たカリスマ 2018/09/11 hagoromo

「こちらはもっと辛辣だよ」

その内容は、当該広告を見たがアップルⅡは実際のところ、貴社の広告イメージとは違い、まだまだ家電のように誰でもが簡単に使えるものではないとした上で、アップルの広告は証券市場分析や家計簿プログラムが存在するかのように訴えているが、それはどこで買えるのか、といった質問も含まれていた。

「なるほど、この写真は証券市場分析プログラムを使っているイメージだが、確かに外部記憶機器も映ってないしソフトも販売されてないからウソ、いや誇大広告というわけかな」

ロッド・ホルトはキャメルのタバコをくわえたままで呟いた。

「どうする、スティーブ」

マイク・マークラが不安そうに口を開いたがスティーブ・ジョブズはこれら一連のことをレジス・マッケンナ・エージェンシィに伝えて意見を聞いたと説明した。

「レジスがいうには（セックスを連想させる）といったクレーム云々はともかく、ホームコンピュータ市場向けという広告戦略は時期が早かったと言われたよ。要はまだまだマニアやホビイスト、あるいはコンピュータの知識を持ちビジネス志向を探るユーザー達へのアピールが大切な時代なのだと。

未来を見たカリスマ 2018/09/11 hagoromo

とはいえアップルⅡのボードオンリーの販売には反応はほとんどなく、ほどなくジョブズとウォズ約束通りその販売は取り下げられたが、問題の広告ページ下の写真は静かに無難なものに差し替えられた。

アップルはやり方によっては反論もできたが、スコッティとマークラの判断でここは安全策をとることにした。

無論大手にこうした戦略の間違いや、クレームがあった場合には新聞や雑誌も飛びつき大騒ぎになる可能性もあった。しかしアップルはまだまだ無名に近い存在であり、拡大途上にある市場特有の寛大さにも助けられ、致命的なトラブルは避けられたのだった。

「あらためて聞くが、そのｉＰｈｏｎｅってのは電話機なのか」

仕事から帰った真夜中、ダン・コトケも別の友人宅に泊まるからと出かけたある日、私が３９年後から持ってきたｉＰｈｏｎｅ６ｓ Ｐｌｕｓの説明を続けることになった。

「ワインなら飲めるかい」

私がアルコールに弱いと知っているスティーブ・ジョブズがワイングラス２つとボトルを持ち出していった。

未来を見た　カリスマ　2018/09/13 hagaromo

「少しいただくよ。君もそうだろうが疲れているから飲むと寝てしまいそうだ」
手にしたグラスにワインを注がれながら笑うとスティーブは「そうだな」といいながらも一気に飲み干した。

ｉＰｈｏｎｅは大別して携帯電話機、携帯情報端末機、携帯音楽プレーヤーを統合したものであること、情報端末はまだこの時代ではインフラが開かれていないがテキストだけでなく写真や動画に至るまでを送りあったり共有し閲覧できるのだと説明した。
しかし実に妙な気分だ。二〇〇七年一月、マックワールドエキスポのキーノートで後年のスティーブ・ジョブズがｉＰｈｏｎｅをｉＰｏｄ、携帯電話、インターネットや電子メールの送受信等が行える携帯情報端末という３つの機能を併せ持ったデバイスであると発表した姿が記憶に残っているからだ。彼はそのとき「アップルは今日電話機を再発明した」とも宣言した。その当人に「ｉＰｈｏｎｅとは」と御託を並べている自分が可笑しかった。
「なににやついてるんだよ」
スティーブは説明の続きを催促した。
そういえば、スティーブと私の間でひとつの約束ができていた。それはスティーブがあえて聞かない限りスティーブ本人やアップルの未来について話さないということだっ

未来を見たかりしマ 2018/09/11 hagoromo

た。

スティーブは私が未来からタイムワープしてきた人間という事実についてはすべての前提として認めざるをえないと考えたようだが、未来は自分たちで築くものであり用意されているものではないという持論を持っていた。そして良いこと悪いことに限らず基本的に自分の未来は知るべきではないと結論づけたようだ。

「持ち運べるという点を別にすれば電話機と音楽プレーヤーについては理解できるがその情報端末ってのがいまいちよく分からんな」

グラスに自分で二杯目のワインを注ぎながらスティーブはつぶやいた。

「君はＡＲＰＡＮＥＴを知っているだろう」

スティーブは勿論だという顔をしながら、

「タイムシェアリングシステムにコミュニケーション能力を持たせたコンピュータネットワークと考えればいいのかな」

それに、と思い出したように付け加えた。

「核攻撃にも耐えうる設計といったかな。だから軍用のシステムさ」

スティーブは自分たちには関係ないといった顔をした。

「まあ、実のところ核攻撃に耐えうるというのは副産物で、メインの使命は研究用の大型コンピュータの設置台数が限られていることから、ひとつの端末からそれら大型コン

未来を見たカリスマ 2018/09/11 hagaromo

ピュータのどれとも接続できるネットワークを構築することにあったようだよ」
スティーブは軽く右手を上げ、話しの先を促した。
「簡単にいえばそのＡＲＰＡＮＥＴの進化型が我々の誰もが使えるようインフラ化されたんだよ。一九九〇年代中頃から私たちも公衆交換電話網、メタル回線を利用してインターネットと名付けられたコンピュータネットワークを使い始めたんだ」
スティーブは俄然具体的な話しになったからか、体を起こして本格的に聞く姿勢を見せた。

「要するに単に個人間でのコミュニケーションだけでなく新聞やラジオ・テレビ・メールといったメディアがすべてデジタル化され、ネットワーク化された結果このｉＰｈｏｎｅで日々の事件やニュースといった情報は勿論、デジタルな百科事典にアクセスして調べ物をしたり、映画を見たりもできるんだ」
私はグラスに口を付けながら続けた。
「それに無線ルーターを使えばネットワーク回線に繋がっている機器とｉＰｈｏｎｅ間は費用のかからない無線でも利用できるんだ。それがｉＰｈｏｎｅをして情報端末っていう意味さ」
さすがのスティーブも理解と言うより想像もできない点があるのだろう、困惑の顔を

未来を見た方 Kaiser Mayer 2018/09/11 Nagaoka

する。

「まあ分からんところは置いといてだ。文章入力するにはどうするんだよ。キーボードもないぜ」

わずかに残っているバッテリーを使い、ソフトウェアキーボードというものを見せた後、この時代では使えないが実は音声認識の技術が搭載されており、話し言葉をテキスト化して入力できることを説明するとスティーブはあきらめ顔をした。

「ぶっとんでいるな。まるでＳＦだ。目の前にこれがなければ信じられんよ」

少し考えていたようだが

「寝ようぜ。続きはまた今度だ」

スティーブはあきらめ顔のまま大きなアクビをしながらつぶやいた。

リビングで数十分を過ごした我々はそれぞれの部屋に分かれた。しかしこんなおだやかな時間はここだけだった。なぜならアップルⅡは売れていたが、まだまだ企業の屋台骨は安定しておらずアップルの日常は予測できないトラブルが多々押し寄せ、平穏さとは無縁だった。

未来を見た男 ＿ 2018-09-11 hagaromo

二つの危機

一九七七年の後半はふたつの危機に見舞われた。

そのひとつはすでに伝説化された話しになっているが、その伝説の筋書きを私流にご紹介するとこうなる。

ランディ・ウィギントンが新しいＡｐｐｌｅＳｏｆｔ ＢＡＳＩＣを開発中、それまで一ヶ月半ほどの成果を保存してあったタイムシェアリング先の大型コンピュータから突如データが消えてしまう事故が起きた。

「スティーブ、僕は早速コール・コンピュータ社に電話し最新のデータがダメでも直近のバックアップテープをセットしてくれるよう頼んだんです」

「それでどうした」

問いただすスティーブに向かい、半べそをかいたランディは言いにくそうに、

「お前の会社は数ヶ月も料金が滞納しているからダメだ、できないと言われました」

この時期のアップルはキャッシュフローが逼迫していたのであちらこちらでこんなトラブルを起こしていた。

スティーブは普段威張り散らしているが、こうしたときの決断は早く肝っ玉が据わって

未来を見るかけ

いることには驚かされる。
早速コール・コンピュータ社の社長アレックス・カムラートを呼び出しなだめるようにジョブズはいった。
「君がこちらに来てくれたらたまった料金を小切手で用意しておくよ。ただし僕らも急いでるんだ、わかるだろう。だから直近のデータテープをセットしデータをダウンロードできるようにしてから出かけてくれないか。頼むよ」
それならばと納得したアレックス・カムラートだったが、早速ランディはアレックス・カムラートがこちらに向かっている間にデータをダウンロードし、ログオフしてその場から去った。
アレックス・カムラートという人物はボクサーあがりの人物で鼻も目もつぶれた強面の男だった。事実怒りっぽいと評判だったが、集金に来たその男に向かいスティーブ・ジョブズは真っ向から悪たれをついたのだ。
「おまえに小切手なんぞ支払うつもりはない。数週間分もの貴重な仕事を吹っ飛ばしやがったお前たちに払う金などあるわけないだろう。地獄に落ちやがれ。帰れ」
スティーブ・ジョブズは菜食主義者で当時は痩せていた。したがって万一殴り合いにでもなったらスティーブは確実にボコボコにされただろう。しかしスティーブの剣幕に押されたのか、カムラートはしばらく仁王立ちになったままだったが、怒りながらドアを

未来を見るカリスマ 2018/09/11 hagoromo

蹴って出て行った。

とまあ、こうした伝説がすでに広まっているようだ。しかしその場にいた私が見た光景とはかなり違うことを告白しつつ状況の説明をしておきたい。

そもそもアップルⅡにはウォズが開発した整数ＢＡＳＩＣが搭載されていたがユーザーはより実践的な浮動小数点演算が可能なＢＡＳＩＣを欲していた。

無論ウォズもそれは承知だったが、変更にはまともな時間を必要とすることは明らかだったもののウォズはすでにフロッピーディスク・ドライブの開発を始めていたから取り組む余裕がなかった。

そこでアップルはマイクロソフト社から６５０２ ＢＡＳＩＣを買い取り、これをアップルⅡの低解像度グラフィックスと整合性を持たせ ＡｐｐｌｅＳｏｆｔ ＢＡＳＩＣとして開発することになった。これまたランディの仕事だった。

しかしランディは愚痴が絶えなかった。

「トモ、この６５０２ ＢＡＳＩＣはバグが多すぎるんだ。まずはこのバグを潰さないと」

私はランディの顔を見ながら、

「ランディ、君の独壇場だろ」

未来を見たかりんマ 2018/09/11 hagoromo

と誉めるつもりでいったが、彼の表情は曇りっぱなしだった。
「いや、ウォズという天才と一緒に仕事をするのは素晴らしいことだけど、彼は飛び抜けているから困るんだよ、トモ」
どういうことかと促すと、
「だってウォズはいまだにハンド・アセンブリングだからね。凄いことだけどアップルIIで動くアセンブラーがないんだよ」
「ということは開発ツールがないってこと？」
私も驚き聞き返した。ちなみにアセンブラーとは、アセンブリ言語のソースコードを機械語のプログラムに変換するソフトウェアのことだ。
そこでランディは苦肉の策でコール・コンピュータ社のクロス・コンパイラを電話回線経由で使うことにした。そのクロス・コンパイラもＢＡＳＩＣで書かれていたという。
処理にはひどく時間がかかりコンパイルには2時間ほど、ソースコードの打ち出しには数日かかると思われたが、ここでコール・コンピュータ社のシステムが故障し，契約のユーザーエリアに保存してあった６５０２ ＢＡＳＩＣが消滅した。
とまあ、ここまでは確かなのだ。
ただしコール・コンピュータ社のカムラートが到着する間にうんぬんというのはいか

未来を見た方がいいのか？ 2018/09/11 ｈｉｒｏｒｉｎｏ

にもありそうな伝説だが、実際はここで助け船をだしたのが一九七七年十一月、ロッド・ホルトが採用したクリフ・ヒューストンとディック・ヒューストンという兄弟だった。

彼らはそれまでＩＭＳＡＩ８０８０を所有していたが、ウエスト・コースト・コンピュータフェアでアップルⅡを見て感激し、ホルトに接触したのだという。

ともあれデータセンターのコンピュータが使えないことは確かだった。ではどうするかで青ざめたランディ・ウィギントンはスティーブ・ジョブズらに対処を求めた。結果、クリフ・ヒューストン、それにときおりウォズとジョブズがやってきては早口で話し合っていたが、私には宇宙人の言葉のようで意味不明だった。

後でランディに聞いたところによれば、クリフ所有のＩＭＳＡＩ８０８０のおかげで窮地をのがれたのだという。

「いや、本当に助かったよ。クリフのＩＭＳＡＩに６５０２ ＢＡＳＩＣの紙テープを読み込ませ、それをフロッピーディスクに落としてＩＭＳＡＩベースの６５０２クロス・アセンブラーにかけたんだ」

「なるほど、ＩＭＳＡＩがデータ・センターのコンピュータ代わりになったというわけか」

私が少々とんちんかんな問いをしたもののランディは言い換えもせず、

未来を見た方は、ファンタジーの世界の人間だけ。

「それより開発ツールができたことが強みだったよ。なにしろこれまで2時間かかっていた作業が6分で終わったんだからね。そして全ソースコードの打ち出しだって、確か40分もかからなかったよ。電話回線がネックなのは分かっていたけど、個人用コンピュータの威力をあらためて知ったよ」

ランディはろくに食事もとらずに働き続けたからだろうか、少し痩せてみえた。

ともかくデータセンターのコンピュータが使えなくなった現実を踏まえ、もしＩＭＳＡＩがなければ代替手段を考えつくまでまったく先に進めない話しだったから危機であったことは確かなのだ。

ただしスティーブ・ジョブズがボクサーあがりのカムラートと睨み合ったという話しの方が面白いのは確かだが…。

もうひとつの危機はもっと深刻だった。

この頃スティーブの口癖は、

「アップルⅡの成功ははじめから確信していたよ」

といったものだった。

自分が予測したとおり、アップルⅡは売れてるしこれからも売れるとメディアや周囲に自慢していた。しかし私と二人きりになるとニュアンスはかなり違った物言いになっ

未来を見た。

た。

「いや、売れるし売らねばならないと思っていたよ。しかし君だから白状するけどアップルⅠの倍ほど売れれば上々だと思ってたんだ」

いたずらっぽい顔をして彼は続けた。

「アップルⅡにケースをというのは俺の考えだったが、当時は金も時間もなかった。だからなるべく安く上げようとして低予算の加工法でケースを作ったんだ」

その低予算の加工法によるケース作りを依頼していたケースメーカーの金型が壊れたのだ。

ケースがなければアップルⅡは出荷できず売上げがなくなる。なによりも前記したようにこの時期アップルのキャッシュフローは底をついていたから根本的な改革は出来得なかった。

正真正銘の危機だった。

スコッティもマークラも単に金を出せば済むことではないことは理解していたがキャッシュフロー不足を考慮し取り急ぎ個人で二十万ドルずつの資金投与したが、ケース成型システムを修理し再度ケースを成型できるまでには物理的な時間が必要だった。

ここでもスティーブ・ジョブズのガッツが会社を救った。

未来を見る方法 ＿＿＿＿＿＿＿＿

「トモ、一緒に来てくれ」

スティーブと私はケースメーカーまで車を飛ばした。彼の運転はいつも乱暴で危なっかしいものだったが、数十分後に自分たちの運命が決まると思うと気が気でなくスティーブの荒っぽい運転も気にならなかった。

メーカーの責任者に会うとスティーブは挨拶もせずいきなり本題に入った。

「状況はわかっているつもりだ。ケースの出荷を予定通り、いや少しでも早めて欲しいが、ここで僕たちが君たちに報いることはひとつだと思う」

スティーブはメーカーの責任者をあの射るような瞳で凝視した。

「スケジュールより早く出荷してくれたら、一週あたり１０００ドルのボーナスを出すよ。だから何とか頑張ってくれないか」

スティーブの真摯な態度とボーナスの提供は成型メーカーを奮い立たせた。文字通り早めにケースが届けられ始めたため、ほどなくしてアップルⅡの出荷もできるようになった。

アップルにとってもぎりぎり、背水の陣だった。あと一週間ほどケースの納品が遅れたら倒産の憂き目に遭うところだったのだ。

こんな具合にアップルの経営陣は他にもいろいろなヘマをやらかしつつ学んでいっ

未来を見通せ　カリスマ　20180911 hagoromo

た。

マイク・マークラは自分が立案したアップルⅡの販売見通しが責められても仕方がないほど悲観的だったことを思い知った。またジョブズが下した技術的選択や試作品の最終仕上げをウォズが嫌がること、細かなことまで粗探しをするロッド・ホルト、製品の美的考慮を重要視しないマイク・スコットらも多くのいざこざの中でこれまでとは程度の問題はあるにせよお互いの欠点に寛容になっていった。

ある日、スコッティは、

「俺もジョブズ流の足の疲れをとる方法を始めたよ」

いたずらっぽい顔してスコッティは私にいった。

「なんですかそれは」

「決まってるだろ。トイレの便器に水を流してその中に足を入れるのさ」

スコッティと私は顔を見合わせ大笑いしたが、離れた場所にいたスティーブ・ジョブズが何事かと振り向いた。

未来を見通したカリスマ 2018.09.11 hagaromo

第三章　スティーブ・ジョブズという男

スティーブの本音

スティーブ・ジョブズは一九五五年二月二四日の生まれだから、私が一九七六年一二月にタイムスリップし、彼のガレージに転がり込んだとき彼は二一歳の若者だった。

私は元世界の一九七八年にはすでにアップルⅡというパソコンの存在を知っていた。しかし日本での販売価格は当時の価格で八〇万円ほどもした。給料が一〇万円そこそこの時代だったからおいそれと買えるはずもなく、間に合わせのつもりでコモドール社のオールインワン・パソコンＰＥＴ２００１を買った。それでも三〇万円ほどは必要だった。

ただアップルとかＡｐｐｌｅという社名は当時の日本ではかなり怪しくいかがわしいイメージがあった。

なぜならラブホテルや怪しげな商売をしている会社の中にその冠がついている企業が目立ったからだ。だからというわけでもないが今のように「素敵」だとか「クール」といったイメージとは無縁だった。

未来を見た方がいいのか？ 2018/09/11 hagaromo

さらに違い遠い米国の、それも一企業の情報を安易に見聞きできる時代ではなかったから一九八二年にアップルⅡを手に入れたときにもスティーブ・ジョブズがどうのこうのといった情報は皆無だったし気にもとめなかった。

マッキントッシュが登場した一九八四年、私も縁があってそのマッキントッシュを手に入れた。アップルⅡ同様日本語はサポートしていなかったが、そのＧＵＩに夢中になったものの、アップルという会社が２人のスティーブによりガレージから起業した会社だといった伝説も耳に入ってこなかったはずだ。

繰り返すが、アップルⅡの情報自体が極東の島国にリアルタイムに入ってくる時代ではなかったし、せいぜい私らが入手できるのは日本総代理店のイーエスディ ラボラトリという会社が発行していた「アップルマガジン」程度のことで、マシンや関連するソフト＆ハードの情報を集めるだけで四苦八苦していた。

また日本のメディアも今でこそアップルの動向や新製品情報などを進んで取り扱うが、新聞やテレビでアップルの名が出ることはほとんどなかったし米国で発刊されるようになったマックワールド（ＭＡＣＷＯＲＬＤ）誌にしても二ヶ月ほど遅れてやっと手に入れることができた時代だった。

だから、スティーブ・ジョブズという破天荒な男の存在やその魅力ある話に耳を傾けたのは一九八九年七月十日、幕張の東京ベイＮＫホールで行われたＮｅＸＴ発表会あた

未来を見た方は、ここに

りからではなかったか。

したがって私がスティーブ・ジョブズという男を意識したとき、すでに彼はアップルの人間ではなかったのである。ただしその後、彼の名は良きにつけ悪しきにつけ見聞きする機会が多くなり、無視出来なくなっていった。

特に一九九六年末にアップルがＮｅＸＴを買収し、スティーブ・ジョブズも顧問という形で復帰してからは。

そのスティーブ・ジョブズのイメージはといえば元ヒッピーでプレゼンの神様、大金持ち、傍若無人の経営者で人を人とも思わず怒鳴り散らす嫌な男といったものだった。

一九八九年に起業した私はアップルジャパンのソフトウェア・デベロッパーとなり、一四年間日本でもっともアップルに近いといわれた会社を経営していたこともあって一般ユーザーの知り得ない情報をも知る立場にあったが、それでもスティーブ・ジョブズという人間を好きにはなれなかった。

さてそんな私が四〇年前にタイムスリップしスティーブ・ジョブズと出会ったわけだが、正直これまでの印象はいささか修正しなければならないと思った。

アップルの中で私の秘密を知っているのはスティーブ・ジョブズただひとりだったし、私も社内で一緒に働く人たちに対し未来を語ることはなかった。

未来を見た力 Hagaroma

しかしそこはこちらも生身の人間だから、要所要所で自分が出てしまう。なにしろ明日や一ヶ月後がどうのこうのについて詳細な歴史を記憶に刻んでいたわけではないものの、アップルの歴史の節目節目に関しては多くの情報を集めていたから、それらの知識を隠して皆と話すのは実に難しいし苦しかった。

またスティーブ・ジョブズと二人だけのときにもアップルの未来について、あるいは当該企画が成功するか失敗するかといった具体的な話しはあえてしなかったしジョブズも聞かなかった。

とはいえビル・フェルナンデス、クリス・エスピノサ、ランディ・ウィギントンそしてダン・コトケらは折に触れて的確な指摘をする私に尋常でないものを感じていたようだ。無論それはジョブズが「みんな、トモは超能力者で未来がわかるらしいぞ」と冗談めかしいて言う話しの範囲であって、まさか四十年後の世界からタイムスリップしてきた人間とは夢にも思わなかったに違いない。

「スティーブ、言いにくいけど君は周りの人たちからどんな風に見られているか知ってるかい」

ずいぶんと私を信頼してくれ、どこへ行くにも連れ回してくれるジョブズだったから、アップルⅡのファーストロットが出荷を終えたある日の夜、遠慮のない質問をして

未来を見たかりスマ 2018/09/11 hagoromo

みた。それに私の秘密を知っているからか、スティーブは私に対して決して怒鳴ったり口汚い物言いや素振りは見せなかったからクリスやランディたちは不思議がっていた。

スティーブはソファーに寝そべり両足をサイドテープルの上に乗せながらいった。

「俺も馬鹿じゃあないから知ってるよ」

足を組み直して続けた。

「君も感じているだろうけど、俺たちの周りに集まったというか集めた人間は一部を除いて優れた人間たちなんだ。俺は役立たずのクソやろうと一緒に仕事するなどゴメンだからね」

「それはわかってるよ」

「しかしトモ。これがホームブリュー・コンピュータ・クラブでならことは簡単だ。嫌な奴なら付き合わなければいいんだ、お互いにな」

私もスティーブに対面しているソファーに深く座りながらこの機会だから長年の疑問を聞いてみようという気になった。

「それとこれとどういう関係があるんだい」

「俺はウォズと一緒にアップルを作った。確かにラッキーだったけど一番難しいと思ったのは人を動かすことだよ。トモ」

未来を回回見たカリスマ20180911 hagoromo

「それはよく分かるさ。私も小さな会社を経営していたからね」
「うん。会社や製品のビジョンを明確にして頭の良い奴らを目標に向かって鼓舞し、目的を達成させるのが俺の役割だが、概して人は自分に甘いから（明日出来ることは今日はしない）という気持ちになるのさ。できるだけ楽な方向へと行って仕舞いがちなんだ」
「なるほど、それに発破をかけるのが君の役目というわけか」
私は腰が沈みすぎるソファーに埋もれながら頷いた。
「まあそれは分かるとしてもだ。君の物言いは誰よりもきついし気分を害する奴だっているに違いないよ。もっと諭すように対峙できないのかい」
声こそあげなかったがスティーブは口を開けて笑った。
「俺は宗教団体のグルでもなければ人生の指導者でもないんだ。君が見ての通りの若造だよ。そいつが頭のいい奴らを動かすのに優しく諭せば済むとでも思っているのかい。誰も俺など信用しないよ」
スティーブは悪戯っぽい顔をしながらまたまた笑った。
「誰かがいってたよ。人を動かす重要な要素があるとすればそのひとつは相手に恐怖心を与えることだそうだ」
「……」

未来を面白くカリスマ20180911 hagoromo

「恐怖といっても無論命にかかわる云々ではないぜ。下手をすれば首になるかも知れないとか降格になるかも知れないという恐怖だよ。まあ人によっては全人格を脅かされるという気持ちになる奴もいるだろうがね」

スティーブは唇をひと舐めした。

「幸運なことに俺はアップルの創業者のひとりだ。全権というわけにはいかないが仕事上の権限も持っている。だからもしその気なら社員を首にすることもできるはずだ。そうだろう」

「面白いもので、人って自分で率先して仕事に向かうより他人から指示される方が楽だと思うことが多いらしいんだ。頭の良さと行動力とはまた別の問題だし、怒られ叱られて鼓舞される方が理論然と指示されるより動きやすいんだよ」

「では君はそれらを承知で嫌われ者になってるのかい」

私は話しの核心をついた。

スティーブは冷静だった。私の煽るような質問にもニコニコしながら答えていた。

「確かに俺だって若いし気が短いことも確かだ。『若造が生き急ぐな』と禅の師に言われたこともあるけど、何をすべきかわからないでグズグズしている奴を見ると張り倒したくなる。

決して俺は聖人だとは思わないしなりたいとも思わないよ。瞑想もやってきたけど自分

未来を見た。カリスマ2018-09-11 hagaromo

の気持ちを落ち着かせるためには役立つが、悟りだなんてクソ食らえだ！俺は『自分は何者なのか』を知りたくて禅に傾倒したんだ。前に話したコーブン・チノ(知野弘文)の門を叩いたんだが、彼曰く禅僧になるのも会社を運営するのも極めれば同じだといってくれたなぁ」

「ああ、以前聞いたね。でもさ、スタッフたちだけでなく外部の人たちの中にも君に恥をかかされたと、君の態度が悪いと怒っている人もいると聞いたよ。それはアップルにとってマイナスではないのかい」

私も食い下がった。

「知ってるさ。一作日だったか、君も同席したインタビューがあっただろう。しかしなんだいあの記者は。なんのために取材にきたのか自分でも分かってないんだよ。あんなクソやろうに大切な時間を取られると思うとインタビューなど受けない方がマシさ。ああして怒鳴っておけば二度と来ないよ」

スティーブは真面目な顔で言い張った。

確かに一昨日、大手メディアのジャーナリストと称する男から広報を通じて取材申込みがありスティーブはそれを受けた。しかし開口一番質問攻めにあったのはジャーナリストの方だった。

未来を見た方は、ハッピーエンドを見る。

そのジャーナリストはパーソナルコンピュータとは何なのかを一度も真剣に考えたことがないのは明らかだったしアップルⅠのこともほとんど知らなかった。そんな奴がいま爆発的に売れ出しているアップルⅡのことを取材したところで何がわかるのか。とスティーブはいいたかったに違いない。

どうせピント外れのクソ記事しか書けないといいたいのだろう。

この種のことは未来の私も多々経験したから言わんとすることはよく分かった。無論私はスティーブのようには振る舞えなかったが。

「俺はものごとを真剣に考えようとしない、人生を真剣に生きようとしない奴らを見ると無性に腹が立つんだ」

「君に話したこと…あったかなあ」

スティーブは一呼吸置いて神妙につぶやいた。

「俺は若いときから、自分は長生きできないと思っているんだ。いまでもその考えはあまり変わっていないけどね」

私はまさか（君は五六歳のとき膵臓ガンで死ぬんだ）とはいえなかった。

「またなんでそんな考えに至ったんだい」

当然の質問に少しいいにくそうなスティーブは続けた。

「いや、ある占い師に観てもらったときそういわれたんだよ。１９歳のときだったか

ホーム 2018-09-11 ナガロ

な。そんなにショックではなかったけどそのとき俺はいまだ自分で何を成すべきかわからなかったことが不安でね。だからやりたいことには何でも手を出したよ。ＬＳＤとかもね」

一呼吸入れたスティーブは続けた。

「ギターも練習したしハーモニカもやったな。これはボブ・ディランの影響だ。マッサージも習ったし日本の易経、知ってるだろう、その筮竹を使う占いにも夢中になったよ。それにすでに知っているだろうけど瞑想や神秘思想にもはまってさ、パラマハンサ・ヨガナンダのAutobiography of a Yogi (あるヨギの自叙伝) だなんて本をいつも抱えていたよ。ダン・コトケとインドまで行ったしね」

苦笑いしながらスティーブは私を見つめた。

「だからさ、自分はあとせいぜい数年か数十年の命なのになにをすべきかもわからないその自分にイライラした毎日を送ってたんだ。幸いいまは目標が見つかったと思っているけど、そのときから死という物を意識しだしたのさ。自分が死することを意識すれば毎日はおろそかにできないだろう。だから先ほどもいったけど自分の可能性にも気づかず、考えようともしない刹那的な奴らを見ていると以前の自分を思い出すのかな、腹が立つのさ」

スティーブは魅力的だが射すくめる視線を私に向けてから天井を仰いだ。

未来を見るかりぇ 2018/09/11 hagoromo

「いま思い出したけど、君が相手を射すくめるようなその視線だけど僕には一種の催眠術みたいに思えるんだ。もしかしたら催眠術も勉強したのかい」

長年の疑問を思い出したので遠慮なく聞いてみた。

「ああ、よく分かるなあトモ」

「いや、私も少年時代に数冊催眠術の本を買って独学し、ハイスクールで女の子たちに催眠術をかけていたことがあったんだ」

スティーブはどこか自分の深層心理と私の告白が相容れることを感じたのか具体的な話しをしてくれた。

「トモ、君はある意味同類だな。いや、なにか真理みたいなものを掴みたくて若い時にはそうしたことに夢中になるんだろうな。確かにある本に相手を意のままに動かす基本は凝視することと書いてあったよ。事実俺も催眠術を意識してそうした練習もしたけど俺には催眠術は向かないことがわかったよ。ただし今では意識していないけど習慣になってしまったらしいな」

「向かないと君は言うが、一番大切なエッセンスを君は会得しているように思うよ」

スティーブ・ジョブズは嬉しそうな顔をして座り直した。

「話しを会社に戻すけど」

一呼吸してスティーブはまたも姿勢を変えながら続けた。

未来を見た方 ハリスマ 2018-09-11 hagoromo

「恐怖心で人を動かせるとしてもだ、トモ、それだけではダメなんだ。成果を上げないとね。口うるさくいわれ、一生懸命に働いても成果を感じられず、結果がでなければ働く意欲も失うしリーダーに対する信頼や尊敬なんてありえない。だから俺はますます追い立てられる気持ちになる」

スティーブは再び天井をながめた。

「俺は確かに暴君に見えるかも知れないが、でもいつも自分が正しいと確信しているわけではないんだ。しかし君にもこぼしたことがあるけど、例えばウォズを会社の方針に沿って働かせるのは至難の技だぜ。事実スコッティは苦労しているよ。ウォズや奴らが(これが規則だから)と理論然とした指示で喜んで働くと思う方が甘いよ。皆本来は一匹狼なんだ」

一呼吸して、

「だけど、俺も反省しないわけではないんだぜ」

スティーブは照れたような顔をした。

「レジス・マッケンナと知り合って少し経った頃だったけど、彼の事務所に電話をかけたとき担当者の物言いにカチンときて怒鳴るはめになったんだ。行き掛かり上、随分と口汚いものいいをしてしまったよ」

私は目で話しの続きを催促した。

未来を見たかりしてマ 2018/09/11 ハガロマ

「そのときレジスにこっぴどく叱られてさ『二度とスタッフにそういう物言いはするな』と言われたよ。俺もその次にレジスに会いに行ったときばつが悪くてさ、そのスタッフのデスクにいって謝ったよ。俺だって謝るときもあるんだぜ」

スティーブは両肩をひょいと上げて笑った。

「トモ、君のように先が、未来がわかればともかく、俺だって自分の決断が１００％間違いないとはいえないよ。だから口五月蠅く、時に乱暴な言葉遣いで指示したり鼓舞するけど意味のある反論は歓迎なんだよ。聞くに値する反論なら俺は自分の意見に固執するつもりはないんだ。まあ反論してくれる奴など滅多にいないけどさ」

「なるほど、君はスティーブ・ジョブズを演じてるんだな」

私の発言を聞き流しながらもスティーブはちょっと寂しそうだった。

「でも、こんな俺でも廊下で待ち伏せされて殴られたり刺されたりしたことはないぜ」

スティーブは苦笑いした。

こうした会話から察するにスティーブは意外と自制心が強く、わざと人にきつい言い方をしていると思われるかも知れない。しかしスティーブという人間の持つマグマは本人が思う以上に強く熱いものだった。だからときにはコントロールを失う言動も目立ったのだ。

それにスティーブ・ジョブズの魅力の一つはその傲慢さとは裏腹にガラスのような壊

未来を見た力 Ｉｓｋ Ⅱ の誕生

れやすさを感じさせることだった。
いみじくもロッド・ホルトがいっていた。
「単に年の差ということではないんだが、スティーブといるとどうにも危なっかしくて守ってやろうという気になっちまうんだ。あのクソ野郎をだぜ」
と笑っていた。
事実ホルトは時に兄のように、時に父のようにスティーブに接していた。

ＤｉｓｋⅡの誕生

アップルⅡは売れ続けていたが、市場が広がるにつけアップルⅡはホビーストだけのものではなくなっていった。それはより厳しい世間の批評に曝されることになったことを意味する。
一番のクレームというか評判がわるかったのはアップルⅡのカセットインターフェースだった。無論ウォズが作ったものだが家庭用のカセットテープレコーダーを記憶装置として使うことができランニングコストは安価だった。しかしアップルⅡだけの問題ではなかったもののその信頼性には問題があった。

未来を見た方 Kazuma Sakamoto

カセットテープをコンピュータの記録媒体に利用することはアップルの発明ではなく、この頃のパソコンの多くがそうだったのだ。

信頼性に問題とは、例えば同じアップルⅡでも違うカセットテープレコーダーを使うと巧く行かないことがあったりする。ホビーストたちにとっては珍しいことではなく「相性が悪い」で済んでいたものの一般ユーザーにとっては欠陥品と映った。

さらにカセットテープによるデータの書き込みや読出しには時間がかかり、ちょっとしたゲームでも数分、コンピュータ言語のようなものだと１０分ほどかかることもざらだった。そのうえ、ロード中に読み込みエラーとなる場合もあり得たしコンピュータへの期待が高まり多様なデータにアクセスしたくともカセットテープではランダムアクセスができなかった。

さて、この時代にフロッピーディスク装置が無かったわけではない。しかし８インチの大型の製品が主流でシュガートのＳＡ８００が市場を席巻していたがやっとサイズの小型化を目指して５・２５インチのＳＡ４００が登場したばかりだった。

一九七七年の十二月、マイク・マークラは翌年一月にラスベガスで開催されるＣＥＳ国際家電ショーまでにディスクドライブの可能性を明確にしたかった。

取締役会の席でマークラは同席したスティーブ・ジョブズ、スティーブ・ウォズニア

未来を見回してカリスマ 2018/09/11 hagaromo

ック、ロッド・ホルト、マイク・スコットそして私の全員を見回してからいった。
「知っての通り、私は最近ランディの力を借りて小切手帳管理プログラムを作っている。これはそんなに大きなプログラムではないがカセットテープによるセーブ／ロードにはウンザリしてるんだ。市場は日々大きな容量が必要なプログラムが必要となるしその兆候も出てきている」
一息入れたマークラは続けた。
「是非フロッピー・ディスクドライブの開発を進めたい。勿論これを実現できるのはウォズしかいまいが」
とはいえウォズはフロッピー・ディスクの動作原理については詳しく知らなかった。しかし以前ヒューレット・パッカード社に勤めていたとき、シュガート社からマニュアルを取り寄せたこともあった。
ともかくＳＡ４００の実機をスティーブ・ジョブズがどこからか調達してきた。ウォズは目新しい機器を手にして持ち前の知的好奇心が膨らんでいった。
「僕がフロッピーデスク装置に精通していなかったことが幸運だったと思うよ」
ウォズは後に笑顔で私に話してくれたことがあった。
制御方法や回路設計に関してもウォズはこれまでの常識にはとらわれず、一から独自の考え方で難関を突破していった。

未来を見たかりスマ 2018/09/11 hagoromo

「僕は難しいと言われたことに挑戦するのが好きなんだ。巧く行けば自慢できるしね」しかしロッド・ホルトもスティーブ・ジョブズもあらためてウォズの天才ぶりには驚いた。

ホルトはいう。

「あのＳＡ４００のマニュアルをどう熟読したのかわからないけど、あれだけの情報から動作原理を完全に理解しただけでなく回路の簡素化を思いつくなどウォズしかできない芸当だよ」

マークラも、

「まさしくウォズは魔法使いだな」

凄いというより呆れていたというのが周りの人たちの感想だった。

そのウォズもディスクへのデータ読み込および書き込み、フォーマッタのソフトウェア作りにはランディ・ウィギントンの応援を求めた。

ウォズとランディはクリスマスが迫る頃、本気を出したようだ。昼夜を問わず働き続けクリスマス休暇も返上で働いた。

ただし社長のスコッティはイライラのしっぱなしだった。

「できるのか、できないのか。俺には製品発表と出荷日を決める責任があるんだ。胃が痛いよ」

未来を見た方 ＿＿＿＿＿＿＿＿

いつもは途中で飽きて仕事を先延ばしすることも多いウォズだったが、ホルトが驚嘆するほどフロッピーディスクドライブ開発には入れ込んでいた。

「奴は本気だよ。トモ」

ウォズの監視役だったホルトは愛用のキャメルを咥えながら私にウォズの働きぶりを聞かせてくれた。

「精魂かけて取り組んでいるよ。鬼気迫るというか狂気に近い集中力だよ」

事実たまたまウォズとすれ違っても魂がどこか別の所にあるようでブツブツと独り言をいっていた。その姿は寝ることや食べることなどには眼中にないように思えた。

それでもウォズとランディは展示会までにはディスク用のオペレーションシステム作りは間に合わないと考えていたらしい。

ともかくデモ用でいいから開発を完成したいと努力したがやはりラスベガスに立つ日までには間に合わなかった。

しかしラスベガスの雰囲気はウォズとランディをうきうきさせた。開発を徹夜で続けながらときおり息抜きと称して賭け事で憂さを晴らした。

ランディはダイスで３５ドル稼いだことに有頂天になったのか、開発中だったディスク内のデータをうっかり消してしまうというアクシデントを起こしてしまい一時はデータ復旧を絶望視したこともあった。

未来を見た方がいいのか？ 2018/09/11 hagoromo

そのＤｉｓｋⅡと名付けられた５インチ・フロッピー・ディスクドライブはウォズでなければなし得ない成果だった。

ウォズ自身も後年当時を振り返って、

「自分にとってＤｉｓｋⅡはアップルⅡ以上に素晴らしい製品だと思うし、生涯でもっとも気に入った誇れる製品だよ」

と言っている。

とはいえＤｉｓｋⅡの開発はスティーブ・ウォズニアックの独り舞台のように伝わっているし後年本人も（自分が創った）と明言しているが、実際は見てきたようにソフトウェア面ではランディ・ウィギントンの力が不可欠だったし、フロッピーディスク装置自体のアナログ回路はロッド・ホルトがモトローラの新型チップを駆使し、それまで１８個使っていたチップを４個に減らした。

ウォズの真骨頂はデジタル回路だった。フロッピーディスクのコントロール・ボードのチップ数を従来の４０個からたったの８個に減らしたのだ。やはりウォズもホルトも天才なのだ。

ただし後述することになるがＤｉｓｋⅡを実際に使うとなればＣＰ／Ｍのようなディスク・オペレーティング・システム（ＤＯＳ）が必要になる。さすがのウォズもこれには

未来を見る方法 Hagoromo

手が出せなかった。独学の天才の限界だったともいえる。

話しは先走るが、一九七八年初頭のコンシューマー・エレクトロニクス・ショーでこのＤｉｓｋⅡが発表され、その後に開催された第二回ウエストコースト・コンピュータ・フェアでは厳しい眼を持つコンピュータに詳しい専門家たちの度肝を抜いた。

アップルとは競合だったコモドール社のＣＥＯチャック・ペドルもいつもの毒舌ぶりとは違いＤｉｓｋⅡを「これはエレクトロニクス業界を完全に一変させてしまう」と絶賛した。

「このＤｉｓｋⅡがリリースしたらアップルⅡの出荷は大幅に伸びるよ」

私がスティーブにささやいたが、スティーブ・ジョブズは当然だという顔をして笑っていた。

安価に提供されたこともあったし一九七九年秋にはアップルⅡ用に初めての表計算ソフト「ＶｉｓｉＣａｌｃ（ビジカルク）」がディスクベースで発売されたが、これがキラーアプリケーションとなる。

なぜなら米国ではサラリーマンであっても確定申告が必須なため、一般のユーザにも表計算ソフトは売れたしアップルⅡとＤｉｓｋⅡの有用性をストレートにアピールできたからだ。そしてアップルⅡは、いやパーソナルコンピュータはすでに単なるゲーム機ではなく、ビジネスや家庭においても有用なツール、武器になることを示したという点

未来を見てたかりしてマ 2018/09/11 Nagaoka

でもその功績は大きかった。

ＤｉｓｋⅡの試作品が出来上がると社内では様々なテストが重ねられていた。勿論フロッピーデスクドライブのテストにはフロッピーが必要だ。あちこちで様々な使われ方が始まるとあっというまにその５インチフロッピーが不足するようになった。その度にクリス・エスピノサやランディ・ウィギントンが買いにいかされた。

そんなシーンを見ていて私はふと未来の自分がアップルⅡとＤｉｓｋⅡを手にして楽しみ、工夫したことを思い出した。

当時のＤｉｓｋⅡは片面単密仕様とよばれ、フロッピーの片面を３５トラック、１６セクタに分割してデータの読み書きを実行した。

トラックとは外周から内周に向かい同心円状にエリアが列び、０から３４までの番号がつけられている。さらにこのトラックは１６のセクタに分割され、各２５６バイトのデータが書き込まれる仕様だった。

したがって１枚の(片面)のフロッピーは１４３Ｋバイトのデータを格納できたわけだ(フォーマット以前の容量)。

現在の感覚では「なにそれ、メチャ小さいじゃん」と思うだろうが、アップルⅡ本体の標準メモリが４ＫＢとか８ＫＢといった時代だからすばらしく広い空間に思えたの

未来を見た。カリスマ2018-09-11 hagoromo

だ。

ただし当時はフロッピーも一般ユーザーにとっては高価だった。

米国と日本では状況がかなり違うと思うが、一九八二年に私が手に入れた5インチ・フロッピーは秋葉原で一〇枚入りで一万六千円もした。したがってショップによっては一枚ずつのばら売りをしていたほどだった。

したがって一枚のフロッピーを至極大切に使った。どのようにしたらフロッピーのギリギリまでデータを書き込むことができるかを考えながら使ったものだ。

あるとき、たまたまビル・フェルナンデスやクリス・エスピノサらがＤｉｓｋⅡを使っていたときのことだった。

「１４３ＫＢというとデカイと思ったけどすぐに一杯になっちゃうな」

とクリスが言ったのを聞き、私は悪戯心がわいた。

「クリス、新しいフロッピー1枚貰えるかな」

何事かと思ったのか、怪訝な顔をしながらクリスは机上にある箱から1枚の未使用フロッピーを取りだし私に差し出した。

「なにするの、トモ」

「まあ、見ててごらんよ」

私はフロッピーのエンベロープの端にハサミで切り込みを入れ始めた。

未来を見たかりんだ 2018/09/11 hagoromo

「あっ、だめになっちゃうよ」、

クリスが叫んだが、私は笑いながら作業を続け、書き込み防止の切り込みがない側に同じような切り込みを付けたフロッピーをクリスに渡しながらいった。

「はい。クリス、これで両面１４３ＫＢの倍容量のフロッピーのできあがりだよ」

市場に出回っていた片面単密のフロッピーは文字通り片面しか使えなかった。というより製造工程上、磁気媒体は両面に塗布されていたが検査は片面しかされておらず、別面は保証対象外だったのだ。

しかし金のない我々ユーザーは何とかして高いフロッピーを有効的に使いたいと考えたあげく、エンベロープの中身、すなわち記録媒体を傷つけずに反対側の書き込み防止位置に書込を可能にするノッチを入れればフロッピーを裏返してさらに１４３ＫＢが使えることを経験上知ったのだ。

勿論保証対象外だからデータエラーが起きても文句は言えない。しかしほとんど問題がなかったと記憶している。

事実後年米国でもそうした切り込みが間違いなくできるようにと専用パンチが売られたが、我々は当初カッターナイフやハサミでそれを行っていたのだった。

「クリス、だけど承知のように保証されているのは片面だけだ。だから仕事上重要なバ

未来を見た方 Kaiser Mayer 2018/09/11 hagoromo

ックアップには使わない方がいいよ」
笑いながらいう私にビル・フェルナンデスが言い放った。
「これはいいなあ。ただしこの話しは、シブチンのスコッティには内緒だな」
「確かに。これを知ったらスコッティは在庫全部のフロッピーに切り込み入れろって叫ぶからな」
クリスの一言で我々は心の底から笑い合った。
「だけどトモ、ハサミやナイフを扱うのは結構難しそうだよね。失敗もありえるなあ」
そういうクリスに私は、
「クリス、見ていてご覧、そのうち安全に同じことが出来る専用ツールが登場するよ」
私はウインクしながらその場を離れた。

いろいろな雑音やトラブルもあったが、アップルⅡは思った以上に出荷されていく。しかし改善すべき点、改良すべき点は無数にあった。そのひとつがマニュアルだった。
「よく推敲されたマニュアルをアップルⅡに同梱すべきだと思っている。コンピュータを知らない人は勿論だがホビーストの注目を浴びるくらいよく出来たマニュアルが欲しいよ」
この頃のスティーブ・ジョブズの口癖だったが、そんなものを簡単に作れる人材はい

未来を見たかりしゃ 2018/09/11 hagoromo

なかったし社長のマイク・スコットは簡単なデータシートで十分と考えていたから最初期のアップルⅡにはコンピュータを動かすための命令コード一覧だけしか付属していなかった。

これを近所のショッピング・モールにあるコピーサービスで複写し、これまた近くの文具店で購入したフォルダーに納めただけのものだった。

「我々の顧客の多くはホビーストだ。彼らは自分でコンピュータの特長や仕組みを知るのが好きなんだから一から十まで知らせる必要はないよ」

スコッティの言いぐさだったが、その後スコッティ自身が少しマシなマニュアルを書き、これを受付係兼秘書係兼雑用係のシェリー・リビングストンにタイプさせた。

ある日、外出から戻った私は受付にいたシェリーに呼び止められた。

「トモ、お願いだから時間があるときでいいけど、貴方も手伝ってくれないかな、タイピングを、間に合わないのよ」

シェリーは気の毒そうに私にも手書きされたマニュアルや資料類をタイピングするのを手伝ってくれと哀願したのだ。きっと頼みやすかったか、暇そうにみえたのだろうか。

「勿論だよ。なにしろ私は若い頃貿易商社で朝から晩までタイプを打っていたから任し

未来を見通せるカリスマ 2018/09/11 hagaromo

てくれ」

私もこうした具体的な、それも会社の経営や指針を左右する仕事ではなく、黙々とこなしていく仕事の方が気が楽だったから、時間のある限りシェリーのタイプライターを借りたり、他部署から借りてきてシェリーと並んでタイピングを手伝った。

「タイプ係は君と私だけかい？」

タイプを打ちながらも私は気張らしのつもりで隣にいるシェリーに聞いてみた。

「主にはそうだけど、スコッティもたまにはタイピング手伝ってくれるのよ」

「へえ、それは知らなかったな。ＣＥＯ自らタイプか」

私が意外な顔をしたのかシェリーは続けた。

「いまのアップルは担当部署など名目だけよ。幸いオフィスは全体が見渡せるでしょ。だから誰がなにをしているか、あるいは誰が困っているかが一目瞭然だから、すぐにサポートしてくれるわ。社長とか副社長だなんてまるでいないみたいよ。仕事の上ではスコッティも同僚よね」

シェリーは一息入れてから、

「スティーブは別だけど」

と悪戯っぽく微笑んだ。

未来を見たかりしてい 2018/09/11 hagaromo

タイピングはいつもシェリーの隣でやっていたが、シェリーとお喋りしていると人間関係の相関図を知り得たり、来客する人たちの人物像などが知れて面白いだけでなく為にもなった。

さすがに受付係兼秘書係兼雑用係である。だから時間が空いたりスティーブが外出しているときには進んでシェリーの手伝いをするようになった。

ある日の事、ちょうど休憩時間にサンドイッチが出されたときスコッティが私の隣に座ったのを良い機会だと思い常々思っていたことをいった。

「スコッティ、貴方はタフですね。官僚的でなく自ら駆けずり回っているのをいつも素晴らしいと思っています」

私は正直な気持ちをいった。

「俺は社長だからと書類いじりやサインばかりしているのは性に合わないんだ。君も知ってのとおり我々の会社はまだまだ一般的な尺度からいったら個人企業のレベルだからね。できることは何でもやらないとな」

「個人企業といえばだ」

スコッティはコーヒーを一口飲んでから続けた。

「先日、あのプリント回路基板の故障解決を手伝ってくれているドン・ブルーナーが笑って話してくれたよ。アップルという会社で働いていると知人にいったら(なんだ、変

未来を見る　カリスマ　2018/09/11 hagaromo

な名前の会社だな）と笑われたらしいよ。俺たちの会社はまあそんな会社なんだ」
スコッティは豪快に残りのサンドイッチを頬張りながらニヤッと笑った。
そういえばランディ・ウィギントンは最近のアップルは面白くて仕方がないと話していた。
「トモ、アップルはよい方向に向かっているようだよ。数ヶ月前よりはね」
「なんといったらよいかな。皆が自分の仕事だけに拘っていないという感じで僕が困惑して考え込んでいると必ずだれかが『どうしたランディ』と近寄り声をかけてくれるんだ」
「素敵だなあ」
私の反応に我が意を得たのかランディは
「いまのアップルってさ、なにかデカイことが起こると、それが良いことでも悪いことでも全員が一眼となって働くよね。まあ全社員が２０数名くらいだからできることだけど、僕はあまり大きな会社になって欲しくないなあ」
ランディは片手を上げて挨拶し私の前から離れて行った。
後で振り返ればこの頃が一番アップルらしさというか、起業時のワクワク感も全員に行き渡って会社全体に一体感がある時代だった。
ところでアップルⅡの本格的なリファレンス・マニュアルは主にクリス・エスピノサ

未来を見通せ　カリスマ　2018/09/11 Nagaoka

が非公式に書いたものだった。

当時彼はカリフォルニア大学バークレー校の一年生だったが、彼にリファレンス・マニュアル書きを勧めたのはどうやらジェフ・ラスキンのようだ。

ジェフ・ラスキンといえば後年、あのマッキントッシュ・プロジェクトを立ち上げた人物であり、スティーブ・ジョブズにプロジェクトを乗っ取られたことでも知られているが、そもそも第一回ウエストコースト・コンピュータ・フェアでスティーブ・ジョブズと知り合い、一九七八年早々に自身の会社ごとアップルに買収されてドキュメンテーション作成の仕事を始めていたのだった。

ラスキンはコンピュータのマニュアルは一般の人たちには難し過ぎるからなるべく技術用語を廃し、平坦な言葉、統一した言葉を使って書くべきだと主張していた。そして事実一部のホビーストならともかく今後一層増えるであろう幅広いユーザー層を考えれば分かりやすいドキュメンテーションの存在は急務だった。しかし当時のアップルにはそれを生む余裕がなかった。

ラスキンはたまたま大学の学業に専念するつもりだったクリス・エスピノサにアップルⅡの解説書を書くように薦めたらしい。

俄然やる気を出したクリスだったが、ゲラの段階までアップルを頼ることはなかっ

未来を見せてくれたのだった。

た。

そのゲラを持って久しぶりにアップルを訪れたクリスは、たまたまエントランスにいた私にそれを見せてくれたのだった。

「どこでこれをタイピングしたの」

私の驚きを嬉しそうな笑顔でクリスは説明してくれた。

「いや、大学の寮で書こうと始めたんだけど、いろいろとあってさ、途中で寮を出なければならなくなって大変だったよ。一時は公園のベンチで寝てたもの」

呆れ顔の私にクリスは愉快そうに続けた。

「一応大学の機械で活字に組んだ部分もあるけど、回路図や一部のダンプリストなどはウォズに確認してもらってさ、彼に加筆を頼もうと思ってるんだ」

一部のソースでこのマニュアルは（ウォズが書いた物をスコッティがタイピングした）という話しも広まっている。確かに図版やアセンブラのコードなどはウォズが書き提供したことは間違いないが当時のウォズにこれだけのボリュームのものを書く余裕も気力もなかった。

それに、タイピングのごく一部はこれまたスコッティも手伝ったようだが、実は私もシェリーに請われて手伝っていたのである。

こうして一九七八年二月に発刊された“Apple II Reference Manual”はその表紙の

未来を見たかりしマ 2018/09/11 hagoromo

カラーから「赤本 (Red Book)」と愛されユーザーに珍重された。

ただしこの赤本は、技術解説書でありアップルⅡを入手した際のセッティングなどを説明するガイドブックではないし、現在の視点から見れば決して分かりやすいものではない。また一部には間違いもあるが、ともかくアップルはアップルⅡの出荷から９ヶ月にしてやっとマニュアルらしいマニュアルが提供できたのである。

スティーブ・ウォズニアックは確かにフロッピーディスク・コントローラを極限まで簡素化し、同時にフロッピーディスクからファイルの読み書きが出来るプログラムを書いた。しかしそれはハードウェアに最も近い物理層以下の知識を駆使してなんとか実現しただけで一般ユーザーが使える代物ではなかった。

そしてディック・ヒューストンという人物がコントロール・カードのためにＲＯＭコードを書いた。しかし彼らにもできることはそこまでだった。

もともとウォズはフロッピー・ディスク装置に詳しいわけでもなかったし経験もなかった。だから経営陣に今度はＤＯＳを書いてくれといわれてもいたがこればかりは自信がなかった。

ただし成功の女神はアップルを放ってはおかなかった。

アップルは一九七八年一月二十八日にそれまでより十五倍ほども広い 10260

未来を見通せ　カリスマ2018-09-11 Nagaoka

Bandley Drives, Coupertino に移転した。

勿論事務所内の設計はスティーブ・ジョブズが取り仕切った。

「おい、クリス。おまえは器用だし絵や図面を書くのが巧いのを見込んで頼みがある」

スティーブ・ジョブズはすれ違ったクリス・エスピノサの肩に手を置いて大きな声をだした。

何ごとかとクリスはスティーブに向き合ったが、スティーブ曰く新しい事務所のオフィスレイアウトプランを分かりやすく描いてくれという依頼だった。

「おやすい御用ですよ。なにか下書きみたいなものがあるんですか」

クリスの問いに、

「そんなものはない。俺の頭の中にあるイメージを話すからそれを図面にしろ」

そのクリスが描いたオフィスプランは明解だった。

少々横長の広いスペース中央はトイレとし、左上はテニスコートで右上が製造部門、左下はエンジニアリングを含むソフトウェア技術部門、そして右下はオフィスと４分割されていた。そして誰がどの場所にいるのかも書かれている。

勿論このプランは引越当初の予定で描かれたもので、テニスコートはすぐに商品の在庫置き場に浸食されていった。

ともかくこのレイアウト案による基本的な割り振りはスティープのお気に入りだった

未来を見た方 ＿＿＿＿＿＿＿＿

ようでアップルのオフィスプランの伝統となったばかりか、後のＰＩＸＡＲ社のレイアウトにも取り入れられた。

余談ながらこのバンドレー・ドライブのオフィスのレイアウトを思い出すと当時のスタッフたちの顔がひとりひとり浮かんでくるし、それぞれの仕事の重要性というか期待度というものがわかるような気がする。

例えばソフトウェア技術部門の小間割りだが、スティーブ・ウォズニアックのオフィスの隣には常に相棒とも言える活躍をしていたランディ・ウィギントのオフィスがあった。また技術部門には副社長ロッド・ホルトのオフィスがあった。ただし彼はウェルデル・サンダーと同室だったが、ひとりで一番広いスペースを使っていたのはビル・フェルナンデスだった。無論彼の仕事は各種計測機械類を必要としていたから単に机と椅子があるスペースではなかったが。

またソフトウェア技術部門の大部屋には一九七七年十一月、ロッド・ホルトが採用し、データセンターの６５０２ＢＡＳＩＣソースが消滅した際に力になったクリフ・ヒューストンとディック・ヒューストンの兄弟がいた。

一方、一般オフィス側に目を転じれば、スティーブ・ジョブズとマイク・マークラはそれぞれ広めの個室だったが、ジョブズのオフィスの片隅には私のデスクが用意されていた。

未来を見た。カリスマ2018-09-11 hagoromo

マイク・スコットはゲーリー・マーチンと相部屋だったものの、一日の多くはスティーブ・ジョブズの部屋の隣にある会議室で様々なスタッフたちと打ち合わせをしていたし、社内を歩き回るのを好んでいたからオフィスにはほとんどいなかった。

そしてオフィススペースの中央には受付と秘書を兼ねたあのシェリー・リビングストンら三人が詰めていた。

その他、ランチ・ルームやゼロックスコピー機が設置された部屋などもオフィス側にあった。

ともあれ何が幸いするか分からないのが世の中だ。バンドレー・ドライブの新しい事務所の通り反対側にボブ・シェパードソンの会社（シェパードソン・マイクロシステムズ社)があった。したがって引越直後から双方向の行き来ができていた。

ある日、ウォズが鼻の穴を膨らませ、興奮気味にジョブズのオフィスのドアを叩いた。丁度私はジョブズに呼ばれて話しをしていたが、ウォズの勢いに押され、

「私は外した方がいいかな」

と聞いた。

ウォズは両手を体ごと揺らし、

「いや、トモ、君も一緒に聞いてくれ」

といいながら空いている椅子にどかりと座り込んだ。

未来を見るかなくなる 2018/09/11 hagoromo

「スティーブ、いま僕はボブ、ほら向こうにあるボブ・シェパードソンの会社にフロッピーディスク装置を見せにいったんだよ。先週彼の会社の前でばったり会い、フロッピーディスク装置を見たいといわれたんだ」

ウォズは興奮すると余計に早口になる。大分慣れたとはいえ、彼の話しを瞬時に理解する英語力が私には不足していることをあらためて思い知らされる。

「そこで、フロッピーディスクのファイル管理の話しになったんだけど、ボブの会社にいるポール・ロートンがＤＯＳを書きたい、是非やらせてくれといってるんだよ、スティーブ。交渉は君の役目だ。すぐにでも相談してくれないか」

ジョブズもＤＯＳの重要性を理解していたから早速腰を上げ、早くも２週間後には契約を締結した。

またアップル側の技術者としてはフロッピードライブ開発で苦労してきたランディ・ウィギントンが手伝うことになった。

「やはり餅屋は餅屋だよ、トモ。経験というパワーが大きいとはいえボブのところにはナショナル・セミコンダクターのＩＭＰ１６があったよ。ポールはそれを使っての開発なんだ。何しろウォズはいまだにアセンブラーさえ通さない手作業だからな」

スティーブは遠くを見るように両手の指先を合わしてソファーに横になった。

「スティーブ、それでもウォズは遊んでいるわけではないよ。ポールが打ち出した紙テ

未来を見る方法 ナガリ・ヤマ 2018/09/11 ナガリ・ヤマ

ープをアップルⅡに読み込ませるため、紙テープリーダーのインターフェース作りに没頭してるよ」

私が報告するとスティーブは片手を上げてつぶやいた。

「わかってるよ。ウォズはやはり天才だし我が社の誇りだな」

こうしてアップルⅡ用の最初のＤＯＳはバージョン２・８で完成形となったが、それでは収まりが悪いとＤＯＳ３・０として発表された。

【断章】

コンピュータのデータ記憶媒体にカセットテープを使っていたユーザーにとって１４３ＫＢという現在の感覚ではとても小さな空間とはいえ、その使い勝手の良さは衝撃だった。無論ウォズがいかにがんばってＤｉｓｋⅡを開発したところでＤＯＳがなければ一般ユーザーの手に渡ったところで使い物にならなかった。

データの読み書きが速いことは勿論、データのランダムアクセスが可能になったしファイルの管理が容易になった。そしてゲームも含め大容量のソフトがフロッピーディスクベースで供給されるようになったのだ。

そのＤｉｓｋⅡはアップルⅡの拡張スロットに挿すインターフェースカードと共に購入したがその価格は当時十九万九千円だった。一九八三年のことだったと記憶している。

未来を見たカリスマ 2018/09/11 hagoromo

そして当時のＤＯＳはすでに３・３になっていたが、需要が急速に伸びてきたこともあって日本語のマニュアルが用意されていた。
翻訳は井之上パブリック・リレーションズが行ったものだが、原典の翻訳とはいえいま見ても決して分かりやすい解説書ではない。しかし当時は日本語の資料がまだまだ少なかったことでもあり嬉々として熟読したものだ。

困惑のアップル

スティーブ・ウォズニアク渾身の作品ＤｉｓｋⅡは大評判となりアップルⅡ本体の売上げに大きく貢献する。これまで類を見ない少ない部品点数で構成されたフロッピーディスクドライブはウォズらしい作品だった。
自身も優秀な技術者でホームブリュー・コンピュータ・クラブの名司会者でもあったリー・フェルゼンシュタインも（こいつらとやり合うのは避けた方がよさそうだ）と驚嘆したという。
一九七八年は社員数が六〇人程までに増え、アップルⅡの受注は順調だったからあれほど苦労したキャッシュフローの問題も過去のこととなった。

未来を見るカリスマ 2018/09/11 ハガロマ

ただし企業として現状に甘んじているだけでは未来がないことも明らかだった。
マイク・マークラはこれまでアップルⅡに寄せられた意見や改良すべき点をスコッティと一緒にまとめていた。

「アップルⅡの改良すべき点といっても急務はどれほどあるの」
私はマイクに聞いてみた。
「ユーザーが希望している最も多い要望はテキストに関する制約だろうな」
「大文字だけしか表示できないことや一列あたり四〇文字という制約だね」
私の言葉にマークラは頷いた。
「大文字だけでは表現力が弱いとあのテッド・ネルソンにも皮肉られたしな」
マイクは少々疲れ気味なのか、右手の指で両目を軽く押しながら続けた。
「これまでのようにホビースト相手だったらともかく、ビジネス向けのソフトウェア類を充実させるとなれば小文字表記と八〇カラム仕様は不可欠な機能になるだろうね」
「スティーブはどんな考えなのかな」
私の質問にマークラは眉間に皺を寄せて声を潜めた。
「スティーブはアップルⅡの改良版といった間に合わせでは満足できないというんだ」
「まったく新しい機種を開発したいというのかい」

未来を見たかりんマ 2018/09/11 hagoromo

マークラは厄介なことだと顔に表しながら無言で頷いた。
後日スティーブと二人だけになったとき、その問題を素直にぶつけてみた。
スティーブの話しは良し悪しはともあれ明確だった。
「ひとつの理由はいつまでもアップルⅡに寄りかかっていては駄目になるということだよ」
「先日の会議でとりあえずアップルⅡのビジネスバージョンとアップルⅡ Ｐｌｕｓという改良版を開発するということになったらしいけど」
私の話に被せるようにスティーブは、
「あれはあくまで時間稼ぎ、間に合わせだよ」
と突っぱねるように言い切った。
「それともうひとつ大きな理由があるんだ」
スティーブは両掌の指先を合わせながら私を睨んだ。
「ウォズにいつまでも頼よっていてはこれまたダメだと思うんだ」
私自身は未来から来た男だし二〇一六年までアップルの運命を知っているから驚かないが、社内でこんな意見を吐けば大混乱になるに違いなかった。事実社内においてもアップルがこれだけ成功したのはすべてアップルⅡを開発したウォズがいればこそだという評価が多かったし、特に技術陣とってウォズは神だったからだ。

未来を見たカリスマ 2018/09/11 hagaromo

それがまたジョブズには不満だった。
「なるべく個人的な確執を表に出してはならないと思うけど、トモ、君には正直に話すよ。ウォズは確かに天才だがすでに1人の天才がイノベーションを生み出す時代ではなくなっているし、正直ウォズの閃きでまったく新しい製品を作り出すことは無理なんだ」
私は思わず頷いた。
「俺たちが会社を作ろうとしたのはすでにアップルⅠやアップルⅡのプロトタイプがあったからだ。その可能性にかけただけなんだが今は状況がまったく違う。いつまでもアップルⅡが売れるからと寄りかかっていては会社が危ないんだよ」
それに、と繰り返したスティーブは饒舌になっていた。
「アップルにウォズ以外にも優秀な技術者が多々いることを証明しなければならないんだよ」
力説するスティーブの目を直視しながら私はいった。
「スティーブ、怒らないで聞いてくれるかな」
怪訝な顔をこちらに向けなががらもスティーブは頷いたので私は話しを続けた。
「君には異論があるかも知れないがアップルⅡは設計から開発まですべてウォズの仕事だといわれているからウォズのマシンだ。だから次のマシンは君自身の考えるコンセプ

未来を垣間見たカリスマ20180911 hagoromo

トで設計した新しいマシンを作りたいのかな」

スティーブは意外にも怒るどころか体を起こしながら、表情を柔らげた。

「実はそうなんだよ、トモ。ただし俺でもストレートにそうそう話しを切り出せる相手ばかりではないからな。さすがにトモだ」

変なところで誉められたが、スティーブはウォズに依存せず、自分が考えうる最良のコンピュータ作りを考えていたのだった。

ただしまったく新しい製品開発を短期間で望むのはさすがに当時の状況では無理な話でもあったからアップルⅡのビジネスバージョンであり、かつアップルⅡのソフトウェアとも互換性を持つといった折衷案でアップルⅢという製品開発計画がスタートすることになった。

それでもビジネスの苦労はスティーブ・ジョブズにとって発憤材料になるものだったが、自業自得だとはいえスティーブを打ちのめす出来事が生じた。

一九七八年五月十七日、オレゴン州の林檎農園に引っ込んでいたクリスアン・ブレナンが女の子を産んだのだ。

スティーブが自分の子供ではないと必死に抵抗した子だ。

いかに混乱していたとはいえスティーブの言動は常軌を逸していた。自分の子供では

未来を見た　カリスマ　2018/09/11 hagaromo

ないと拒みつつ、わざわざ子供の顔を見に行き女の子にリサ（Ｌｉｓａ）という名前をつけたりするし、自発的に養育費を払ったかと思えばすぐに止めてしまうという暴挙としか思えない言動ばかりが目立った。

クリスアンが示談の話しを持ち込んできたとき、マイク・マークラが口を出したのが気に障ったのかスティーブは示談自体を蹴った。

マークラは、

「トモ、忠告しておくよ。この件には君とて立ち入らないことだ」

深いため息とともにマークラは自分の席に戻っていった。

私もこちらからあえて子供の話やクリスアンの話題は出さないように注意していたが、あるときスティーブは暗い顔をして一人ごとのように呟いたことがある。

「俺の人生の中でこれほど思うようにならず無力な出来事はないよ」

しかし私とてこの件に関してはスティーブの言動にひとつでも同情や共感を覚えたことはなかった。

当時はＤＮＡ鑑定がなかった時代だが、父子鑑定テストを承諾し、その結果スティーブがリサの父親である可能性は９４・９７％と出た。それでもスティーブは違うといいはり、定期的な養育費の支払いを拒んだだけでなく（父親である可能性なら、アメリカ人男性の２８％にある）と根拠もない虚言を繰り返していた。

未来を垣間見たカリスマ20180911 hagaromo

ある意味、彼の人生はすべて自分主導で歩んできたともいえる。大学も自ら選んだし、自身の意志で中退もした。ウォズを誘って起業し、マークラやレジスといったその道のプロも懐に引きいれた。

いろいろあったがそれらは皆スティーブ自身の意志のなせる業だった。しかし生まれた子供の存在は動かざる事実だったものの、彼にとって子供を認知することは自分の存在を否定することに等しかったのかも知れない。

この頃、スティーブを多少でもコントロールできたのはロッド・ホルトと私だけだったように思う。

特にホルトは仕事の面でもプライベートな面も時に父親、時に兄のようにスティーブの相談相手にのなっていたし、私はといえば愚痴のはけ口だった。ただし口には出さないもののスティーブにとって私はどこか怖い存在でもあったのかも知れない。何しろ自分の将来、未来がすべて分かっているただ一人の人間だったからだ。

スティーブはクリスアンが出産したと聞いたとき、私に対して普段は決していわないことをボソッと口にした。

「トモ、俺の未来はどうなる。俺は駄目になってしまうのか」

私などには思いもよらない感情が彼の中に渦巻いていたのだろうが、彼は無性に自分でも正体が分からないものに恐怖を感じていたようだ。

未来を見る方法 ナガロマ 2018/09/11 nagoromo

あまりに打ちのめされている彼の肩に手を置き私はいった。
「スティーブ、余計な事はいわないよ。ただただ正しいことを心がければ君はいつまでも素敵なスティーブだよ」
スティーブ・ジョブズはプライベートの混乱を覆い隠すようにアップルⅢの開発に口を出すようになるが、ケースを自分でデザインすると主張したのはともかく、組み込むべきものが入らないサイズを要求しただけでなく、ここでも冷却ファンは罪悪だとしてその利用を認めなかった。
その他、日々主張が変わることでアップルⅢのプロダクトは混乱を極めることになる。しかしそれはしばらく後になってからの話だ。

一九七九年に入るとアップルが一段と成長・成功するための環境が整ってきた。その第一はパソコン初の表計算ソフト「ビジカルク」の登場だ。アップルⅡにとって当初から組み込まれていたＢＡＳＩＣ言語によるプログラミング機能および拡張スロットの使いやすさ、そしてＤｉｓｋⅡというフロッピーディスクの普及とこのビジカルクはあたかもパソコンの三種の神器とでも呼ぶべき組合せとなった。
ところでスティーブ・ジョブズという男と丸二年の間、それこそ衣食を共にする生活を送ってきた私だが、それまで書籍や映画といったメディアから受けていた印象とはか

未来を見る方向 Kazuki Sakamoto

なり違うことがわかってきた。

確かにGood Jobsとして付き合っているかと思えばいきなりBad Jobsに変貌するという例も数多く見てきたが、スタッフらの多くもスティーブの言動には慣れているのかクソ野郎呼ばわりされてもあまり気にかけない様子だった。

またスティーブ・ジョブズはアップルの創業者であるという点で尊敬もされ会社の顔となっていったが、社員たちはスティーブが会社のトップとは認識していなかった。あくまでスコッティとマークラが経営を取り仕切っているという認識だったのだ。

ただし口うるさいスティーブだったが、私に対しては周りが不思議に思うほど真摯な対応をとっていた。

そんなスティーブだが、機嫌が悪いと自分からスタッフを誘ったイタリアレストランで支払もせずに帰ってしまうこともあったし、逆に機嫌がよいときにはやけに気前がよかった。

例えばアップルに貢献してくれるサポーターや販売代理店の代表、あるいは著名人たちにはアップルⅡを無償提供することも度々あったし、そこまではともかく卸値で直販するといった場合もあった。

アップルⅡが順調に出荷されるようになったある日、ダン・フィルストラという男がボストンでソフトウェ会社を設立したことを知ったスティーブはアップルⅡを原価で提

未来を見るカリスマ 2018/09/11 hagaromo

供したことがあった。スティーブに特別思うところがあったはずもなく、たまたま機嫌がよかっただけなのかも知れないが。ただし後で聞いたとろによれば、アップルⅡがより成功するためにはソフトウェアの充実が重要であり、キラーアプリケーションの登場が急務だといった私の持論が記憶に残っていたからだという。

「別に深い意味はなかったよ。ただし以前トモが言っただろう。ソフトウェアが重要だってさ」

「確かそんな話しをしたなあ」

スティーブは遅い昼飯のつもりなのか、冷えたピザを頬張りながら話した。

「その、ダンといったかな、奴がソフトウェア会社を設立しアップルⅡ向けのソフトも作りたいと言っていることを聞いて多少なりとも便宜を図っただけさ」

しかし偶然の歯車はアップルのより成功へとギアを入れ始めた。とはいえスティーブをはじめ誰もがその足音を聞き逃していたともいえる。

一九七九年の年明け早々、そのダン・フィルストラが自社(パーソナルソフトウェア社)開発のソフトウェアを持参しデモをさせてくれとやってきた。

対応したのはマイク・マークラ、スティーブ・ジョブズ、ロッド・ホルトそして私の4人だった。

未来を見た方 Hagaroma

フィルストラは挨拶もそこそこにアップルⅡを格安で売ってくれた礼を言い始めたがスティーブはそれを両手で制しながら聞いた。

「そのソフトウェアの名はなんていうんだい」

大きめな眼鏡のフレームを指で押し上げながらフィルストラは、

「”Calculedger”と名付けましたが、発売までに変えるかも知れません」

と答えた。

スティーブは躊躇せず、

「ありふれた名だな。もう少し印象深い名の方がいいぞ」

といったが、隣に座っていたマイクがスティーブの膝に手を置きこれまた制止しつつ(アップルⅡで開発したのか)と聞いた。

「ＡｐｐｌｅＳｏｆｔ ＢＡＳＩＣで開発したのでアップルⅡ専用ということになります」

フィルストラは答えながら、机上に用意されたＤｉｓｋⅡに持参のフロッピーディスケットをセットし、隣にあるアップルⅡの電源を入れた。

ＤｉｓｋⅡは(カタカタ…キュルキュル…)と小気味の良い音を立てて「Calculedger」を起動した。

無論同席した私は眼前にあるソフトウェアが後に「ビジカルク」と名を変え、アップ

未来を見る方 カリスマ 2018/09/11 hagaromo

ルⅡの販売台数を大きく後押しするキラーアプリケーションとなることを熟知していたが、変な横やりは歴史の必然性を変えることになると考え口出しはしないことに決めていた。私がどうのこうのと言わなくても「ビジカルク」は成功するわけだしアップルが大きな躓きをするわけでもないのだから。

ところで「Calculedger」は当時ハーバード・ビジネス・スクールの学生ダニエル・ブルックリンと友人のマサチューセッツ工科大学に在籍していたロバート・フランクストンが自身らの会社であるソフトウェア・アーツ社で開発したものだった。

話は前後するが、プルックリンは自身のアイデアをハーバード大学の財務学教授に相談したが、教授は大型コンピュータの時分割システムが存在するのにマイコン用のソフトウェアなど売れないだろうと笑いながらも以前自分の担当学生だったパーソナルソフトウェア社のフィルストラを紹介したのだった。

ブルックリンに会い、彼のアイデアが気に入ったフィルストラは自分の手元にあったアップルⅡをブルックリンとフランクストンに貸し出した。

後から聞いたところによれば、開発機材購入の余裕がなかったブルックリンたちがフィルストラにコンピュータの貸出を依頼したとき、他機種はすでに貸出済みでフィルストラの手元にはアップルⅡしか残っていなかったという。

未来を見たカリスマ 2018/09/11 hagoromo

こうして偶然の女神はアップルに微笑んだが、マイクにしてもスティーブにしても「Calculedger」が示す可能性と未来を感じ取ることはできなかった。

「Calculedger」の一番重要な機能は縦横の表組みになっている数値の一箇所を変更するとその値に関連する合計覧なども瞬時に計算し直してくれる点にあった。しかしスティーブらはその名称に捕らわれたのか、単なる計算プログラムだと思い込んだようだ。

特にマークラは自身が開発した小切手帳管理プログラムをフィルストラに見せるなど場違いの言動も目立った。

しかし別れ際にマイクは愛想良く、

「プログラミングが完成したらまた見せてくれないか」

とフィルストラに声をかけた。

私がため息交じりに自分の席に戻ろうとしたときロッド・ホルトが追いかけてきて呼び止められた。

ホルトは愛用のキャメルに火を点けながら私に聞いた。

「トモ、君はずっと黙っていたがどう思う、あのソフトウェアは」

私は正直に、

未来を見るカリスマ 2018.09.11 hagaromo

「みんな頭がいいのになぜソフトウェアの価値が分からないのかなあ」
と答え、ひと呼吸入れて皆の反応の弱さに不満を呈した。
「あれはまさしく表計算アプリケーションなんだけどねえ」
「なるほど。俺もプログラミングはできるけど根っからのハード屋なんだな。人の書いたプログラムの価値を推し量るのは難しいや」
とホルトは自嘲気味にいいながら背を向けた。
「Calculedger」は「ビジカルク」と名をあらため、同年の１０月に売り出されると大きな反響を得てアップルⅡの売上げが明らかに伸び始めた。
アップルで一番喜んだのはスコッティだった。
昼どきに一緒になったときもこぼれるような笑顔だった。
「なにしろビジカルクを使いたいのでアップルⅡの出荷を急いでくれと催促が凄いんだよ、トモ」
とはいえさすがにスコッティは喜んでいるだけではなく、したたかな面も見せた。
フィルストラがソフトウェアのデモをするため販売店回りをする際、アップルの営業を同行させ、手伝いと共にその場でアップルⅡの注文を受けさせた。
パーソナルソフトウェア社はその後ビジカルクの好調さに肖ろうと社名をビジコープ社とあらため販売に攻勢をかけた。しかし後から登場したマルチプランやロータス１・

未来を見たカリスマ 2018/09/11 hagaromo

２・３といった二番煎じのソフトウェアに次第に押されていく。
当時ソフトウェアは著作権主張ができなかったこともあり、後発のそれらに異議を申し立て、権利主張するすべがなかったことは時代の不運というしかなかった。

一九七九年の秋頃だったと記憶しているが、私がそろそろ寝ようと身支度を始めたときドアがノックされた。スティーブに違いない。
「どうぞ、まだ起きてるよ」
私の声が響いているうちにドアが勢いよく開かれた。
「どうしたのスティーブ」
どこか思い詰めたようなスティーブ・ジョブズの表情を見て私は聞いた。
「トモ、遅くに済まないがワインがあったら一杯くれないか」
そういいながらソファーにどっかと座り込んで足を伸ばした。
私は冷蔵庫から冷やしたカルフォルニアワインのボトルを取り出して、
「スティーブ、君は赤の方がよかったな」
と聞きながら返事を待たずに栓を抜いていた。
ワイングラスを持ったままスティーブは少しの間凍り付いたように動かなかった。
「どうしたのスティーブ」

未来を見た方 ハッピー 2018/09/11 hagaromo

私の再度の問いかけにハッと我に返ったスティーブは一気にグラスを飲み干した。
「トモ，遅くに済まない」
こちらも同じことを繰り返してスティーブは、らしくもない話し方でボソッと口を開いた。
「変なんだよ、トモ。これは君にも関係することかと思って飛んできたんだ」
「実に腑に落ちないことが起こってるんだ」
どうやらスティーブの口ぶりからは仕事の話しではないらしい。もしかしたらクリスアン・ブレナンとその子供の話かと私は正直身構えたが、どうもそうではないようだ。
「昨日、オフィスの引き出しの奥からこうした数枚の写真が出てきたんだ」
彼は脱いだジャケットの内ポケットから封筒に入っていた写真を広げた。その中には見覚えのある風景が写っていた。
「これって、もしかしたら日本の秋葉原の写真かい。いや、君が写っているから違うんだろうな」
私の訝しい顔を凝視しながらスティーブも考え込んでいるようだ。
しばらくして、
「いや、どうやら俺が（どうやら）というのも変だがその秋葉原なんだよ」
「俺って気がふれてしまったのかな、トモ」

未来を見たかりスマ 2018/09/11 hagoromo

スティーブは哀願するように再度私に視線を向けた。
「どうにも君が何で困惑しているのか、いまひとつよく分からないからゆっくりと説明してよ」
私の物言いに頷きながらスティーブは話し出した。
「トモ、俺はどうやら、この半年の間に日本に行ったらしいんだ」
そのスティーブの珍しくも動揺した態度と変な話しっぷりに私は思わず吹き出した。
「ゴメンゴメン。これまでこんな君を見た事がないからね」
私は言い訳をしながら、スティーブがまだ手にしているグラスにワインを注いだ。
「いや、こんな話しはトモ、君にしか話せないよ」
私の無言の促しにスティーブは続けた。
「写真を見るまで覚えがまったくなかったことなんだ。俺ってまだ数ヶ月前のことを忘れるようなボケではないつもりだが、何かが変なんだ。
写真を見た瞬間俺は初めて日本に行ったことを思い出した…いや、忘れていたんではないんだ。初めて知ったというべきなのかな」
スティーブの話を要約すると。彼は日本に行ってきたことを（知らなかった）のだという。忘れていたことを思い出したのではなく写真を見てそれが事実だったことを初め

未来を見る方法 ＿＿＿＿＿＿＿＿

て（分かった）のだという。

そもそも、もし自分が日本へ出張が決まったとするなら私に言わないはずはないし、必ず一緒に行こうと誘ったはずだと彼は言う。しかし日本に行くことも、戻ったこともまったく記憶になくしたがって私にその日本行きのことを話したこともないはずだという。

「いいかいトモ、おかしいんだ。日本に行ったのなら社内の数人とも話題になるだろうし君が知らないはずはない。それにだ」

スティーブは困惑というより恐怖の表情を示しながら、

「俺自身の認識自体、日本に行った記憶もなければ、大体がそのために数日の休みを取ったはずもないんだよ」

「私も君が数日会社を休めば分からないはずはないよ」

私の確信に満ちた言い方に強く頷きながら、

「だろう？ 俺にもその実感はまったくなかったし会社に出張の申請をした形跡もないんだ。だけどこの写真は本物だと俺の心が訴えるんだよ」

「スティーブ、怒るなよ。この写真は合成ということはないのかい。誰かが悪戯で作ったフェイクだとか」

スティーブは２杯目のワインを飲み干してやっと落ち着いてきた。

未来を見つめたかりスマ 2018/09/11 hagoromo

「俺もそう思ってさ、先ほど日本の知人、ここに一緒に写っている奴に電話をしてみたんだ。覚えはなかったけど確実に日本で世話になったことを思い出した…いや、実感として分かったからさ」

思わず私はクスッと笑ってしまった。

「しかしだトモ、俺だって(私はお前と会ったことってあったか)などとは聞けないよ。だから忘れたふりをしてさ、秋葉原に行ったとき、ＴＥＡＣのオーディオを見にいった店名を教えてくれといってみたんだ」

「しかしスティーブ、相手の人が(貴方なんか知らない)といったらどうするつもりだったの」

私のいささかリラックスした物言いにスティーブも乗ってきたのか、

「いや、正直ドキドキものだったけど受話器からは間違いなく聞き覚えのある声で(スティーブ・ジョブズさん、その節はありがとうございました。秋葉原をご案内できて光栄でした)と言われたから、これは間違いないなと思ってさ」

真顔になったスティーブは、

「いいかい、トモ。確かに俺は日本に行き秋葉原の散策を楽しんだんだ。実感はいまだにないが、記憶というものは再構築されるという説もあるらしいよな。写真を見て、俺を秋葉原へ案内してくれた日本のパソコン雑誌の編集長の声を聞いたとき、記憶が宿っ

未来を見たかりしマ 2018/09/11 hagaromo

た感じなんだ。不完全だけどね」

「……」

「しかし、トモ。俺は、この俺はアップルを休んではいないんだ。記録もそうなっている。だとすれば」

「もし夢でないのなら君が2人いたということになるね」

私がスティーブの言葉を引き継いでいうと彼は大きなため息と共に天井を仰いだ。

私は思いついたことをいった。スティーブの動揺を糺したかったからだしその事実はまぎれもなく私の存在が引き起こした矛盾であり、時空の狭間で起こったねじれのように思えたからだ。

「スティーブ、この件は二〇一六年の日本からこの時代にタイムスリップした私の存在が引き起こしたことに間違いないと思うよ」

私はワインをひと舐めし、

「どうやら歴史というか時空という奴は私にまだ日本へ接触されたくないのかも知れないね。しかし君は仕事で日本に行かなければならない。ならば必ず私も一緒にということになる。それでは神は…いや比喩だけどね…困るので、君と私の日常はそのままに君自身を、この場合はパラレルワードなのかな、わずかに違う世界にいる君を日本へ行かせたのかも知れないね」

未来を見る人 カリフォルニア 20180911 hagaromo

私は窓のカーテンを引きあけた。
満点の星空はどのような不思議が起こってもおかしくないと示唆しているように思えた。
「そうした意味でいえば、君もこのカリフォルニアの世界でほんの数日間タイムスリップしたことになるのかな。というより君が写真を見た瞬間に歴史の修正・修復が起こり、君の記憶にもう一人別世界の君の記憶が触れ合ったのかな」
「なるほど、まだ半信半疑だがそんな風に考えないと俺が狂ってしまったことになるよ。トモ、君の秘密を知っているのは俺だけだ。だからこそ時空の矛盾は君と俺しか認識できないのかな」
スティーブにやっと笑顔が戻ってきた。
「それで、スティーブ。君は写真を見て日本で過ごしたことを思い出したのかい」
私はいつ戻れるかもしれない懐かしい日本のことを僅かでも知りたくてスティーブに聞いた。なにしろ一九七九年といえば、私は結婚して二年目だった。そして小さな貿易商社に勤務し、趣味で富士通のワンボードマイコンやコモドール社のＰＥＴ２００１というオールインワンのパソコンを楽しんでいた時期だ。
正直、女房がどうしているかが心配でそれを思うと胸が張り裂けそうだった。しかしもしパラレルワールドだとしてスティーブがカリフォルニアと日本の秋葉原に同時に存

未来を見た。ガリスマ2018-09-11 hagoromo

在したとするなら、私自身だって二〇一九年(タイムスリップから三年経過したから)と一九七九年の今に同時に存在しているのかも知れない。

そうであれば女房と未来の私は何の支障もなく平凡な毎日を送っているに違いない。そうであって欲しいと私は思わずワイングラスをテーブルに置き、両手を合わせた。

「どうしたトモ」

スティーブが沈思した私を訝しがって声を出した。

「君流に考えるなら、どうやらここにいる俺は日本には行ってなく、単に記憶を授かっただけかも知れないが、いまの俺も実体験としていくつかのことは思い出せるんだ。おかしなことに仕事の話しはあまり知らないんだが」

笑いながらスティーブは秋葉原での出来事を話し出した。

「先ほどもいったが、案内してくれたのはパソコンの月刊誌の編集長だったよ。アスキーっていう雑誌だったな」

「その人だったら私も知ってるよ」

懐かしい顔が浮かんだ。

スティーブは編集長に案内され、秋葉原を堪能したという。

時代は七十年代後半の時代だったから、スティーブが歩き回っても気づく人はまずい

未来を見つめるように虚ろな表情をしたがすぐにいつもの活発さを取り戻した。

なかった。そしてスティーブは熱心なオーディオマニアでありＴＥＡＣのオープンデッキを愛用していたのでラジオセンター二階にあった同機のパーツ類を販売しているジャンク屋のような店にまで立ち寄ったらしい。

「トモ、正直驚いたよ。電子部品やオーディオパーツといった類はアメリカが本場だと思っていたけどあの雰囲気と品揃えは特別だな。少年の頃、よく親父にエレクトロニクス部品の店に連れていかれたしああいうのは好きなんだ」

一息いれて、

「だんだん記憶がはっきりしてきたけどラジオセンターには驚いたよ。確かに店舗は綺麗ではないし天井が低くてさ、俺は頭をかばいながら屈んで見て回ったなあ。そうそう電話をかけたとき編集長に聞いて思い出したんだが俺たちが入ったのは菊池無線電機とか内田ラジオといった店だったっけ」

「ＴＥＡＣのパーツはほとんど手に入らないので内田ラジオという店、小さな店舗だが俺には光って見えたな」

スティーブは遠くを見つめるように虚ろな表情をしたがすぐにいつもの活発さを取り戻した。

「俺は最初そのラジオセンターというのがいわゆる量販店の名だと思ったんだ。しかし

未来を見た。ガリスマ2018-09-11 hagaromo

店内を回って気がついたが小さなショップが集まった集合ビルなんだなあれは。同じような商品、競合する商品を販売している店がずらりと並んでいることを知って本当に驚いたよ」

私はたたみ込んだ。

「で、スティーブ、君はなにか買ったのかい」

スティーブは少しずつ記憶が膨らんでいくことを楽しんでいるかのようだった。

「そうそう、俺が土産代わりに買ったのは超小型平面スピーカーだったよ。知らないメーカー製だったがデモを聴かせてもらったけど小型の割には迫力あるサウンドが出てたよ」

スティーブは喉が渇いたのか、目でワインがもっと欲しいと催促したので私は2本目のボトルを持ち出して栓を開けた。スティーブは上手そうにグラスに並々と注いだワインを喉に流し込んで話しを続けた。

「そうだ。確かカイテンズシという店で寿司を食べたな。寿司と蕎麦はベジタリアンの俺も魅惑されたよ。それに、ここだけの話だが日本滞在中に女の友達もできたよ」

スティープはウィンクしながら話しは尽きることがなかった。

ともあれスティーブは同じ時期にこのカリフォルニアと日本に同時に存在したことに

なる。そんなことがあり得るのかどうか、私などがいくら考えても分かるはずもなかった。ただし確実なことはスティーブ・ジョブズが嘘や虚言をいうはずもなかったし夢でもなかった。だから彼が大きな興味を持って日本を訪れたこと、秋葉原を嬉々として歩き回ったことは現実だったのだ。

そもそも彼が日本を意識しだしたのは禅だったという。リード大学在学中に鈴木俊隆著「禅マインド・ビギナーズ・マインド」という本に影響されたからだ。そして鈴木が開いたロスアルトスの禅センターを訪ねたときに乙川(知野)弘文と出会い師と仰ぐようになる。それは私がタイムワープした一九七六年の前年だったらしい。

この出来事が私とスティーブの運命をより複雑に交差させていくことになったし、私が未来からタイムワープした人間であることをあらためてスティーブ・ジョブズに知らしめる出来事となった。

未来を見たカリスマ 2018/09/11 hagaromo

第四章　成長と混乱

ＰＡＲＣ訪問

アップルは正式な株式上場前に何度か資金調達を実施した。

一九七九年八月にはＬ・Ｆ・ロスチャイルドやゼロックスそしてエジプト系投資家などに対してだ。うちゼロックス社には十万株を売却した。このときの資金調達はかなりアップル側が強気で（売ってあげる）という感じが強かった。

ともあれゼロックスに恩を売った成果が３か月後のゼロックス社のパロアルト研究所（ＰＡＲＣ）訪問に繋がったとみるべきだろう。このＰＡＲＣ訪問には多くの伝説が生まれたが、この訪問をきっかけにスティーブ・ジョブズはＧＵＩを持つパソコン開発に意欲を持ち、それが後年 リサやマッキントッシュとして開花することになる。

一九七九年十二月、スティーブ・ジョブズはゼロックス社のパロアルト研究所を訪れた。

しかしスティーブは当初、その訪問にあまり乗り気ではなかった。

未来を見通せ!!

「トモ、君も一緒に来てくれないか。ジェフ・ラスキンはともかくビル・アトキンソンが五月蠅く勧めるんだが、俺は気が乗らないんだよ」

スティーブ・ジョブズはアップルの業績のよさや先の資金調達成功もあって強気だった。

「俺の信条だが、どうせ大企業なぞに革新的なものなど作れるはずはないし行くだけ無駄だと思うんだ」

「でも、君は行こうとしているんだろう」

私は悪戯っぽくスティーブにいった。

「いや、社内の奴らの勧めだけならその気はなかったが、マークラとスコッティいわくゼロックスの幹部が是非俺に見学に来てほしいという依頼が続いているというんだ」

スティーブはうんざりした顔をしながら、

「トモ、君も噂を聞いたかも知れんがゼロックスへの今回の株式売却で埒もない噂が立ったらしいんだ」

スティーブは吐き捨てるようにいった。

「知ってるよ。ゼロックスに対する株式売却はゼロックスがアップルの買収を考えてのことだ、という噂だね」

私は先ほどダン・コトケが持ってきてくれたコーラーの瓶をあけながら答えた。

未来を見た方がいいぜ。飲み物は水以外なら生ジュースに限るよ」
スティーブはオレンジジュースのグラスを手にしながらも私の話に頷いた。
「そうなんだ。ここでだんまりを決めているのではなく俺たちがＰＡＲＣを乗っ取るくらいの気持ちで一度訪問してくれとマークラも五月蠅いんだよ。そうした世間的な付き合いをこなすのも俺の仕事だといいやがる」
ジュースを喉に流し込みスティーブは、
「なあ、トモ。俺は半分冗談のつもりで言ったんだが君は真顔だな」
私は今回の訪問がアップルの未来にとっていかに重要な意味をもっているのかを知っているから自然に真剣な表情になったのか、普段の私とは微妙な違いにスティーブは気がついたのかも知れない。
「いや、君との約束だから未来のことへの明言は避けるけど、行った方がいいよ」
真面目な顔でいった私を真正面からスティーブはあの鋭い視線でしばらく見つめていたが、
「わかった。君がそういうのなら何かあるのかも知れないな。一緒に行ってみようぜ」
「後で日時は知らせるよ」
そういいながらスティーブは席を立った。

未来を見たカリスマ 2018/09/11 hagaromo

結局スティーブに同行したのはビル・アトキンソン、ジェフ・ラスキン、ジョン・カウチそして私の四人だった。

スティーブが人選した結果だが、ラスキンはそもそもの言い出しっぺでＰＡＲＣに詳しいから、そしてアトキンソンはソフトウェアの、カウチはハードウェアの責任者として選ばれたらしい。

こうして我々はＰＡＲＣに乗り込んだが、後で聞いたところによればビル・アトキンソンは今回の訪問に際してアラン・ケイの論文を始めとして多くの資料に目を通し勉強していたらしい。

我々五人がＰＡＲＣのシンプルなエントランスを入るとアデル・ゴールドバーグ女史がＡｌｔｏが置かれているロビーまで案内してくれた。

スティーブは意識的なのか、あるいは緊張していたのか見るからに態度が横柄でスーツこそ着ていたものの両手をズボンのポケットに突っ込んだまま握手もしなかった。

我々が通されたデモルームにはラリー・テスラーが穏やかな表情で待っていた。

型どおりの挨拶が済んだ後、早速アデル・ゴールドバーグが一抱えもある円形のハードディスク装置を持って現れた。眼前には縦型のディスプレイにキーボードとマウスお

未来を見た者 Alto 2018/09/11 hagoromo

よびピアノの鍵盤の様な装置が置かれ、設置台の下にはハードディスク装置とＡｌｔｏコンピュータの心臓部、すなわちハードウェアが隠されていた。

私は二〇一六年からタイムワープした人間だし、一九九二年に富士ゼロックスの展示会においてＡｌｔｏの実機を見ていたから、それぞれのハードウェアの構成が何を意味するかの理解はあったが、ジェフ・ラスキン以外はＡｌｔｏの実物を見た者はいなかったようだ。

電源が投入されてゴールドバーグがデモを始めるとテスラーがそのオペレーションとモニター上の動きをひとつひとつ説明してくれた。

モニターが明るくなった途端にスティーブの顔色が変わった。

カウチが、

「モニターの背景が白いぞ。それに表示文字が黒い」

アトキンソンが、

「紙とペンを模しているんだ」

独り言のようにつぶやいたが、スティーブは無言だった。

ジェフ・ラスキンは満足そうに微笑んでいる。

テスラーがＡｌｔｏ開発のコンセプトを簡単に説明した後、ワードプロセッサや図形がマウスというポインティングデバイス操作で直感的な移動や拡大縮小するデモが行わ

未来を見た方はこちら 2018/09/11 hagoromo

れた。
一通りの説明の後に質疑応答の時間がとられたが、質問のほとんどはビル・アトキンソンだった。
無理もない、なにが起こっているかは皆わかったが、これほどのコンピュータを見た事がなかったからカウチもスティーブも無言を通すしかなかった。
スティーブはもっぱらボタンが三つ並んいるマウスを手にして仔細に眺めているだけだった。
予め説明されていた時間が過ぎた。
ラリー・テスラーとジェフ・ラスキンが握手を交わし、ビル・アトキンソンとジョン・カウチも如才ない挨拶をしてＰＡＲＣを後にしたが、スティーブは終始無言だった。アトキンソンが感想を聞いても生返事をするだけだった。

スティーブは自分のオフィスに戻ってすぐに電話の受話器をとった。
「どこにかけるの」
いま戻ったばかりでもあり私の意外だという声にかぶせるように、
「ゼロックスの重役だよ」
そういったスティーブは電話に出た相手に矢継ぎ早に、それも少々無礼にも思う喋り方

未来を見たカリスマ 2018/09/11 hagaromo

で話し出した。

「ああ、スティーブだ。アップルのスティーブ・ジョブズだが、ああそうだ。いまＰＡＲＣから戻ったところだ。ただし納得できないことがあるんで電話したんだ」

「そうだ。君がいう、そうだ、そうしたデモを見せられたが、技術的に見るべき点もあったがもっとましなデモがあるはずだ。俺に隠し事があるというなら君のところとはこれっきりになるぞ」

脅すようにスティーブは続けた。

スティーブはゼロックスの重役に電話して今日見たことを話しつつ、おざなりではなくもっと本格的な機能説明を迫ったのだ。

スティーブは先ほど見せられたＡｌｔｏおよびＳｍａｌｌｔａｌｋのデモにはもっともっと奥が深いものが隠されていると直感したようだ。

「うわべだけでなく、すべてを見せてくれ。そもそも訪問しろといったのはそちらだろう。ＯＫ。分かった、間違いないように手配を頼むぞ」

天下のゼロックス社の役員にアップルのスタッフへ命令するかのような話し方にスティーブをよく知っている私も唖然としたが、受話器をおいたスティーブはニッコリと微笑んで、

「これでよし」

未来を見たかりしゃ 2018/09/11 hagoromo

と呟いた。

ＰＡＲＣのＡｌｔｏおよびＳｍａｌｌｔａｌｋのデモには２つのバージョンがあったという。

特に審査に通ったＶＩＰ向けのものと一般に見せるものとである。

明らかに一度目は、誰にも見せる式の、いわゆる無害なデモを我々は見たに違いない。スティーブは、そのとき自分たちに与えられなかった情報がどれほど多いかを悟ったらしい。そしてたった２日後に再び大人数を連れてＰＡＲＣを訪問することになった。

今度はマイク・スコットやスティーブ・ウォズニアックも一緒だったしリサプロジェクトとしてスタートしたばかりの技術者数人も同行した。

二度目の訪問時、エントランスで待ち受けていたのはＰＡＲＣのハロルド・ホールら２人だったが、応接室で前回より長い時間我々は待たされた。

スティーブたちは準備に必要な時間だろと気にも留めなかったが、私はデモ担当のアデル・ゴールドバーグが「今日のデモなど聞いていない」と主張し、デモすることを一時拒否したことを知っていたからその情景を想像して楽しんでいた。無論その結末も知っていたから安心して待っていられたが。

未来を見たカリスマ 2018/09/11 hagoromo

アデル・ゴールドバーグはアップル社の能力と意図を知るよしもなかったが、技術者の本能と自身らが開発し育てたＡｌｔｏおよびＳｍａｌｌｔａｌｋの重要さと大切さを知っており、特に優秀なプログラマーにそれらを見せるリスクを恐れていたのだ。

彼女は何とかしてゼロックス社自身にＡｌｔｏとＳｍａｌｌｔａｌｋを正当に評価させ、これを世に出したいと考えていたらしい。

しかし今回の訪問に際してゼロックス本社からは（すべてを見せろ）という指示がなされていた。これにはアデルも従うしかなく顔を真っ赤にして我々の前に現れた。

一度目は終始無言で通したスティーブ・ジョブズだったが、この二度目の訪問では多々感嘆の声を出し、最後には「この会社はなんでこいつを発売しないんだ」と声を荒げた。

我々に強い印象を残したデモのひとつはＡｌｔｏの画面上のテキストが一行ごとにスクロールすることだったがそれを見たスティーブが、

「これがドットごとに紙みたいに動いたらいいのに」

といったときのことだ。

デモをしていたダン・インガルスは（おちゃのこさいさいです）といいながら、Ａｌｔｏを止めずに実現したときにはアップルの全員が呆然となった。

その時、私は部屋の隅に我々が驚いている様子を楽しんでいるかのように立っている

未来を見たカリスマ 2018/09/11 hagoromo

人物に気がついた。
皆に気づかれないよう静かに立ち上がって私はその人物の前までいき、
「はじめまして、トモヒコ・カガヤといいます。アラン・ケイさんですね」
「お会いできて光栄です」
と右手を出した。
私の手を両手でしっかりと握り返しながらアラン・ケイは私の顔を正面から見つめ、
「失礼だが、君もアップルの社員なのかい」
と聞いた。
「そうですが、なぜですか」
私の質問に彼は（僕には君だけ体から発するサウンドが違うように思えたんでね）と笑った。
私はそのとき、彼がミュージシャンでもあることを思い出した。
アラン・ケイは続けて、
「僕にはスティーブ・ジョブズやアップルのことより君の秘密に興味があるよ」
「楽しんでくれ。また会おう」
ウィンクしながら彼は奥に引っ込んだ。
気がついたら私はうっすらと汗をかいていたがそれは暖房のせいばかりではなかっ

未来を見たカリスマ 2018/09/11 hagoromo

た。
もしかしたらアラン・ケイは持ち前の鋭い観察力と直感力で私が現代(一九七九年)にはそぐわない人間だと気づいたのかも知れない。
ＰＡＲＣのエントランスにはラリー・テスラーがいて我々を送ってくれた。私はちょっとした悪戯心が騒いだので皆に聞こえないように小声でささやいた。
「今日はありがとうございました。テスラーさん、次ぎお会いするときは一緒にお仕事したいですね」
テスラーは通り一遍の挨拶だと受け取ったのだろうが愛想良く、
「楽しみにしてます」
と私の手を握った。
スティーブはといえば帰り際にＡｌｔｏを一台正式に購入したいと要望したが、ゼロックス社は市販製品ではないことを理由にそれを拒否した。
帰りの車の中でスティーブは私に向き直り、ＰＡＲＣでデモを見た印象を興奮気味にいった。
「トモ、理性ある奴ならすべてのコンピュータはあのようになるべきだと思うよな」
そして私だけに聞こえる小さな声で、

未来を見つめたかりスマ 2018-09-11 hagaromo

「まあ、例のｉＰｈｏｎｅを見た俺にとってはその原点を見つけたといったところかな」

スティーブは悪戯っぽくささやいた。

ただしこの日、スティーブはｉＰｈｏｎｅの影響もあってかＧＵＩにあまりにも強く心を奪われた結果、ＡｌｔｏおよびＳｍａｌｌｔａｌｋの優れた他の面、例えばオブジェクト指向プログラミングとＥｔｈｅｒｎｅｔでつながったメールシステムの重要性を見落としていた。

幸いなことにアップルⅡは売れに売れていた。そして会社の規模も急速に拡大していく。その過程で社内にはこれまでにはなかったギスギスした雰囲気も漂い始めていた。

その頃、まずアップルは新型のマシンの開発に迫られていた。

これはスティーブがウォズに頼らず自分のマシンが欲しいといった個人的なことだけではなかった。会社の経営陣たちにとってアップルⅡがいつまでもベストセラーを維持できるとは思われなかったからだ。

アップルⅡの販売がいつピタリと止まるのか、気にならないはずはなかった。

一九七八年末以降アップルはそれらの対応を急ぐべきくいくつか策を取っていった。

自宅に帰りシャワーを浴びて出てきたスティーブは、

未来を見る方法 ＿＿＿＿＿＿＿＿

「トモ、ちょっといいか」
と私が宛がわれていた部屋に入ってきた。
この頃になると私の給料でアパートの一室ぐらいは借りられるようになってはいたものの、独り立ちはスティーブが許してくれなかった。
「部屋が狭いというなら好きな部屋を使えよ。アパート借りるにしても金がいるしそれは君にとって無駄な金だよ」
タオルで髪を乾かしながらスティーブは椅子に座った。
「それにだトモ、君は俺の私設コンサルタント兼秘書だ。なくてはならない人材なんだよ」
そう言われては私もスティーブの居候をやめて出て行きたいなんて言い出せなかった。
「ところでトモ、聞いたか。ヒューレット・パッカードからウェンデル・サンダーって奴が入社したことを」
「ああ、ロッド・ホルトに聞いたよ。ウォズのボスだった人だといってたな」
ウォズが紹介の労をとったとも思えなかったが、ウェンデルは新機種アップルⅢ設計の技術部門を監督する責任者として雇われた。
スティーブは私と二人だけという気がおけない場所だったから辛辣なものいいを始め

未来を見た方 Ｒ 2018/09/11 hagoromo

た。

「あの官僚野郎たちにアップルⅢを開発させようというスコッティやマークラもおかしいぜ。俺はＢクラスの人間などいらないと口を酸っぱくしてスコッティにいったんだがクソ野郎はクソ野郎を呼び込むというやつさ」

私は小型の冷蔵庫から冷えたホワイトワインを取り出して開け、小型の丸いテーブルの上に乗せた二つのグラスに注いだ。

「人が急速に増えるとかならずノイズも大きくなるもんだよスティーブ」

と慰めるつもりで私はグラスをスティーブに差し出した。

「ありがとう。でも奴らと一緒に仕事をすると思うと憂鬱だよ。クソ野郎のくせに皆プライドだけは高いんだ」

事実ヒューレット・パッカードから入社した人たちとナショナル・セミコンダクターから来た人たちの小競り合いが増えていた。

これまでのアップルにはなかったことだった。

「まったく間抜けな奴らばかり増殖しやがって」

ワインを一息に飲み干しグラスを置いたスティーブは眉をひそめていった。

「相変わらずだが、ウォズも苦労の種だよな」

私も話しには聞いていた。

未来を見たかりしマ 2018/09/11 hagoromo

アップルⅢの失敗

アップルⅢ開発と平行してアップルⅡの改良版（コード名：Ａｎｎｉｅ）と呼ばれていたマシンの開発をウォズ主導でやるはずだった。しかし彼はディスク装置のときのような情熱を持ってことにあたらなかったしその働きぶりはだれが見ても大きなムラがありやる気のなさが目立った。

「結局Ａｎｎｉｅはあきらめたのかい」

私は再度スティーブのグラスに二杯目のワインを注ぎながら聞いた。

「まあ仕方がないよな。ウォズにしてみれば自分の思うとおりのマシン作りができないわけだからな」

スティーブは同情的なところを示した。

「そうだね。ウォズは人の命令で働くタイプではないからね」

「だけど大人しくしていればいいものを、嫌われる悪戯ばかり続けているのが困りものなんだよ」

事実ウォズは相変わらずいたずら好きで通っていたが、アップルの社内は創業時のような寛大さは薄れていた。ために開発中のマシンの筐体にネズミを仕込んだりといった

未来を見るかけ

悪戯は悪戯では済まなくなっていった。

四十年後の未来からやってきた私はアップルⅢが失敗するという結論を知っている。その理由も大方分かっているつもりだったがすでに私などが口出しできる組織ではなくなっていたし歴史を変えてしまっては自分が無事に元の世界へ戻れなくなるのではないかと思い、アドバイスする機会を失っていた。

アップルⅢの失敗の主な原因はスティーブ・ジョブズにあるというのが定説だ。

彼は自分の好むマシンというか自分がユーザーだったら欲しいマシンを夢見ていた。したがってアップルⅢの筐体デザインやそのサイズをスティーブ主導で始まったことを聞いて定説どおりの混乱を引き起こすであろうことは肌で感じていた。

内部構造など考えずにサイズを決めたから基板の配置やサイズに大きな制約が出た。それ以上に問題なのは相変わらず冷却ファンは使うなという主張だ。

さらに経営陣が命じた開発期間はそもそも短かすぎた。その割りにテキスト表示は八〇桁でアルファベットは大文字と小文字が使えるようにしろとの指示があったばかりかアップルⅡとの互換性を保てという。

そのエミュレーションの必要性はアップルⅢのグラフィック機能向上の可能性を潰すことにもなった。

未来を見た。ガリスマ2018-09-11 hagoromo

なによりもウェンデル・サンダーがイエスマンだったことが大いに災いした。ウェンデルは経営陣からの指示とスティーブの移ろいやすい思いつきに振り回されたのだ。

数日後、ロッド・ホルトと会ったとき彼もアップルの現状を憂いていた。

「いや、なにも昔は良かったというつもりはないんだ。だけど確かにいまは昔よりキャッシュフローは問題ないしアップルⅡも売れてる。しかし経営陣には余裕が見られないし社員たちはまったくまとまりがなくなっているんだ。アップルらしさなんて探しても見つからないよ」

「そういえば」

私は声を潜めていった。

「ある人から聞いたけど、ロッド、君なんかも古参で頭が固いと新参者たちに煙たがられているらしいね」

遠慮のない私の口ぶりにホルトは声を上げて笑った。

「まったく可笑しな話しさトモ。俺は昔から（いかれた野郎）のはずだったのにいつのまにか、（貴方は官僚的だ）と言われるんだから」

「しかし、トモ。アップルⅢは成功すると思うかい」

真顔になってホルトに聞かれるとどう答えて良いかわからなかった。

未来を見通せ　カリスマ　2018/09/11 hagaromo

「経営陣は発表を急いでるんだよ。数ヶ月後に株式公募が決まっているだろう。それ以前に発表してよい材料にしたいのさ」

ホルトはあくまで私の意見を聞きたがった。

私は自分がタイムスリップしてきた人間だということはスティーブ・ジョブズしか教えないことに決めていたが嘘をいうことは嫌だったし自身の言動の積み重ねが実績となりそれなりの評価を受けるようになっていたからそれも保持したかった。

「私は上手くいかないと思うよ」

正直にいうとホルトは頷きながら、

「あまりに時間がなさ過ぎたよ。アップルⅡは会社ができるときにはすでに基本は存在していただろう。しかしアップルⅢはアップルがウォズの手を借りずに開発する最初のマシンなんだ。もっと時間が必要なんだよ。もっと入念な設計、入念なテストをしなければならないんだ」

ホルトは愛用のキャメルを咥えながら私の肩に手を置いて自分の席に戻っていった。

数日後の夜、スティーブから意外な話しを聞かされた。

「トモ、俺はアップルⅢプロジェクトから手を引くことにしたよ」

スティーブは真顔でつぶやいた。

未来を見る人 カリスマ 2018/09/11 hagaromo

「君がプロジェクトから手を引いてアップルⅢは出荷できるのかい」
「なにがあったんだい」
矢継ぎ早の私の質問にソファーに仰向けになったスティーブは大きなため息をついた。
「理由はふたつある」
少し間を置いた後で、
「ひとつは前にも言ったと思うけど、俺はB級の奴らと仕事をするのが嫌になったってことさ」
ここでスティーブはもう一度ため息をついてから続けた。
「いろいろとアドバイスして奴らにやらせてみたが、どいつもこいつもはっきりせず、俺の考えたとおりに進まないんだよ」
まあ、ウェンデル・サンダーたちからすれば混乱する一番の要因はスティーブ・ジョブズその人にあったというだろう。
様々な主張を受け入れながら進めた設計は様々な無理を強いられた。スティーブ自身の意見や指示も日毎に変わり開発者たちを苦しめたらしい。
とはいえスティーブに(君が混乱の原因だ)とはさすがにいえなかった。
「もうひとつの理由はアップルⅡとの互換など考えずにまったく新しいマシンを作りた

未来を見たカリスマ 2018/09/11 hagoromo

いと思ったからなんだ。まだなにも形になっていないが、リサプロジェクトとして開発計画を立てている製品だけど、例のゼロックス・パロアルト研究所で見たＡｌｔｏのようなＧＵＩを実現したいんだ。悪いがアップルⅢにかまっている時間などないのさ」

スティーブはすでにアップルⅢへの興味を失っていたのだ。

一九八〇年五月、カリフォルニア州アナハイムで開催されたナショナル・コンピュータ会議でアップルⅢが発表されたとき、業界筋や報道関係者からは賞賛の声が上がりウェンデル・サンダーは鼻高々だった。

結局その二、三ヶ月後に新しいＯＳ、ワード・プロセッサ、ビジカルク、高機能ＢＡＳＩＣと共に発表され、アップルⅢ待望の機運は高まった。そしてついに秋になって出荷されるとすぐに欠陥品として返品と苦情が相次いだ。

ロッド・ホルトの危惧が当たってしまった。

欠陥の直接の原因はともかく、それらの担当者や責任者らは様々なプレッシャーがあったにせよ自分たちの役割を全うしていなかった。

トラブルの原因は十分なテストをしていたら防げるはずのことだった。

アップルの評判は大いに傷付いた。

未来を見るカリスマ 2018/09/11 hagoromo

すべてはスティーブ・ジョブズはもとよりマイク・マークラおよびマイケル・スコットらの油断というより過信がホルトの言うとおり過酷な開発期間と適切なテストもしないまま出荷した結果だった。

アップルコンピュータ社が設立されたとき、アップルⅡはプロトタイプながらすでに存在した。したがってアップルⅢはアップルが最初に独力で開発した製品だったが、それが失敗という結果に経営陣は愕然とする。

スコッティはスコッティで、失敗の原因はスティーブ・ジョブズだと頑なに信じて疑わなかった。スティーブが開発現場をかき回したからだと怒っていた。

一九八〇年代のアップルは株式公開を目前にしていたこともあってそれまでにも増して混乱と同時に活気があった。

ＧＵＩを持つコンシューマー向けコンピュータとしては初めてのリサの開発が具体的にスタートしたし、先走るがマッキントッシュ開発の芽も地中から青葉を覗かせていた。しかし一番の問題はスティーブ・ジョブズら経営陣と技術者たちとのビジョンの共有ができていなかったことだった。その最たるものがアップルⅢの失敗に見られた。

ということで、企業運営に関する諸問題は山積みだったが、私自身が抱えている問題も決してどうでもよい問題ではなくなっていた。

未来を見たカリスマ 2018/09/11 hagaromo

それは私自身の存在がアップルの中で目立ち始めたからだ。

別に私自身が目立つ言動をしているわけではなかった。創業時のようにガレージに入ってくるスタッフらが数十人の時には会社と言うよりサークルみたいな感じだったしボスのスティーブ・ジョブズが（トモは俺の秘書だ）といえば誰もが疑うことなく従っていたし私も彼ら彼女らの中に溶け込んでいた。しかし規模が大きくなりすべてのスタッフが創業時の暗黙の了解ごとを知っているはずもなくトモヒコ・カガヤという存在が不思議がられるようになってきた。

理由は明白だった。表向きはスティーブ・ジョブズの秘書的存在だったが他のスタッフのように明確な仕事のテリトリーがなかった。取締役といった職責はなかったがスティーブやマークラらが認めてくれていたおかげで取締役会をはじめほとんど会社の決定権を持つ場に出席を許されたし入室を厳しく制限されていた部屋にもフリーパスで入ることが出来た。したがって私の注文や依頼を断る人は現実的にいなかった。なぜなら私が横柄だとか横暴というのではなく私の指示や依頼事はスティーブ・ジョブズのそれだと思えと当のスティーブから社内に通達があったからだ。

それに私はアップル創業時から、すなわちガレージの時代からのスタッフだったという事実は揺るがしがたく、それなりの畏敬の目で見てくれる人たちも多かったのも事実だった。

未来を見るカリスマ 2018/09/11 hagoromo

しかし常識的に見て年齢ひとつを取ってみても 七十歳前後の人材は本社に類をみなかったから（あれ、誰）という感じで目立ったようだ。

要はトモヒコ・カガヤという人物はアップルで何をしてるのか、単なるスティーブの秘書でもないようだし、という点が話のネタに使われていた。

私はスティーブのたっての願いもあってこれまで曖昧だった私の職責をＣＩＯすなわちChief Information Officerとすることに同意した。

簡単に言えば情報担当役員ということか。

こうした役職であればいままで以上にアップル全体の情報に関しての報告を受けることが出来るしアドバイスをすることもできるわけだ。そして私自身の報告は直接スティーブに行えばよいという。これならアップル内外でのフットワークがとてもやりやすくなることは間違いない。

一方、私の日々の言動は決して派手なものではなかったがタイムスリップした一九七六年一二月以降、さまざまな出来事の中で私の示した予測やポイントとなるテクノロジーといったあれこれが驚くほど的確であるという評価を受けつつあった。

それはそうだろう。

タイムスリップしてアップルの創業時代に迷い込むことが分かっていたらもっと勉強しておけばよかったと思うが、アップルの歴史の大方の行方は知っていたし真実かどう

未来予測のカリスマ 2018/09/11 hagoromo

かは別にしても多くのエピソードや人々の葛藤も知っていた。
何よりも私は二〇一六年からタイムスリップしてきた人間であり、アップルの、あるいはテクノロジーの行く末について熟知しているのだから間違うはずもなかった。
ただし注意すべきはそれをストレートに主張するのではなく、かといって単なる絵空事ではなくひとつの学問的な未来予測としてスタッフらに伝えることが求められた。そうした点において私はスティーブの全面的な支援と理解を受けていた。
さて、そんなおり私はスティーブに呼ばれてオフィスに戻った。
用件は大別して二つだった。
ひとつはこれまで私の居座っていた場所はスティーブ・ジョブズのオフィス内だったが専用のオフィスが与えられることになった。それは私という存在を社員たちにより同化させようとするスティーブ・ジョブズの策のひとつだったが、２つ目の件は意外な依頼だった。

「ドアを閉めてくれないか」
スティーブの言葉に頷いた私はオフィスのドアを閉めて鍵をかけた。
「トモ、君の存在はいまでは俺にとって、いやアップルにとって重要なんだ。いやこれは世辞でなく本当の事だ。そして俺と君との秘密を秘密として会社全体に君の存在を知

未来を回回見たカリスマ20180911 hagoromo

らしめる時期だと思うんだ」
私は黙って次の言葉を待った。
「それでトモにひとつ頼みがあるんだ。というより業務命令と思ってくれ」
スティーブが私にこうしたことを告げるのは始めてだったかも知れないが、その表情は硬いものではなく微笑んでいた。
「私もアップルの社員の端くれだからスティーブ、君の業務命令なら最善を尽くすよ。私のできる限りのことという制約はあるけどね」
私も減らず口風に対応した。
「実はマイク・マークラにも頼まれたことがあるし、君の親しいロッド・ホルトにも同じようなことを言われたことがあるんだ」
スティーブの言っている意味が分からず私は首を傾げた。
「もっと早くから俺が気を回さなくてはいけなかったのだが、トモの言動のひとつひとつが驚くほど的確で、特に先々に対する注視の姿勢やアドバイスは不思議なほど実情に合ったものだったと彼らは高く評価しているんだ。無論それがどこからくる能力なのかを知っているのは俺だけのはずだが、そうだろう」
悪戯っぽく笑うスティーブに私は（勿論さ）と答えた。
「ただしその本当のことを公言するわけにはいかないさ。一番その恩恵を受けているの

未来を見たカリスマ 2018/09/11 hagoromo

はこの俺でもあるしな。しかしこのままトモを不思議なオヤジとしてだけにしておいては君自身も身の置き所がないだろうし会社にとっても益にならない。そこでだ」

スティーブは両手を頭の後ろに組みながら両足をデスクの端に乗せた。

「トモのＣＩＯ就任をよい機会にして一度社内で勉強会、いやセミナーをやってもらいたいんだ」

意外な依頼に私は本当に驚いた。スティーブの真意がいまひとつわからなかったからだ。

「アップルⅢ失敗の反省もあるんだが、開発の奴らは勿論、スタッフたちと我々経営陣がいまいちどビジョンを共有することが大切だと常々マイクたちと話していたが、そのひとつのきっかけとなると思うんだ。そこで君に、そうだな…例えば『近未来へ向けてのテクノロジーの予測』といったテーマで少し具体的で明確な話しをしてもらえないかと思ったんだ」

「無論タイムスリップの話しはなしだ」

スティーブは足を組み直しながら笑った。

「それはかまわないけど、どこの馬の骨かもわからないし学位も持っていない私の話など誰も聞きたいとは思わないだろうに」

未来を見る力 Hagaromo

私は当然の疑問をストレートにスティーブにぶつけた。
「いや、それは君自身が自分の事を過小評価しているよ」
と言いながらスティーブは体を起こして私にあの鋭い視線を向けた。
「知ってのとおり、一〇月にジェフ・ラスキンの研究プロジェクトに面白い奴らが参加したんだ」
「うん、すでに私は短い時間だが皆と話したよ。えっとバレル・スミス、バッド・トリブル、ブライアン・ハワード、そしてジョアンナ・ホフマンたちだね」
「そうだ。俺はジェフの考えるコンセプトにはまったく興味はないんだ。奴の考えるコンピュータはクソだ。それにこれからのコンピュータはＧＵＩ抜きにしては考えられないとＰＡＲＣに行った後思ったし、トモ、君に個人的なアドバイスというか未来のビジョンを聞かせてもらってよりその思いを強くしたんだ。ただし仕方がないことだがほとんどの奴らはそうした未来に興味はない」
深く深呼吸してスティーブは言葉を探しているようだったが、
「どこから聞いたのか、ＭＩＴにいたというジョアンナ・ホフマンやＰＡＲＣから来たラリー・テスラーあるいはあの気むずかしいジェフ・ラスキンでさえ一度じっくり（カガヤサンと話がしたいので許可してくれ）というんだ。思うに皆手持ちの仮題に振り回されてはいるがそれだけではダメで新しい製品作りには新しいビジョンが欲しいと思っ

未来を見たカリスマ 2018/09/11 hagoromo

てるんだよ」

やれやれ、難しい話しになってきたが、スティーブは私がひとりひとりに対応している時間はないだろうから、ＣＩＯという立場はもとよりアップルのビジョナリーという立場から「未来のパーソナルコンピュータ」への夢を語って欲しいんだという。

事実新たな市場や商品、サービス、技術といったものを具現化することがこれからのビジネスには重要と私が常々スティーブに説いていたからだが、最後にスティーブがいま主導権を握りたいと思っているマッキントッシュ・プロジェクトへの参加をもしやすくする力になるに違いないという本心も暴露した。

そして、

「おっと、たまたま口に出たけどビジョナリーというのは良い言い方だよなトモ。君のタイトルにビジョナリーというのを付け加えようか」

と笑った。

ＧＵＩの重要性を説く私の言動がジェフ・ラスキンが提唱しはじめたばかりのマッキントッシュ・プロジェクトをスティーブ・ジョブズ主導とする手伝いをすることに心を痛めたが、歴史の向かう先を歪めるわけにもいかず、スティーブの申し出を受けることにした。

しかしそれは実に肩の荷が重い仕事となった。

未来を見た。

株式上場

アップルはビジネスが拡大していく中で正式な株式上場前にも二度資金調達をした。ゼロックスを含めた一九七九年八月とは別に一九八〇年十一月にもかなり大規模な資金調達が行われた。すべてアップルⅡの成功が多額の資金調達を可能にしたのだ。その二度目の資金調達の際にもゼロックス社は八〇万株を取得している。

そしてアップルは一九八〇年十二月十二日に念願の株式上場を果たした。これらによりスティーブは若干二十五歳で二億五六〇〇万ドルの個人資産を手にした。ただし（金のためにビジネスをはじめるわけではない）と言っていたスティーブだが、大富豪となると冷酷非情さがより目立つようになったのも事実だ。

アップルでは株式上場で三〇〇人ほどが大金持ちになったがスティーブは起業時から苦楽を共にしてきたダン・コトケ、ビル・フェルナンデス、ランディ・ウイギントン、クリス・エスピノサなどには株式を与えようとはしなかった。

私はどうしても納得できずに、株式公開のスケジュールが決まった一週間後だったかスティーブの自宅で二人きりになった際になるべくリラックスした雰囲気を壊さずに聞いた。

未来を見通せ　ガリスマ2018-09-11 hagaromo

「スティーブ、なぜ君は友達のダンなどに株式を譲らないのかい」
スティーブは一瞬私に対して珍しく不機嫌な表情を見せたが、
「ああ、悪い悪い。トモ、君に不快な思いをさせるつもりはないんだ。ただいきなりの質問だったからな」
いいわけと繕いが見え見えの態度でスティーブはソファーに座り込んだ。
「まず、いっておくけど」
両手の指先を合わせながらスティーブは私を見据えて話し始めた。
「トモ、君には相応の株式を渡すよ。マイク・マークラに指示しておいたから数日後に連絡がいくだろう」
なんだかいきなり口止め料のカウンターパンチを喰らったようにも思えたが、
「いや、かっこうをつけるつもりはないが、私は毎月のサラリーで十分感謝しているよ。しかし創業時から苦楽を共にしてきた仲間ちたが落ち込んでいるのを見るのが辛いんだ」
これまた私の正直な気持ちだった。二〇一六年からタイムスリップした私はいつ戻れるかはともかく、一生この地で骨を埋めるつもりはなかった。だから金を貯めて…といった意識はなかったから正直欲もなかったのである。
私の視線をはずしたスティーブは大きなため息をつきながら天井を仰いだ。

未来を見る方 ＿＿＿＿＿＿＿＿

「トモ、理由はあるんだよ」

少し間を置き口を開いた。

「君があげた奴らは確かに創業時からの従業員だが、かなり長い間というより彼らは近年まで時給で働いていたんだよ。いわば正規雇用者の扱いではなかったわけだ」

再び息を吐き、

「それに、株の譲渡に関しての最終決定権は俺ではなくマイクやスコッティなんだよ。俺は社長ではないからな。それに、ダンやランディらは大金を持つには若すぎるよ」

私は言いたいことは山ほどあったが、スティーブの言い訳は言い訳にもならないその場逃れに思えたから反論しても意味がないことを察知した。

企業としての決定権うんぬんは確かにスティーブのいうとおりだが、筆頭株主はスティーブだったし彼が株譲渡相手を選んだ事は知られていた事実だった。

第一先ほど私に言った台詞「マイク・マークラに指示しておいたから数日後に連絡がいくだろう」という事実はスティーブ自身の権限でことが運ぶことを証明していた。

さらにダンやランディが大金を持つのには若すぎるというなら自分はどうなんだと言いたかったが、彼は理論然とした考えを持っているとは思えなかったから言い争っても益はないことは明らかだった。

株式を渡さないのは（渡したくないから）という感情論というか自分の力を見せつけ

未来を見る人 カリスマ 2018/09/11 hagoromo

たいからのようにも思えた。
このストックオプションに関してはロッド・ホルトもスティーブの不公平さに怒っていた。だからある日、ロッドは見るに見かねてスティーブに提案した。
「俺ら二人で少しずつ持ち株を出し合い、コトケにも分け与えたらどうか」と。
しかしこの提案にもスティーブ・ジョブズの反応は冷淡だった。
「そりゃあいい提案だねロッド。では僕はゼロ株を奴に渡すよ」
それがスティーブの返事だったと後にロッドはため息交じりに話してくれた。
結局ロッド・ホルトはダニエル・コトケに気持ちだといって自分の株を一〇〇株無償で譲り渡したらしい。

数日後、昼食の場で一緒になったウォズに私は珍しく愚痴を言ってしまった。
「トモ、あなたがジョブズのことで愚痴るなんて珍しいな。というより初めてだろう」
ウォズはいつも以上に優しかった。それに今日はどうしたのか、髭をきれに刈り込んだ姿のウォズは気の毒そうに私を見つめた。
「辛くてさ、ウォズ。クリスやランディらの顔をまともに見られないんだ」
ウォズの太く毛深い腕が私の肩にまわされた。三〇歳の若者にいいジイサンが慰められているシーンは自分でも情けなかったが、こればかりは私がいくらあがいたところで

未来を見た　カリスマ　2018/09/11 hagoromo

どうしようもなかった。
「大丈夫だ、トモ。僕に考えがあるんだ。できればあなたにも手伝って欲しいな」
ウォズから聞かされた計画は考えもしなかったことだった。
ウォズは株式の公開直前に自分所有のオプションから二〇〇〇株ほどずつ、今回の恩恵に与れなかった功労者たちに株を譲るのだという。それらのリストにはダン・コトケ、ビル・フェルナンデス、ランディ・ウイギントン、クリス・エスピノサなどが含まれていると聞き私は気持ちがかなり楽になった。
「ウォズ、私が手伝えることは大したことはないだろうが是非なんでも言ってほしいな。ただしジョブズと衝突したくないから堂々と手伝うわけにはいかないんだ」
私が後ろめたそうにいうと、
「勿論わかってるさ。受付のシェリーにまとめ役を頼んであるから後で彼女と相談してよ」
ウォズは私の肩に回した太い腕を再度揺すりながら、
「元気出してよ、トモ」
といいながら自分のオフィスに戻っていった。
「ウォズのギフトがなかったら，僕はいまだに家も持てなかったよ」

未来を見通せ　カリスマ2018-0911 hagoromo

後年、ダン・コトケは機会がある度にそんな話しをしていたという。
それから三日後、スティーブの留守をいいことに私はシェリーのところに話しにいった。
「ああトモ、ウォズから聞いているわよ。二人で秘密裏にリストアップと株式数などの検証をしましょうね」
シェリーは嬉しそうにいった。
「なんか、気持ちが晴れるよ。君と二人でウォズのプランを実現するのはね」
シェリーは突然目を輝かせ、
「トモ、それいいわよ。この計画のタイトルは『ウォズ・プラン』に決まりね」
思わず私は自分の唇に指を当てて、
「シェリー、声が大きいよ」
といわなければならなかった。

ただしスティーブ・ウォズニアックという人物はお人好し過ぎた。もともと金銭に興味はないのに一躍大金持ちになったのでその処遇に困惑していた。
結局「金というものは持ったまま死ぬより金持ちとして生きるべき」というサミュエル・ジョンソンの金言どおりに暮らそうと考えたようだ。

未来を見た。カリスマ2018-09-11 hagoromo

しかし自分の財産にも開けっぴろげだったから騙されるべくして騙されることが多かった。

見知らぬ人から援助を申し込まれればすぐに小切手を切るといったこともした。

私は余計な事かと思ったが見かねてウォズのオフィスに行き、

「ウォズ、是非財務の専門家を雇うべきだよ」

といった苦言をいう羽目にもなったが、スタートアップした会社に投資をしたりポルシェを買いそのナンバープレートを“APPLE II”にして悦に入っていた。

しまいにはどこかの弁護士に勧められたとかでサンノゼのイーストサイドにあった映画館まで買わされたが結局お荷物となった。

ある日、マイク・マークラと顔を会わせたとき、

「まったくウォズはお人好しだけでは済まないぜ、トモ」

と苦笑しながら教えてくれたことがある。

どうやらウォズの父親から電話があったらしい。息子に注意をしてくれと、何だか小学生に対する物言いのようだったとマイクは笑った。

「まあ、いくつになっても父親は父親だし子供は子供ってことだな」

マイクは優しい表情をしながら続けた。

未来を見つめたかりんマ 2018/09/11 hagoromo

「トモ、奴の車の中に現金化していない二十五万ドル分の小切手が散らかっているのを父親が見つけたと言うんだ。まったく非常識というか我々の感覚とズレているよ」

「で、ウォズにはなんていったの、マイク」

私は興味を持って聞いてみた。

「ウォズ、金がいらないなら俺が貰うからもってこいといったよ」

マイクは冗談をいいながらも、ウォズが犯罪に巻き込まれるような事態になる事を懸念していたのだ。

ところで非情なスティーブ・ジョブズも身内には優しかった。

両親のポール・ジョブズとクララ・ジョブズに七十五万ドル相当の株式を送ったが、二人はその一部を売り、ロスアルトスの家のローンを完済した。

スティーブ自身もすでにヒッピーの面影など微塵もなくなっていた。

髪を整え、高級紳士服店で求めたスーツやシャツを着こなした姿は男の私が見ても素敵だった。また高級住宅街のロスガトスに家を買い、バーバラ・ヤシンスキーという絶世の美女と暮らすことになるらしいという噂も聞いた。

どうやら私には言いにくいのか、直接の話しはまだなかった。

私はこれは居候から脱却するチャンスだと思い、スティーブが贈ってくれた株式の一部を売却して小さな洒落た住居を確保することにした。株式全部を売れば小さな家なら

未来を見たカリスマ 2018/09/11 hagaromo

買えたものの根無し草の身としては無駄に思えたから一軒家を借りることにした。
スティーブは私の独立に目立った反対はしなかった。というよりどこか自分が追い出したといった負い目を感じていたらしい。
だからだろうか（トモ、トモ）と前以上に私を当てにしてくれたし引っ越しした翌月には住宅費補助のつもりなのか給料が増えていた。

年が明けた一九八一年二月七日、一本の電話がアップル全体を揺るがした。アップルに近いスコッツ・バレー空港でウォズの乗った四人乗り自家用飛行機が墜落したというのだ。
ウォズは飛行機の操縦を習い始め、結局単発のビーチクラフト・ボナンザを買ったのだ。どうやらそれが墜落したらしい。
私はそのことを知ったとき、私の肩に腕を回して慰めてくれたウォズを思い出して嗚咽しそうになったが辛うじて我慢した。
一報を受けたスティーブ・ジョブズとマイク・スコットそして私の三人が急遽病院へ向かうことになった。
マイク・マークラやロッド・ホルト、それにランディ・ウィギントンらも行きたがったが病院に大勢で駆けつけるわけにはいかなかったし会社自体も急務のあれこれが重な

未来を見たかりんマ 2018/09/11 hagoromo

っていた。
「わかった。では僕は留守番役を買って出るよ。後で詳しく教えてくれ」
マイク・マークラはわざと落ち着いた態度で自分を納得させていたが、無意識にか両手で髪を掻きむしっていた。
病室に飛び込んだ我々はウォズが意外に元気そうなのにまずはホッとした。
スコッティは、
「トモ、悪いがマークラらにウォズは大丈夫だと電話してくれないか」
と気遣いを見せた。アップルの社員全体が固唾をのんでウォズの状況を待っているからだ。
「わかった」
私は病院の待合室まで駆け下りて早速マイクにウォズが無事なことを伝え、病室へとって返した。
ウォズは顔に切り傷を負い無残な姿だったがそれ意外大きな外傷はないように思えた。しかしさすがにショックのためか自分がどのような状況にあるのかわからずボーッとしていた。
「ウォズ、どうだ俺が分かるか」
スティーブはベッドに寝ているウォズに向かって声をかけた。

未来を見た方 Kasumi 2018/09/11 hagaromo

「ああ、分かるとも」

笑顔を作ろうとしたのだろうが、傷で痛々しいその表情は無残だった。しかしウォズ自身もわからなかったが重度の健忘症となっており、事故の前日までの記憶しかなく自分が飛行機事故に遭ったことさえ認識できていなかった。

ウォズの怪我が完治するには一ヶ月ほどかかったが、彼はアップルにすぐには戻りたくなかったらしい。

退院の挨拶のため久しぶりに会社へ顔を出したウォズに受付係兼秘書のシェリーは半べその表情で抱きついた。

「おいおいシェリー、恥ずかしいよ」

ウォズは照れながらエントランスに集まった数十人の社員や役員たちに笑顔を見せた。帰りがけにちょうどスティーブが留守だったからか、私のオフィスに立ち寄ってくれた。

「トモ、正式なことが決まったら皆に報告するけど僕はしばらく会社を離れて大学へ復学するつもりなんだ」

返事に窮した私は、

「仕事は問題ないのかい」

どうにも場違いな反応しかできなかったが、すでにウォズは自分が仕事の中心に座る

未来を垣間見たカリスマ20180911.hagoromo

ことを意識的に避けていたことを知っていた。
「また来るよ、スティーブによろしくな」
ウォズは大きな背中を見せてオフィスを去って行った。

未来を見た方 Kasumi 2018/09/11 Nagaoka

第五章　マッキントッシュ前夜

ラスキンのマッキントッシュ

一九八一年の年明け早々だったと思うが、クパチーノのとあるコーヒーショップで少々遅いランチ代わりの軽食を取っていたとき、あのジェフ・ラスキンがテーブルの前に立っていた。

「トモヒコさん、ご一緒していいですか」

その髭面の顔からのぞくふたつの眼は少々疲れているように思えた。

「勿論ですよ。私はひとりですから、ご遠慮なくお座りになってください」

私は対面の椅子に座ることを勧めた。

「あなたも一休みですか」

私は話しのきっかけをつくろうと差し障りのない問いを発した。

「ええ、ちょっと資料を探しに出た帰りだったんですが、あなたが店内にいらっしゃるのを見て声をかけさせてもらいました」

ジェフ・ラスキンは教師をしていたとかで心地良い声と明解な話しっぷりの男だっ

未来を見た方 ＿＿＿＿＿＿＿＿

た。私は（ああ、ラスキンは音楽家でもあったなあ）と考えながら相づちのつもりで笑顔を返した。

そのときの彼は黒っぽい服を着ていたし、無造作に生えたままにしているような髭もまだ真っ黒だったからどこかの宗教家のようにも見えた。それだけ見かけは温和で紳士だったが内に秘めた熱いものを閉じ込めているのがわかった。

「楽しい話しでなくて恐縮ですが相談にのってもらいたくて」

それまで社内では挨拶程度しかコンタクトしたことがなかったので私はどう対応したら良いかを考えながら、

「まだしばらく時間がとれますから、私で良かったらなんなりとどうぞ」

と返答した。このときラスキンは三八歳だったが、年齢よりずっと老けて見えた。

「マッキントッシュ・プロジェクトのことなんです」

ラスキンは私と視線を合わせて静かに話を切り出した。

歴史を知っている私はどんな内容なのかはすでに承知していたが、まずは彼がどのような話しをするのかを聞いてみたくてうなずき先を促した。

「あなたはもっともスティーブに近い存在と知っているしジェントルマンだと見聞きしていますので是非アドバイスをと思いまして」

やはりラスキンとてストレートに話しを切り出すのは憚れるようだった。

未来を面白くカリスマ20180913 hagoromo

「スティーブがあなたのプロジェクトの邪魔をしているようですね」
私の方から核心をついた物言いをしてみた。
大きな体のラスキンは小ぶりな椅子に座りにくそうにしながらテーブルに一瞬目を伏せて話し出した。
「ええ、私がするはずだったプレゼンテーションをスティーブは（中止になった）とふれ回って妨害しようとしたこともありました。もともとスティーブはリサに関わっているときは（お前のプロダクトはアップルのビジネスの邪魔をすることになる）と猛反対でした。しかしご承知のようにリサチームからスコッティに追放された後、やることがなくなったからでしょう、私のプロジェクトに顔を出すようになりました」
いまではマッキントッシュはＭａｃと呼ばれ、アップル製品の根幹となっているが、そもそもはジェフ・ラスキンがほそぼそと始めたプロジェクトの名前だった。
マッキントッシュという名はアップルという社名にならい、ラスキンが好きなリンゴの種類であるMcIntosh（和名：旭）から取った名前だったがどうやらラスキン自身なのかあるいは別のスタッフなのかはいまとなっては不明なものの、スペルを間違ったのがそのままコンピュータの名前として認知されるようになってしまったといわれている。
「最初プロダクトに反対していたスティーブもしばらく後に顔を出したときには私と同

未来を見た方がいいのか？ 2018/09/11 hagoromo

じ考えを持っていたこともあって話しが合ったんです」

私は少々意外だという気がして首を傾げた。

「マッキントッシュはなにもかも必要なすべてを缶詰のように詰め込んだアドオンなしで使える一〇〇〇ドル程度の製品を目指しています。マシンの電源を入れたら小難しいコマンドなど入力しなくてもすぐに使えるしポータブル性も高い製品なんです」

オーダーを取りに来た店員にコーヒーを注文したラスキンはグラスの水で口を湿らせて続けた。

「私のマッキントッシュはアップルⅡのような拡張スロットもありませんしグラフィックスも不要、マウスも採用するつもりはありません。とてもシンプルなマシンなのです」

私は後にラスキンがアップルを去った後、そのラスキンの思いをキャノンで製品化したという「Ｃａｎｏｎ　Ｃａｔ」を思い出していた。

一、二度しか触ったことがなかったので詳しい事は知らないが一九八四年にリリースされたマッキントッシュに夢中になっていた時期でもあり、地味なＯＡマシンといった印象しかなかった。

ラスキンの声が私の回想を現実に戻した。

「そうしたシンプルさはスティーブの考えている理想のマシンに近いと賞賛してくれま

未来を見た。カリスマ2018-09-11 hagaromo

した。彼がアップルⅡの拡張スロットに反対だった話しはよく知られてますしね。私のトースターなみに使いやすいコンピュータというコンセプトも気に入ったようでした」

この一九八一年という年はスティーブ・ジョブズにとって内に抱えた膨大なエネルギーのはけ口を失っていた時機だった。リサプロジェクトから外されたものの会長という役職に就任していたし株式公開で莫大な金も手にした。世の中で自分の思い通りにできないことはないといった意気込みだったに違いない。

そうしたスティーブにとってラスキンがこつこつと進めていた小さなプロジェクトは格好の標的だったのだ。

ラスキンは姿勢を正して続けた。

「そもそも私がアップルで働くことになったのはあなたもご承知だと思いますが一九七七年に私の小さな会社ごとスティーブが買収し私はドキュメンテーション制作を任されたわけです。ですから私はスティーブ・ジョブズという男を毛嫌いするつもりはありませんでした」

すでにテーブルにあるコーヒーは冷めていたが、ラスキンはそれを一口二口飲んで、躊躇いがちに話し出した。

「スティーブは最初自分はハードウェアを担当する、だから私にソフトウェアを担当し

未来を見た方 ＿＿＿＿＿＿＿＿

ろといいました。申し上げるまでもなく彼はアップルの会長ですし私は一介のドキュメント部門のマネージャーに過ぎませんから面と向かって拒否するわけにもいかなかったんです」

ラスキンは意識してセーブした話し方をしていたのか、次第に両手をテーブルの前に突きだしながらオーバーアクションも見せ始めた。ただし私は形だけだとしてもＣＩＯの肩書きを持っている人間だからだろう、ラスキンは終始紳士的で丁寧な話し方を崩さなかった。

「確かにスティーブがプロジェクトに加わることは良い面もあったのです」

「あ、聞きました。予算面で援助が増えたとか」

私はスティーブ・ジョブズ本人から聞いた話しを思い出しながら口を挟んだ。

「そうなんです。しかしバレル・スミスが苦労して作ったマザーボードを見ていきなり（ＣＰＵを６８０００にしろ）とスティーブが言い出しまして」

ジェフ・ラスキンは現状の危惧を私に訴えながらスティーブ・ジョブズの介入を阻止あるいは緩和する策はないものかと核心に入った。しかし繰り返すが会長と一介の社員とでは現実問題喧嘩にもならなかったし、社長のスコッティもスティーブがマッキントッシュ・プロジェクトに頭を突っ込むのはアップルとして悪いことではないと考えていた。

未来を見るカリスマ 2018/09/11 hagaromo

なぜならリサの開発にちょっかいを出さないでくれるのであればマッキントッシュ・プロジェクトにどのような影響があったにしても大した問題にはならないと考えていたようだ。

私はジェフ・ラスキンを前にして良策を即答できる問題ではないこと、スティーブ側の思惑も確認してなにかできることがあれば知らせようと返事をした。

その後私もＣＩＯという立場からマッキントッシュ・プロジェクトの進捗状況に注視していたが、スティーブの参加はチームの士気を鼓舞していることは確かだった。なにしろスティーブは資金を集める力も、数少ない開発用機器やそのスペースをぶんどる力も、そして優秀なスタッフを他部署から引き抜いてくる力も持っていたからだ。

このマッキントッシュ・プロジェクトはその年のクリスマス間近になったときその動きが急に激しくなった。何故ならバレス・スミスが６８０００を使った設計の目処をつけたからだ。これがスティーブの感性を激しく揺さぶった。

６８０００ならリサと一緒にＧＵＩやマウスも採用できるはずだしマッキントッシュはクロックもリサより速いという。それにリサは数十人のエンジニアたちが手を染めていたし数枚の回路基板とカスタム・コンポーネントが使われていたものの依然開発に苦慮していた。対してスティーブの目の前のマッキントッシュは回路基板が１枚で価格はリサの数分の一で可能なのだ。

未来を見たカリスマ 2018/09/11 hagaromo

それを知ったスティーブはこのマシンは（第二のアップルIIになる）という確信を得たようだ。さらにリサチームに、そしスコッティに一泡吹かすことができると踏んだのだ。

マッキントッシュチームのマーケティング担当だったジョアンナ・ホフマンに近況を聞いたとき彼女は近頃スティーブの目が輝いているといいつつ、

「トモ、確実にジェフに暗雲が立ちこめているわ。私の勘では近々スティーブが実力行使し自分の思うものを手にすると感じるの。だってあんなに地味なマッキントッシュ・プロジェクトだったけど、今では後光が射しているもの」

少し変わったイントネーション、そして情熱的な高い声のジョアンナは心配そうにしかしどこか愉快だと感じているような複雑な表情をしながら私に語ってくれた。

後年ラスキンを「マッキントッシュの父」と称する人たちもいるが、ラスキンの思いはその名前だけしか残っていない。コンセプトもデザインもそしてユーザーインターフェースもラスキンの描いたものとはまったく違った製品でしかなかった。そしてことの是非はともあれ一九八四年一月二四日、正式に発表されたマッキントッシュはまさしくスティーブ・ジョブズのマシンだった。

未来を見た男 スティーブ・ジョブズ 2018.09.11 hagaromo

リサ不幸な生い立ち

一般的にリサという画期的なプロダクトはスティーブ・ジョブズらがゼロックス社のパロアルト研究所(ＰＡＲＣ)を訪れ、そこで見た暫定ダイナブックすなわちＡｌｔｏ上で走るＳｍａｌｌｔａｌｋのデモを見て触発され、開発がスタートしたという話しが知られているがこれは文字通りには正しくない。

何故ならそもそもＰＡＲＣ訪問は一九七九年末だったが、リサという開発コード名でプロジェクトがスタートしたのは同年初頭のことだからだ。

またリサという名に落ち着くまでには アップル４００あるいはリサ４００といった案も根強かったが、結局シンプルなリサに落ち着いた。

それはアップルⅡに縛られないまったく新しいコンピュータを作りたいというスティーブ・ジョブズの考えに基づいた計画だったが、当初は標準的なインターフェースを持ったＧＵＩもなければマウスもない伝統的なコンピュータとして考えられていた。

そのリサプロジェクトがゼロックス社パロアルト研究所訪問後にＧＵＩを持つコンピュータ開発に変わっていったのは自然なことだったに違いない。何しろスティーブ・ジョブズはＡｌｔｏを見て「人生で最良の物を見た気がするし理性のある人なら、すべてのコンピュータがやがてこうなることがわかるはずだ」と言い放ったからだ。

未来を見る方法 ナリスマ 2018/09/11 hagaromo

それらに伴いアップルも新しい人材が必要だった。そしてリサを完成させるために、宇宙をへこませるために、個性豊かで異能の持ち主たちがアップルに集まりつつあった。

その頃、スティーブの口から出る言葉にはリサというワードが入らないことがないくらいだったが、私を含めて周囲の人間たちはリサという名はスティーブが頑なに父親であることを拒んできたクリスアン・ブレナンが生んだ娘の名だと知っていただけになんとも奇妙で口に出しづらかった。しかし当のスティーブは平気だった。

社内でも意見や思いは複雑に交錯していた。無論スティーブ・ジョブズはブレナンが生んだ娘の名であることを認めたわけでもなかった。そしてあのウォズも奇妙なことに同意見だった。

「リサがジョブズの私生児の名から取った命名というのは事実ではないんだ。あれは別のキーパーソン、そうケン・ロスミュラーの娘の名から取ったんだよ」

ウォズがなぜこんなガセを信じたのか、あるいは意図的にスティーブをかばおうとしたのかは分からないが、頑なにそう主張していたのは確かだった。

しかし当のロスミュラーは、

「ばからしい話しさ。スティーブほど自尊心の強い男が大切な新プロダクトの名に他人の娘の名をつけるはずはないだろう」

未来を見る方 カリスマ 2018-09-11 hagaromo

苦笑いしながら私に説明してくれた。

その後、ロスミュラーは協力的でないことを理由に解雇されるはめになったが一部ではリサの名を巡る確執が原因なのではないかとも噂された。

そういえばリサプロジェクトのリーダー、ジョン・カウチの娘の名だといった噂もあったりして混乱していた。

実際ロスミュラーの娘の名はリサではなかったし、ともあれアップルとしては他の命名をとコンサルタントに依頼もしたが、すでにリサという名はマスコミに広く行き渡っていたからレジス・マッケンナ・エージェンシーの案でLocal Integrated Software Architectureの略だと報道されていた。無論それを信じるものなどアップル社内ではひとりもいなかったが。

そのリサプロジェクト開発はＰＡＲＣでスティーブ・ジョブズらにＡｌｔｏの紹介をしたラリー・テスラーと同僚たちなどがアップルに入社したことで加速したが、ここでもスティーブの言動がプロジェクトの進行にマイナスの影響を与えると考えたスコッティによりスティーブは早々にリサプロジェクトから外され、かわりにジョン・カウチがリーダーに任命された。

この一件でもスティーブとスコッティはバトルを繰り返すことになる。

スティーブは私と二人っきりになると愚痴が多くなった。

未来を見た男 Kaiser Kaiser

「リサは発案からコンセプトをまとめるまですべて俺の努力の賜だぜ、トモ。そうだろう」

両手を振り回しながらスティーブは悔しそうに喋りまくった。

「スコッティの野郎は、俺にアップルのスポークスマンに徹しろといいやがる。このままではリサもアップルⅢの二の舞になるぜ」

私はそもそもスコッティがアップルⅢの二の舞を恐れてスティーブをリサプロジェクトから外したことを知ってるだけに笑いを押さえるのに苦労した。

ただし現場の雰囲気はスティーブが考えているものとはかなり違っていた。ラリー・テスラーやジョン・カウチなど学位を持った技術者から見てスティーブ・ジョブズの存在はアップルの創業者、企業家として尊敬するにしても製品開発に関しては耳を傾けるべき意見ではないと受け流された。

中には技術者でもない奴が（なにほざいてるんだ）とストレートに批難する人もいてそれがまたスティーブを苛立たせた。要はビジョンを共有できなかったのだ。

さて、私はラリー・テスラーがアップルに入社したのを聞き早速彼のオフィスへ挨拶に向かった。

ドアは開いており、足音で振り向いたラリーは一瞬驚いたような表情をしたもののす

未来を見たカリスマ 2018/09/11 hagoromo

ぐに笑顔で入るように促した。
「ご挨拶が遅れました。トモヒコ・カガヤです。以前ＰＡＲＣではお世話になりました」
私は軽く会釈しながら右手を差し出した。
「新米のラリー・テスラーです。トモヒコさんよろしく」
ラリー・テスラーは私の右手を握り返しながらいった。
「まだ資料などの整理が終わってないんだ。散らかってるけど座れる椅子に腰掛けてください」
ラリーの勧めで私は空いていた背もたれがない椅子に腰掛けたが、
「いや、僕の方からカガヤさんのところへ挨拶に行こうと思っていたんですが、先を越されました。ラリーと呼んでください」
といった。
私も（トモって呼んで下さい）といいながらオフィス内を眺めた。彼の持参したものは膨大な資料のようだがそのほとんどは書籍とファイリングされた印刷物のように思えた。
「凄い量ですね」
私の問いにラリーは苦笑いしながら、

未来を見る方法 ナリスマ 2018/09/11 hagoromo

「まだまだ整理には時間がかかるが、ちょうど一休みしようと思ったところです。コーヒーでも一緒にどう」

と気楽に対応してくれた。このときテスラーは三十五歳だったが、生まれた年は私より三年前の一九四五年のはずだ。しかし私が二〇一六年からタイムスリップしたこともあって変な感じだが彼は私の年齢の半分程度だった。

オフィスの隅にあったコーヒーサーバーからカップを二つ持ち、

「何の変哲もないコーヒーだが、何もないよりはましさ」

ラリーは笑いながら私にコーヒーを勧めた。

私は（ありがとう）とコーヒーカップを受け取りながらながらまずは聞いてみた。

「テスラーさん、いやラリー、早速たたみ込むようで悪いけど貴方はなぜアップルに来る決心をされたのですか」

ラリーは微笑をたたえながらこれまた椅子に座り、私の問いが意図していたことのようによどみなく話し始めた。

「それはあなたたちがＰＡＲＣを訪問したのがきっかけなんです」

一呼吸入れたラリーは、

「これは相棒のアラン・ケイとも意見が合ったんだけど、僕らの研究を一番正当に評価してくれたのがあなたたち、アップルだということに気づいたからといったらいいのか

未来を見た方がいいのでは？ 2018/09/11 hagoromo

な」

私は無言で先を促した。

「僕は一九七三年にＰＡＲＣに入ったんだが、沢山の人たちにＡｌｔｏとＳｍａｌｌｔａｌｋのデモを見せました。それも僕たちの大切な仕事だったからです。アラン・ケイの言い方でいうならダイナブック構想を現在出来うる最良の形で実現したマシンがＡｌｔｏだと僕たちは自負していたし可能な限り興味のある方に見せて感心を引きたかったんですがそもそもゼロックスの反応は冷たいものでした」

「無論あなたたちの目標はＡｌｔｏの製品化だったわけですね」

頷きながらラリーは、

「面白いように、というと語弊があるけどＡｌｔｏをビジネスに繋げようと考える人は絶無でした」

「でもスティーブをはじめ、我々が驚き（これだ！）と思ったのだから、誰か同じように考えた人はいなかったんですか」

私はずっと気になっていたことを聞いてみた。

「いや、見学に来る人たちは様々だったことは確かですよ。一流といわれる学者から研究者たち、無論企業からも見学者は多々いたけど、ほんとに僕たちもいらいらするくらい（これが欲しかった）といってくれる人はいなかったんです」

未来を見た力 Kaiser Mayer 2018/09/11 Sunday

ラリーは飲みかけのコーヒーカップを積んであるダンボール箱の上に置きながら、
「あなたたちの反応を見て僕が働く場所はアップルしかないと本当に思ったんです。やはり仕事というものはきちんと評価してくれるところでやりたいものです。僕の年齢を考えてもいまが一番働き盛りだと思うし」
(当然でしょう)というように微笑んだ。
突然ラリーは、
「僕の方からも質問があるんだけどいいですか」
申し訳ないような顔でいった。
私は(なんなりとどうぞ)というしかない。
「失礼な質問だとは承知していますが」
ラリーは断りながら、
「アップルの中でトモ、あなたの存在は異質に思えるんですよ。これはアラン・ケイも同意見でした。ケイはなんか思うことがあるらしく僕にも話してくれなかったが、ともあれあなたは創業時代からの社員なんですか」
私は頷きながら苦笑するしかなかったが、
「それは私がアップルの中で浮いた存在だということかな」
そういうとラリーは慌てて、

未来を見た。カリスマ 2018/09/11 hagaromo

「いやそういうことではないんですよ。しかし口火を切ったのでいわせて貰うけど、アップルは出来たばかりの企業、数年前までガレージカンパニーでしたね。新しい時代の新しい会社ですから皆若い人たちばかりと思っていました」

なるほど、そういう話しかと私は少し安堵した。

「いや、本人の口から言うと実に嫌みに聞こえるかも知れないけど、確かに私のような高齢者は特例のようです」

それは成り行きなのだから仕方がなかったがタイムスリップの事実を話すわけにはいかない。

私は一九七六年一二月にスティーブ・ジョブズに出会い一緒に仕事を始めたこと。確かに彼らとは大きく年が離れているがそれゆえに異能な存在として扱われていることなどを話した。

口を挟まず最後までラリー・テスラーは私の話を聞いていたが、

「なるほど、実は僕もここに来てトモ、あなたのことを様々な人たちにあれこれ聞いてみたんです」

彼は空になったコーヒーカップに再び一杯コーヒーを注ぎながら続けた。

ラリーいわく、アップルの社員たちは口を揃えて実に私は不思議な存在だというらしい。スティーブ・ジョブズの直轄でもあるが敵がいない、素性や経歴を誰も知らない、

未来を見たかりスマ 2018/09/11 hagoromo

分かっているのは日本人であることと年齢くらいだと笑う。そして技術者でもなく事務方でもない独自なポジションをアップルの中で勝ち得たただひとりの人という評価らしい。

なによりもあの五月蠅いスティーブ・ジョブズに全幅の信頼を勝ち得ている人間というよりスティーブ・ジョブズが一目置いている不思議な人物だと言われているという。

(なるほど、こうしたこともあってスティーブは私にセミナーをさせ、一種のガス抜きをしようと考えたのか)と納得した。

「少し前にスティーブ・ジョブズから命を受け私は“Chief Information Officer”という役職についたばかりなんですよ」

私の説明をラリーはあまり納得していない様子だった。

「なるほど、しかし失礼ながらあなたの待遇としては遅きに逸した感じがするなあ」

とラリーは悪戯っぽく笑った。

ラリーは2杯目のコーヒーを飲み干しながら聞いた。

「そういえばあなたがＰＡＲＣを去るとき私に言った言葉を覚えていますか」

私は(なんといったのかな)と記憶をたどった。

「あなたは(今度会うときは一緒に仕事をしよう)といったんですよ。妙に耳の底にその言葉が残っているんですね。それがアップルに来る引き金になったんです」

未来を見るカリスマ 2018/09/11 hagoromo

「それに」
ラリーは一呼吸おいてから、
「その言葉と関係あるのかも知れないが、あなたは未来が見える特殊能力があるという人も複数いました」
ラリーの目は笑っていなかったが、私がどう答えるかを楽しんでいるようにも思えた。
「これまた変人と見られているいう証拠かな。スティーブがそんなことを言いふらしているようですね。しかしラリー、あなたがアップルに来たのはあなたご自身の決断であり意志に間違いないわけです」
そう誤魔化すしかなかった。
「う〜ん、トモあなたにはきっと私らにはわからない情報収集能力とそのソースをお持ちなんでしょうね」
ラリーは科学者らしいいいかたでその場は和やかに過ぎていった…。

確かに私の存在は十数人のガレージ時代にはスティーブの一言でそれこそ特別な存在として認知されたがすでにアップルの従業員は千人をはるかに超えていた。その中で特別というより異質な人間が存在すること自体おかしなことに違いない。そろそろ今まで

未来を垣間見たカリスマ20180911 hagoromo

のように成り行きでアップルに在籍するのには無理があるのかも知れないしスティーブから先日受けたセミナーの依頼もそれらを気にしてくれた結果に違いない。

ところでリサの開発陣は苦悩していた。それでもラリー・テスラーはビル・アトキンソンと共にリサのユーザーインターフェースに関わる基本原則を定義し始めた。

多くの天才や鬼才がアップルに集まり始めたことにスティーブは、

「アップルはエリス島※のような会社なんだよ、トモ。つまりだ、他の会社から移ってきた人たちによって成り立っているんだ。それぞれ個人的には皆超一流の頭脳を持っているんだが、それゆえ他の会社ではトラブルの元になるような連中なのさ」

と、どこか他人事のようにいった。

しかしスティーブの懸念はある意味では的を得ていた。ジョブズがリサプロジェクトから離れざるを得なくなった一九八〇年以降アップルは大きく変化していった。

ましてやジョン・カウチの元で天才たちがそれぞれの能力を十分発揮し協力体制が確立できたかどうかは疑問であり、その開発の進め方は良くも悪くもすでにアップルらしさの欠如はもとより経営陣と技術者たちとのビジョンには大きなズレが生じていた。

※一八九二年一月一日、アメリカ合衆国アッパー・ニューヨーク湾内にあるエリス

未来を見通せ　カリスマ2018/09/11 hagoromo

島に移民局が建設されヨーロッパ移民たちが踏み入れる最初のアメリカとなった。そして名高い自由の女神像は一八九二年から一九五四年まで機能していた当該移民局のあったエリス島の近くの島にある。

株式公開の騒ぎも一段落し、ウォズも去った一九八一年春先のある日、アップル本社の一番大きなフロアーで「パーソナルコンピュータの未来」と題するセミナーが開かれた。

講師は私こと加賀谷友彦だ。スティーブ・ジョブズのたっての要望で開催された勉強会のひとつだったが、出席は任意というふれこみだったものの意外なことに予想以上のスタッフが集まった。

セミナー冒頭にスティーブの挨拶があった。

「これからトモがどんな話しをするのか詳しい内容については俺も知らないが、近未来のコンピュータ、パーソナルコンピュータに関わる内容のようだ。ただしひとつだけ君たち全員に注意しておくことがある。我々は仕事上これからパーソナルコンピュータがどのような進化を遂げるかをもし知ることが出来るなら目標も明確になるに違いないし社員全員の共通認識も持ちやすくなるだろう」

スティーブは全員を見回した後、

未来を見たかりんマ 2018/09/11 hagoromo

「ただしトモの話しはもしかすると君たちには荒唐無稽、単なる夢物語に聞こえるかも知れない。いや、戯言だという奴もいるかも知れない。しかし俺はここで断言しておく。トモの話しを笑いものにする奴がいたら俺が許さない。今回のセミナーは俺やマイク・マークラらが無理に頼んで実現したものだ」

一息いれたスティーブは少し微笑みながら、

「俺はトモと仕事は勿論それこそ衣食住を一緒に四年過ごしてきた。トモは承知のように多弁ではないが彼と話をした奴は分かるだろう。彼の話すビジョンはときに突飛なことに思えるかも知れないが、後で振り返ってみるとその通りになっていることがほとんどだった」

「俺自身驚かされたことが幾たびもあった」

スティーブは思い出すように天井を見上げながら、

「トモと始めて、そう一九七六年十二月に会ったときのことだ。マイクらの支援で俺たちは来年早々法人化することに決めていたが、トモはその日を『1月3日ですね』といった。俺たちはまだ手続きがどのように運ぶかも分からなかったしマイクと打ち合わせをする前だった。だから瞬間マイクが勝手に決めたのかと怒鳴ったくらいだ」

会場内に笑いが起こった。

「その種のことは創業からのメンバーだった、ここにいるマイクやロッドをはじめクリ

未来を見通せ　カリスマ2018-09-11 hagoromo

ス、ビル・フェルナンデス、ダン・コトケらには頷くことが大いに違いない」
出席しているスタッフらは近くにいるマイク・マークラやロッド・ホルトあるいはダン・コトケらに顔を向けたがスティーブが名指しで呼んだ人たちがこぞって静かに頷く姿に皆は息を飲んだ。
「しかしトモは占い師ではないし予言者でもない。正直彼がどのような理屈でそうした結論に達するのかは俺にも分からないが、断言するけどトモは本物のビジョナリーなんだ。彼は技術者ではないが、コンピュータはどうあるべきかを良く知っている、俺たちよりよく知っている。もし彼の思いを俺たちが共有できるのならその実現にはここにいる君たちの力が是非にも必要なんだ。真摯な態度で聞いて欲しい」
スティーブは深呼吸し、
「ではトモ、始めてくれ」
といいながら壇上から降り自分の席についた。

私は緊張しながらもスティーブのいた壇上にあがり、全体を見回した。いやはや錚々たるメンバーたちだ。マイク・スコットやマイク・マークラらアップルの役員らはもとよりだが、ジェフ・ラスキン、ビル・アトキンソンそしてＰＡＲＣからきたばかりのラリー・テスラーやラスキンのマッキントッシュ・プロジェクトに参加したばかりのジョ

未来を見たかりんマ 2018/09/11 hagoromo

アンナ・ホフマン、バレル・スミス、そしてアンディ・ハーツフェルドらの顔も見えた。

私は現役時代、数十人のセミナーから五〇〇人近くも聴衆がいる前でスピーチしてきたから大勢の前で話すことに躊躇はなかった。例えば一九九三年だったか、私は機会学会の“ScentificVisualization研究会”の講師として招かれ、QuickTimeのテクノロジーに関して講演をしたことがあった。

後でお聞きしたところによれば、そこに参列されていた方々は東大や慶応、東工大の教授や先生方だった。しかし当時アップルのデベロッパーでもあり、かつコンシューマ向けとしては最初のデジタルビデオ・ソフトウェア開発にたずさわりQuickTimeに関しては最先端の情報を得ていた自負もあったから臆することもなかった。

しかしそんな私でも天才、伝説の人たちと語られる大勢の人たちの前に立つのは実に場違いに思えたが、ここまできたらやるっきゃない。

「先般、ＣＩＯの職責を命じられたトモヒコ・カガヤです。今日は皆さんそれぞれ大変お忙しい時間を調整し出席いただけたことにまず感謝いたします。スティーブはもとよりスコッティやマイクまで出席されてますが、アップルはそれで仕事は大丈夫なのでしょうか」

未来を見た方は、ハーモニー2018年09月 hagaromo

会場に笑いが起こった。

私はその後すぐ本題に入った。ただし一時間ほどにもなった話しの全てをここで再現するのは長すぎるし退屈だろうから要点のみを記してみる。

まず今日の話のテーマはパーソナルコンピュータが今後三十五年ほどの間にどれほどの進化を遂げるかについての考察だと明言した。なぜ四十年とか三十年という切りの良い数値でなく三十五年という半端な未来を示すのかについては説明しなかったが、無論それは二〇一六年からタイムワープした私の持つ知識の限界だったからだ。

そしてスティーブも言ってくれたようにこれは占いでもなければ私の個人的な夢や希望ではなく事実だと告げ、なぜならそれが歴史というか進化・進歩の必然性だからだと述べた。

「皆さんには釈迦に説法ですが米インテル社の創業者のひとりであるゴードン・ムーアが一九六五年論文上に示したムーアーの法則が知られています。大規模集積回路の集積度の進化はまずこの通りに進むものと思われます」

断言した私の言葉が終わらない内に小さなざわめきが起こったがすぐに静かになった。

「我がアップルは申し上げるまでもなくパーソナルコンピュータメーカーの雄です。ア

未来を見たカリスマ 2018/09/11 hagoromo

ップルⅡでこの世界を切り開き、ホビーにしろビジネスにしろ、いままでには考えられなかった世界を実現してきました。しかし我々が単に機能が豊富で優秀、そして安価な製品を作るだけのメーカーに甘んじるならあと数年でこの業界から消えてなくなるでしょう」

さきほどより大きなざわめきが起こった。

「アップルは単なるメーカーであってはならないと思っています。確かにコンピュータという最も進化したテクノロジー製品を製造することがビジネスの根幹ですが忘れてはならない一番大切な事があります」

少し遅れて席に着いた受付のチーフ、シェリー・リビングストンが胸の前で軽く手を振ってくれた。

「アップルの使命はハードウェアを開発するだけでなく、それらのプロダクトやサービスでいままでにないユーザー体験を提供することが大切です。ただ珍しいものというだけなら皆さんも経験がおありのように早々埃を被って倉庫の奥にしまい込まれるでしょう」

続いて私はパーソナルコンピュータは人類初の無目的な製品なのだといった。冷蔵庫にはテレビにはあるいは洗濯機にはその目的があるし冷蔵庫に洗濯をさせようとする人はいない。しかしパーソナルコンピュータは計算機としてだけでなく絵を描き音楽を奏

未来を見るかりスマ 2018/09/11 hagaromo

で、様々なゲームを楽しむことができる。

近い将来には写真の美しさをそのままパソコンの画面で確認するだけでなくその編集までできるようになるし、離れている人たちと気楽に電子メールで情報交換ができるだけでなく相手の顔を見ながら会話することもできるようになる。

しかしそれだけに目的意識のない人にパーソナルコンピュータを与えても彼・彼女はなにをしてよいのかが分からないし、ましてや何が出来るかも知らない。何が出来るのか、どのような可能性を秘めているのか、ユーザーはどう変われるのかを製品に添えて提供できることがポイントとなる。

確かにアップルⅡは使いやすく分かりやすい製品であり、ために教育の場でも注目を浴びつつあるが、現行のコンピュータは覚えなくてはならないことが多すぎて決して普通の人が遊び半分で扱えるものではないと論じた。

「ここにいらっしゃる皆さんは世辞ではなく異能な人たちばかりです。したがってご自分をユーザーと見立てた製品設計、製品企画をやってはなりません。このことは人として優秀であるとか無能という違いがあると申し上げているのではないのです。私たちにはそれぞれ役割があり得手不得手もあり、望む世界が違うのです。理想的にはその世界の全ての人たちが目を光らせ嬉々として手にとってくれるような製品を作らなければな

未来を見るかもしれない 2018/09/11 Nagaoka

りません」

私は座っている人たちの反応をみようと再び一〇〇人以上もいるであろう参加者をゆっくりと見回した。

「したがって我々はアップルⅡあるいは将来の新製品で普通の人たちが何ができ、日常の生活やビジネスにおいてどのような可能性と変化が期待できるかを明確に示す必要があるんです」

話しのスピードを少しあげて、

「ハードウェア・テクノロジーは先のムーアーの法則をベースにＩＣの集積度が飛躍的に向上します。ということは三つの改革が期待できることになります。ひとつはコンピュータの小型化、二つ目は処理スピードの向上、三つ目にコストダウンですね」

続いて私たちはアップルⅡでこれまで大型コンピュータしか知らなかった人たちに机上に乗る小型のコンピュータで多くのことができることを知らしめたこと。しかし三十五年後の未来を考察するならコンピュータはアラン・ケイ氏が提唱しているダイナブックのサイズを通り越し掌に乗るサイズになること。いや、これはＳＦの世界を申し上げるのではないが腕時計がコミュニケーションツールになるのだといった。

しかしそれを実現するためには集積度のさらなる向上、ディスプレイの進化、バッテリーの小型高性能化が是非とも求められることは申し上げるまでもないことだとも。

未来を見る力 Kaiser Mayer 2018/09/11 hagaromo

会場内にはいくつかため息が漏れ始めた。

私は少しリラックスしてきたこともあり、再び会場内の人たちと視線を合わせながらゆっくりと見回しながら話しを続けた。

「デバイスは小型化するだけではありません。そのタバコの箱より一回り大きなサイズの中に大別して四つの機能が包括されるでしょう。ひとつは無線で使う携帯電話、ミュージックプレーヤー、ネットワークインフラを使う電子メール等の情報端末機能、そして超小型のパーソナルコンピュータとしてアプリケーションやゲームソフトの実行です。さらにこの小型の端末はより新しい世界を作り出す可能性を秘めています。その第一はクレジットカードの情報をこのデバイス内に記憶させ、ショップのレジ近くに設置してある読み取り機にかざすだけで安全にスマートに買い物が出来る『財布のいらない』時代が来ます。さらに電車やバスは勿論、ドライブインなどでもそうしたデバイスを読み取り機にかざすだけで通過できるようになるのです」

私は手元に用意された水を一口飲んで喉を潤した。

続けてすべてをいま想像するのは無理かも知れないが、こうしたデバイスがアップルからリリースされたら世の中は、いや世界はどのようにかわるのだろうかを真剣に考えるべきだといった。そしてこれまた重要なのは「何かができること」だけではない。いかに直感的に分かりやすく目的の機能を呼び出して実行できるか、操作を極力シンプル

未来を見るカリスマ 2018/09/11 ハガロマ

にしなければならないとも。
分厚い取扱説明書を端から端まで何度も読まなければわからないようなユーザーインターフェースでは誰も使おうとはしないだろうと。
我々がこれから相対する顧客のほとんどは技術者ではなく一般的な人たちであり、主婦であったり学生あるいは子供たちなのだから。
「例えば未来の極小・極薄のモニターは当然カラーでプリントされた写真を見るのと同等の精緻な表示が可能になります。そのデバイス自体には物理的なボタンはほとんどなく操作はディスプレイ上の仮想ポイントをユーザー自身の指で触れればそれだけで目的を達することが出来るようになります」
続けて、画面上のボタンはデザイン的にもサイズや機能的あるいはその位置もソフトウェアによるものだから自由度が高いことになる。そして単に触れるという行為だけが操作ではないと言った後に、
「いまこの会場の中にはリサのＧＵＩで苦労されている方々もいらっしゃいますが、貴方たちなら理解してもらえると思います。
リサはＧＵＩを持ちその操作の多くはマウスと呼ぶ小型のデバイスを使うことを目指しています。
さて、そのマウスボタンの数をいくつにすれば良いかで苦悩していると聞いてます。

未来を見た力 Kaiser Kaiser

数を増やせば一見便利そうですがオペレーションの瞬間にどのボタンを押すべきかでユーザーは迷うことにもなりがちです。

例えばマウスのボタンがひとつだけと仮定してみましょうか。普通に考えればボタンは押すことで目的を果たすわけですからひとつでは役に立たないと思う人もいるかも知れません。ひとつのボタンでは機能というか働きが限られてしまうと考えるのが普通でしょう。そうするとボタンは二つ必要だ、いや三つはあった方がいいという議論になります」

マウスボタンの数について研究していたラリー・テスラーが思わず我が意を得たりと手を叩いた。

それにつられて周りが和み始めた。

「だとしても我々は固定観念に凝り固まってはなりません。例えひとつだけのボタンだとしてもその操作は押す、長押しする、押したままマウスを移動させる、二回続けて押すといったバリエーションをソフトウェアで認知させそれぞれの機能に割り振ることもできることを知っています。いや押さずにある領域にマウスポインタ、すなわちカーソルを置くということも一種のコマンドになり得ます」

ラリー・テスラー、ジョン・カウチそれにビル・アトキンソンら数人が大きく頷いているのが見えた。

未来の国の見たかりんマ 2018/09/11 hagoromo

それとこうした携帯可能なデバイスを実現するのにはバッテリー駆動が肝心となること。それもフル充電すれば最低十二時間程度の連続使用が可能な超小型のバッテリーが必要だと話した。

「しかし残念ながら、申し上げるまでもないが現在のテクノロジーではこれらを実現するのは無理です。しかし無理だから関係ないと切り捨ててはアップルに未来はありません。できることからいわゆるデスクトップ機にこうした能力・機能を実現しようとする意志、心がけが肝心だと思います」

この世界にタイムスリップして四年にもなるというのに相変わらずつたない英語ではあったが、ゆっくりと話した。

繰り返すが、近未来のパーソナルコンピュータは現在のＤＯＳ(ディスク・オペレーション・システム)のようにユーザーが暗号のようなコマンドを入力しなければならない操作系では普及に限界が生じるだろうこと。

アップルⅡは大変使いやすいと評価されているが、それでも一般ユーザが理解できることはほんの一握りのことに違いない。

スティーブらと一緒に一昨年の末にゼロックスのＰＡＲＣへ見学に行ったが、そこで見たことが我々の当面の目標に違いない。無論Ａｌｔｏの真似をすればすむことではな

未来を見た方がいいの 2018/09/11 hagaronno

いはず。アップルならではの新機軸を多々取り入れて市場の、業界の度肝を抜く製品作りをしようではないかと説いた。

パラパラと小さな拍手が湧き起こり、それが次第に大きくなった。

最後に私は二〇一六年十二月六日にタイムスリップした際、持参していたｉＰｈｏｎｅ６ｓ Ｐｌｕｓをポケットから取りだした。

すでにバッテリーは完全に切れているので起動する心配はなかったし事前にスティーブ・ジョブズの了解を得、私が独自のネットワークを使って製作した未来を予測するモックアップだと称して見せることにしたのだ。

拍手が収まったところで私はそのｉＰｈｏｎｅを右手に持ち、壇上から皆に見せながらいった。

「これまでの私の話は通り一変の夢ものがたり、ＳＦ、悪い冗談と聞いた人もいるかも知れません。しかし情報の出所は教えられないものの正確性を重視した話しだと理解していただきたい。とはいえ話しだけでは面白くもないだろうからここではじめて皆さんに私がお話しした未来のプロダクト、掌に乗る情報端末とも呼べる製品のモックアップをお見せしたいと思います」

そういうと会場が大きくざわついた。口笛が飛び交い奇声を上げる者もいた。

「遠くてよく見えないかも知れませんが、興味のある方はセミナーが終わった後で時間

未来を見てください 2018/09/11 hagoromo

の許す限り手にとって見てください。無論モックアップだから動作しませんが、未来のアップルがこうしたプロダクトの実現に努力することこそ世界の覇者になれる道だと信じています。そしてそれが世界中のユーザーの手に、ポケットにバッグ内に入ることを目標にしようではありませんか」

そう告げた後、続けてこの場では触れるだけに留めるものの、後三〇年ほど経ったとき、ひとつの重大なキーワードをいかに制することができるかがアップルを含めたＩＴ企業の運命を左右するだろうと話し、それはＡＩすなわち人工知能だと付け加えたが、これにはほとんど反応がなかった。

「ただし、いまお話しした一連の進化はセグメント毎に、年代順にくぎれるものではなくシームレスにそして一部が重複し繋がっていくものです。だからこそ我々も日々の基礎研究を怠ってはならないと思います」

と締めくくった。

「スティーブ、これで私の話を終えるがなにか付け加えることがありますか」

私は満足そうに最前列に座っているスティーブ・ジョブズに話しを向けた。

スティーブは座ったまま首を横に振り、特に話すことはないと無言で意思表示した。

「長い間、静かに聞いていただきありがとう」

私はお辞儀をしながら両手を軽く合わせて合掌した。そして壇からから降りようとし

未来を見るカリスマ 2018/09/11 hagaromo

たがその瞬間、壇上に数十人のスタッフらが駆け上がってきた。無論モックアップとして提示したｉＰｈｏｎｅを身近に見るためだ。

ビル・アトキンソン、ラリー・テスラー、バレル・スミスらは明らかに顔色が変わっていた。ジョアンナ・ホフマンは周りに押されたのか羽織っていたカーディガンが片方肩から外れかかっていた。

後にハードウェアの天才と呼ばれるバレル・スミスが我先にｉＰｈｏｎｅを奪うように手に取って私の顔を見ながら、

「これって本当にモックアップなの」

と聞いた。数人がｉＰｈｏｎｅを取り合っていた…。

頷くしかない私だったが、ハードウェアに詳しい彼から見て精度の高さだけ見ても尋常な作りではないことを察知したようだ。無論ｉＰｈｏｎｅの背面にはあのアップルロゴが燦然と輝いていたから皆それにも目を見張った。

それはともかくモックアップとして見せたｉＰｈｏｎｅの説得力は絶大だった。これを見せなければ何といわれようと彼ら彼女たちの多くは私の話を一種の戯言としか捉えなかったように思う。

未来を見た方がいいのか 2018/09/11 hagaromo

後年、アップルのデザインチームは数多くのモックアップを制作して実機への期待度を高め、設計段階だけでは分からない操作性の確認などを行うのが好例となっていくがそれはこの時の教訓を生かしたものだといわれている。ともあれ私はしばらくの間、そのモックアップと称した未来の超小型デバイスについて様々な説明を求められることになり、整合性のある合理的な言い訳をすることに苦労した。

ウォズが飛行機事故を起こし、まだ完治していない三週間後アップルにまたまた激震が走った。

アップルは業績は良かったものの、ＣＥＯのマイク・スコットから見れば「アップル船」は少しばかり沈みかアップルという希有な企業の社風が壊れつつあったし、その原因はさまざまな人間が増えた結果、無能な社員が重荷になったからと感じたようだ。荷が重ければそれらを捨てないと船は沈んでしまう。スコッティはアップルⅢの失敗に鑑み、一大決心をした。

事実アップルの自由を重んじる企業文化や会社が社員らに示していた善意と寛容さをもってしても社員各自の能力差を無視することは出来なくなったというのが大きな理由だった。

確かにそうした緩んだ空気がアップルⅢの失敗につながったというのも説得力のある

未来を見た。カリスマ 2018/09/11 hagaromo

意見だった。
すでに気心が知れ友人となっていたロッド・ホルトがいみじくも私に言ったことがある。
「仕事ができないうえに、まともに働かないエンジニアが大きなヘマをしたら普通の会社なら首だよ。しかしアップルはそいつらを管理職のポストにして摩擦を避けている。この会社じゃ人を首にしないんだよ、トモ。それでは無能な管理職だらけになってしまう」
その頃、スティーブのオフィスに度々スコッティとマイク・マークラが集まり静かではあったが激論が繰り返されていた。そもそも私はＣＩＯになって専用のオフィスを宛がわれていたがスティーブが社内にいるとき、ほとんど彼と一緒だったし重要な会議のその場にいた。
「いいかいスティーブ、俺は物わかりが悪い単なるシブチン社長ではないぜ」
スコッティは感情をおさえつつ口火を切った。
「俺は常に社内を歩き回り、良しにつけ悪しきにつけて仕事の進捗状況をこの目で確認し彼ら彼女らと話し合ってきた。彼ら彼女らがなにを考え、いまどんな状況にあるかを社内で一番知っているのはこの俺だ。なあ、マイク…そうだろう」
同意を求められたマイク・マークラは無言で頷いた。

未来を見たカリスマ 2018/09/11 hagoromo

「皆の志気を高めるため、承知のように会社の負担で全員をハワイ旅行させたこともある。スコッティは派手好きだという批難もあったが、それもこれも仕事によい結果を求めてのことだ」

スコッティはスティーブ、マイクそして私へと順番に視線を送りながら続けた。

「それがどうだ。いがみ合いが増え、責任のなすり合いばかりだ。アップルらしさとかよき時代の社風などどこにもないよ」

スティーブが口を挟んだ。

「だから何度も取締役会や改善委員会で皆で話し合ったよ。それだけの理由で君の言う四十一名もの解雇が本当に必要なのか説明してくれよ」

その言葉を吟味するようにスコッティは（君らしくもない物言いだな）といいながら話しを続けた。

「スティーブ。創業者の君に意見することではないが、社風というものは取締役会や委員会で定めるものではないし、求めてはいけないんだ」

「そしてこの決定は常々君の言う、B級の人間を増やさないための策なんだよスティーブ」

小一時間もの話し合いの末、スティーブの目にはうっすらと涙が浮かんでいたし、マイクも沈んだ気持ちを隠そうともしなかった。

未来を見た方がいいのか？ 2018/09/11 hagoromo

スコッティがたたみ込んだ。

「誰かが悪者にならなくてはならないなら、俺が悪者になるよ。収まりが付かなくなったらこの俺を首にすればいい。ともかく、偽善とイエスマンと無謀で無責任な計画にはもううんざりだよ」

スコッティは吐き捨てスティーブのオフィスを出て行った。

後に残ったマイク・マークラは苦虫を噛みしめたような顔で、

「まあ、仕方がないなスティーブ」

といいながらドアを開けた。

こうして四十一名の社員の解雇が決まり、ひとりずつ対象者がスコッティのオフィスに呼ばれた。

アップルという会社に「首切り」などあり得ないと思っていた社員らは次は自分が呼ばれるのではないかと恐れた。彼らにとってこれまで無邪気に信じ合ってきた時代の終わりであり、会社に対する忠誠心の終わりでもあるように思えた。

この最初の大量解雇はブラック・ウェンズディー(魔の水曜日)などと呼ばれたが、波紋は会社側が考えていた以上に大きくなっていった。それにスコッティは暗に(これは最初の一歩だ)と臭わすなど社内の反感を買っていった。

マイクとスティーブにも当然のことのように社員らの陳情やクレームが多々舞い込ん

未来を見たかりスマ 2018/09/11 hagoromo

だが、二人はまるで知らなかったかのような態度で社員らに接していた。ためにスコッティは次第に孤立し窮地に立たされていった。

その数日後、受付カウンターを通ったとき、シェリー・リビングストンに呼び止められた。

「トモ、ちょっと話し相手になってよ。もう皆がギスギスしていて私も気が滅入るのよ」

「それは私も同じさ、どうにもスコッティだけに責任を押しつけて問題を終息させようという感じだからね」

我が意を得たりといった表情でシェリーは、

「あなたは創業時からアップルにいるんでしょう。そして今はＣＩＯと偉くなったわよね。ならガレージで好き勝手に営業していたアップルという会社を株式公開し事業部制を置き、年商三億ドルに達する多国籍企業に育てたのは誰のおかげかおわかりでしょ、トモ」

「無論承知しているよ。それに君はスコッティが好きだからなあ」

少し伏し目がちになったシェリーは怒りをどう収めようか自分と格闘していた。

「皆はスコッティのことを気分屋だというけど、ここだけの話…気分屋というならマイクだってスティーブだってその上を行ってるわよ」

未来を見る方 ハワイ 2018/09/11 hagoromo

珍しくシェリーの口から経営陣への不満が出た。

結局事態の収拾を計らなければならなくなったマイクとスティーブは三月、ハワイから戻ったばかりのスコッティの社長解任を決めた。

当のスコッティは社長解任が発表されたとき、飼い殺しのような待遇には絶えられないとアップルを去ることを決断する。

ロッド・ホルトは大きなため息をつきながら私に呟いた。

「スコッティは自分の全人生をアップルに捧げてきたからな。彼はいつも働きづめだったし飲酒したり二日酔いになる余裕もなかったはずさ。それに彼は他に就職しようなどという気はないだろうから今後が気がかりだよな」

事実スコッティは自宅のブラインドを閉めたまま一歩も外に出ず、電話にも出なかった。

この事態は予想以上にスティーブのメンタルな部分に大きな影響を与えたようだ。

あるときスティーブは小声で私に打ち明けた。

「トモ、皆がどう言ってるかはともかく俺はスコッティのことが気になって最近よく眠れないんだ」

「社長解任を後悔してるのかい」

未来を見るかしこ 2018/09/11 hagoromo

私の問いには答えず、
「どうにも気持ちがざわついてさ、スコッティが自殺したという電話がかかってくる夢を見るんだ」
スティーブはスティーブで魔の水曜日の責任をすべてスコッティに押しつけたことへの罪の意識に苛まれていたようだ。
そういえばアップルを去るとき、スコッティはエントランスまで送っていった私の肩に左手を置きながら右手でシェリーと握手しつつ、
「長い間、世話になった」
「君とはもっと一緒に仕事をしたかったよ」
と笑顔をみせながら呟いた。
「アップルは私が育てた子供なんだよ、トモ」
そう呟いてマイク・スコットは背中を見せた。
アップルⅢの失敗、ウォズの記憶喪失、魔の水曜日そしてスコッティの辞職にもかかわらず、スコッティの育てたアップルは繁栄を続けた。それを支えたのは相変わらずアップルⅡの売上げだった。

未来を見た。カリスマ2018-09-11 hagoromo

知野弘文と出会う

「トモ、ちょっと頼みがあるんだが」

久しぶりに休暇が取れた日曜日の午後、私の自宅をスティーブが訪れた。

そう言えば彼が我が家を訪れたのは引越直後にお祝いを持って現れてからは初めてだった。

スティーブの豪邸とは比べものにはならない小さな借家だったが、私はそのお気に入りのリビングルームに彼を誘い入れた。

「おい、俺ははじめて見たが、これは君の奥さんかい」

小さなフレームに入れてテーブルの端に置いてあった女房の写真に気づいてスティーブは聞いた。

「ああ、たまたま名刺入れに若い時の写真が一枚入っていたのに気づいてね」

「ふうん。子供みたいに見えるな、可愛くてさ」

スティーブ精一杯の世辞なのだろうが、私が反応する間もなくソファーに座り込んで話し始めた。

「トモ、休みなのに悪いがまずは君が仏教とか禅についてどう考えているのか教えてくれないか」

未来を見たかりしてマ 2018/09/11 hagoromo

スティーブは真面目な顔をしていった。
確かに私は日本人だが、あらためて日本文化とか仏教や禅といったことを急に話題にされてもきちんと勉強したわけではないので実に心許ない。
「スティーブ、君が仏教とか日本文化について興味を持っていることはよく知っているけど私は単に日本人というだけで詳しくないから雑談しかできないよ」
私は最初に言い訳めくが釘を刺しておいた。
「ああ、それでいいんだ」
スティーブはリラックスした姿勢をしながら窓の外を眺めた。
「相変わらずひとり暮らしで何もないけど、ワインでもあけようか」
私は先週買いだめした赤ワインのボトルとワイングラス二つを持ってきてスティーブの前にあるテーブルに置いた。
グラスが汚れてないかを確かめながら私は、
「何が知りたいの、スティーブ」
と聞いた。
「トモ、君は俺がコーブン(知野弘文=乙川弘文)を禅の師と仰いでいることは知ってるよな」
「知ってるよ。前にも聞いたことがあるしスティーブ、君が知野さんを知ったのは確か

未来を見たカリスマ 2018/09/11 hagaromo

私が君のガレージ前に現れた年の数ヶ月前だったみたいだね」
「うん、禅センターに行った時に知り合ったんだ」
スティーブは私がワインをグラスに注ぐのを待ちきれないかのように手を出した。
「久しぶりに近々そのコーブンと会う約束をしたんだけど、トモ、君も一緒に来てくれないか」
スティーブはあの人を射貫くような視線を一瞬私に向けたが、すぐに穏やかな表情に戻った。
私は何だか禅や仏教を勧誘されているみたいでこそばゆい感じをしつつ、
「それはかまわないが、私を誘うなにか意図があるのかい」
思ったことをストレートに言ってみた。
スティーブと四六時中付き合ってきたが、彼に対して日本人特有の遠慮はすべきでないことを勉強したし、スティーブ自身も曖昧な物言いを好まなかったから極力ストレートに発言するよう心がけていた。
「いや、まさか君に禅を勧めようというんではないんだ」
私の考えたことが分かったのかスティーブはワイングラスを目の高さまで上げて、
「いつかコーブンと電話で話したとき、トモのことが話題になったんだ。彼が君と会ってみたいというんだ」

未来を垣間見たカリスマ20180911 hagoromo

そういいながら一杯目を飲み干したスティーブは自分のグラスに自身でワインを注いだ。

私は自分が苦笑したのをスティーブに知られないようにと顔の向きを変えたが、

「嫌かい」

スティーブは私の心を読んだかのようにいう。

私はスティーブの真正面に椅子を向けて彼の視線を跳ね返すように話し始めた。

若い頃に私は宗教といったものの魅力と怖さを知った。スティーブがそうだったように自分という人間は何者であるのか、どのような人生がこれから待っているのかを知りたくて、というより自分の未来に大いなる不安を抱いて聖書を読んでみたり弘法大師空海の生涯を追ったりした時代があることを話し始めた。

要はどのような宗教もそれを信じた人と信じられない人の間には大きな壁ができること、特定の宗教の信者になったために人格が変わった人も見てきたこと。本人が幸せならそれでよいのかも知れないが、仏や神に依存しすぎ、ましてや新興宗教にのめり込みすぎて家庭まで壊した人を見聞きしてきただけに宗教とて人生万能の薬ではないと肝に命じていることを話した。

「なにかを信じることは悪い事ではないけど、そのために他の世界が見えなくなったり

未来を見るかりんマ 2018/09/11 hagaromo

人の意見に耳を傾けないのでは何の為の宗教なのかと思うんだ、スティーブ」

両手の指先を合わせながらスティーブ・ジョブズは私の話を黙って聞き続けた。

「スティーブ、私は君に説教をする気はさらさらないけど、人生の師は決して僧侶だけではないと思うんだ。無論両親や学校の先生、ビジネスの先輩たち、近所の老人たちもそうかも知れないし時には友人たちこそが自分にとって人生の師でありうるときもあるんじゃあないかな」

私はまだ口をつけていなかったワインをひとなめして続けた。

「特に僧侶という立場は我々凡夫にとって、ああ、凡夫って意味分かるよね」

スティーブは頷いた。

「しかし僧侶という立場は我々凡夫にとって学校の教師や近所の老人、友人たちとは比較にならない影響力を持っているんだ。なにしろ僧というのは本来仏教の戒律を守る、男性の出家者である比丘、女性の出家者である比丘尼（びくに）の集団のことを意味するから職業でもない。そして一般人には絶えられないきつい修行を続け人の欲望をコントロールでき人生の意味といったことを悟っているというのがあるべき姿だよ。だからこそ人々に尊敬されるわけだし、我々は僧侶を大学の先生に対するのとは違った立場で相対するわけだね」

スティーブは穏やかな微笑をたたえながらいった。

未来を見つめたカリスマ 2018-09-11 hagaromo

「トモ、君は僧侶が嫌いなのかい」

私は明確な言葉でそのことを言わなかったが、私の意図をスティーブは理解したようだ。

「トモ、君の僧侶や宗教に対する危惧は俺も分かってるつもりさ。僧侶とて人間だし食事もすれば宗派によるようだが女も抱くだろう。だけど俺の知らない世界を知っていることも事実さ」

ワイングラスを見つめながらスティーブは、

「それに俺は一時期、日本に行って僧侶になろうとしたこともあったしダンと一緒にインドまで行ったけど正直宗教やスピリチュアルなあれこれには幻滅して帰ってきたんだ。だから俺は仏教をそのまま信じているわけでもないんだ。

そうそう、俺の考え方が間違っているのかも知れないが俺にとって禅は宗教というより心身共に自分を磨き上げるメソッドだと捉えているんだ。禅に魅せられたのは知的理解よりも体験に価値を置いていたからなんだよ」

一気に話したスティーブはソファに座り直して続けた。

「前にも話題にしたが俺も仏教に関する本を大学の図書館で読みあさったよ。『あるヨギの自叙伝』『宇宙意識』『タントラへの道』『仏教と瞑想』そして『禅マインド ビギナーズ・マインド』などかな」

未来を見る方法 ＿＿＿＿＿＿＿＿

さすがに複数の著名をすらすらと話すスティーブだったからそれらを本当に熟読したんだろうとあらためて感心した。

「しかし、だ。トモ、俺は知的理解、そうだな、頭でいくら理解しても実践なくしてなにも変わらない変われないことを思い知ったよ。いくら本を読んでもそれだけでは現実は変わらない。その点禅は実践を重視するだろ、そこに科学的なニュアンスを感じたんだ。その頃の俺に一番足りなかったのは知ることではなく体で体験することだったんだ。どうだ、おかしいかな」

「そうだなあ、私には明言する資格はないけど禅ももともと禅宗といって坐禅を基本的な修行形態とする宗教だよね」

私は若いときに興味本位で知った裏覚えの知識を絞り出しながら話しを続けた。

禅とはもともとサンスクリットの dhyāna（ジャーナ、パーリ語では jhāna）の音写であり、音写「禅那（ぜんな）」の略である。さらに禅那を今風に和訳すれば瞑想ということになる。

「ただし受け売りだけど、禅はまさしく体験によって伝えるものこそ真髄だとする不立文字（ふりゅうもんじ）を強調するから、瞑想と禅は別物だというのが専門家の通例のようだね」

スティーブは私に言われなくとも禅の歴史やその成り立ちに関しても知っていたから

未来を見る方法 ＿＿＿＿＿＿＿＿

話しそのものは難しいものだったがお互いに理解はできた。

私は小腹が空いてきたのでワインに合いそうなスナックを取りだしてテーブルに置いたが、スティーブは見向きもしなかった。

「スティーブ。これは私がタイムスリップした二〇一六年当時の情報だが、禅というより、瞑想には科学的な効果・効用があることが証明されたらしいよ。無論昔から精神統一に良いとか呼吸法が健康に役に立つといった話しは多々あったけど、アメリカの研究者がいくつか重要なことを発見したというテレビ番組を見たよ。確かマインドフルネスというんだがね」

私が口にしたスナックを横目で見ながらスティーブは（体によくないよ）とでもいうように両肩を上げた。

「最新の脳科学の研究で宗教性を廃したマインドフルネスは脳を改善し鬱病の再発防止やビジネスにおいても効率をアップさせる効果があることが証明されたらしいね。とはいえスティーブ、禅も仏教ならその究極は悟りを開くことが目的だろう。しかし君は禅から何を学ぼうとしているの」

スティーブは少し考えた後で笑いながらいった。

「そうだな、最初はともかく自分の気持ち、心を落ち着かせたいと思っただけなんだ。当時の俺は常に心穏やかでないガキだったからな。しかし正直にいえば、俺は当時何か

未来を見たカリスマ 2018/09/11 hagaromo

にすがりたかったんだ。だから『禅マインド ビギナーズ・マインド』の影響を受けてロスアルトス禅センターに行った時にコーブンに出会ったんだよ。俺にとっては実に神秘的でさ、今まで出会ったことのない類の人だと思ったよ」

私はその頃の彼の心の葛藤を分かるような気がした。自分の来し方と未来が果たしてどうなのか。自分が何者で何を成すべきかも分かっていない若者がなにか拠り所となるものが欲しかったに違いない。

スティーブと二人だけで長い話しをするのは久しぶりだったが、数日後に彼と禅センターに同行することを約束して別れた。

帰り際にスティーブは真面目な顔で、

「だけどトモ、よい機会だから白状するけど、俺にとっての一番の師はトモ、君なのかも知れないな」

そんな呟きを残してスティーブ・ジョブズは帰っていった。車の爆音を響かせながら。

一週間後、スティーブも久しぶりのようだったが彼の車に乗り一緒に禅センターに向かった。カリフォルニアの空は絵はがきの写真みたいに青かった。

知野弘文は小ぎれいな袈裟を纏い、両掌を組みながら笑顔で我々の前に現れた。

未来を見て想像していたとおり小柄な人だったが全身から活力がみなぎっているように感じられた。私はどう挨拶してよいか迷ったが右手を差し出しながら、
「加賀谷友彦です。お目にかかれて光栄です」
といった。
知野は、
「ようこそ、おいでくださいました」
と独特なイントネーションの日本語でいいながら軽く合掌した後に私の手を力強く握った。
「ここで日本の方に会うのは久しぶりです。スティーブから貴方のことを聞き一度お会いしたいと思っていました」
今度はスティーブにもわかるようにとの配慮かブロークンな英語でいいながら、
「こちらへ」
私たちを日本間でもなければ洋風でもない質素な一室へ誘った。
どうやらコーブンは私の年齢が気になったようだ。アップルの社員としては確かに異例の高齢者であることは間違いないし、そうした人材を何故スティーブ・ジョブズが気に入り全幅の信頼をしているかに不審を持ったらしい。もしかしたら怪しい人物に丸め込まれているのではないかと危惧したのかも知れない。

未来を見る見なかりしマ 2018/09/11 hagaromo

とはいえまさか（私は二〇一六年の未来からタイムスリップしてきた人間です）と白状するわけにはいかない。

第一スティーブとの約束ごとでスティーブの承諾なく本当の事を話してはならないと決めていた。そもそも本当の事をいったところで頭がおかしいジジイとしか見られないだろうが。

私といえば反対にスティーブが信奉するコーブンという僧侶とは実際どのような人物なのか、スティーブがなぜそんなにも高く評価しているのかを見極めたいとその場に挑んだ。

知野弘文＝乙川弘文が曹洞宗の僧だということ、スティーブとの関係については日本で出版された「ゼン・オブ・スティーブ・ジョブズ」などから知ってはいたが私の知っている情報はそんな僅かなことだけだった。

コーブンとの話しは小一時間も続いたが、この初面談はスティーブの期待外れだったかも知れない。

何故なら話題は禅とか仏教のことより音楽だったり映画の話題だったり、あるいは初めて渡米したときの戸惑いといった取り留めのないものとなったからだ。

特に初めてアメリカの土地を踏んだときのカルチャーショックについては話しが合った。

未来を見つめ見たかりとマ 2018/09/11 ﾊﾞｶﾞﾔﾛｰﾝ

「私が初めてアメリカに来たのは一九六七年でしたが、カガヤさんの初渡米はいつだったのですか」

私はいきなりコーブンに問われて一瞬ドギマギした。それは私の初渡米は一九八七年のことで、この年より六年も先の話だからだ。

うっかり思ったことを口から出してしまえば大きな矛盾が露わになってしまうが、そうした点には最新の注意をする癖というか習慣がついていたので私は、

「オーディオ関連の仕事でスティーブに会う前に初めてアメリカを体験しました」

と誤魔化した。

幸いコーブンはそれ以上話しを突っ込まず話題は初渡米での言葉の不自由さは勿論、レストランで注文し出てきた料理の量が多すぎて困惑したこと、チップ社会に慣れるまでギクシャクしたことなどなどの思い出話となった。

特にコープンは私がボストンの日本食レストランで揚げ出し豆腐を食べていたとき、隣の客から（それはなんだ）と聞かれ、上手く説明ができないため（豆腐の天ぷらだ）と説明した話しや、ニューヨークでラーメン屋を見つけ嬉々として入ったまではよかったが、店内が日本的だったからか同行の一人が思わず（味噌三つに醤油一つね）と日本語で注文したものの（Excuse me...）と言われた話しに声を上げ手を叩いて豪快に笑った。しかし常にその目は冷静さを欠いていないように思えた。

未来を見る人 カリスマ 2018-09-11 hagaromo

後で思い返すとコーブンは私の持っている僅かなわだかまりを察し、意識的に仏教とか禅の話しを避けたのかも知れないと気がついた。

このとき、スティーブ・ジョブズはまだ二六歳であり、知野弘文も四三歳だったが私は彼らとは年代がまったく違う年寄りだった。だからか、その私の目から見て、一人の日本人から見て知野弘文はどう見ても普通の僧侶であり、特別な存在には思えなかった。

私の印象はといえば、コーブンは袈裟こそ着ているものの、話しのとおりの人物であるなら合理的な考え方をする人のように思えたし、かつ世俗というものをすべて肯定するようなその物言いに僧侶というより話術が巧みな優秀なビジネスマンのように思えた。

帰り際にコーブンは、

「スティーブ、カガヤさんを連れてきてくれてありがとう。この人は私の知らないことを沢山体験しているように感じる大変興味深い方だね」

といいながら、私に向かって合掌しつつ、

「また機会を作ってスティーブと一緒に来てください。楽しみにしています」

といいながら如才なく駐車場まで送ってくれた。

未来を見る方法 ＿＿＿＿＿＿＿＿

とはいえ暫くぶりにコーブンと会ったスティーブ・ジョブズの表情には喜びが溢れていた。

なにしろ出会った当初、スティーブは日本に行き永平寺の門を叩いて僧侶になろうと真剣に考えていたというが、コーブンが、

「結局は禅の修行も事業も同じだ」

と説き、日本行きを断念させたことがあったという。

確かに、それが本当なら知野弘文の物言いが少し違っただけでスティーブ・ジョブズは禅寺に入りアップルという企業は残らなかったに違いない。

マッキントッシュ生みの苦しみ

アップルは忙し過ぎた。一九八〇年から一九八一年初頭は株式公開、アップルⅢの失敗、魔の水曜日、ウォズの飛行機事故そしてアップル最初のＣＥＯマイク・スコットの辞職と大揺れのアップルだった。しかしアップルⅡの売上げが依然としてアップルを支えていた。

ウォズがただただ好きでやった仕事の結果のアップルⅡが支えていたのだ。

未来を見る。カリスマ 2018/09/11 hagaromo

ちなみに少し先の話だがそのウォズは一九八一年の秋には大学の四年の課程を終えるため、カリフォルニア大学バークレー校に復学するという。ただしスティーブ・ウォズニアックとしてではなく、学生たちや教授陣の特別な目を避けるため仮名で復学を計画していた。そしてアップルはといえば四一名もの解雇者を出したその後、あらたに多くの社員を新規に採用し心機一転の心意気を見せようとしていた。

そんなある日、私が自分のオフィスに戻ろうとして受付前を通ったときシェリー・リビングストンがカウンターに入ろうとしているところに出会った。

「あら、トモ。まさかあたしを見て素通りする気ではないわよね」

快活なシェリーは私の反応を待たずに、

「トモ、今日は素敵なスーツ姿ね。どうしたの、そのまま結婚式にも出られるわよ」

「ジジイをからかってはいけないよシェリー」

私も少し無駄口をたたきたかったので受付カウンターに片肘を置いてシェリーに向き直った。

幸い周りにはだれもいなかった。

「だってスーツ姿で会社にくる人などここには数えるほどしかいないから目立つのよ」

「確かにね。爺さんになると姿形くらいピシッとしていないとシェリーにも嫌われるか

未来を見たかりスマ 2018/09/11 hagoromo

らさ」

私は自分の子供といってもおかしくない年齢のシェリーに笑いながら冗談をいった。実際仕事とはいえ、スティーブはもとよりマイク・マークラらとの会話は気が抜けない内容ばかりだったから、たまにはこうして軽口をたたきたい気分になる。それにスコッティの退職やウォズの飛行機事故などのあれこれでシェリーと接する機会も多くなりこうしてお互い冗談をいえる間柄になっていた。

「あら、ご謙遜なこと。しかしこの本社にいる経営陣の中では確かにトモは一番年上よね。だからこれまた目立つのよ。ここは若造のたまり場だもの」

自分の言い方がおかしいのかシェリーは小さな声を出して笑った。

「私は経営陣ではないよシェリー、単なるＣＩＯに過ぎないよ」

とことわりつつ、

「でもそうだねぇ。ロッドより私は一回り以上の年上だからアップル唯一のジジイかもね」

「でもねぇ、トモ」

シェリーはどうしたのか急に声を潜め、周りを確認してからいった。

「トモ、あなた自身は気づいていないようだけど私の知っている大方の人は例のセミナー以降、皆あなたに一目置いてるのよ。奴を侮ってはならないと」

未来を見た方 ＿＿＿＿＿＿＿＿

私に向けられた真剣な視線をまともに受け止められずにその視線を外しながら、
「確かに私はＣＩＯというよりいまだにスティーブ直属のただ一人の人間だからね。それを別にしたらやはりただのジジイだよシェリー」
「そうよねぇ。あなたって私と一緒にマニュアルをタイプしてくれたし、他の人と争ったところを見た事もないわ。まあそれがここでは特別なのかな」
自分の言葉に納得したのかシェリーは笑顔に戻った。
「でもね、トモ。あなたはこのアップルの他の連中とは違った時代を生きているような、すべてを見通している目をもっていると皆はいってるわよ」
訝しい顔を向けた私にシェリーは、
「例えばランディやダンも、そうロッドもいってたけど、あなたの言うことって正確で的確だから怖いって。それにＰＡＲＣから来たラリー・テスラーもあなたを気に入っているようね」
私は少々ドキッとしたが、
「違った時代か。シェリー、それは私がここで浮いている証拠だよ。それに単に年上だから皆ジイサンに優しいのかも知れないね」
「それに、男ばかりに興味を持たれても面白くないな」
私はそう笑うとシェリーは真顔になり、

未来を見たかりスマ 2018/09/11 hagoromo

「いえ、トモもすでに話したことがあるようだけどマッキントッシュ・プロジェクトにいるジョアンナ・ホフマンもあなたに興味津々だったわよ」
「年寄りをからかうものではないよシェリー」
わざと大声を出しながら受付カウンター前を後にした。

直後、ランディ・ウィギントンに呼び止められた。
「トモ、丁度良いところで会ったよ」
「ランディ、元気そうだね」
私の挨拶も面倒だという感じてランディは顔を近づけていった。
「トモ、覚えてるかい。二年ほど前になるのかなＤｉｓｋⅡの検証時にさ、フロッピーディスクの片側に切り込みをつけて裏返しにすれば１４３ＫＢが倍使えるとあなたが教えてくれた件だけど」
「もちろん覚えているよ。便利にしているかい」
「いや、ビル・フェルナンデスらとも話したんだがトモって凄いなあと」
私は何のことかが分からないので困った顔をした。
「あのさ、フロッピーディスクの裏側も利用するのは良いけどナイフやハサミだと失敗するときもあるといったらあのときトモは（そのうち安全に同じことが出来るツールが

未来を見た力 Nibble Notch

出てくる）と言ってましたよね」

「ああ、それがどうしたの」

私にはまだ話しの流れが分からず問い返した。

「いや、先日コンピュータ関連の周辺機器を作っている人と知り合ってさ、たまたま聞いたんだけどトモが予言したツールを“Nibble Notch”という名で売り出す計画を立ててるというんだ。雑誌への広告も年末までには出したいっていってたんだ」

「なるほど、そんなことか」

私は話しが見えたので安心して答えた。

しかしクリスは私の予言が当たったと嬉しそうな顔をしている。

「クリス、あれは予言ではないよ。世の中同じことを考えそれをビジネスに繋げようとする人たちが必ず出てくるという意味さ。だから予言ではなく予測、悪く言えば当てずっぽうだよ」

まだなにか言いたそうなランディを残して私は笑いながらオフィスに向かった。

自分のオフィスに戻る短い時間でふと考えた。

もし私がこのまま元の時代に戻れなかったら、いや戻れたとしてもアップルの歴史というかその軌跡に私という人間がいたことが記録に残されるのだろうかと。いや、もし（私には幸いだが）元の時代に戻れたとしたら、いまここにいるスティーブやシェリー、

未来を見たカリスマ 2018/09/11 hagoromo

ランディたちの記憶の中にトモヒコ・カガヤというジジイの記憶は消されてしまうのだろうか。そう考えるとちょっと虚しくなってきた。

自分のオフィスに入る前にちょっとした報告をしようとスティーブのオフィスを覗くとスティーブ・ジョブズとマイク・マークラがいた。二人とも機嫌が良いみたいで「お帰り」と声をかけてくれた。

「どうしたんですか、お二人とも今日はいい顔してますよ」

私がいうと、マイク・マークラは少し恥ずかしそうな表情になったが、

「スコッティが抜けた後の新しい人事がきまったんだよ、トモ」

というと隣のスティーブ・ジョブズも満足そうに笑顔を向けた。

なかなかこうした和やかな場は近年のアップルにはなかったので私は少々訝しい顔をしたのかも知れない。

それを察したのかマイクが戯けたように、

「シリコンバレーの名士殿が二十六歳の若さでアップルの会長になられたんだよ」

その物言いを受けてスティーブは

「マイクがＣＥＯ就任を受けてくれたんだ、トモ」

「それはおめでとうございます。マイクそしてスティーブ」

未来を見る方 ＿＿＿＿＿＿＿＿

私は二人の手を順番に握った。

要は新しいアップルの社長がマイク・マークラ、そしてスティーブ・ジョブズは会長に就任したのだ。

マイクは、スティーブの机上にある電源が入っていないアップルのキーボードを指で押しながら、

「僕はこうした役割には就かないと決めていたんだが、残念ながらいまは適当な人がいないようだ。スティーブと話し合ってきたんだがあくまで暫定的な措置なんだよ」

言い訳をいいながらもマイクはどこか嬉しそうだった。そして、

「スティーブとも意見が一致したんだがアップルⅢの苦い教訓から研究開発費も大幅に増やすことになる。なによりも世界がびっくりするようなコンピュータを作らなければな」

スティーブもマイクの発言を受け、

「そうだよマイク、俺たちが素晴らしい製品を開発できる実力があることを立証しないといけないんだ。マッキントッシュがまさしくそのプロダクトになるんだ」

「万々歳じゃあないか」

私も明るいアップルが好きだ。

アップルの２人の雄が一緒に和気藹々未来に向け建設的な話しをしているのを聞くの

未来を面白くカリスマ20180911 hagoromo

は久しぶりだし心底嬉しかった。だから自然に拍手をしていた。
スティーブは私の拍手を笑顔で制止しながら、呟いた。
「トモ、しかし手放しで喜んでいる場合でもないんだよ」
私にはいま彼らが心配していることが分かっていた。この時期アップルが自社の計画を遂行していくなかでひとつの壁が見えてくることは歴史が証明していることだった。
私の表情を見て取ったのかマイクは、
「なんか、トモはすでに分かっているようだなスティーブ」
と声を出した。
スティーブ・ジョブズは苦笑いしながら
「トモは未来が分かる男だからな」
とふざけてみせた。
スティーブとマイクの顔をみながら私はいった。
「ＩＢＭの参入だね」
「承知のように我々はＩＢＭがパーソナルコンピュータ市場に参入してくることは早くから予想していたことだ。いまさら驚くことではないがリサを早く完成させないとならんな」
マイク・マークラが真顔でいった。

未来を見通せ　カリスマ2018-09-11 hagoromo

「いや、出荷はマッキントッシュの方が先になるよ」

スティーブは口を尖らせていったが続けて、

「確かにＩＢＭはコンピュータの雄だよマークラ。だけどあの巨大企業にパーソナルコンピュータの粋が分かってたまるものか。どうせクソな製品しか出てこないよ」

相変わらずのスティーブの弁だった。

しかし歴史の結果を知っている私はその巨人ＩＢＭの足音が遠くから聞こえるような気がした。

「でも絶対に侮ってはいけませんよ」

と思わず強い口調で答えたが、二人にあまり緊張感は感じられなかった。

ＩＢＭＰＣは一九八一年八月に発表されたが、その際アップルは余裕を見せるつもりだったか "Welcom IBM" と題した次のような広告を掲載した。

Welcome,IBM. Seriously.

Welcome to the most exciting and important marketplace since the computer revolution began 35 years ago. And congraturations on your first personal computer. Putting real computer power in the hands of the individual

未来を見た方がいいのか？ 2018/09/11 ｈｉｒｏｒｉｎｏ

communicate and spend their leisure hours. Computer literacy is first becoming as fundamental a skill as reading or writing. When we invented the first personal computer system, we estimated that over 140,000,000 people worldwide could justify the purchase of one,if only they understood its benefits. Next year alone,we project that well over 1,000,000 will come to that understanding. Over the next decade ,the growth of the personal computer will continue in logarithmic leaps. We look forward to responsible competition in the massive effort to distribute this American technology to the world. And we appriciate the magnitude of your commitment. Because what we are doing is increasing sosial capital by enhancing individual productivity. Welcome to the task.

Apple Computer.

「ようこそＩＢＭ様。コンピュータの革命が三十五年前に始まって以来、最もエキサイティングで重要な市場へようこそ。 貴社初のコンピュータ発売にお祝い申しあげます…」に始まるアップルの広告は話題性こそ大きかったがその余裕、状況軽視が仇になり急速にシェアをＩＢＭに奪われていった。

未来を見たカリスマ 2018/09/11 hagaromo

マッキントッシュ・プロジェクトは相変わらずスティーブ・ジョブズとジェフ・ラスキンとで主導権争いが続いていた。しかしどう考えてもラスキンに勝ち目はなかった。

私もラスキンから相談を受けた手前、何とか穏便にことを納められないかと画策してみたが妙案は浮かばなかった。

まだ社長のマイク・スコットが在職していたときのことだが、ラスキンもスティーブによる数々の圧力と妨害工作を受けつつ抵抗はした。

目立ったこととしてラスキンはマッキントッシュ・プロジェクトを率いる能力がスティーブ・ジョブズにはないとした十一項目にわたった論証を文書でマイク・スコットに提出した。一九八一年二月十九日のことだった。

私自身はその原文を見たことがなかったが、後で聞いたところによれば以下のような内容だったという。

一　常習的に打ち合わせのスケジュールを破る
二　考えずに行動することで誤った判断が多い
三　他人の成果を認めようとしない
四　感情的に反応する
五　一見温情的であるかのようだが不合理で無駄の多い判断をする

未来を面白たがりくマ20180911 hagoromo

六　人の話を聞こうとしない
七　約束を守らない
八　権威主義的な決断を行う
九　すべての見込みに裏付けがなく楽観的
十　無責任で思慮不足

したがってソフトウェアプロジェクトのマネージャーとして最悪と論じた。

この内容から想像すればラスキンは以前スティーブ・ジョブズが提案したように、すなわちハードウェアはスティーブが、ソフトウェアをラスキンが担当するということでやむを得ずとはいえ納得していたように思える。

ともかく論証メモの内容をスコッティから知らされたスティーブは怒り狂った。

当のスコッティはこの厄介な問題をマイク・マークラに振り、自分は関わらないようにした。それは厄介な話しから距離を置きたかったというだけでなくリサプロジェクトからスティーブを外したことでもあり、自分の裁定ではスティーブが納得しないであろうことを考えたからだ。

「トモ、ラスキンって奴は思っていた通りのクソ野郎だ。大クソ野郎だぜ。こうも真っ向から俺の悪口を書かれては黙っていられない。これからマイクに奴をプロジェクトか

未来を見た。カリスマ 2018/09/11 hagaromo

ら外せと言ってくるよ」

スティーブは私のオフィスのドアを勢いよく閉め、大きな靴音をさせながらマイク・マークラのオフィスに入っていった。

スティーブはこれほど正面から自分の弱点を指摘されたことはなかったこともあって事の原因はともあれ怒るのも当然だと思えた。しかし反面ラスキンにしてみれば彼がスティーブに反論できることはこうしたことくらいしかなかったのだ。

その少し前、私が受付のシェリー・リビングストンと雑談していたとき、ラスキンが近寄ってきていった。

「トモヒコさん、少しお話しがしたいんですが」

正直私はラスキンとの話しよりシェリーとバカ話をしていた方が楽しかったが、仕事だからしかたがない。

受付が見えるホールの片隅にあるコーナーに我々は座った。

後ろは壁だし左右に見通しは効いたものの、通る人たちに注視をすれば我々の話を聞かれる心配はほとんどなかったからだ。それに密室で彼と話しをするという事実はスティーブへの手前避けたかったからこうしたオープンな場所は好都合だったのだ。

「ジェフ、私がアドバイスできることがなくて心苦しいけどスティーブは着々とプロジェクトを自分が率いる準備をしているようだね」

未来を見たカリスマ 2018/09/11 hagoromo

私の話をラスキンは肩を落として聞いていたが、
「あなただからいうけど、私もこれほどスティーブが狡猾だとは思わなかったです」
といい大きなため息をつきながら、
「トモヒコさん、現実歪曲フィールドという言葉を聞いたことがありますか」
無論二〇一六年からタイムワープしてきた私はその語句や意味を知っていたが、これまでアップルの社内で聞いたことはなかった。
咄嗟に私は、
「いえ、聞いたことありませんね」
と答えていた。
「トモヒコさんでも知らないことがあるんですね」
嫌みないい方ではなく、私を買いかぶっている様子が見て取れたが、私は苦笑するしかなかった。
「まったくスティーブのやり方には怒りしか感じません。一言でいうなら他人のアイデアを平然と盗むんですよ」
私の無言の促しにラスキンは小声ながら雄弁に話し出した。
それによれば、スティーブ・ジョブズは他人からの提案や意見を一蹴し鼻であしらっておいて、その数日後には(素晴らしいアイデアを考えついたよ)といいながらその主張

未来を見通せ　カリスマ　2018/09/11 hagoromo

を自己のアイデアとして通すというのだ。

私自身にスティーブはそうした思いをさせたことはなかったから気がつかなかったもののマッキントッシュ用のＢＡＳＩＣを開発していたプログラマーのドン・デンマンやアンディ・ハーツフェルドからも同様の話しを聞いたことがあるので本当のことらしい。だからドン・デンマンいわくスティーブに認めさせたいアイデアがあったら彼に話し、ダメだと一蹴させればよい。そうすれば一週間後にスティーブ自身が（よいアイデアを思いついた）とその案を披露し採用するから…という皮肉を言っていた。

「スティーブのこの卑怯な戦法が意識的なのか、あるいは無意識な行動なのかは分からないんですが私たちはこれを『現実歪曲フィールド』と呼んでるんです」

ラスキンはこの後にマイク・マークラに呼ばれているといいながら「愚痴を聞いてくれてありがとう」と席を立った。

このとき「現実歪曲フィールド」という名付け親はジェフ・ラスキンなのかと思ったが、後にアンディ・ハーツフェルドからバド・トリブルの命名だと聞かされた。

しかしスティーブを擁護するわけではないが、物事を見極めビジョンを具現化する道のりは単純ではない。

スティーブにしても思いついたあれこれを翌日には否定することで知られているが、要はひとつの考えに執着する危険性を廃し、可能な限り様々な可能性を求める姿勢のた

未来を見た方は、ハッピーに生活する方法を見つけるのだ。

めに他人の意見をも躊躇なく取り入れる結果なのかも知れない。
無論最初その意見をいった本人からすれば自分のアイデアを奪われたと思うだろうし結局そうなのだが。

私が（やれやれ）とため息交じりの重い気持ちで立ち上がったとき、受付にいるシェリーが手招きしているのに気がついた。
「ため息はいけないな…（ため息は命を削る鉋かな）という川柳かなにかがあったな」
私は自虐的な呟きをしながらシェリーの前にいくと彼女はどうやら私の振る舞いを見ていたようで、
「話しは聞こえなかったけどジェフの話しはあの件しかないわよね。だけどトモ、あなたが気落ちする問題ではないわよ。それに、スティーブはもとよりだけどジェフも自尊心の強い人よね。いずれは衝突するということは誰が見ても明らかよ。両雄並び立たずってことだからトモが気を遣う問題ではないのよ」
となぐさめてくれた。
そのときちょうど外出先から戻ってきたロッド・ホルトが受付カウンターに両肘をついてシェリーと話しをしている私を見ながら、
「お二人さん、仲がいいねぇ」

未来を見るカリスマ 2018/09/11 hagaromo

ウィンクしつつ茶化しながら奥に入っていったが、周りにほんのりとキャメルの香りが漂った。

そういえば「現実歪曲フィールド」の意味だが、ジェフ・ラスキンやバド・トリブルらがいうところのニュアンスと私がワープする前、二〇一六年あたりに意味していたものとはかなり違うことに気がついた。

理屈から考えれば「フィールド(field)」とは電場・磁場・重力場などの「場」を意味すると考えられる。そしてその前に「現実歪曲」と付くのだから文字通りその意味は「現実や事実を歪めてしまう場」といった意味になる。

したがって、近年私たちが認識している「現実歪曲フィールド」とは、スティーブ・ジョブズの持つカリスマ性が現実世界に及ぼす影響力を意味する言葉であり、不可能を可能にする交渉力といったニュアンスで使われていたはずだ。

例えば(ジョブズの現実歪曲フィールドが発動するや否や、一瞬で無理が有理に変化した…)などと使われるように。しかしラスキンらの話しではよい意味というより、人のアイデアを自分のアイデアとして転化し、ごり押しをすることだというニュアンスだったのだ。

そんなことを考えながら自分のオフィスのドアを開けようとしたとき、ひとつ離れた

未来を見た方はマイクの方が多いのでは？ 2018/09/11 ハガロマ

オフィスのドアが開きマイク・マークラが渋い表情をして手招きしていた。
今日はよく手招きされる日だと苦笑しながら私はマイクのオフィスに入るとそこはただならぬ雰囲気だった。
マイクの他、スティーブ・ジョブズと先ほど話したジェフ・ラスキンが睨み合っているではないか。
「トモ、頼むから君もこの場にいてくれないか。俺ひとりじゃ収集がつかないからな」
私が同席すれば少なくともスティーブはそうそう無茶なことはいわないだろうというマイクの思惑だったようだが、哀願するような顔でいわれたからには仕方なく空いている椅子に座った。
マイクは自分の席に座りながら、
「二人の話を聞き、解決策をと考えているんだが話しが拗れすぎてしまったよ」
と私に向かって呟いたが、どこか諦めの気分が漂っていた。
ジェフ・ラスキンも私に視線を向けつつ、
「会長のスティーブとこうしてやりあって分が悪いことは私でもわかります。しかしスティーブのやり方はフェアではないし企業のトップがやるべきことではないでしょう。もっと正々堂々とプロジェクトのリーダーになりたいのなら正攻法で責めるべきです」
と口火を切った。

未来を見たカリスマ 2018/09/11 hagaromo

スティーブはと見ればすでに涙目になっている。どうにも彼は子供っぽいところがあり、自分の思うようにならないとすぐ泣くというのがスティーブの特技だと皮肉る人もいた。

ラスキンは、

「まずスティーブは人間として約束を守らなければなりません。自らハードウェアは自分が、ソフトウェアは私にと宣言したのにもかかわらず次第にソフトウェアにまで口を出すそのやり方は許せません」

一息入れて続けた。

「それに皆さんご存じのようにマッキントッシュ・プロジェクトは私が立案し私がスコッティやマイクの許可を受けて始めたものです。理由もなく誰にしても横取りされる覚えはありません。ましてや私の仕事自体までをも邪魔するというのではアップル会長の名が泣くでしょう。こんな状態では私は一日たりともスティーブと一緒に仕事はできません」

「俺だってそうだ」

スティーブも言い張ったがその言い方はどこか弱々しかった。

マークラの決断は予想されたものだったが、彼の立場からすれば他の選択肢はなかっ

未来を見たカリスマ 2018/09/11 hagaromo

たに違いない。

一時間ほどのミーティングが終わったときマッキントッシュ・プロジェクトのリーダーはスティーブ・ジョブズの手中にあった。

マイクもこれが公正な決断であるとは思っていなかっただたろうが、社内のもめ事をこれ以上大きくさせ長引かせるわけにはいかなかった。

ラスキンには一週間の休暇しか与えられなかったしこれまでの苦労に対する賞賛の一言もなかった。肩を落としたラスキンは私の方にチラッと視線を送りながら会釈し静かにマークラのオフィスを出ていった。

休暇から戻ったラスキンには新しい研究部門のリーダーというポジションが提示されたが、ラスキンにとっては魅力のあるものではなかった。何故ならどうせ注目を浴びるプロダクトを考え出せばまたスティーブがずかずかと乗り込んでくるとも考えたからだ。

結局翌年の一九八二年三月、ラスキンはアップルを去った。そして生涯アイコン操作のＧＵＩよりも優れたインターフェースがありうるとし、かつマッキントッシュのコンセプトは自分が考えたものだという主張を繰り返したが、すでに見てきたように製品化されたマッキントッシュはラスキンのコンセプトとはまるで違ったものだったしことの是非はともあれ、それは誰が見てもスティーブ・ジョブズのマシンだった。

未来を見通せ　カリスマ2018/09/11 hagaromo

スティーブ・ジョブズはラスキンを追いやり念願のマッキントッシュ・プロジェクトを率いることになった。

まだまだ具体的なビジョンはまとまっていなかったが、ウォズの代わりに戦力となる人員が集まりつつあった。

アンディ・ハーツフェルドもそうした一人だった。彼は一九七九年八月にシステムプログラマーとして入社したが大のウォズファンだった。

ハードウェアの天才といわれるようになるビュレル・スミスと共に自分たちは（ウォズ大学の生徒だ）と公言してはばアップルIIに魅せられ、ソフトウェアの開発を始めたが、彼の目標は当然のことスティーブ・ウォズニアックだった。

そういえばこの頃、すなわち一九八一年春も終わり頃になるとウォズも飛行機事故から立ち直り退院していたが、まだ精神的に完治していなかったし、すぐに仕事をしたくないと会社を休むことが多かった。スティーブとのわだかまりも大きくなってきたようだ。

そんな一九八一年の春先のある日、ランチで席が間近だったこともあって、私はアンディと長話しをする機会を得た。

アンディ・ハーツフェルドは小柄ではあったが見るからに精力的な人物でポジティブ

未来を見た方は、ハッキングの可能性があります。

な思考の持ち主だった。
早速私が（なぜマッキントッシュチームにきたの）と聞くと少し声のトーンを落として話し出した。
「僕は先のブラック・ウェンズディのときアップルを辞めようとスコッティのところに行ったんですよ」
「慰留されたんだったね」
私が受けると大きく頷きながら、
「だって隣にいたパートナーが首になったしショックもあってこのまま職場に残っても意欲を出せないと思ったんですよ」
アンディは大きめの眼鏡を左手で直しながら笑った。
「だけどスコッティに留意されて（どのプロジェクトなら会社に残ってくれるんだ）といわれてちょっと感激しました」
「で、あなたはマッキントッシュチームに行きたいって言ったわけだ」
私が笑いながら合いの手を入れるとアンディも嬉しそうに、
「そうなんです。そしたらすぐスティーブがきて…」
今度は愉快そうに声を出して笑った。

未来を見た男 カリスマ 2018/09/11 hagoromo

このときのエピソードは私も印象深いものだったので覚えていたが、アンディ・ハーツフェルド自身から聞かせてもらえるとは思っていなかったので本当に楽しかった。

「トモ、あなたはスティーブと親しいから分かるでしょうけど、いや別に親しくなくてもスティーブはスティーブだな」

含み笑いしながらアンディは続けた。

「そのとき僕はマッキントッシュチームに移るためアップルⅡの残務整理のつもりでプログラミングのまとめをしていたんです。そのとき（お前がアンディって奴か）とスティーブから声がかかったわけです。そして（お前は優秀か）と聞くから（そう思ってます）というと(すぐ俺と一緒に来い）っていうわけ」

「まったくスティーブらしいなあ」

私が残ったコーヒーを口にするとアンディも同じようにコーヒーで喉を潤して、

「当然僕はこれまでの仕事を引き継ぎしなければと考えていたので、この仕事は数日で終わるので待ってくださいといったんですよ」

さも可笑しそうに口を押さえるアンディに私は、

「スティーブはあなたの使っていたアップルⅡの電源コードをいきなり引き抜いた…」

その言葉が終わらないうちに私とアンディは顔を合わせて笑い合ったが、向こうの列にいた十数人が何ごとかとこちらを振り向いた。

未来を見たカリスマ 2018/09/11 hagoromo

ということで結局アンディは一九八一年二月からマッキントッシュチームで働くことになった。

そんなとき我々の背中を軽く叩きながら、

「面白い話しがあるなら僕にも教えてよ」

あのビル・アトキンソンがくしゃくしゃの頭、そしてブルーの目で笑っていた。そしてアンディの隣に長い足を伸ばして座った。

そういえばタイムスリップする以前、私は二度ビル・アトキンソンに会っている。

一度目は一九九〇年のこと、幕張メッセで開催されたマルチメディア国際会議に私の会社が自社開発したコンシューマー市場初のデジタルビデオシステムを展示デモしていたときのことだ。そこにビル・アトキンソンが立ち寄ったことがあった。

ブルーとホワイトの派手な横縞のTシャツを着たラフな格好だったが、なかなか神経の細やかな暖かい人のように思えた。

私達がデジタルビデオソフトのデータをハイパーカード(HyperCardはアトキンソンが開発した)から使用するところを説明していた時、アップルジャパンの関係者がアトキンソンの袖をひっぱるようにして連れていこうとした。しかしアトキンソンは少し離れたところから体を反転させ、後戻りして我々にお礼を言ってくれたのだった。

二度目は二〇〇四年、写真家として来日したビル・アトキンソンが自書写真集出版記

未来を見る方法 ハーツフェルド 2018/09/11 hagaromo

念の講演をしたときのこと、私はそこでマックペイントのフロッピーディスクとマニュアルにサインをして貰った。しかしアップル本社内で出会ったアトキンソンは髪型も違っていたし口ひげを生やしていたからか別人のように思えた。

アトキンソンとハーツフェルドは私がついていけないほどの早口でなにかを言い合い、一緒に笑い合っていたがその瞬間私は奇妙な思いにかられていた。

それはいまから九年ほど経てば(一九九〇年になる)前記したようにアトキンソンと私は幕張メッセの小さなブースで出会うわけだが、そのとき私は初対面だったものの彼は一九七八年アップルに入社しこうして幾たびか私と出会っている。そんなアトキンソンは九年後に幕張で出会う私を私と認識してくれるのだろうかということだ。それ以前に私自身はその一九九〇年のマルチメディア国際会議のとき自分の存在が果たしてどうなっているのかと考えると頭が混乱し恐ろしくなった。

「どうしたの、トモ。気分でも悪いのかい」

アトキンソンの声で私は我に返った。

「いや、失礼。ちょっと考え事をしていたので」

私は笑顔でつくろったが、ビルをあらためて見上げると明るい表情ながら髭は伸びているし徹夜明けのようだった。

「ビル、また徹夜かい」

未来を見た方がいいのか？ 2018/09/11 hagoromo

「そうなんだけどさ、別にスティーブに言われたわけではないんだ。アンディは分かってくれるだろうけどプログラマーという人種は厄介なものでね」

アンディが我が意を得たりと早くも頷いている。

「どういうこと」

私の問いにビルは、

「僕らは難しい問題に直面するほど燃えるんだよな。で、解決するまでぶっ続けで仕事をしてしまうというわけさ」

「そうだね。一度中断すると神の声が聞こえなくなってしまいそうでね」

アンディが同調した。

私はプロのプログラマーではないが、アップルⅡやＰＥＴ２００１のＢＡＳＩＣで様々なプログラミングを楽しんだ。そして一九八四年アスキー「月刊ＬＯＧＩＮ」主催の「アダルトソフトウェアコンテスト」ゲーム部門に応募し入選したこともあった。アップルⅡ用ゲームを作ったわけだがそれはグラフィックスおよびＧＵＩとサウンドおよびスピーチを取り入れたものだった。

あるマック雑誌の編集長が後に（これぞマルチメディアだ）と称してくださったこともあり商品化もされた。そのプログラミングの中で短い間ではあったがプログラマの性と

未来を見る方法 ＿＿＿＿＿＿＿＿

いったあれこれを思い知った経験が甦ってきたのだった。

どうしても解決策が思い浮かばずああだこうだと寝る間も惜しんで試行錯誤をするが何ともならない日が続く。かと思うと食事中や散歩をしている時にまるで神の啓示のようにフト妙案が浮かんで解決するといったことが何度もあった。

ただし偉そうなことを申し上げるとダラダラとやっていては神の啓示は降りてこない。考え得るあれこれを試しつつ新たな解決策を探ることを長い時間集中してこそ気を抜いた一瞬に閃くのかも知れない。

しかし誰であっても睡眠不足は良いはずがはない。

ビル・アトキンソンはこの後大事には至らなかったものの、運転中に居眠りをしてしまい大型トレーラーの後部に突っ込み、運転していたスポーツカーの屋根をはぎ取られるという事故を起こした。

アトキンソンとハーツフェルドの二人はマッキントッシュ開発にとってソフトウェア面でなくてはならない人材であり、アンディはソフトウェアの魔術師と評価されていたしアトキンソンはあのスティーブも一目置かざるを得なかった異才の人材だった。

事実ビル・アトキンソンはアップルで最初で最後といってよいかも知れないが、プログラマーという立場で大きな地位を築いた。

リサやマッキントッシュの描画ルーチン(後にＱｕｉｃｋＤｒａｗと称される)開発は

未来を見つめたカリスマ 2018/09/11 hagoromo

もとよりマックペイントやハイパーカードの開発者として知られ、天才プログラマーの称号を欲しいままにした人物となった。また特別研究員に遇され、初代アップル・フェローに遇された。

そうした秀でた彼らにしてもマッキントッシュの完成は見通しさえつかなかった。ただただスティーブは十二ヶ月で仕上げると息巻いていたしその要求も相変わらず性急で突飛なあれこれが続いた。なにしろあるときの会議に現れたスティーブは手に持っていた電話帳を会議テーブルの上に放り投げながらいった。

「それがマッキントッシュの大きさだぞ。これ以上大きい設計は許さないからな」

といいながら、

「それからモニター一体型としてもだ、横型のコンピュータはもう見飽きた。リサも横型だし今度は縦長のデザインを考えて見ろよ」

そう言い捨てて出て行ってしまった。

ビル・アトキンソン以下、マッキントッシュ開発メンバー全員は唖然としてスティーブの背中を見つめていた。

その場にいた私はビル・アトキンソンに、

「ビル、難しい問題に直面するほど燃えるまたとないチャンスだね」

と両肩を上げてジョークをいった。

ビルとアンディは「あーあ」というようにソファーへ大げさに倒れ込んで笑い転げた。

スコッティが退職したことに関してスティーブはメンタルな部分で痛みを覚えたようだが仕事の面からすれば間違いなくそれは彼にとって朗報だった。

確かにスコッティはリサの開発にスティーブが口を出さないであろうことを期待してジェフ・ラスキンのプロジェクトだったマッキントッシュ・プロジェクトにスティーブが参加する事を黙認したし喜んだといってよいだろう。

ただしスコッティはそれでスティーブが大人しくしているとは思っていなかったしスティーブの動向に目を光らせていた。

スティーブからしてみれば リサプロジェクトから外されたことは大きくプライドを傷つけられたし、もしマッキントッシュ・プロジェクトが見るべき成果を上げるようになれば、またまたそこから自分が外されるのではないかと危惧していたふしがある。

スティーブにしてみればせっかく勝ち取ったマッキントッシュ・プロジェクトだから意地でも当初の発売日までに完成させたかった。

その目標は無謀にも一年後の一九八二年はじめとスティーブは考えていたが、開発チームの誰もが無理だと感じていたもののスティーブはがむしゃらに突き進んだ。

未来を見た方 Kaiser Mayer 2018/09/11 hagoromo

私が自分のオフィスを出たときスティーブが丁度こちらに歩いてくるところだった。
「おっと、トモ、良いところで会ったよ。ちょっと俺のオフィスに寄ってくれないか」
スティーブはどうやら機嫌がよいらしく、快活に両手を広げて私をオフィスに迎え入れてくれた。
「私もいくつかスティーブ、君に確認したいことがあったので丁度いいよ」
私は勝手知ったるスティーブのオフィスの奥にある椅子に座った。そこはかつて私の居場所だったからだ。
スティーブは話したいことがやまほどあると言いながら、自分の椅子に座り数秒目を瞑った。そして、
「トモ、知ってのとおり俺はマッキントッシュ・プロジェクトを率いることになったが問題は山積みなんだ」
とはいえその話しっぷりはまんざらでもないようだったが、
「トモ、君に意見を聞きたいのだけど笑わないでくれるかい」
と悪戯っぽい表情で聞いた。
なにごとかと思ったが、
「勿論だよスティーブ、君の言うことにはいつも敬意を払っているよ。聞かせてくれ」

未来を見通せ　カリスマ2018-09-11 hagoromo

私は意識的に体を前に突き出しながら答えた。しかし確かにスティーブの話しは時節を考えても突飛でもないことに思えた。

「俺はマッキントッシュを最高のパーソナルコンピュータにしたいんだ。そのために最適な人材も集めたし問題は山積みとはいえどうあるべきかは明確になってきたつもりだよ。ただ…俺には“Macintosh”という名が気に入らないんだ」

私は二〇一六年の日本からタイムスリップしてこの時代に放り出された人間だったから、スティーブのいうところの意味や内容はすでに周知のエピソードとして知っていたものの、これをリアルタイムに聞かされた関係者たちの動揺が目に見えるようだった。スティーブは、

「マッキントッシュという名はラスキンのクソ野郎がつけた名だ。俺はそのプロダクト名も自分で最良と思うものにしたいんだよ。トモ、おかしいかい」

あの射るような眼差しで見つめられるとどうにも困ってしまうが、私は知ってはいたがわざと、

「どんなプロダクト名にしたいと君は思ってるの」

と聞いてみた。

「いいか、笑うなよ」

未来を見た方がいいのか？ 2018/09/11 Nagaoka

と再度念を押しながらスティーブは、
「"Bicycle" (自転車) という名にしたいんだ」
ちょっとうつむきながらいった。
「なるほど。私にはスティーブ、君の考えていることは日々の会話の中からわかるような気がするよ」
というとスティーブは子供のように嬉しそうな顔をしながら、
「俺ってこの件で君になにか話したことがあるかな」
と聞いたが、私はそれに直接答えることはしないで話を続けた。
「なぜ "Bicycle" なのかは容易にわかるよ。君は以前コンピュータは (Bicycle for the Mind) 知的自転車だという説をぶっていただろう。我々人間はすべての生き物の中でも移動する能力ひとつをとっても優れた動物ではないとね。歩く、走るのも遅いしエネルギー効率も悪いから速く遠くへ移動するのは苦手だと。しかし例えばその人間に自転車を与えたとすれば話しはまったく違ってくると…」
スティーブは我が意を得たりと私の話を受けて喋りだした。
「そうなんだよ。コンピュータは我々の知性にとってはまさしく知的自転車であり我々の知性を拡張するツールになると信じているのさ。さすがにトモ、俺の考えていることをよく分かってくれているよ」

未来を見た。カリスマ2018-09-11 hagoromo

スティーブは上機嫌だったが、私は水を差すような物言いをしなければならなかった。

「スティーブ、事実君の考えは説得力のあることだし私も頷く一人だよ。しかし、そのこととマッキントッシュというプロダクト名を "Bicycle" にするというのは別問題だと思うよ」

スティーブは一瞬ムッとした表情を見せたがすぐに天井を仰いだ。

「君はこのプロジェクトからラスキンの臭いをすべて消し去りたいのだろうけどマッキントッシュという名称はすでに皆馴染んでしまったしアップルという会社の製品名としてはリンゴの名前だし、決して悪くはないと私は思っているんだ。さらに君が苦労しているようにマッキントッシュ・プロジェクトはまだまだ多くの問題を抱えているから、ここでまた開発陣や経営陣を混乱させ、悩ませる要素を増やすことは得策ではないと思うんだ」

スティーブが黙り込んでいるので続けた。

「それに、スティーブ。誰が見ても現在のマッキントッシュ・プロジェクトのリーダーは君だし、マッキントッシュは君が宇宙を凹ますために作るマシンであることに代わりはないよ」

未来を見たかりしゃ 2018/09/11 hagoromo

私の話しが終わってもしばらくスティーブは腕組みしながら沈黙を守っていた。なにか反撃の言葉があるのだろうと私は心の中で身構えていたが、フッと息をはき出したスティーブは、

「やはりそうか…。数日前にプロジェクトの奴らに俺のアイデアを披露したんだが猛烈な反発にあったんだ。だからトモの意見を聞いてみようと思ったんだが、君も反対か」

「いや、反対ということではないんだよ。あのレジス・マッケンナさんもいってたろ。名前そのものが問題なのではなく、その名前に象徴されるもの、その背景にある考えというのが最も大事だとね」

「うん、覚えているよ。もしその会社がよい会社になれば、その名はどのようなものであれよいシンボルになるという話しだろ」

スティーブは少し気持ちが落ち着いてきたようだった。

「そうだよスティーブ。一番大切な時期に関係者を混乱させるのは得策ではないし、つまりシンボルというか名前そのものには大して意味はないんだ。マッキントッシュという名に素晴らしいストーリーとイメージを与えるのが君の大切な役割だし、それこそ君にしかできないことだと私は信じているよ」

私がいうとスティーブの顔が少しほころんだ。

「そうか、やはりいま"Bicycle"という名を押し通すには無理があるかも知れないな。

未来を見るカリスマ 2018/09/11 hagoromo

どうにもここの所、気が急いてどうしようもないんだ」
スティーブは両肩を上げ、自嘲気味に言葉を続けた。
「一昨日のことだったかな、リサプロジェクトマネージャーのカウチ、あのジョン・カウチとちょっとやりあってさ」
「ああ、聞いたよ。君とカウチがマッキントッシュとリサのどちらが早く出荷できるかの言い合いになって、結局五〇〇〇ドルの賭をしたってことだね」
スティーブは頷きながら、
「俺たちの意気込みを示すためもあったし、マッキントッシュ開発チームを鼓舞したくてさ。カウチの挑発に乗ってしまったんだ」
やっとスティーブに笑顔が戻ってきた。
「現実問題として開発期間を考えると、大きな問題はソフトウェアなんだが、俺は君が常々いっているようにマッキントッシュのキラーアプリケーションが多々欲しいんだ。無論そうしたソフトをマッキントッシュに同梱してリリースしたかったが現状ではどうにも無理のようだから、ここは一大決心して一部を外注するしかないと考えたところなんだ」
スティーブの話しが途切れたのを確認して私はゆっくりと椅子から立ち上がり退出の意志を示しながらいった。

未来を見た方はマッキントッシュ用のソフトウェアを「使って天国、作るの地獄」と称していたほどだ。
そのうえにメモリはたったの１２８ＫＢしかなかった。
ランディ・ウィギントンは私に疲れ果てた顔でいった。
「ビル・ゲイツへの依頼だね」
スティーブの驚いた顔を眺めながら私はスティーブのオフィスを出た。
マッキントッシュの開発は越えなければならないことが多々あったがそのひとつが添付するべきソフトウェアがなかったことだ。リサもそうだったがマッキントッシュもその時代に広く利用されていたＭＳ－ＤＯＳといったオペレーティングシステムと互換性がない独自のシステム環境だった。
なければ自ら作らなければならない。結局マッキントッシュにはグラフィックソフトとして「マックペイント」とワープロソフトの「マックライト」をバンドルすることにした。
「マックペイント」はビル・アトキンソンが開発に成功しそれはその後現在に至るまでグラフィックソフトのお手本を示した。一方「マックライト」の開発は難航した。
後に我々もマッキントッシュのプロマグラム開発がいかに難しいものかを思い知ることになるが、プログラマの間ではマッキントッシュ用のソフトウェアを「使って天国、作るの地獄」と称していたほどだ。
そのうえにメモリはたったの１２８ＫＢしかなかった。
ランディ・ウィギントンは私に疲れ果てた顔でいった。

未来を見るカリスマ2018/09/11 hagoromo

「トモ、他のコンピュータなら画面にテキストを一行表示することなど簡単です。しかしマッキントッシュではそう簡単にはいかないんです。フォントは何のフォントか、そしてテキストサイズを測っていかなければなりませんし、その上文書中に挿入されるグラフィックに対処しなければならないわけですからね」

一息ついて、

「これはビルも言ってましたがマックペイントとマックライトはしばらくの間、ユーザーがマッキントッシュで使えるたった二つのアプリケーションですし、この二つが今後のアプリケーションのお手本とならなければなりません。しかし時間が足らないんです」

唾を飛ばしながら訴えていた。

そもそもファインダそのものが不安定だったために問題はより複雑となった。ブルース・ホーンとスティーブ・キャプスらがファインダのプログラムを改良する度にマックライトがクラッシュした。

ビル・アトキンソンも同じだった。ファインダの度々の変更でフラストレーションが溜まりすぎ、マウスのコードを引き抜き壁に投げつけ「やつらは俺のプロジェクトを台無しにしようとしてやがる」と泣き叫んだりもした。

未来を見たかりしかし 20180911 hagoromo

それはそれとしてもマックペイントとマックライトだけではマッキントッシュの先行きが危ういことはスティーブ・ジョブズも分かっていた。

自社で開発できなければアウトソースするしかないしいわゆるサードパーティー各社にどれほど有益で魅力のあるアプリケーションを開発してもらえるかにかかってくる。

そのアウトソース先というか最大のサードパーティーがマイクロソフトだった。というより当時ビジカルクのビジコープ社とマイクロソフト社くらいしかマッキントッシュ用アプリケーションを開発できる企業らしい企業はなかったのだ。

スティーブ・ジョブズはマイクロソフトの創業者ビル・ゲイツにマッキントッシュの先進性と素晴らしさ、そしてパソコンのマーケットを制覇するであろうあれこれを熱心に語り、マッキントッシュ対応のアプリケーション開発を勧めた。

一九八二年だっと記憶しているが、スティーブ・ジョブズの求めに応じてビル・ゲイツがマッキントッシュのプロトタイプを見にやってきたとき、私はスティーブに紹介されてはじめて彼と簡単な挨拶を交わした。

とはいえ、元の世界では一九九〇年に幕張メッセで開催されたマルチメディア国際会議ですれ違っているのだが…。

未来を見た。ガリスマ2018-09-11 hagaromo

ビル・ゲイツはスティーブと同じ1955年生まれだが私にはスティーブより若く見えた。シャツにネクタイ姿だったが大きな眼鏡はどうにも彼の顔には似合わないように思えたし、そもそも着るものなどに気を遣う時間などないといった感じもした。

スティーブが焦らすようにマッキントッシュの説明をした後、次のブレゼン準備に15分ほどかかるというのでマッキントッシュ開発者の数人とその場を離れた。

よい機会だからとその休憩中に私はゲイツに話しかけた。

「マッキントッシュをどう思いますか」

私の質問に眩しそうにした視線で、

「個人的には大変気に入っているよ」

と満更お世辞でもないように応えた。

「ただ、スティーブはまだマッキントッシュのすべてを僕らに見せてはいないようだけどね」

ゲイツは神経質そうに大きめのメガネを指でずり上げながら話しを続けた。

「すでに何度もスティーブとは会っているけど付き合いやすい相手ではないよね。とはいっても僕も同じ事をよく言われるけど」

とニヤリとした。

私は意識的に笑顔を崩さず、

未来を見るかけ 2018/09/11 ぷりぷりの

「しかし私が見るところ、スティーブは貴方の能力を高く買ってますしライバル視してますよ」

というとゲイツは真顔で、

「僕もスティーブのことはこの業界の英雄だと認めざるを得ないと思ってるよ。業界の中ではスティーブのことをあれこれ言うし実際の所彼は僕にも無礼な態度を取ることもしばしばだけど、ひとつ確かなことは彼がいなければマッキントッシュは誕生しないということだよ」

ビル・ゲイツの真意を理解するには短すぎる会話だったが、彼は本気でマッキントッシュのソフトウェア群を開発しようと考えていたようで、密にアップルと連絡を取っていただけでなくその熱心さはサードパーティーというより一時アップルの第二開発部門とでもいってよいほど人的資源の投入にも熱心だった。

なにしろ一時期、マイクロソフトのマッキントッシュ用ソフトウェア開発スタッフの数はアップルのクパチーノ全体のスタッフの数に匹敵していたのだ。

アップル社内以外でマッキントッシュを一番認めていたのはビル・ゲイツその人だったのかも知れない。

そうしたことを知ってか知らずか、スティーブはマッキントッシュの発売の一年後までに市場に五百種類のアプリケーションを流通させようと考えていた。

未来を見た。カリスマ2018/09/11 hagaromo

その為に新任のマーケティングマネージャー、マイク・マーレイはサードパーティーのアプリケーション開発推進を担当する「ソフトウェアの伝道者（エバンジェリスト）」と呼ぶ者たちを配した。

その第一号は元ヒューレット・パッカードの技術者マイク・ボイシュ、二人目はアラン・ロスマン、三人目はガイ・カワサキだった。

スティーブは一九八二年の出荷予定日になんとしてもマッキントッシュを出荷したいと無理なスケジュールを開発陣にごり押ししていたが、無理なものは無理だった。

結局当初の予定には間に合わずスティーブは新たな出荷目標を翌年五月に設定してチームを鼓舞したが、問題は相変わらず山積みだった。

その一九八二年初頭、マッキントッシュチームは優秀なエンジニアたちで溢れかえっていた。

彼らが共有していたことは皆が驚くほどのコンピュータを創り、世界をあっといわせることであり、お金やキャリア、伝統といった世俗のあれこれは気にしないというものだった。

しかしそうはいっても現実は違って、エンジニアたちの年収は三万ドルほどと決して高い報酬ではなかったものの一方スティーブは二十五万ドルの年収をとっていた。

未来を見た方は、ハーツフェルドの言葉を思い出すことでしょう。

そういえばクリス・エスピノザは私に、

「トモ、チームに入る条件は優秀というだけではだめなんですよ。我々の仲間に入るのはパイナップル・ビザが好きでないとね」

と笑いながら教えてくれた。

「本当に面接の時に聞かれることなんですが、何故って同じピザが好きでないと毎晩一緒に食べに行けないじゃないですか」

そんなたわいもないことなら私も笑って済ますことが出来たが、スティーブの言動は私が同席しないと常軌を逸した悪ガキ同然になるという話しをアンディ・ハーツフェルドらに聞かされていた。

私自身は二〇一六年からタイムスリップしてきた人間であり、スティーブ・ジョブズの逸話は多々知っていたから特別驚くことではなかったが、その時代に居合わせた友人としては無視することはできなかった。

なにしろピザに限らずスティーブ・ジョブズとの外食は恥ずかしさと屈辱に耐える訓練かと思うほどのものだった。

アンディは私に唾を飛ばしながら訴えたことがあった。

「トモ、あなたが一緒の時には単に気むずかしいスティーブで済みますが僕らだけのときのスティーブは別人なんです」

未来を見たカリスマ 2018/09/11 hagaromo

なにしろレストランで運ばれてきた料理をそのまま受け取ることはまずなかったという。話が違うとか、皿が汚れてるとか、ウェイトレスの態度が悪いなどなどと難癖をつけて突き返すのだ。

「気がふれたのかと思いましたよ最初は。しかし徐々にこうした態度はスティーブの心が、心の奥底が病んでいるからこその権力の誇示だと気がつきました。どう見てもその時の彼は正常ではありませんでした」

アンディはこの時とばかり私に訴えた。

「それだけではないんですよ、トモ」

私は思わず、

「ええ、支払時に現金の持ち合わせがないといって貴方に払わせるんでしょ」

言ってから(しまった)と思った。ここは知らないフリをしておくべきなのだ。

しかし幸いなことにアンディは

「誰から聞いたのか知りませんが、そうなんですよ」

と深く追求しなかった。

ともかく誘うのはスティーブだったし彼はすでに二億ドルの現金を持つ大金持ちだった。

ただしアンディは、スティーブが奢るべきだというわけではないんだと力説した。

未来を見せたがりさま 2018/09/11 hagoromo

「自分の分も僕に払わせるのが問題なんです」
と嘆いた。
「バックグラウンドというか心構えをする暇も無く成功したからでもあるだろうし、自分に出来ないことなどないのだと思っているのかも知れないね。力を見せたくて仕方がないんだろうな」
私がため息交じりにいうと、
「そうなんでしょうが、スティーブもあなたがいる時にはそうした無茶はいいませんしやりません。だから意識的な行為なんですよ」
「それにウォズが大学へ復帰して会社に来なくなったでしょ。だからマスコミの取材やらはみなスティーブへと殺到するようになったし、事実アップルの成功はジョブズひとりの功績みたいに書き立てるものだから舞い上がっているのでしょうね」
あきらめ顔でアンディは呟いた。
私の数少ない友人の一人となっていたロッド・ホルトもこの頃のスティーブに対しては辛辣な物言いをしていた。
「まあ、いま彼はこれまで経験したことのない持ち上げられかたをしているから舞い上がっているんだな。金持ちでかつ時代の寵児だからマスコミはもとより時事ネタのターゲットになっているんだよ。メディアもアップルのことを書けば売れるらしいぜ」

未来を見る力 Kaji Masaki

事実偉大なイノベータとして評価されはじめたスティーブは大企業の社長たちは勿論、多くの経済界の輩も彼の話しを聞きたがった。そして一九八二年にはカリフォルニア州知事から産業革新委員会の委員に任命されたことをきっかけに、バンクオブアメリカの会長やヒューレットパッカード社のＣＥＯたちとの付き合いも始まった。

「スティーブは良し悪しはともかく一般的な社会通念が大事にされている場での経験や体験をしないうちに成功しちまったし、もともとあの性格だから偉くなったと思っているんだろうよ」

ロッドは苦々しい顔をして続けた。

「トモ、君はどうか知らないけど最近のスティーブは俺を含めて昔の自分を知っている奴らを避けている感じもするよ。きっとガレージ時代はもとより、作業場の床に這いつくばりながら電話を取っていた時代を知られたくない、いや思い出したくないのかも知れんな。奴を見ていると（俺は昔からこんなに立派だった）といってるみたいだぜ」

それは私も感じていたことだった。スティーブは忙し過ぎるからだと自分を納得させてはいたが、以前より声をかけてくる機会が少なくなっていたし、会って話をしてもどこか上の空といった感じだった。

そのスティーブは是が非でも来年（一九八三年）五月にマッキントッシュを発売するこ

未来を見たかりしてマ 2018/09/11 hagoromo

とに拘っていた。

たまたま私と廊下ですれ違ったりすると彼は、

「トモ、今度も間に合わないといったことのないよう君も目配りしてくれ」

繰り返し繰り返しいっていたが、マッキントッシュチームの誰もがスティーブのいう発売日は絶望視していた。

それを鼓舞し開発の進捗状況を共有する目的だったようだが九月に高級リゾート地、パハロ・デューンズで開催されたマッキントッシュチームの合宿でスティーブは「海賊になろう！」というスローガンとともに「週九十時間、喜んで働こう！」と宣言し「海賊になろう！」とプリントされたトレーナーを参加者一〇〇人に配ると同時に自分も着てみせた。

この年の秋、ジョン・カウチが率いるリサチームが俄然活気を帯びていた。それは来年春の発売に向けて具体的な準備が続けられていたし著名なジャーナリストを招いて試作品を公開し始めていた。

リサはメディアの反応もよく、それがまたスティーブ・ジョブズにはイライラの原因ともなっていた。

マイク・マークラもマッキントッシュの進捗状況がスティーブの思惑と次第にずれて

未来を見るカリスマ2018-09-11 hagaromo

きていることを危惧していた。
エントランスで立ち話となったときマイクは、
「頑張ってくれるのはありがたいが、私の責任としてはチームの奴らの健康状態も気になる所なんだよ、トモ」
そしてマイクは珍しく愚痴めいた話しを続けた。
それらはスティーブの新しい交際相手の話、ペプシ社長のスカリーという人物を社長として迎えようと説得している話し、オーディオ・メーカーと"Macintosh"の商標の件でトラブっているという話しだったが、どれも私の仕事には直接関係なかったしそもそも口の出しようもない話しばかりで閉口した。
無論二〇一六年からタイムスリップしてきた私はそれらの結果を知ってるだけに正直興味も湧かなかった。
「生みの苦しみでしょうかねマイク。でもクリスマス商戦はいい具合だとききました
が」
私は強引に話題を変えた。
「トモ、確かにクリスマス商戦だけは凄いよ。これまでの記録を一気に塗り替える勢いで売上げが伸びてるよ」
ちょっと間を置いたマイクは片手を少しあげて立ち去りの挨拶をしながら、

未来を見たかりんマ 2018/09/11 hagoromo

「アップルⅡには感謝してもし過ぎることはないよな」
自嘲気味なニュアンスを残して自分のオフィスに入っていった。
相変わらずアップルを支えているのはアップルⅡの売上げだったのである。その改良版であるアップルⅡｅも来年リサと同時に発表される運びとなっていた。

私自身はマッキントッシュ開発チームの一員ではなかったものの、どうにも気持ちが晴れない日々が続いた。スティーブが鼓舞すればするほどシラケてくるといったらよいのか。
「まあ、一九八四年一月二十四日には間違いなく発表にこぎつけるのだから私が悩んでも仕方がないよな」
と心の中で自分に言い聞かせ気分を変えようと外の空気を吸うためにエントランスに向かった。
それになんだか最近はスティーブとも気持ちがすれ違うことが多くなった気もするし、自分の居場所が次第に狭くなっているように思えて仕方がなかった。
「私はここでなにをしているのだろうか。なぜここにいなければならないのか。果たしてタイムスリップしたことに意味があるのだろうか」
いきなり妻の顔や弟妹、そして数人の友人たちの姿が交互に浮かんでは消えた。

未来を見る力 Kaiser Sunday 2018/09/11 hagaromo

皆心配そうな表情だった。
私は無性に寂しくなった。
受付でちょうど電話を置いたところだったシェリー・リビングストンが外に出ようとしていた私に気づき、
「トモ、なにか深刻な顔をしてるわよ。ここで嫌なこと吐きだしていきなさいよ」
と声をかけてくれた。
私は張り詰めていた気持ちがふっと緩んだのか、シェリーを振り返ったとき情けないことに彼女の姿が滲んで見えた。
「あらあらトモ、どうしたの。私、なにかあなたを泣かせるようなこといったかしら」
シェリーは慌てて受付カウンターから飛び出てきてハグしてくれた。
そのときちょうど通りかかったマッキントッシュチームの一人、ジョアンナ・ホフマンがシェリーに両手を握られうなだれている私に驚き駆け寄ってきた。
「どうしたのよトモ、シェリー」
シェリーは無言で頷くばかりだったが勘のよいジョアンナは、私の顔を覗き込むようにしてつぶやいた。
「スティーブにいじめられたのね」
その物言いが可笑しくて思わず苦笑いした私を二人の女性が心配そうに見つめてい

未来を見たカリスマ 2018/09/11 hagoromo

た。

そういえば一九七六年にタイムスリップして以来、幸いなことにスティーブ・ジョブズに気に入られこうしてアップルの一員として働くようになって五年ほど経った。その間私なりに環境に溶け込めるよう努力したつもりだし仕事面ではロッド・ホルトやラリー・テスラー他数人と友達になっていた。

眼前にいる自分の子供といってもよい年齢のシェリーやジョアンナたちはジジイの私にあれこれと気を配ってくれるし自分は恵まれていると常に感謝していた。

しかし思えば私はひとときでも真に安楽な気持ちになったことはなかった。四十年も先の時代からタイムスリップした私の心の奥底には妻への申し訳なさ、果たして戻れるものなのかという深い不安が常に渦巻き、仕事関係以外の友人もできなかった。

シェリーやジョアンナの励ましてくれる華やかで明るい声をどこか遠くに聞きながら私は過去が夢なのか、今がうつつなのか…どちらが本当の自分の人生なのかと気持ちがざわつき、その場に呆然と立ちすくんでいた。

ビュレル・スミスはマッキントッシュ開発チームの一員として主にロジックボードの設計を担当した人物である。彼はスティーブ・ウォズニアック開発のアップルⅡを崇拝し、マッキントッシュのロジックボード設計においてウォズニアックのスタイルをさら

未来を見る方 カリスマ 2018/09/11 hagaromo

に突きつめ、独自の設計スタイルを編み出した天才の一人だった。
彼とは私が社内で講演したとき、話しの最後に電池切れのｉＰｈｏｎｅを未来のガジェットを示唆するモックアップだと称して出席者に見せたときから頻繁に話す機会が増えた。
彼はいの一番に私が立っていた壇上に駆け上がりｉＰｈｏｎｅを奪うように手にしながら「これって本当にモックアップなの」と聞いた男だった。

その後何度も私のオフィスに来たり、休みの時間を惜しみながら掌に乗る未来のデバイスについて沢山の質問を浴びせたのだった。
ビュレルは仕事に熱心なだけでなく実力のある人物だったが、社内ではまだまだ評価されない技術者のひとりだったといってもよい。そしてあのアンディ・ハーツフェルドの親友でもあった。
ビュレル・スミスは一九七九年二月にアップルの中でも最も給料の安い職種である下級サービス技師として雇われた。ただしビュレル・スミスはマッキントッシュのハードウェア設計者としてすぐ頭角を現し天才的な手腕を発揮していた。
またアップルⅡ関連の開発では一部スティーブ・ウォズニアックの代役まで務めるほど確かな技術力を持っていたものの、正式なエンジニアには昇格できず不満をつのらせ

未来を見た方 Kazuma Kaneshiro

ていた時期でもあった。
彼は私に愚痴をいったことがある。
「トモ、僕は自分で言うのも不遜だけどなぜ評価されないのか分からないしそれが不満なんですよ」
「そうだね。君は才能とか技術的なスキルはもとよりだけど、他の技術者よりも抜きんでて熟練しているし勤勉さでも劣っていないよね。私はお世辞でなくそう確信しているよ」
私は正直に思っていることをはき出したがビュレル自身も自分が正当な評価をされない理由が分からなかった。無論上司に聞いてもはぐらかされるだけで不満が膨らむばかりだった。
「やはりまだまだ自己アピールが足りないのかなあ」
ビュレルは子供のように目をくりくりし首を傾げながら仕事場に向かった。
それから二週間ほど経ったある日の午後、私はロビーの受付カウンター内にいたシェリー・リビングストンと雑談していた。
先日どうにもみっともない醜態を見せてしまったが、逆に自分の弱さをさらけ出したからか、気が楽になり前よりも話しやすくなった。
そんなところにビュレルが現れた。

未来を見る力 Hagoromo

「トモ、いいところで会いました。ちょっと聞いてほしいことがあるんだけど」
そのときシェリーは大げさな物言いで、
「仕方がないわね。ビュレル、私の彼氏を貸してあげるわ」
ウィンクしながら私に目配せした。
私よりビュレルが顔を赤くしたのが可笑しかった。
「私のオフィスにくるかい」
「是非」
というので殺風景な私のオフィスで話しを聞くことにした。
「実はですねトモ。前にお話しした私への評価が低いことだけど、その理由が分かった気がするんですよ」
正直私には他人の評価を客観的に知るすべもなかったし、そうした役割を担っているわけでもないから気が楽だった。しかしビュレルに関しては前にもいったようにもっともっと上司たちは彼の業績を認めるべきだと思っていた。
自分の椅子に座りながらビュレルを見ると彼も二脚ある椅子のひとつに座りながら話し出した。
「僕はついに他のエンジニアたちにあって自分に欠けているものに気がついたんですよ、トモ」

未来を見通せ　ガリスマ　2018/09/11 Nagaoka

嬉しそうにいうビュレルの顔を眺めたとき、タイムスリップする前にアンディ・ハーツフェルド著「レボリューション・イン・ザ・バレー」という本に出ていたエピソードを思い出したが、無論ここは本人から話しを聞くべきだと私は黙って頷いた。

それは技術者らの多くは皆立派な髭を蓄えていたがビュレル・スミスにはなかったという事実だというのである。

「トモ、あなたは髭をはやしていないけど、マッキントッシュチームやリサあるいはアップルⅡの開発チームを見回すとスティーブは勿論、スティーブ・ウォズニアック、ダニエル・コトケ、ビル・アトキンソン、スティーブ・キャップス、マイク・マレー、キット・プランク、ジェフ・ラスキン、ジェリー・マーノック、ポール・バーカー、リック・ペイジそれにジョン・カウチなどなど皆立派な髭を生やしているんですよ」

真剣な眼差しで説明するビュレルを笑うわけにもいかなかったが、真剣な眼差しだからこそ吹き出しそうになった。しかし彼としては大切で重大な発見だと思ったのだ。

私は面白半分に問うてみた。

「なるほど。ただしビュレル、念のために聞くけど君が名を上げた人たちは何故髭を生やしているのかな」

ビュレルは少し考えたうえで呟いた。

「うん、何故なんでしょうね。これまで考えたこともなかったからなあ」

未来を見た力 Ｒ 2018-09-11 hagaromo

私はあくまでいま思いついたことだとして自分の考えを話した。

一般的に(なぜ男が髭を生やすのか？)といえば私の知る限りそれは男らしさのアピールであり、特に若いときの髭は若造に見られたくないといった意志があるようだ。それはタイムスリップ以前、私の回りにも髭を生やした男性が数人いたしそうした本人たちから聞いた話しなので間違いはないだろう。まあ若いときは心理的に背伸びをしたいということかも知れない。

ただし余談ながら年配の男性の髭はいささか違う。歳を重ねると頭が薄くなるが、そうすると頭髪の不足を髭で補おうとするかのように髭を生やそうとする男性も多いからだ。

それはともかくアップル以外でも髭を生やしている人たちは多かった。例えばバイト誌の最初の編集者のカール・ヘルマーズ、ニュージャージーで最初期のコンピュータ・ショウＰＣ－７６を計画したジョン・ディルクス、ドクター・ドブズ誌の編集者でＷＣＣＦの主催者だったジム・ウォーレン、製造番号四番のＡｌｔａｉｒ８８００を組立て、ラジオでメロディーを奏でさせたスティーブ・ドンビア、別名キャプテン・クランチと呼ばれたジョン・ドレーパ、ビル・ゲイツと共にマイクロソフト社を起業したポール・アレン、ビジカルクを開発したダン・ブルックリンなどを挙げれば十分だろう。それぞれの人物が当時何歳だったかを調べるのは難しくはないが、スティーブ・ジョブ

未来を垣間見たカリスマ20180911 hagoromo

ズを含めて確実なことは一九八〇年当時、一部の人たちを除けば皆若かったということだ。二〇歳代がほとんどだったのではないか。

そんな彼らが髭を生やすようになったのはカウンターカルチャーの精神やヒッピー魂をまだ失わずにいたこともあるだろうし、寝る間も惜しんで働いていたこともあり、髭を剃るのも面倒だったのかも知れない。

しかしそうした若者たちが精神を高揚し、ぶつかり合いながらも過ごした当時の世相ではやはりどれほど自分の存在をアピールできるか、主張できるかが肝だったに違いない。したがって意識的、無意識的にも自己アピールを髭というものに託していたと考えても無理はないと思う。

私はそんなあれこれをビュレル・スミスに話したが彼は時々頷きながら同意してくれた。そして自分も早速髭を生やしてみるといいつつ私のオフィスから出て行った。

事実ビュレルはすぐに口ひげを生やし始めたが、彼の髭は完全に生えそろうまでに一ヶ月ほどもかかった。そして自分でも完璧と思われる髭になったと考えたその日の午後、彼は技術担当副社長(立派な髭を生やしていた)に呼ばれてエンジニアとして技術スタッフのメンバーに昇格したのだった。

一人前に髭が生えそろった男として認められたのである。

その日の午後、ビュレルは小走りに私のオフィスに顔を出し、ドアを半開きにしたま

未来を見る方がいいのか？ 2018/09/11 hagaromo

ま部屋に立ち入らず、
「トモ、ありがとう。おかげで上手く行ったよ」
口元の少々薄い髭をひと撫でし、Ｖサインをして走り去った。
とはいえマッキントッシュ開発プロジェクトの尋常ではないプレッシャーはこの繊細な天才にも容赦なく加重していった。

話しは先走るが、ビュレル・スミスはアップル退社後、Ｒａｄｉｕｓ社の共同設立者として成功したものの一九八八年に業界から足を洗った。
しかしそれは悠々自適の引退ではなかった。
彼は精神疾患を患い、裸で外をうろついたり車や教会の窓を壊して歩いたりするようになったという。
彼の病は強い薬でもコントロールできず、夜にスティーブ・ジョブズの家まで出かけては石を投げて窓ガラスを割ったり、とりとめのない手紙を残したり、かんしゃく玉を投げ込んで逮捕されたこともあった。そして後には親友のアンディと会っても話しをしなくなり、ビュレル・スミスが自分の名前を名乗れず留置所に入れられたとき、アンディはビュレルを釈放してもらうためスティーブ・ジョブズの力を借りたこともあった。
彼の病の原因がマッキントッシュ開発時代のプレッシャーにあったとは言わないが、

未来を見つめ

私はそうした彼の近未来を知っているだけに、ビュレル・スミスの猛烈な仕事ぶりが気になってしかたがなかった。

一九八二年も押し迫った頃だったか、私の目から見てもこの頃のアップルは随分と尊大で高慢なところが多々見られた。

まあ、二〇一六年からタイムスリップした私の経歴の中に約一四年間アップルジャパンのデベロッパーとしてビジネスをやってきた経験からしてアップルという企業は決して一筋縄ではいかない会社だということは承知していた。

具体的にいえば何度裏切られたことか…。そして時に尊大で非常識きわまる面も見せたが、私がタイムスリップしていた一九八二年という時期はアップルの社内にいてもそうした感じを受けることが多くなってきた。

事実私がスティーブ直轄の部下だと知るとディーラやディストリビュータの人たち、あるいは時にメディアの人たちからスティーブ・ジョブズとの間を取り持ってくれという直接間接の依頼が目立ってきたが、そうした中には苦情やクレームも多々あった。

ある水曜日のこと、暫くぶりにスティーブから呼ばれたので、私はそうした危惧を隠すことなくぶつけようと勇んで彼のオフィスのドアを開けた。

ところがスティーブのオフィスにはジーン・カーターという副社長がいた。私はステ

未来を見つめたカリスマ 2018/09/11 hagaromo

ィーブと一対一の話しをしたかったので、
「これは失礼。スティーブ、出直すよ」
と言いながらドアを閉めようとする私を制してスティーブは、
「トモ、いいんだ、入ってくれ。それにジーンを紹介しておきたいんだ」
そういわれれば断るわけにはいかない。
まだ社内でまともに話しをしたことのない男と握手をした。なにしろその頃のアップルは大人数だったし新しい人材でごった返していた。そして私は販売に関わる部署の人たちとはほとんど触れ合う機会がなかったのだ。
「ジーン・カーターです。よろしく」
「トモヒコ・カガヤです。こちらこそよろしく」
椅子に座った我々を見つめながらスティーブは、
「トモ、ジーンは日本市場にパイプをつなげてくれた功労者だよ。だから一度君にも紹介しておきたかったんだ。まだまだ極小で未知の市場だけどね。今後大きな市場とすべく君にも大いに活躍して欲しいからね」
スティーブの話しが一区切りついたとき私はジーン・カーターに向かい、
「そうでしたね。一昨年でしたか、日本の合繊メーカー東レとの提携発表がありましたがカーターさん、貴方は責任者として契約を仕切った功労者でしたね。そういえば何故

未来を垣間見たカリスマ20180911 hagoromo

東レなのかという質問が記者たちから出たことを思い出しました。さらにその場で貴方は日本法人設立の可能性も示唆しましたね」

途端にジーン・カーターは澄んだ目を見開いて叫ぶように、

「嗚呼、噂通りの人ですねカガヤさんは。驚きましたよ。貴方はここにいて何故日本での出来事を詳細に知っているんですか」

「だからいったろう。トモは過去も未来もお見通しだと…。さて、それはともかくトモ、君の話を聞いておこうか。ジーンにも君の話は大いに参考になるだろうから遠慮なく話してくれ」

スティーブは作り笑いをしながら茶化すように促した。

「わかったよスティーブ。話しはこうだ…。アップルは君の会社であるばかりか君の命に違いない。だから言いにくいこともあえて言わせてもらうよ」

私は流通各社の反発と不満が広がっていること、マスメディア各社からもアップルはおごり高ぶっているという批判が出ていることを話しスティーブがそれに対して善処すべきだと忠告した。

「スティーブ、君は最良最強の広告塔だよ。君の一言ですべてがよい方向へ変わっていくんだ。だからもう少し流通市場やメディアを味方につけるよう配慮すべきではないかな」

未来を見るカリフォルニアの空 2018/09/11 hagaromo

私はオフィスの窓から暮れなずむカリフォルニアの空を見ながらいった。

スティーブが口を開く前にジーン・カーターが片手を軽く上げて発言の許可をスティーブに求めた。スティーブは無言でそれを許したがジーン・カーターの物言いはその物静かな風貌とは些か違ったものだった。

「カガヤさん、お言葉ですが私もそうした不満があることは承知してます。しかしことはビジネスの世界なんです。我々にはノルマも課されていますし市場にしても食うか食われるかで日々争っています。我々の見るべき方向は販売店やマスコミではなくユーザーだと思うんです。それにアップルはいま市場にとって金の卵だと自負しています。どんな販売店もアップルを売りたがってますしそれは我々の商品が際立っているからでしょう。アップルを扱えないディーラーは焦っていると聞いてます」

一呼吸してジーン・カーターは続けた。

「カガヤさん、これは商機ですよ。普段ならなかなかこちらの主張を通して貰えない流通市場やマスコミに対して我々があるべき主張を促す最良の商機ですからこの機会を逃しては後悔することになると思います。我々は強い姿勢で彼らに臨むべきです」

スティーブの表情はあきらかにジーン・カーターの主張を支持していた。私はこれ以上の話しは溝を作るだけと判断し、

「あなたの話しは分かりました。今回は素直に引き下がりましょう」

未来を見たカリスマ 2018/09/11 hagoromo

私は意識的に穏やかに微笑をくずさず二人に挨拶しながらスティーブのオフィスから退出した。

まあ、カーターがいなくてもスティーブが素直に私の忠告に耳を傾けるとは思っていなかったが、どうにも気持ちが収まらなかった。

確かにアップルは慈善事業の組織ではない。ビジネスだからしてマスコミも流通市場も良い意味で利用すべきことは確かだ。しかし当時のアップルは明らかにおごり高ぶっていた。無礼な対応も目立っていた。それはマスコミや流通各社だけでなく競争相手、すなわち他のコンピュータメーカーも軽蔑と嘲笑の対象でしかなかった。

特にマスコミを敵に回すことは決して得策ではないと私は考えていた。いつか大きなしっぺ返しにあうかも知れないとも。

未来を見た方 Lisa Office System

リサの販売開始

年が明けた一九八三年一月、リサが発売された。リサは実に画期的なコンピュータだった。搭載されたLisa Office System通称 リサ ＯＳはパーソナルコンピュータ初のＧＵＩ環境のオペレーティングシステムだったし、マルチタスク機能とメモリ保護機能を備えている点でも先を行っていた。またメモリも当時としては標準で一ＭＢという大きな容量を持っていた。

一方後発のマッキントッシュはリサの小型版と見られることが多いが、メモリ搭載はたったの１２８ＫＢだったし、シングルタスクの上にメモリ保護機能もなかった。

リサがリリースされた際、注目されたもののひとつがワンボタンのマウスだった。このマウスボタンの数についての論争は部外者にとってどうでもよいことに聞こえるかも知れないが、関係者の間では激論が交わされていた。

マイクロソフトのビル・ゲイツは「マウスボタンの数は、この業界でもっとも激しい議論の的です。まるで宗教戦争だ」と言っていた。

そもそも一九七一年、ビル・イングリッシュらが自分たちの夢をゼロックスＰＲＡＣで実現するため、ダグラス・エンゲルバートのもとから去ったときマウスは赤・黄・青の三つのボタンがあった。そのゼロックスはＳｔａｒ開発段階でボタンは二つが妥当と

未来を見た方 ＿＿＿＿＿＿＿＿

いう結論に達する。

無論アップルでもリサのマウスについて人間工学的な快適さを追求するため、大きさや形状について追求が行われ、工業デザイナーのジェリー・マノックは一五〇種ものマウスの試作を重ねた。

そうした中で一番の難問はボタンをいくつにするかという問題だった。

どうやらワンボタンの提唱者はラリー・テスラーだったようである。

テスラーはある時、

「トモ、私らはボタンが二つのマウスも時間かをかけてテストしました。テストの参加者は皆よく間違えましたよ。マウスのどちらのボタンを押すべきかと画面からしょっちゅう目を離してマウスを見てるんです。私が『ボタンを押して』というと必ずといってよいほど『どっちのボタンですか』と聞かれました」

テスラーはボタンの数以外はすべて同じ条件で実験を続けたところ、ボタンがひとつのマウスの方が簡単だということがわかったという。

「それで理解できたんです。マウスを使っている時は基本的に指の延長で対象を指しているんだとね。それで二番目のボタンをとってしまいました。そして『ボタンひとつのマウス』というレポートを書いたんです」

このボタンを一個にするという決断には元ＰＡＲＣの同僚たち、例えばビル・イング

未来を見る先見 hagoromo

リッシュらには許しがたい暴挙に思えた。彼らには機能を制限するとしか思えなかったのだ。

しかしラリー・テスラーはＰＡＲＣには拘らなかった。

「なにしろリサの目的は、システムをコンピュータの専門家にではなく一般の人々に提供することなんですからね」

それにビル・イングリッシュたちのいうようにリサや後のマッキントッシュのマウスは機能に制限があるマウスではなかった。ボタンはひとつだが、だからこその手法を考え出したのだ。それは私のセミナーがヒントになったようだが、複数ボタンの代わりにボタンのクリックもシングルクリックの他にダブルクリックが採用された。

またマウスでアプリケーションのアイコン上にポインタを移動し、ダブルクリックするとウィンドウが開くのが見えるというプロセスは、リサのインターフェースがＳｍａｌｌｔａｌｋパラダイムに加えた数多くの発明のひとつだった。

こうしてリサのマウスは伝説となった。

その一月、タイム誌のカバーをスティーブの顔が飾ることになっていた。実は昨年末から同誌の記者マイケル・モーリッツが取材許可を得て社内を自由に取材することが許されていた。スティーブとしては精一杯のメディアへのサービスのつもりだったからそ

未来を見通せ　ガリ　ゴ　マ　2018/09/11 ハガ　ロ　マ

の成果が集約されるはずだった。しかし年末にその見本誌が送られてきたものの読んだスティーブは激高し怒り狂った。

それは“The Updated Book of Jobs (ジョブズ白書)”というタイトル記事だったが、内容はスティーブに向けられた嘲笑と批難で埋まっているような記事だった。

私にはタイム誌がメディアを代表してアップル、いやスティーブ・ジョブズにカウンターパンチを見舞ったように思えた。

まばらな家具しかない一室で一人あぐらをかくスティーブ・ジョブズの写真のキャプションには匿名の従業員の弁として「フランス国王にしたらさぞかし立派だったに違いない」と書かれていた。さらにスティーブが怒り狂ったのはウォズニアックの話しとして「スティーブは回路作りも設計もコーディングも一切やっていない」という内容の記事が載っていたからだ。

要はスティーブ・ジョブズという男は創造性も設計技術もなく部下や周りの人たちを鼓舞して巧みに財をなした男だというニュアンスで記事は溢れていた。

スティーブにとって特に古い友人で誰あろうアップルの共同創立者であるウォズからこんな批難を受けるとは思いもよらないことだったから背信行為と考え取り乱したのだ。

スティーブは自分が正しいことを証明してくれることを願い、愚痴をいい、慰めて貰

未来を見た方 ＿＿＿＿＿＿＿＿

えることを期待して手当たり次第に電話で自分の正当性を訴えた。無論私の所にもオフィスが近接しているからすぐに血相変えて飛んできた。

まあまあそれはスティーブとて人間だから由としよう。しかしやはりスティーブはスティーブだった。

なにしろ反省といった気持ちはさらさらなく、ただただタイム誌の記事は事実を伝えていないと自分の主張に同意を求めることに終始した。さらに彼の尋常でない人間性を示すことだが、自分がマッキントッシュ・プロジェクトから追い出し退職に追いやったあのジェフ・ラスキンにまで電話をかけて愚痴をいったらしい。それも年明けの元旦、朝8時に電話をしたという。

スティーブには過去は一切意味のないものだった。重要なのはただただ現在、この瞬間のみなのだ。

私は正直寂しい気持ちと残念な気持ちで一杯だった。スティーブという人間をなんとか理解しそして役に立ちたいと願い努力をしてきたが、自分の無力をひしひしと感じると同時に無性に戻りたかった。

帰りたかった。

元の世界へ…。

未来を見た方 ＿＿＿＿＿＿＿＿

スティーブの意思がリサを生み出すきっかけとなったのは間違いないが、ことは大変複雑だった。

ゼロックス社パロアルト研究所（ＰＡＲＣ）の見学以来、リサの開発はスティーブの思い描くようなコンセプトを持つようになっていったしタイミングはともかくＰＡＲＣからラリー・テスラーをはじめ、後にアラン・ケイやスティーブ・キャプスら十五名ほどの人たちがアップルに移ることになり、開発自体は徐々に注目を浴びるようになっていった。

しかし当時アップルの社長であったマイク・スコットはアップルⅢの失敗はスティーブ・ジョブズが主張した設計要求のためと考えていた。したがって同じ失敗を繰り返さないようにと組織の変更を考え、スティーブをリサプロジェクトチームのリーダーから外すことを決断する。

行き場を失ったジョブズが結果として次に首を突っ込んだのがジェフ・ラスキンが少人数で開発を進めていたマッキントッシュ・プロジェクトだったわけだ。したがってリサの基本コンセプトが固まっていく過程ではスティーブ・ジョブズの夢や意志が強く働いていたことは間違いない。だからこそＧＵＩおよびマウスを持つコンピュータの開発が具体的になっていったのだ。

結局リサはヒューレットパッカード社から来たジョン・カウチがプロジェクトリーダ

未来を見た。カリスマ2018/09/11 hagoromo

ーとなり、二〇〇人／年の人員と五〇〇〇万ドルもの開発費をつぎ込み冒頭に記したように一九八三年一月十九日に正式発表された。

それはモトローラのＣＰＵ ６８０００／５ＭＨｚ、一ＭＢのメモリ、容量八六〇ＫＢの５・２５インチフロッピーディスクドライブ二基、十二インチ／７２０×３６４ピクセル・モノクロビットマップディスプレイ、ワンボタンマウスとキーボードを備え、アップルⅢ用の外付け５ＭＢハードディスクといった仕様となり、他のマシンとの互換性がないこともあって専用七種類のアプリケーションを同梱の上で出荷された。

しかし出荷はされたもののリサは販売当初から躓いた。

アップルが独自で開発した５・２５インチフロッピーディスクドライブ(ＴＷｉｇｇｙＤｒｉｖｅ)は故障が目立ったし話題性ほど販売台数が振るわなかった。

先の話になるが、アップルはリサの問題点を検証し、ソフトウェアを別売にして本体価格を下げ、故障が多い５・２５インチフロッピードライブをマッキントッシュと同じソニー製の３・５インチ仕様に変え、ハードディスク内蔵タイプの仕様に変更し、リサ２とした。

さらに一九八五年には一〇ＭＢの内蔵ハードディスクタイプであるリサ２／１０をマッキントッシュＸＬと改名しマッキントッシュのラインナップに組み入れ延命を図るが

未来を見た方 Kazuma Hagaroma

すぐに販売中止を発表。

その後アップルの在庫を引取りアップグレードを図ったサン・リマーケティング社の努力にもかかわらず一九八九年九月、アップルは税務対策の意図もあって一連のリサを完全に葬ることを決断し、ユタ州ローガンの埋立地に在庫の全てが埋められることになった。

ともあれマッキントッシュを含めその前後のパーソナルコンピュータを知っている私からみてもリサはずば抜けたマシンだった。メモリ保護やマルチタスクといった機能だけでもマッキントッシュはその足元にもおよばない時代の最先端マシンだった。しかしリサはビジネス的に失敗した。なぜだろうか。

後付けの話しとして価格が一〇〇〇〇ドルと高すぎたとかスピードが遅いといった話もあるが、リサの販売が当初から芳しくなかったのはアップルがこの種のビジネスマシンを販売するノウハウに欠けていたこと、そして最大の問題はスティーブ・ジョブズがリサの販売を快く思わず、一言で言うなら邪魔をしたからだと私は考えている。

リサという製品はその名の由来であった実の娘同様にスティーブから認知されないままに生まれたのだ。

なにしろリサ販売の初期からスティーブは、

「近々ベビー・リサ(マッキントッシュのこと)というリサの能力を超え、低価格なマシ

未来を見たカリスマ 2018/09/11 hagoromo

ンが登場する」
と自身でリークしていた。これではリサが売れるはずもない。
しかし一方対外的にスティーブは、
「我々はリサテクノロジーに本当にすべてをかけている」
と二枚舌を繰り返していた。

私は機会があったときその点をスティーブに問いただした。
「スティーブ、君の言動は影響が大きいからリサの販売にブレーキをかけるようなことはまずいと思うけどな」
私のストレートな物言いにスティーブは顔色も変えずに答えた。
「トモは知ってるだろ、いまの俺にとって一番注視すべきプロダクトはマッキントッシュを一日も早く完成させることだ。マッキントッシュで宇宙を凹ますことだ。そして俺はリサプロジェクトから不当に外された男だよ。その俺がなぜリサのあれこれについて気を回さなければならないんだ」
私は口の先まで(君はアップルの会長ではないか)と出かかったが、そういう物言いはスティーブに意味がないことを知っているので黙るしかなかった。
スティーブは続けた。

未来を見る方 ナリスマ 2018/09/11 hagoromo

「カウチとリサとマッキントッシュのどちらが早く出荷できるかという賭に俺は負けたけどプロダクトの出来ということに関してはマッキントッシュの方が断然素晴らしいよ。俺は以前トモに言われたとおり、マッキントッシュという類の無いプロダクトに俺たちなりのストーリーを注ぎ込んでいるんだ」

「それに」

とスティーブはにやりとしながら、

「マッキントッシュをアピールする際に『リサテクノロジー』という言葉は積極的に使うつもりだよ。これは事実だもんな。リサの良いところを凝縮しコンパクトにして価格も買い易い製品にするんだ。だから売れるよ」

私は退散するしかなかった。

私はリサそのものは高く評価していたし二〇一六年からタイムスリップした人間としてリサのその後の不幸も重々承知していたから事あるごとに関係する人たちにリサについての印象を聞いて回った。しかしそれらを総括してみるとどうにも皆責任回避の弁のようで私には正直気に入らなかった。

例えば暫くぶりに会社に顔を出したスティーブ・ウォズニアックに聞いたとき彼は、

「(リサは)マッキントッシュよりアーキテクチャー面からもよいコンピュータだよ。問

未来を見る力 Kaiser Kaiser 2018/09/11 Nagaoka

題は価格だね」
とどこか通り一遍の感想に思えたし、ウォズは当時経営面から遠いポジションにいた関係上、リサ開発の進捗状況には詳しくなかったのだから仕方がない。
私はリサ開発の総指揮を執ったジョン・カウチにも話しを聞いた。
「トモヒコさん、リサの不幸は販売戦略のまずさが第一ですよ。なにしろ全米で五〇のディーラーだけに絞って販売させたのが販売が振るわなかった原因のひとつでしょう。それにリサライターというワープロのデキも悪かったしね」
ジョン・カウチの立場からすればリサそのものに問題があるのではなく販売体制に問題の原因があると主張したかったのだろうが私は思わず、
「リサ自身に弱点はなかったんですか」
と聞かずにはいられなかった。
彼はスティーブが低価格のマッキントッシュのことをあちこちでしゃべっていたこと。またアップルⅢ用に開発されていた外付けハードディスクＰｒｏＦｉｌｅは大きく、しかも遅かったことやフロッピードライブもあまりできがよくなかったことをぼそぼそと話してくれたが、欠点を認識していたとするならプロジェクトリーダーの言としては実に無責任に思えた。

未来を見た方 Kazuma Sakai

ビル・アトキンソンはリサ開発に関してソフトウェア面で深く関わった1人だったが、

「リサはちょっと遅かったが非常によいマシンだと僕は思ってますよ」

といいつつ、

「トモ、僕はリサとマッキントッシュの両方を知っている数少ない人間だけど、やはりこの両者を同じ時期に開発するというのが一番の問題だと常々考えてました。事実二股を強いられた僕たちはメチャ大変だったし、価格や仕様が違うとはいってもユーザーから見てその違いなど大きな問題とは感じないでしょうからね。だからどちらかが影が薄くなるのは自明の理です」

彼らしい明解な意見だったが、立場上どちらの悪口もビルは言えなかったに違いない。

そういえばリサ開発メンバーの1人だったリッチ・ペイジはもっと辛辣な発言を繰り返していた。

「トモヒコさん、どこでどうなったのか私らには分かりませんが リサの仕様に後発のマッキントッシュが次第に似ていくのを見ているのは辛いものがあります。そんなの絶対におかしいですよ。スティーブ・ジョブズはリサプロジェクトをコントロールさせてもらえないから、リサをぶち壊したいんですよ。リサが成功しないとすればその原因は

未来を見る方向 hagaromo

マッキントッシュだしスティーブが原因ですよ。なぜこんな単純なことが経営陣たちに分からないのか私には信じられませんね」

ペイジのいらいらは当時のリサチームの思いを代弁したものに違いないし私は心情的にリッチ・ペイジに同情を禁じ得なかった。

私はリサが次第に形になっていく過程を見ていたが、機能面や処理速度に関して皆が後でいうほど遅いとは思わなかった。なぜって当時のパーソナルコンピュータはそんなものだと知っていたからだ。

それよりもリサは社内のゴタゴタをまともに喰らいながら開発を余儀なくされた不幸な製品だというのが私の印象だった。

マッキントッシュに目立つ機能を持って行かれたのもそうだが、外付けハードディスクは由としてもなぜアップルⅢ用として開発されたハードディスクを標準として使うようにしたのだろうか。中身はともかく外装のデザインくらいリサに合わせて再設計すべきだったのではないか。

横幅のサイズもリサ本体のそれと違うしボディカラーはともかくデザインもリサとしっくりこない。

私が調べた範囲ではこれまた失敗作となったアップルⅢ用のＰｒｏＦｉｌｅが大量に余ってしまったことが一番の要因だと認識している。

未来を垣間見たカリスマ20180911 hagoromo

この点をマイク・マークラに尋ねたが彼は、
「カラーも一緒だし悪くないよ。第一リサの頭上に置かずに並べて机上に置くユーザーもいるしな。その場合はとてもマッチングしていると思うよ」
とお気楽な様子だった。
しかし現実問題として設置スペースの問題もあり、多くのユーザーがリサ本体の上に乗せて使ったしアップルのカタログもそうした使い方を推奨しているように思えた。なによりもアップルの動向に詳しい多くのユーザーはＰｒｏＦｉｌｅがアップルⅢのために設計されたことを知っていた。
ともあれ混乱というか欺瞞と腹の探り合いの総本山はやはりスティーブにあった。
そんな気持ちはさらさらないはずなのにスティーブは一九八三年一月三十一日のタイム誌に、
「これから十年間はリサでやっていけるだろう」
といった心にもないコメントを載せたのだから広報をはじめ社内の混乱は目に余るものとなっていた。

未来を見る方法 Hagaromo

第六章　波乱の前兆

ジョン・スカリーという男

新しいアップルの社長を探しているという話しは社内でも知られていた。特に秘密にする話しでもなかったしマイク・マークラが早く社長の重責を外してくれと後押ししてもいた。

またペプシの社長でマーケティングのプロでもあるというジョン・スカリーという男に白羽の矢が立ちスティーブ自らが交渉中だという話しも漏れ聞こえてきた。社内の一部では何故スティーブはジョン・スカリーに拘っているんだと首を傾げる者もいた。

ただしスティーブという男をよく知っている我々の間では何故スカリーなのかということは自明の理であった。

マッキントッシュ開発チームのジョアンナ・ホフマンは聡明でストレートな物言いをする女性でもあり、この頃私は彼女と話す機会が増えていた。ただしそのほとんどはシェリー・リビングトンと三人の時だったが。

「皆は何故スカリーなのかと訝しがっているけどそんなこと説明がいることかしら」

未来を見つめ直すかりんとう 2018/09/11 hagoromo

シェリーは今更バカバカしいというように首を傾げた。
ジョアンナは愉快だという顔をしながら、
「ほんとね。アップルはコンピュータメーカーよ。本来なら同業の会社から適任者を見つけるのが理屈だと思うけど皆そのことに気がつかないのかしら。ねぇ、トモ」
話を振られた私は、
「まあ、社長が誰になったところで我々の報酬が変わるわけもないしと大方の社員は興味がないのかも知れないね」
「だけど会社にとって社長の選任は重要な事よ。当然よね」
シェリーは真面目な顔で私を直視した。
「やはりスティーブの思惑に皆振り回されているということかな」
私が呟くと、
「スティーブはとにかく自分が主導権を握りたいのよ。本来なら自分が社長になりたいと思っているに違いないわ」
「そうね、だけどさすがにこれまでの経緯を知る役員会ではそれが通らないことをスティーブは知って、何とか自分がコントロールできる人材を探しているんだと思うわ」
ひとつ離れた席にいたラリー・テスラーらが（声がでかいぞ）というサインを笑いながら我々に送ってきたが、それを知るとジョアンナはラリーへ陽気に投げキッスした。

未来を見る力 Kaiser Mayer Group

ランチの後、職場に戻るまでの数十分、私ら三人は新しい社長の選任とスティーブの思惑について言いたいことを話しあっていた。

シェリーがいう。

「ジョン・スカリーって人、コンピュータのこと知ってるのかしら」

「いや、知らないからこそスティーブの思うつぼなのよ」

ジョアンナがすかさず答えるとシェリーも（分かったわ）というような意味深の表情をした。そして私の意見はという意味なのだろう右手を私に向けた。

「私もその通りだと考えているよ。ジョン・スカリーって人はマーケティングに精通しているらしいね。企業にとって社長がマーケティングに強いことは大切な事だしある意味これまでそうした点がアップルに欠けていたことは事実だよ。だから繰り返すけどマーケティングのプロフェッショナルだという肩書きには反対しないけどね」

すかさずジョアンナは、

「あら、随分とスカリーに身贔屓するのね」

といたずらっぽい顔をした。

「いや、すでに貴方たちには分かっているだろうけどスティーブにしてみればマーケティングに関してはスカリーに任せノウハウを勉強するとしても、今後の新製品の動向やプロダクトの主導権といったものをすべて自分が掌握したいわけで…」

未来を見たカリスマ 2018/09/11 hagoromo

「そう、スカリーがコンピュータのことを知らなければまずはスティーブに聞くのが筋だし、そうすればスティーブの考えや主張がスカリーを通して具体策となっていくわよね」

ジョアンナはため息をついた。

私は気心の知れたシェリーとジョアンナに近未来の予測だとして話しを続けた。無論それは二〇一六年からタイムスリップしてきた私だからこそ知り得た歴史的事実なのだが。

「私の危惧、そしてその結末を二人には話しておこうか…」

無意識にも真面目な表情になったのか、二人の女性も真剣な顔で身を乗り出してきた。

「あくまで私個人の意見だが、事実ジョン・スカリーという人物はスティーブの求めに応じてアップルの新しい社長に就任するよ。もう少しでね。問題はその後、社内の組織変更をすることになるが承知のようにいまはリサ・プロジェクトとマッキントッシュ・プロジェクトのリーダーは別だよね」

「そうね。マッキントッシュはスティーブだけどリサはジョン・カウチよね」

シェリーがわかりきったことだというように言い切った。

私は二人の顔を眺めながら、

未来を見た。カリスマ2018-09-11 hagaromo

「きっとこの二つのプロジェクトのリーダーはスティーブが総括することになるよ」
といった。
「それって私らマッキントッシュチームにとっては悪い事ではないかも知れないけど、リサチームには最悪なことじゃない」
ジョアンナは吐き捨てるように呟いた。
私は頷きながら、
「だから次ぎに何が起こるかはわかるよね。スティーブは極力リサの販売や社内での存在感といったものを潰しにかかるだろうからリサは短命に終わるはずだよ」
社内の風潮はもともとこうしたリサかマッキントッシュかといった極端な二派に別れていたわけではない。概して両方のチームは互いに精神的および技術面においてもサポートしあっていたしマッキントッシュのプログラミングを担当する技術者の半分はリサチームから来た人たちだった。事実ビル・アトキンソンを筆頭にそのほとんどは掛け持ちだったといってよいだろう。
ただしスティーブ・ジョブズひとりがマッキントッシュを成功させたい一心でリサをサンドバッグのように扱っていたのだ。
「それからどうなるの」
ジョアンナはシェリーと顔を合わせながら問う。

未来を見たかりしてマ 2018/09/11 ハガロマ

「くどいようだけどリサは色々と延命を図るけど失敗作として葬られるだろうね…」

私がまだ言い終わらないうちに、

「リサの話しはいいのよ。スティーブとスカリーは上手く行くのかしら」

シェリーが突っ込んでくる。

深く息を吸い込んでから私はなるべく軽口を叩くような雰囲気で続けた。

「最初の一年はとても上手く行くと思うよ。だけど、そうだな、再来年の今頃は険悪な仲になるだろうね」

面白い事にシェリーにしてもジョアンナにしても私のこうした一見荒唐無稽な話しに(なぜそう思うの)といった質問はしなかった。それまでの付き合いの中で私の未来予測がすべて現実となっていくことを知っていたからだがまた(なぜトモは未来がわかるの)という質問もしなかった。まさか私が未来からタイムスリップしてきた人間だとは思わなかっただろうが、何らかのそう断じる根拠があっての話であり私が虚言を労する人間でないことは理解してくれていたからだ。

私はこれ以上現時点で話しても意味は無いと思い話題を変えた。

「ところでも二人はスカリーと会ったことあるのかな」

「ええ、会ったというより近くで見たという方が適切だけど、少し前もアップルを見学しに来たわよね」

未来を見通せ　カリスマ　20180911 hagoromo

「そうそう。そのとき私も受付で挨拶したわ」
二人がうなずき合って言い交わした。
「それなら聞くけど、スカリーという男はアップルに相応しい、いや似合う人物だと思うかい」
私は些か意地悪な質問をぶつけてみた。
「そうねぇ。仕事ができるかできないかといったことは私には分からないけど第一印象を正直言うとね、彼はこのシリコンバレーには似合わないと思うな」
ジョアンナの物言いに頷きながらシェリーも、
「同意見だわ。一言でいうなら良くも悪くもだけどアップルらしさ、アップルが築いた文化を理解できるとは思えないわ」
と辛辣な感想だった。

私は二人の話しを聞きながらサンフランシスコやボストンのＭａｃｗｏｒｌｄ Ｅｘｐｏでジョン・スカリーのキーノートスピーチを見聞きしたこと、そしてＭａｃｗｏｒｌｄ Ｅｘｐｏ／Ｔｏｋｙｏ第一回目のときに来日した際、テープカットしたことやその後展示会場を見回ることなくアップルジャパンのスタッフらに促され足早に去っていったことなどを思い出していた。

未来を見通したカリスマ 2018/09/11 hagoromo

後でアップルジャパンの関係者に聞いたところに寄ればそのままゴルフ場に行ったと聞き、日本最初のＭａｃｗｏｒｌｄ Ｅｘｐｏだからこそ会場内の各展示、すなわちデベロッパーたちに挨拶して回ってもバチは当たらないだろうにとがっかりしたことを思い出した。

「ねえねえ、トモなにを考えてるの」

シェリーの呼びかけに我に返った私は、キーノートスピーチの際にＴシャツ姿で現れたジョン・スカリーの姿に痛々しさを感じたことも記憶の底から宿ってきた。彼は彼なりに東海岸のビジネスのセオリーを脱ぎ捨てアップルに同化しようと努力をしていたのだろうが、その姿はコンピュータメーカーの社長にはどうしても見えなかったのだ。

「確かにそうだな。いまスカリーをこの場に立たせたとしても違和感一〇〇％だろうな」

私の物言いに二人はクスクスと笑った。

「今日の結論になるけど」

と断って話しを続けた。

「スカリーにはスカリーの利点があると思うよ。しかしどう考えてもスカリーは苦労するよ。だって清涼飲料水とか菓子類を売る東海岸のエスタブリッシュメント企業の枠の

未来を見る人 カリスマ 2018/09/11 hagoromo

中で育ったスカリーなんだ。一方我々のビジネスは四半期を基準とし慣例に捕らわれないイノベーションを続けていかなければならないビジネスだ。その違いを理解し咀嚼するには多大な時間と努力がいるだろうね」

それに、

「スティーブはスカリーを見くびり過ぎていると思うな。だってスカリーも畑違いとはいえ百戦錬磨のビジネスマンだよ。スカリーがアップルをより会社らしい会社にできるとすればそれは同時にアップル社内に権力闘争を生みだすことにもなるだろうね。それは回り回ってスティーブ一人の思い通りには動かない組織になるということだな」

我々は軽いため息をつきながらそれぞれの職場に戻った。

ジョン・スカリーはスティーブの誘いに固辞を続けていたが結局一九八三年四月、マイク・マークラに変わってアップルの新社長になることを受諾した。

「本当に有意義なことができるチャンスを捨て、一生砂糖水を売り続けるのかい」

というスティーブの殺し文句がスカリーの気持ちを揺り動かしたとも、あるいはアップルが最終的に提示した条件、すなわち年俸一〇〇万ドル、移籍ボーナスとして一〇〇万ドル、最大一〇〇万ドルのストックオプション、業績連動の報奨金そして二〇〇万ドルの自宅が購入できる低利融資に動かされたという口さがない噂も飛び交った。

未来を見通せ　カリスマ2018-09-11 hagaromo

確かにアップルが提示したこうした条件は破格なものであったがスカリーの肩を持つわけではないものの、彼はペプシで好条件で働いていたし何よりも安定業種、安定企業で実力を発揮し安定した地位にいたそのことをすべて捨てアップルで挑戦を選んだのだ。

スカリーは社長就任演説で、

「私がアップルに来た一番の理由はスティーブと一緒に仕事をしてみたいと思ったからです。彼は今世紀のアメリカにとって重要人物の一人だと考えています。そして私はその彼の成長を手助けできるチャンスに恵まれたのです」と切り出した。

ジョン・スカリーの社長就任はウォール街も歓迎し株価は六三ドルまで上昇した。

しかし一番喜んでいたのは他ならぬスティーブ・ジョブズだったに違いない。

一九八三年は私にとって実に心揺れる年となった。

七六年の年末、どうしたことかアップル銀座の店頭から四〇年前にタイムスリップし、スティーブ・ジョブズと知り合い一緒に働くことになったが、その時からのメンバーだったビル・フェルナンデス、ロッド・ホルトが退職したことは私の心にぽっかりと大きな穴をあけた。

そういえばランディ・ウィギントンも八一年九月にアップルを離れて自分で会社を興

未来を見る方法 ナリスマ2018-09-11 hagaromo

したがすぐにアップルとアップルに在籍しているのはダン・コトケしかいなくなった。このことは私にとって寂しいことだったし特にロッド・ホルトは友人として多くの時間を共にしてきた男だったからショックだった。彼は退職に際しては多くを語らなかったが上層部との意見が合わず退職を余儀なくされたらしい。

ロッドは別れ際に、

「俺はアップルが嫌いになったわけではないんだ。ただ現役員たちが俺を嫌っただけなんだ。前にも言ったがスティーブにしてもガレージから一緒に働いてきた俺たちはすでに用済みなんだな。変なこといってすまんがトモ、君も十分気をつけてくれよ。また遊びに来るから」

といいながら去って行った。

去る者がいる反面、新たに新風を巻き起こす人たちもいた。その筆頭は四月に社長に就任したジョン・スカリーだがこの時期ほとんどスティーブと一緒で私などは話す機会もなかった。

私が興味深く接したのは一月にマッキントッシュチームの一員となったスーザン・ケアだった。

彼女は同じくマッキントッシュ開発チームにいたアンディ・ハーツフェルドの高校時代の友人だったというが、そのアンディの勧めでアップルに入社したらしい。

未来を見る方向 ナガリ

ジジイの私から見ると金髪でふっくらし輝いているその表情は時に幼女のように思えたが、彼女は優秀なデザイナーとしてマッキントッシュの開発に多大な貢献をすることになる。

そういえばその一月、あのビル・アトキンソンがアップルを辞めると言い出して大騒動になった。

一月十九日にリサが発表されたことで多くのメディアが注目し取材合戦となった。原因はアップルは自分(ビル・アトキンソン)の事を評価していないからということだったし事実ビルは怒り心頭だった。

なぜならバイト誌にリサ開発陣のインタビューが載ったがビルは呼ばれてなかった。ラリー・テスラーらマネージャー級の人間たちのインタビューで占められていたが一番貢献したはずの自分は不当に評価されてたという不満だったし怒りだった。

いうまでもなくビル・アトキンソンはリサとマッキントッシュのＧＵＩの基盤となるソフトウェア群を書いたのだから一番の功労者であったといえる。

慌てたスティーブはビル・アトキンソンをアップル・フェローに遇することでなんとか退職を思い留まらせた。

ある日の午後、ジョアンナ・ホフマンに連れられてスーザン・ケアが私のオフィスに

未来を回回見たカリスマ20180911 hagoromo

やって来た。挨拶にきたというよりマッキントッシュチームのビル・アトキンソンやアンディ・ハーツフェルドそしてピュレル・スミスらに私の噂をあれこれと聞いて興味を持ったらしい。

型どおりの挨拶を交わした後に私は聞いてみた。

「スーザン、と呼ばせてもらうけど、スティーブの第一印象はどう」

スーザン・ケアは隣に座っているジョアンナ・ホフマンの顔色を伺いつつ笑いながら答えた。

「いろいろとアンディから聞いてましたが、噂以上に気むずかしい男ね。だけど私に辛く当たるといった態度は見せないし上手く付き合って行けると思うわ」

「でもまだスーザンはチームに入ったばかりよ。問題はこれからだと思うけど」

ジョアンナはいたずらっぽい視線をスーザンに送った。

「そうね。ただ分かったことはチームの皆に言われたことだけど、与えられた仕事をやれば済むというものではないのがよく分かったわ。私はデザイナーという立場でチームに誘われたけど、ざっと聞いただけでもあれもこれもと大変みたい」

「ただしスティーブとの関係で大切な事がひとつあるのよ。それを教えておくわ」

ジョアンナは真顔になりながら私とスーザン両方の顔を見ながら話し始めた。

「トモは私たちと立場が違うから単純に当てはまらないけど、私たちに大切なのはステ

未来を見通せ　ガリスマ　2018/09/11 hagoromo

イーブに言い返すことよ」
「言い返すって」
スーザンは意外だと膝を乗り出した。
ジョアンナは言い含めるようにゆっくりと話した。
「いい、例えばスティーブに強く言われたとするわね。仕事ができないとかセンスが悪い、何だこれはとか、文句はいろいろよね」
私は笑い出したが、ジョアンナはめげずに続けた。
「そんなとき、アップルの会長に叱られたとか貶されたと考え、腐ってしまうのが一番ダメなの」
スーザンは真剣な表情でジョアンナの次の言葉を待った。
「誰しもそんなことを人前で、それをも大声で言われたら気落ちして自信を無くすかもしれないけどスティーブの場合は違うのよ。最悪な対応は泣くことかな。そうなればスティーブの言ったことが正しかったように思われてしまうわ」
アップルの中でスティーブと対等の言い合いができ、ときに言い負かす事が出来るただ一人の女性であることを二〇一六年からタイムスリップしてきた男として知っていたが、本人から具体的に聞くと説得力が違った。

未来を見たカリスマ 2018/09/11 hagoromo

ジョアンナは次第に乗ってきたのか両手のボディランゲージが激しくなり、独特のイントネーションも顕著になった。

「スーザン、覚えておいてね。スティーブから声高に文句を言われたらシュンとして引き下がってはダメなのよ。スティーブの目を強く見返して自分の意見や思いをきちんと言い返すのよ。それも大きな声で廻りにも聞こえるようにいうのが効果的ね。時には『貴方は間違ってる』と言い返すのよ」

一息入れて、

「なぜそうした対応が効果があるのか。いろいろ理由はあるけど分かりやすく言えばスティーブはそうした人間を信頼するからよ」

「分かったわ。そんなことがあったときに咄嗟に対応できるか分からないけど心がけとく」

スーザン・ケアは真剣な表情でジョアンナに頷いていた。

ジョアンナは、

「ごめんなさい、トモ。あなたの話しを聞きたくてスーザンを連れてきたのにあたし喋りすぎたわ」

と誤りつつ、あなたもスーザンになにかアドバイスしてあげてと言った。

私は思いついたことがあったので早速スーザン・ケアに話しかけた。

未来を見通せ　カリスマ　20180911 hagoromo

「いま、どんな仕事をしてるの」
「アンディやビルたちがマッキントッシュ用にＯＳとかシステムウェアとか、そう私は詳しくないからよく分からないけど開発してるでしょ。私はそれらを象徴する、一目見て『これだ』とわかるアイコンを作るようにいわれてるの。ファインダーに表示する小さなグラフィックたちね」
「そうだったね。３２×３２ドットの制限があるからなかなか厄介な仕事だよね」
私がそういうとスーザンは、
「トモ、私はけっこう楽しんでいるわ。その制約こそ面白いのよ。だけど私が作ったアイコンを果たしてスティーブが気に入るかどうかがまずは試されるらしいわ。アンディがいうにはね」
私はどう言ったらよいかを考えながらスーザンの可愛らしい顔を間近にしながらいたずらっぽくいった。
「スーザン、君の能力を一度でスティーブに見せつけ、そして気に入るようにする方法があるよ」
スーザンとジョアンナは顔を見合わせながら、
「教えてよ、是非教えて」
と叫んだ。やはり不安だったようだ。

未来を見た力 Kaiser Mayer Dr. Ruby Sunday

「いいかい、スーザン。君は僕のオフィスを出たらすぐに自分のデスクの前に座るんだ」

スーザンは体を乗り出しながら大きく頷いた。

「それで、まずはマッキントッシュの電源をいれる」

「分かった。それからどうするの」

「アンディがアイコンエディターを君のために作ってくれたらしいよね。それを立ち上げる…」

二人はなんだか私がふざけているのかと訝しい顔をした。

「やることは一つだよスーザン。スティーブ・ジョブズの顔のアイコンを作るんだ」

私の意図することがわかったのだろう、ジョアンナの表情がまずばあっと明るくなった。

「なるほど、スティーブは自己顕示欲の強い人よ。自分の顔がアイコンになればきっと喜ぶにちがいないわ。さすがトモだわ」

ジョアンナは喜びながらスーザンの手を取った。

スーザン・ケアはそんなことでスティーブの気を引き、自分の能力をアピールできるか不安のようだったが、

「わかった。早速やってみるわ。ありがとう」

未来を見る方法 hagoromo

と言いながら二人で席を立った。

スーザンは早速スティーブ・ジョブズの肖像をデザインした。当時のアイコンは前記したように３２×３２ドットの白黒だったから全部で一〇二四ドットという大きな制約があり、物の形を伝えることはなかなか難しかった。しかし誰が見てもジョブズだと分かるそのアイコンを見てジョブズ本人も気に入ったという。

その後、ビル・アトキンソンをはじめスーザンに自分の肖像をアイコン化してもらうことがマッキントッシュチームのステータスとなったほどだが、ビル・アトキンソンのアイコンは実際にお絵かきソフトであるマックペイントのアバウトに使われた。

結果スーザン・ケアはスティーブに気に入られ多くの仕事を残した。

例を挙げれば、マッキントッシュ起動時に表示するハッピーマック、調子が悪い時のサッドマック、システムエラー発生時の爆弾マーク、ゴミ箱、時計アイコンなどはもとよりマッキントッシュ１２８ＫＢのコントロールパネルやマックペイントのサンプル画の多くも彼女の作品である。さらにＣａｉｒｏ Ｆｏｎｔをはじめ当時のＧｅｎｅｖａやＣｉｃａｇｏといったビットマップフォントのデザインを手がけたのもスーザン・ケアだった。

したがって彼女はユーザーが最初に「これがマッキントッシュだ」と感じるシステム

未来を見る先見 カリスマ 2018-09-11 hagaromo

全体のイメージや個性を生み出したデザイナーだといえよう。
スーザンの影響はｍａｃＯＳの時代になった現在でも決して無縁ではない。その代表的なものはコマンドアイコンだ。
アップル純正キーボードのコマンドキーにも刻印されている花びらのようなアイコンがそれだが、これもまたスーザン・ケアがジョブズらマッキントッシュチームの要請に従い国際シンボル辞典にあったスウェーデンの地図に採用されている記号をビットマップ化した成果なのである。

少しずつマッキントッシュは形になってきたが、この頃のスティーブ・ジョブズの使命はマッキントッシュ開発チームを鼓舞し、目標を達成することだった。
研修時に「自分たちは海賊だと思え」と訴え「週九十日間働こう！」といったスローガンを掲げＴシャツにまでプリントして着せたりしたが、二〇一六年から来た男としては開発スタッフの皆がこの過酷な労働条件に文句もなく従っていることは奇異に映った。
バレル・スミスは睡眠不足の眼を擦りながらも、
「僕たちは宇宙を凹ますんですよ」
と息巻いていたし、アンディ・ハーツフェルドも、

未来を見たカリスマ 2018/09/11 hagoromo

「我々はいま歴史にマッキントッシュというプロダクトの痕跡を残そうとしているんです」

などと鼻息が荒かった。

またクリス・エスピノザは輝いた表情で言った。

「トモ、私たちは自分たちの給料を上げたいために難しい仕事をやっているのではないんです。確かにアップルは私たちが作るマッキントッシュによって途方もない利益を上げるでしょう。しかし私たちの誰一人その一部をよこせと考えている者などいないんです。マッキントッシュそのものが全世界の利益につながると信じているからです。そのことが皆を駆り立てているんです」

ビル・アトキンソンも疲れた表情を隠しもせずに呟いた。

「いや、確かにいまの状況はむちゃくちゃです。しかし僕たちはどこかで核心を持ってます。マッキントッシュ開発メンバーにとって後から振り返るときがあれば、この時期が人生最良の日だったとね」

どうにも信じがたいスタッフ達の集中力だったが、それは一九八三年一月にスティーブ・ジョブズがボードに書いた

「真のアーティスト宣言」という言葉に集約されていた。

未来を見た方はこちらへ 2018/09/11 hagaromo

人が作り出したものは、それが世に出て消費に供されなければ芸術として存在しないのだ。

考えてみてくれ、ダクラス・エンゲルバートはアーティストだったのだろうか？

いや、時代の主役ではあったが彼は製品を作らなかった。

ＰＡＲＣの魔法使い達はどうか？

ゼロックスは横柄な貴族であったけど僕たちの見たものは製品として世に出なかった。

アーティストが最後にやるべきこと、アーティストと呼ばれる決め手は、自分の作品を箱に詰めることであって、その後は販売担当に引き継ぐことだ。

コンピュータを家庭に売り込むことが出来れば、人々の心に入り込んだも同然だ。

その時点で、苦心して進めた設計、インターフェースの妙、モードとモードレスの違い、メニューバー、ゴミ箱、マウスのボタン、そしてそういった芸術作品のすべてが人々の生活の一部となり、労働習慣を変え、労働に対する考え方に浸透し、そして最終的には人々の人生を変えるのだ。

しかし、そうするには、自分の足跡を宇宙に残すには、製品を世に出す必要がある。世に出す必要があるんだ。

未来を垣間見たカリスマ20180911.hagoromo

真のアーティストは製品を世に送り出すのだ。

なるほど、これがマッキントッシュのボディ内側に開発スタッフらのサインを残した意図のひとつなのだ。

私にとってすでに知り得た情報のひとつではあったが、あらためてパニックと陶酔感の入り交じった雰囲気の中でしゃにむにはたらく人々を見ていると目頭が熱くなってきた。

未来を見たカリスマ 2018/09/11 hagaromo

マッキントッシュ発表

一九八四年一月二十四日、幾多の困難を克服し大きな犠牲を払いながらもスティーブ・ジョブズの夢であったマッキントッシュが発表された。

それはアップル本社近くにあるフリントセンター講堂で開かれた年次株主総会の場だった。

株主総会だからして近年のスペシャルイベントなどとは些か違い、最初は形通りに法律顧問による株主総会として事務的な発表と手続きが話され、続いてその九ヶ月前に新しいＣＥＯに就任したばかりのジョン・スカリーがアップルの業績を発表した。

その後にスティーブが登壇したが、その様子は些か芝居じみたものだった。

その場に集まった株主たちにはこの場でなにか新しい製品が発表されるであろうことは分かっていた。しかしスティーブ・ジョブズは演台にはいきなり登場せず、真っ暗に落とされた照明の中、左の袖から聴衆に語りはじめた。

そして伝説となるスピーチが始まった。

「一九五八年のこと。ＩＢＭはゼログラフィと呼ばれる新技術を発明した若い会社を買収する機会を逃し、二年後にゼロックス社が誕生し、ＩＢＭはそれ以来自分を責めてい

未来を回回見たカリスマ20180911 hagoromo

ます」と語りだした。

私はマッキントッシュ開発チームの連中と共に舞台裏と袖とを行き来しながら固唾をのんでスティーブのスピーチを聞いていたが、その後のデモンストレーションが上手く行くかに気を取られてほとんどスティーブの話しの内容を覚えている人はいなかったように思う。

ジョアンナ・ホフマンと目があったとき、彼女は両掌を組み、神に祈っているような表情だった。

なにしろマッキントッシュのすべてが安定していたわけでもなく、またスティーブが急に、

「マッキントッシュに喋らせよう」

と言い出したから大変な事になったのだった。

安定して音声合成ソフトを使うには内蔵メモリの１２８ＫＢでは不足だったのだからたまらない。結局内蔵メモリを５１２ＫＢと急遽四倍に増設したマッキントッシュを使うことになった。無論社外には内緒だ。

「ＩＢＭは本当に世界を征服してしまうのでしょうか。ジョージ・オーウェルの書いた『１９８４』のように？」

未来を見る力 Hagaromo

スティーブは機関銃のような早口で聴衆に語りかけると続いてあのコマーシャル「１９８４」のビデオが流れた。

観客は熱狂していたが、ここでやっとスティーブ・ジョブズに照明が当たった。

彼はきちんとしたスーツに蝶ネクタイ姿だった。

スティーブは、

「これまでのパーソナルコンピュータにマイルストーンとなるような製品は二つしかありません。それは七七年のアップルⅡと八一年のＩＢＭ ＰＣです。そしてリサの登場から一年経った今、我々は三番目のマイルストーンとしてマッキントッシュを発表します…」

マッキントッシュはかれこれ二年以上も開発にかかったこと、そしてついに狂気じみているほど素晴らしい製品ができあがったとスティーブは続けた。

マッキントッシュの価格は二四九五ドルで全米一五〇〇以上のアップルディーラーで今日から入手できることを伝えた後に

「マッキントッシュの革新的な部分を紹介しよう」

とマッキントッシュがリサの技術を売れ筋価格帯の製品に落とし込んだと自賛し、マウス、ウィンドウ、アイコン、プルダウンメニューなどなどの紹介を続けた。

未来を見通せ　カリスマ2018-09-11 Nagoyama

「マッキントッシュはリサと同じ３２ビットの６８０００プロセッサを使っているんだ。メモリは全部で１９２ＫＢ、そのうち６４ＫＢのＲＯＭを備えておりＯＳやグラフィックス機能、ユーザーインターフェースはすべてＲＯＭに入っている。ＲＡＭは１２８ＫＢ、そして八〇年代のディスクとして一枚に４００ＫＢものデータを記録できる３・５インチのフロッピーディスクを装備している」

スティーブはその後に同時発売される周辺機器を誇らしげに紹介した。

一息入れたスティーブは、

「マッキントッシュを紹介しよう。すべてはあのバッグに収まっているんだ」

と言いながらステージ中央に歩み寄り、自らマッキントッシュをバッグの中から取りだした。

舞台裏ではアンディ・ハーツフェルドとスーザン・ケアが同時に、

「いよいよだぞ」

「いよいよね」

と叫んだ。

また万一のアクシデントがあった場合を想定してバレル・スミス、スティーブ・キャップス、ブルース・ホーンらが固唾をのんで待機しつつ見守っていた。

なにしろこれまで七八〇〇万ドルの開発費を注ぎ込み、信じられないほどのプレッシ

未来を見たカリスマ 2018/09/11 hagoromo

ャーにさらされながら週九〇時間以上の労働を強いられた成果がこのスティーブの発表で運命が決まるのだ。

スティーブ・ジョブズがマッキントッシュを発表するその姿は二〇一六年からタイムスリップした私にとって何度もＹｏｕＴｕｂｅなどの動画で、あるいはスティープの生き様をテーマにした映画などで見たお馴染みの光景だった。

しかし現実に自分がその舞台裏で多くの開発者らとスティーブの一挙一動に固唾をのんでいるとそれはまったく別の出来事のように思えた。

隣に立っていたバレルが、

「スティーブがマッキントッシュにフロッピーを入れたよ」

と叫びながら私の腕を掴んだ。

そのフロッピーは開発陣が徹夜で仕上げたデモ用プログラムだった。スティーブは芝居っけたっぷりにそれをシャツの胸ポケットから取りだしてマッキントッシュにセットしたのだ。そしてスティーブはその場を一端静かに離れ、デモは会場の大型スクリーンに映し出された。

最初は“Macintosh”という大きな文字が画面一杯に横スクロールしながら流れていった。それはスティーブ・キャップスが工夫したフォントだった。

未来を見る方向 Nagaroma

続いて星空のような背景に“Macintosh”という表示が現れ、その下に“Insanely Great!”という筆記体の文字がアニメーションで描かれた。それはブルース・ホーンが苦心して作ったデモだ。そしてマックペイントやマックライトといったバンドルアプリのスクリーンショットがスライドショー的に表示された。

私の前に陣取っていたブルース・ホーンが大きな安堵のため息をついた。

続いてスティーブがマッキントッシュに歩み寄った。

スーザン・ケアとジョアンナ・ホフマンが私のシャツの袖を引きながら緊張している。

「ではここでマッキントッシュ自身に喋ってもらいましょう」

スティーブはマウスを操作した…。

するとマッキントッシュはいかにもな音声合成の音質だったもののスピーチシンセサイザーによるメッセージを喋りだした。

「ハロー、僕はマッキントッシュです。あのバッグから出られて実にいい気分です。人前で話すのは慣れていないので、僕がＩＢＭのメインフレームに最初に出会ったときに思いついた格言を皆さんに紹介しましょう。

『自分で持ち上げられないコンピュータを信用するな！』ということです。

お聞きのように僕は話せますが、今は少し控えて聞き役に徹しようと思います。それで

未来を見る力 Nagoyo

は大いなる誇りを持って紹介しましょう。僕にとっては父親のような人…スティーブ・ジョブズです」

照明がスティーブに戻り、聴衆の歓喜がきわまったかのように拍手が鳴り響いた。聴衆には分からなかったが舞台裏も聴衆に負けずに大騒ぎだった。誰もが飛び上がっていた。

このスピーチ原稿は最初アンディ・ハーツフェルドが書いたもののスーザン・ケアの提案によりシャイアット・デイ社のスティーブ・ヘイドンに書いてもらったものだった。

拍手はなかなか鳴り止まなかった。

ジョアンナ・ホフマンは私の腕を取りながら、

「ねぇ、見てよトモ。スティーブ涙ぐんでない」

と呟いたが、自身も涙声だった。

思えば、この日この時がスティーブ・ジョブズが生涯における一番の頂きに触れた一瞬だったように思う。

登り詰めた山は…降りるしかないことにスティーブは気づかなかった。

マッキントッシュが発表されたことでアップルは連日連夜お祭り騒ぎだったしメディ

未来を見る方法 ＿＿＿＿＿＿＿＿

アからの取材攻勢も今まで以上に凄かった。無論その対応の多くはスティーブ・ジョブズがやっていたこともあり、かつ彼の隣には常にといって良いほどジョン・スカリーの姿があったから残念ながら私にとってもスティーブは遠い存在になってしまった感がある。

またロッド・ホルトも含め、あのガレージ時代からのアップルを知っている者もほとんどいなくなっていたから気の緩む時間も無かった。

ともあれこの頃私に課せられたミッションのひとつに製品化されたマッキントッシュの徹底した評価だった。これはスティーブからもいわれたがマイク・マークラからも強い要請があった。

マッキントッシュの誕生は当事者から見ても大げさでなく無理の連続を押し通して完成したプロダクトだった。したがって果たしてこれはスティーブ・ジョブズがいうように宇宙を凹ますコンピュータになり得るのか、というだけでなく市場に受け入れられるのかを徹底的に分析しておく必要があった。

そういえば手前味噌になるが、この私に課せられたミッションの適任者が私以外にいたとは思えない。なぜならマッキントッシュ開発チームの人間それぞれにとって自分たちがクリアしなければならない目の前のあれこれを実現するため日夜躍起になっていたから、マッキントッシュというパーソナルコンピュータ全体を俯瞰して直視できる者は

未来を回回見たカリスマ2018091 hagaromo

まずいなかった。

無論スティーブ・ジョブズもその一人だったしそうあるべきだつたが、彼は物事を公明正大に評価するには熱すぎた人間だ。

その点、私はといえば二〇一六年からタイムスリップした人間であり、元の世界の一九八四年にマッキントッシュの実機を手に入れ、それこそユーザーの立場であらゆることを試し、歓喜と落胆を繰り返していたから、高度に技術的な面は別にして、私にはすでにここにいるアップルの誰よりもマッキントッシュを使い込んでいる人間だった。

反面私はアップルを去って行った友人のロッド・ホルトが羨ましかった。無論彼は望んでアップルを辞めたわけではないが、彼はアップルを辞めても行くところ、生きる術があった。しかし私にはもしアップルを首になったとして別のどこかで…ということは事実上出来得なかったし、生きる意欲も術もなかった。

そんな私の立場を知っていたのはスティーブ・ジョブズただ一人だったが、彼は目の前の新しい環境に没頭し、廻りに気遣いするような人間ではなかった。

そんな平々凡々の日々を送っていたある日、久しぶりにエキサイティングなことが起こった。

私が自分のオフィスで英文ワードプロセッサのマックライトを使って資料をまとめて

未来を見た方 Kaiser Mayer 2018/09/11 Sunday

いたとき、オフィスのドアが叩かれた。
「どうぞ、おはいりください」
の声と同時に入ってきたのはあのアラン・ケイだった。
「やあ、トモヒコさん、あなたとお話しがしたくてやってきました」
と底抜けな明るさを漂わせてアラン・ケイが右手を差し出した。
私はその手を両手で強く握りながら、
「アップルで会えて嬉しいです」
と椅子を勧めた。
アラン・ケイは本来なら私より八歳も年上なはずだったが、彼はこの一九八四年当時四四歳という働き盛りだった。
対して私はすでにジジイだったが、可笑しな物で二〇一六年に四〇年前へタイムスリップしたときから自分でいうのも辺だが歳を取らなくなったように思えた。
「久しぶりです、トモヒコさん」
再びそういうアラン・ケイに私は、
「トモと呼んで下さい」
といった。
「あなたは今般アップルにアップル・フェローとして入社されたんでしたね」

未来を見る力 Hagoromo

私がいうと、
「やはり、トモ。あなたはどこか不思議な男だな。私がアップルフェローとして入社したことなど社内でもほとんど知らないはずなんだが」
といいながら、その瞳がきらりと光った。
アラン・ケイは続けて、
「パロアルト研究所で会ったとき、別れ際にいった僕の言葉を覚えてるかな」
いたずらっ子のような表情でいった。
「覚えてますよ。あなたは、『僕にはスティーブ・ジョブズやアップルのことより君の秘密に興味があるよ』と言われましたね。それに、オーラーが違うとも」
と私は答えで微笑んだ。
「よく覚えてますね」
といいつつ、続けて、
「ああ、トモ、申し訳ないがコーヒーを飲みたいのだが、いいかな」
ケイはオフィスの端にあるコーヒーサーバーを見ていった。
「勿論です。私も飲みたいから一緒に飲みましょう。少し待って下さい」
数分後、カップ二杯分のコーヒーを入れて私はケイの正面に座り直した。
アラン・ケイはコーヒーを待っている間、オフィスの奥に置いてあった安物のクラシ

未来を見たカリスマ 2018/09/11 hagaromo

ックギターに目を留め、
「ああ、トモ…君もギターをやるんだね。嬉しいなあ」
と目を光らせた。
「まあ、私のはあくまで趣味でしかありません。子供の頃からクラシックギターを楽しんできたけど、そう一年半ほどはパコ・デ・ルシアに憧れてフラメンコギターも習いました。しかし貴方はジャズギタリストとしてプロフェッショナルなのですから一緒にされては困りますよ」
私は笑いながら言い訳した。
「パコ・デ・ルシアといえば、僕も興味があるよ。Fuente Y Caudal（邦題：二筋の川）は大好きだし、ジョン・マクラフリン、アル・ディ・メオラとのスーパー・ギター・トリオも多くのインスピレーションを与えてくれたよ」
「それは嬉しい。しかし音楽の話しはともかく、ケイ、あなたはアップルで何をしようと思っているのですか」
私は直球の話しを切り出した。
ケイはニヤリとしながら、
「僕はここアップルで直接生産性に寄与することはないと思うよ。アップル・フェローだからという訳ではないが僕の仕事は研究というか計画というべきか、温めている期間

未来を見る目 カリスマ 2018/09/11 hagoromo

が長いのが普通なのでね、目に見える形にするまでに時間がかかるのが難点なんだ。ただし君だからいうが、僕がアップルに入った理由のひとつは第三パラダイムの製品、すなわちフラットスクリーンディスプレイを持ち無線によるネットワーキングが可能な小さなコンピュータを手がけたかったからなんだ。それと、しいていうならスティーブの教育係ってとこかな。それも未来に向けての指針を示す仕事だよ。ただし、気になることがひとつあるんだトモ」

「なんでしょうかそれは」

アラン・ケイはしばらく私を直視していたが、

「それは君だよ」

と真顔で言った。

私が困惑して黙っていると、

「僕はスティーブが未来に向けてどのような製品開発に取り組むべきなのかをアドバイスする立場にあるんだが、すでにスティーブにはトモ、君という存在がいる。したがって僕の出番はないかも知れんな」

口ひげを左指で撫でながらケイはいった。

「私は貴方のように輝かしい経歴もないし、ただのジジイですよ」

私が弁解じみていうと、ケイは、

未来を予測するカリスマ 2018/09/11 hagoromo

「ここではそう聞いておこう。しかし常に未来におけるコンピュータのあり方や子供たちの教育といったあれこれを考えている僕にとって、トモ…君はなんとも気になる存在なんだよ」

私は苦笑いしながら自分の頭を指さし、

「ケイ、あなたは『未来を予測する最善の方法は、それを発明することだ』と主張されてますが、しいていうなら私はそれをここでやっているに過ぎないんですよ。私はエンジニアではないので」

「いや、君には…どういえば良いか、そう…未来の臭いがするんだ。その理由は僕にも分からんけどね」

ふと、コーヒーのカップを手に持ったまま立ち上がって窓際にある椅子に座り直しながらアラン・ケイは続けた。

「ところで先日、マッキントッシュ開発チームのビュレル・スミス君から君が持っているという未来のデバイスのモックアップの話しを聞いたのだが、僕にも見せてもらえるだろうか」

遠慮がちにケイはいったが、その目付きは真剣だった。

「勿論ですとも」

私は机の引出を開け、すでにバッテリーが完全に切れたｉＰｈｏｎｅを取りだしてケ

未来を見たカリスマ 2018/09/11 hagoromo

イに渡した。
ケイは手にしたｉＰｈｏｎｅを表裏にしながら繰り返し見つめ、無言のまま私の表情を覗き込み、またｉＰｈｏｎｅに目を落とした。
「これは、凄いな。表面は強化ガラスだろうしボディはアルミニウムのようだ。僕にはこれがモックアップだとは信じられん。いや、モックアップだろうと製品だろうと現在の技術を駆使してもこれだけの完成度を求めるのは無理だな。やはり君にはなにか大きな秘密があるらしいな」
ケイはニヤリとしながら、
「それはともかくこれが動作しＳｍａｌｌｔａｌｋが走って画面がもう少し大きければダイナブックそのものだな」
私は思わず、
「実はｉＰａｄという製品が…」
と言いそうになったが、辛うじて自制した。
私は自分が隠していることが暴露するのではないかと思い話題を変えた。
アラン・ケイの顔を見ていると自分が四十年前の日本からタイムスリップしてきた人間であることを正直に話したくなってくる。彼にはそうした不思議な魅力が溢れているように思った。

未来を見た方がいいのか？ 2018/09/11 hagoromo

「そういえば、ケイ。貴方はマッキントッシュのことをどのように評価してるんですか」

アラン・ケイは窓際でまだｉＰｈｏｎｅを握ってその感触を確かめていたが、視線をそのｉＰｈｏｎｅから外さずにいった。

「マッキントッシュは、批判するに足りる最初のコンピュターだよ。ただしパワーが小さすぎるね」

ケイは顔を私の方に向け、

「そう、スティーブに同じ事を言ったら激怒されたよ」

と声を立てて笑った。

続けてケイは、

「僕たちがどうアドバイスしようとアップルは、いやスティーブ・ジョブズらは自らの考える方向に会社を持って行くに違いないね。ただし大きな苦難が待ち構えているように思うよ。だから僕たちの役割は現実的にはそんなに意味のあることではないのかも知れない。しかしアップルでトモ、君と未来のプロダクトについて一緒に仕事ができるならそれが一番嬉しいよ」

ｉＰｈｏｎｅを名残惜しそうに私の手に戻しながらアラン・ケイはため息をついた。

そのとき、私はふと閃いた。

未来を覗くことができる男なのかも知れないと思いながら、私のオフィスを去って行く彼の後ろ姿を眺めていた。

もしかしたらアラン・ケイはすでにスティーブ・ジョブズの運命を危惧していたのではないかと…。

私は実際四十年ほど先の未来を知っている男だったが、アラン・ケイはこの時代にいて未来を覗くことができる男なのかも知れないと思いながら、私のオフィスを去って行く彼の後ろ姿を眺めていた。

ジョブズの挫折

マッキントッシュの発表は間違いなく大成功だった。それはスティーブ・ジョブズにとっても新しいＣＥＯのジョン・スカリーにとっても同じだった。

大方の予想通り、スカリーは自身をスティーブにとってマーケティングと経営に関してよき指導者であると自負していたし、スティーブはスカリーにとってテクノロジーについて教えてくれる教師であった。

特にスカリーはまさに絶妙なタイミングでマッキントッシュのデビューの場にその存在感を示すことが出来た幸福感に酔っていたようだ。こうした注目のされ方はそれまでにも成功していたとはいえペプシではあり得なかった。

未来を見通せ　カリスマ　2018/09/11 Nagaoka

ＣＥＯ就任からマッキントッシュの発表を境に一九八四年は二人にとって絶頂期だったといえよう。

マスコミは二人のことを「ダイナミック・デュオ」と称して賞賛した。

スカリーも調子に乗って、

「アップルのリーダーはただ一人、スティーブと私です」

などと公言してはばからなかったし、確かに二人は公式の場はもとより社内においても常に一緒だった。

しかし一見順風満帆のアップルもシビアに社内を見回せば無視出来ない問題に捕らわれていた。

そのひとつはジョン・スカリーがアップルの社長兼ＣＥＯ就任となったのに合わせ、スティーブ・ジョブズは新任のスカリーがそれまでの経緯を知らない事を利用し、自身の指揮権強化をアピールし始めたのである。

なぜなら以前社長だったマイク・スコットからジョブズはリサプロジェクトの指揮権を剥奪されていたこともあり、ジョブズはマッキントッシュの開発および販売をより有利にするため、すべての指揮権を取りたかったからだ。

ジョブズの強力な訴えに動かされ、スカリーはジョブズにマッキントッシュ部門を自由に統括する権限を与えただけでなくその十一月にはマッキントッシュとリサ部門は

未来を見た。カリスマ 2018-09-11 hagoromo

"Apple 32 SuperMicros" 部門として統合されたのである。
この頃のパッケージにはそれを示す "Apple 32 SuperMicros" というロゴタイプが印刷されている。

ともかく重要なのはこの "Apple 32 SuperMicros" 部門の指揮をスティーブ・ジョブズが取ることになったことだ。いわば彼は念願のマッキントッシュおよびリサに関わるすべての指揮をとる権限を与えられたわけだ。
この事実はマッキントッシュの開発および販売を一大優先と考えるジョブズによってリサの製造と販売は意図的にブレーキをかけられることになった。
リサがビジネス的に失敗に終わった要因は単純ではないが、経緯を知っている我々から見てその直接の原因は明らかだった。

シェリー・リビングストンは常に私のよき話し相手、理解者となってくれたが "Apple 32 SuperMicros" の発表を聞いたとき、
「これは明らかにリサ潰しにかかるわね、スティーブは」
と眉をひそめた。
「ジョンにはスティーブの考えている先がまったく分からないのかなあ」

未来を見通せ　カリスマ　2018/09/11 hagoromo

私がため息交じりにいうと、
「そうね。しかしジョンもいくらＣＥＯだからといっても経験がないアップルでの舵取りは他の人の意見も多く聞いてから判断すべきよ」
と納得いかない様子だった。
「いや、これはやっかみではないけどスティーブは意図的にスカリーに他の人間を近づけないようにしているよ」
私がいうとシェリーは首を縦に振りながら、
「そういえば最近、トモ…貴方でさえスティーブと話す機会がないらしいわよね」
怪訝な表情で呟いた。
「愚痴に聞こえたら誤るけど、ここの三か月ほど挨拶程度しか話す機会がないんだ。常にスティーブの隣にはジョンがいるしね」
事実これまであれほど「トモ、トモ」と頼りにしてくれたスティーブだったが、私に限らず例えばマイク・マークラもスティーブとほとんど話す機会がないとこぼしていた。
しかし一九八四年も夏が過ぎ、秋が来てクリスマス商戦が目の前にきたときスティーブとジョンの蜜月は終わることになる。
ジョンとスティーブはクリスマス商戦を念頭に入れて膨大な数のマッキントッシュ製

未来を見た方 ＿＿＿＿＿＿＿＿

造に全力を注いでいたが、予定を大幅に下回る需要しか生まれず在庫の山がアップルの財政を危うくしはじめたからだ。事実目前の四半期決算で初めての赤字を計上し、社員の１／５にあたる人員削減を実行せざるを得なくなった。

私はジョアンナ・ホフマンとランチで一緒になったとき素直な疑問を発してみた。

「ねえジョアンナ。マッキントッシュの販売に勢いがつかないのは何故だと思う」

ジョアンナは一瞬複雑な表情をしてから首を傾げて話した。

「うーん、いま思えばたとえ一台でも売れたことの方が奇跡だったかも知れないわ。だってディスクドライブは一台だしメモリも全然足りない、おまけにアプリケーションはないに等しいんですものね。どう考えても理性的な買い物ではないわよね。だからあれだけ売れたのは奇跡よトモ」

アップルは対策を、それも早急に具体的な対策を考えなければならなかった。

春先には外付けフロッピーディスクドライブがリリースされた。そして九月にはファットマックと呼ばれたメモリを四倍の５１２ＫＢにした製品の発売にこぎつけた。これで大半のアプリケーションが安定して動くようになったしサードパーティー各社も新しいアプリケーション開発がしやすくなった。

ただし、決定打が残されていた。

未来を見た方 Sample

それはハードディスクを使えるようにすることだった。しかしそれを実現するには内部のシステムプログラムを大幅に書き換える必要があったが、マッキントッシュ開発チームはすでにぼろぼろに擦り切れ、燃え尽きていた。

結局バグの修整や改良を指揮する者はいなかった。それでもスティーブ・キャプスはブルース・ホーンと組んでファインダのバグ修正を終了した後にアップルを去った。ブルース・ホーンはキャプスより先に辞めた。

一九八四年秋、ビュレル・スミスら残っていたスタッフの一部はこの虚脱状態から抜け出そうと考えた。そして機能強化された新しいマッキントッシュの開発を進めようと画策した。

マイクロプロセッサが強化され、メモリも増え、画像を写真のように表示できるグレースケールのモニター、そしてハードディスクも付く予定だった。

しかしどうしたわけか、アップルの幹部たちはそうした計画を認めなかった。またスティーブ・ジョブズの後押しもなかった。

堪忍袋の緒を切ったビュレル・スミスやアンディ・ハーツフェルドも会社を去って行った。

そんな話しをシェリー・リビングストンとしていたとき彼女は、

未来を見る方法 ハガロマ 2018/09/11 hagaroma

「皆が一生懸命アップルのことマッキントッシュのことを考えている時、トモ、スティーブは何していたのよ」

と叫んだ。

彼女も怒っていた。ただしどこに、誰にこの怒りの矛先を向ければよいのかが分からなかった。

私は少しうつむき加減にいった。

「いまスティーブはマッキントッシュを各界の有名人に届けるのに忙しいようだ」

ミック・ジャガー、ジョンレノンの息子ショーン九歳の誕生日にもプレゼントとしてマッキントッシュを贈った。その場にいたアンディ・ウォーホルにも贈った。

「それに、スティーブはさも販売は自分の責任外とでもいうように相変わらず楽観視しているよ。一番の問題は誰も責任を取ろうとしないことだね」

私も苦々しくいった。

もっとも悪い事にこうした状況に至った責任をスティーブとジョンはそれぞれ相手の責任だと押しつけ合ったことだ。

スティーブ・ジョブズにいわせればマーケティングの手腕を買われてアップルのＣＥＯに就任したジョン・スカリーが思うように働いていないと感じるようになったし、ジョン・スカリーにしてみればやりたいことを皆ジョブズが邪魔しているか反対されてい

未来を見たカリスマ 2018/09/11 hagoromo

ると考えていた。

そんな緊迫した状況下でアップルは新年を迎えた。

そもそもアップルという会社のコンセプト、すなわちジョブズのビジョンにも捻れが生じてきた。

それはマッキントッシュにしても単体で売れる時代ではなくネットワークが必要になってきたしポストスクリプトをサポートしたプリンタ、ＬａｓｅｒＷｒｉｔｅｒの開発とＰａｇｅＭａｋｅｒの登場でデスクトップ・パブリッシング(ＤＴＰ)という概念が次のキラーシステムとなろうとしていた。

アップルもそれらを敏感に感じマッキントッシュ・オフィスと称するＡｐｐｌｅＴａｌｋを使うローカルネットワークとファイルサーバーシステムを実現し売り込もうとしていた。

しかしアップル社内でそれらは一部の人たちを別にして耳慣れないコンセプトだった。なにしろアップルという会社は依然として「一人に一台ずつのコンピュータ」を普及させることを目指した企業だったからだ。

さてもともと閃きで行動を決める類のスティーブ・ジョブズは歯車が噛み合わなくなるとどうしたらよいのか分からないはめとなる。その上でスカリーからはきちんと仕事

未来を見たカリスマ 2018/09/11 hagaromo

をして欲しいと要求されるとジョブズはマッキントッシュの失敗をスカリーのせいにしはじめた。

新しい年になって間もなく、珍しく、本当に珍しくスティーブが私のオフィスに入ってきた。気むずかしい顔をして。

「トモ、ここのところ新しいＣＥＯに振り回されて君ともまともに話しができなかったが今日は少し時間が取れたので君の話を聞きに来たよ」

と勝手知ったる椅子にどかりと座った。

私はそれまで手にしていた電池の切れたｉＰｈｏｎｅをジャケットのポケットに入れながらいった。

「難しい問題を抱えているようだね」

私が本題に入るとスティーブは眉間に皺を寄せ、両手の指先を合わせながら呟いた。

「奴を追い出すしか解決策はないんだ、トモ。問題はその方法が俺にはわからないんだ」

「おいおい、スティーブ。いくらなんでもそれは穏やかではないよ。ジョンは君が連れて来た人間だぜ」

私がいうと、

「そんなことは分かってる！」

未来を見る方法 ハリスマ 2018/09/11 hagoromo

と怒鳴った。

スティーブが私に対してことの是非はともかく怒鳴るということはこれまで一度もなかった。あの気むずかしく横柄なスティーブが私には穏やかなのがアップル社内の七不思議のひとつだとジョアンナ・ホフマンが冗談気にいったほどだった。

ハッとしたスティーブは、

「すまない、トモ。君に怒鳴るつもりはなかったんだ。どうやら俺の神経も極限まで痛めつけられているようだ」

彼は本当に悄気ていた。どうしてよいかわからない子供のようだった。

「スティーブ、そんなことはどうでもいいよ。穏やかな解決策はないのかい」

スティーブの混乱を沈めたいと私は静かにつぶやいた。しかし二〇一六年からタイムスリップした私は、この混乱の結果が分かっているだけにできるなら問題の核心に触れることは避けたかった。これ以上スティーブを混乱させても得るものはないと考えたからだ。

スティーブは私の近くに椅子を動かし、哀願するようにいった。

「トモ、俺はどうなってしまうんだ。このままでは…アップルは、俺たちのアップルではなくなってしまうよ。どうすればいい、トモ」

あの人を射貫くような視線を私に送りながら涙を浮かべていた。

未来を見たカリスマ 2018/09/11 hagaromo

私も適切な言葉が思い浮かばず、しばらく沈黙が続いたが、スティーブは私に哀願した。

「トモ、これまで俺は自分の未来について君に聞くことは避けてきた。しかし俺はどうなるんだ。どうしたらいいんだ。頼む教えてくれ」

うなだれながらスティーブは私の膝を両手で掴みながら続けた。

「トモ、君は未来から来た人間だ。歴史の顛末は知っているはずだ。俺はどうなるんだ、どうしたらいいんだ。結果がわかれば対処の方法だって見つかるかも知れないんだ。歴史だって変えられるに違いないんだ。お願いだ、教えてくれ」

私はスティーブ・ジョブズの泣き声をどこか遠くに聞きながら、彼の今後の人生をどのように話したらよいかを考えていた。

スティーブ・ジョブズはこれまでになく混乱していた。自身が哀願しＣＥＯの座に座らせたジョン・スカリーに裏切られたと心底から思っていたようだ。自分に落ち度がなかったかを反省するのも人の常だが、彼にはそうした常人の感覚はなかった。私らからみれば、現在のアップルの混乱と低迷全ての原因はスティーブ・ジョブズその人にあるのは明白だったのだが。

しかしアップルはマッキントッシュの発表前後、その状況は勢いに任せてやりたい放

未来を知っている君ならわかるはずだ」
とはじめて自分の未来を教えろと迫った。
一九七六年の末にスティーブ・ジョブズ宅のガレージ前にタイムスリップして以来、私が記憶していた範囲ではすべて歴史が刻んだ結果どおりことが運んでいた。
二〇一六年から来た私にとって、多くの結果はすでに知っていたが、なぜそうなったのか、どのような紆余曲折があったのかは資料や関係者の証言があっても正直不明なこ

題を続けてきたというのが現状だったといえる。
例えば予算の概念はあったが「ここまで」というブレーキをかける機運はなかったし、財務や経理業務が正確迅速に把握されず在庫管理も疎かだった。したがって経営状態が良いときはともかく一度問題が生じても一体自分たちのどこが…何がいけないのか、どう改善すべきかもすぐには把握できなかったと思われる。
もともと閃きで行動を決める類のスティーブは歯車が噛み合わなくなるとどうしたらよいのか分からないはめとなる。その上でスカリーからはきちんと仕事をして欲しいと要求されるとジョブズはマッキントッシュの失敗をすべてスカリーのせいにした。

私のオフィスでスティーブは涙ながらに、
「トモ、俺はいったいどうなるんだ。どうすればいいんだ。未来を知っている君ならわかるはずだ」
とはじめて自分の未来を教えろと迫った。
一九七六年の末にスティーブ・ジョブズ宅のガレージ前にタイムスリップして以来、私が記憶していた範囲ではすべて歴史が刻んだ結果どおりことが運んでいた。
二〇一六年から来た私にとって、多くの結果はすでに知っていたが、なぜそうなったのか、どのような紆余曲折があったのかは資料や関係者の証言があっても正直不明なこ

未来を見たカリスマ 2018/09/11 hagaromo

とがほとんどだったから、自分がアップルの社内に置かれてはじめて知るあれこれも多かった。しかし結果は結末はすでに知っていたとおりだった。

アップルⅡは発売され大成功を収め、アップルⅢは失敗、ウォズは飛行機事故を起こし、スティーブ・ジョブズはクリスアン・ブレナンとの間にリサという娘をもうけた。その娘の名をつけたリサもスティーブはいま自分の手で葬り去ろうとしていた。そしてジョン・スカリーという男が新しいＣＥＯとなり一九八四年一月二十四日に華々しくマッキントッシュが発表され、そしていまスティーブとジョンの間に大きな亀裂が入ってしまった。

すべては歴史のとおりだった。

違ったことがあるとすれば、加賀谷友彦という私の存在だけだ。

私は歴史、アップルの歴史にとってはまさしく異物なのだ。

とはいえ、その異物である私も意識的に歴史を変えようとは思わなかったしそうした行動は控えたつもりだが、私という存在はまるでいなかったように歴史は歩んでいる。だとすればスティーブ・ジョブズの運命も変えられるとは思えない。

「分かったよスティーブ。他ならぬ君の頼みだ。タイムスリップ後の私という存在は君無しではあり得なかったことも事実だと思っているし君が望むならスティーブ・ジョブ

未来を見たカリスマ 2018/09/11 hagoromo

ズという男のこれからを話してもいいよ。ただし、君の人生はこれからも栄光と挫折の波の中にいることになる。それでも聞たいかい」

私は涙が乾いたスティーブの顔を直視しながらいった。

スティーブは無言で頷いた。

私はオフィスのドアが閉まっていることを確認し鍵をかけて自分の椅子に座り直した。

スティーブが生唾を飲み込む音が聞こえた。

私は意識して静かな口調で話し出した。まるで目の前にいる青年のことではなく他人の物語を聞かせるような感じで。

まずスティーブ・ジョブズの側近であるジェイ・エリオットの気配りで近々、疎遠になったスティーブ・ジョブズとジョン・スカリーが直接会談する機会がお膳立てされること。

その場でジョン・スカリーの放つ言葉はスティーブ、君を一層怒らせるに違いないこと。しかし君はことの核心はジョンにあると思っているしそう反論するだろう。

「売上げは急激に落ち続け、費用は削減しなければならず、経営側として決断し始末をつけなければならないことは山ほどあった。しかしスカリーはなにもしていないではないか。まるで昨年末から休暇を取ってでもいたように閉じこもっていただけではない

未来を見通せ　カリスマ　2018/09/11 hagaromo

か…」とね。
スティーブが頷きながら、
「その通りだ、トモ。ジョン・スカリーこそ問題の核心なんだ。彼の役目は俺に協力し、上手に俺を管理し指導することにあるはずだ」
吐き捨てるようにいった。
私は続けた。
その後、ジョン・スカリーが外国へ出張する機会が生まれるが、その機会を得て君はスカリーをＣＥＯの座から引き下ろそうと考え画策する。しかしその策はある人物によりスカリーに漏れてしまい作戦は失敗するであろうこと。
結局、ジョン・スカリーは取締役会に、君を取るか自分を取るかを迫ることになると話した。
スティーブは顔を上げ、聞いた。
「取締役会は当然俺を支持するんだろうな」
私は静かに首を横に振った。
「嘘だ！そんなことはあり得ない。アップルは俺が、俺たちが作った会社だ。マークラだってデル・ヨーカム、ジェイ・エリオットだって俺の腹心だぜ、トモ。それはいくらなんでもないだろう」

未来を見たカリスマ 2018/09/11 hagoromo

先ほどまで泣いていたスティーブだったが今度は闘争本能丸出しの表情で私に迫った。

「いいかいスティーブ。これは君が是非にも聞かせろというから二〇一六年の未来からこの時代へタイムスリップした私が歴史の事実として知っていることを話しているんだ。残念ながら間違いはないんだよ」

「ちょっと待て、トモ。俺の未来は命がある限り続くんだ。この機会に俺の未来すべてを聞かせてくれないか。ただしこのオフィスでは気が滅入る。ドライブしながら聞かせてくれ」

私の都合など聞きもせず、スティーブ・ジョブズは私の袖をひくようにオフィスを出てエントランスに向かった。駐車場に行くためだ。

受付にいたシェリーがただならぬ我々二人の様子に心配そうな視線を送ってくれたが、私は笑顔で軽く手を上げ「大丈夫だ」という意を示した。

スティーブが向かった先はロス・アルトスのスティーブ・ジョブズの実家だった。

車の運転に支障が出てはと心配しながらも私はスティーブがアップル退社を余儀なくされること、新しいコンピュータ会社を起業しかつデジタル映像会社を買収し苦労はするものの成功すること、そして一九九六年末にアップルに復職し大成功を収めることな

未来を回回見たカリスマ20180911 hagoromo

どを大まかに話した。ただし話しはまだ彼の寿命や病気との闘いのところまでには至らなかった。

スティーブは、

「トモ、君の話はわかった。どうやら君の話ではいまの俺は分が悪いようだ。しかし俺は自分の運命が一〇〇％決まっているなどどうしても信じられんよ。生き方、考え方、行動次第で違う未来を切り開くことだってできるに違いないよ。そう思わなかったら人生なんて面白くもなんともないぜ。まあ久しぶりにママの料理でも食べて、ジョンとの戦いの作戦を練ろうよ」

そういいながら我々は車を降り、久しぶりにスティーブ・ジョブズの実家のガレージ前に立った。

そのとき、ジャケットのポケットに入れてあったｉＰｈｏｎｅがいきなり「ジーッ」とバイブレーションした。

「電池は完全に切れているはずなのにおかしいな」

と思いながら私は先に歩くスティーブの背を眺めながらポケットからｉＰｈｏｎｅを取りだした。

不思議なことに画面は久しく見ていなかったロック画面が表示していたので思わずホームボタンを押した。

未来を見た方がいいでしょう。

瞬間私は目眩を起こしたのか光に包まれ体が大きく揺れた。そして意識を失いそうになり思わず「スティーブ！」と叫んだその耳に、

「どうしたトモ。おい、変だぞ。君の体が透き通っている。嘘だろう、頼むトモ、行かないでくれ。俺を一人にしないでくれ。トモ！」

そう叫ぶ声が遠ざかった。

頭を抱えるようにして蹲ったまま私はゆっくりと目を開けた。不思議に自分がいまどこにいるのかがわかるような気がした。

その耳に今度は、

「大丈夫ですか」

「救急車呼ぼうかしら」

という慌てる人たちの声が聞こえた。

「申し訳ありません。大丈夫です。ありがとうございます」

そういいながらゆっくり立ち上がった私の目の前にアップル銀座の眩いばかりの照明が光り輝いていた。

廻りを見渡すとまだ昼間ではあったがクリスマス・デコレーションに飾られた銀座の街並みはとても美しかった。

未来を見るカリスマ 2018/09/11 hagaromo

さすがに心臓はバクバクだったが、思わず手にしたｉＰｈｏｎｅを見るとその日付は二〇一六年一二月六日の午後二時を示していた。

タイプスリップし、約九年間もアップルで働いたというのに戻った現在の時間はタイムスリップしたその時とほとんど変わっていなかった。

「戻れたのだ！ いや一瞬の夢だったのかも知れない」

そう思ったが、写真アプリの中には数十枚、私が一九七〇年代後半からアップルにいたことを証明する写真が残っていたし、着ていたジャケットも九年前とは違い、先ほどまでスティーブ・ジョブズと一緒にいたときに身につけていた淡いグレーのジャケットだった。

緊張が一気に取れた気がして私は恥ずかしさも忘れ、アップル銀座のエントランス前で嗚咽していた。それは感極まったうれしい涙だったのは間違いないが、反面スティーブをあのまま置き去りにしたように思えて後ろめたくもあった。それに仕方のないことだとはいえ、シェリーやジョアンナ、マイクらにさよならも言えなかったことが悔やまれた。

そもそも私はここ、アップル銀座に新しいｉＭａｃを、そして女房にｉＰｈｏｎｅケースでもクリスマスプレゼントしようとやってきたのだ。

未来を面倒見たがりさマ20180911.hagoromo

手に持っていたｉＰｈｏｎｅをポケットに突っ込み、私は涙を拭き姿勢を正して店内に入った。

ふと視線を感じて振り向くと今買ったばかりなのだろう、ｉＰｈｏｎｅ７のパッケージを大切そうにバッグに入れようとしてる女性と眼が合った。

私は思わず「シェリー！」と叫びそうになったが、年齢から考えても彼女がシェリー・リビングストンであるはずもなかった。

呆然と立ちすくんでいる私に素敵な笑顔を見せてくれつつ彼女は銀座の街に溶け込んでいった。

完

未来を見る先見 カリスマ 2018.09.11 hagoromo

主な参考文献

・「パソコン革命の英雄たち～ハッカーズ25年の功績」マグロウヒル社
・「ハッカーズ」工学社
・「パソコン創世記」TBSブリタニカ
・「スティーブ・ジョブズの王国」プレジデント社
・「スティーブ・ジョブズ偶像復活」東洋経済新報社
・「林檎百科～マッキントッシュクロニクル」翔泳社
・「スティーブ・ジョブズ 青春の光と影」東京電機大学出版局
・「スティーブ・ジョブズ I ～ III」東京電機大学出版局
・「アップル・コンフィデンシャル 2.5J」アスペクト
・「スティーブ・ジョブズ～無謀な男が新のリーダーになるまで」日本経済新聞出版社
・「マッキントッシュ伝説」アスキー
・「レボリューション・イン・ザ・バレー」オライリージャパン
・「ジョブズ伝説」三五館社
・「ゼン・オブ・スティーブ・ジョブズ」集英社インターナショナル社
・「スティーブ・ジョブズ」講談社

未来を垣間見たカリスマ20180911.hagoromo

・「エデンの西(上)」サイマル出版会
・「マッキントッシュ物語」翔泳社
・「Steve Jobs Keynote History 1984−2011」(マックパワー付録)アスキー・メディアワークス

未来を垣間見たカリスマ20180911.hagoromo

本書の無断複写は著作権法上での例外を除き禁じられています。

小説 - 未来を垣間見た男　スティーブ・ジョブズ

2017年7月28日　　第一刷
2017年12月20日　第二刷
2018年9月15日　　第三刷

著者：松田純一（まつだ　じゅんいち）
http://www.mactechlab.jp

未来を透視したカリスマ20180911.hagoromo